ISSN 2432-244X

言語記述論集 第9号

言 語 記 述 研 究 会

言語記述論集 第9号

目 次

【書評・追悼文】フランク・リヒテンバーク氏『トアバイタ語参照文法』を
通して見る「東南ソロモン語群の二重否定について」 ..... 落合 いずみ 1
ジンポー語民話資料「蝉の鳴き声の由来」 ..... 倉部 慶太 9
カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案物語『裸麦の種子の由来』
—訳注と語りの特徴— ..... 鈴木 博之・四郎翁姆 23
音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際
—チベット文化圏南東端のチベット系諸言語を例に— ..... 鈴木 博之 43
マルマ語会話文資料 ..... 藤原 敬介 65
枠付け類型論における様態の種類が与える構文選択への影響
—タガログ語のデータから— ..... 山本 恭裕 95
スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法概略と民話資料二編 ..... 古本 真 115
コプト・エジプト語サイード方言における母音体系と母音字の重複の音価:
白修道院長・アトリペのシェヌーテによる『第六カノン』の写本をもとに
..... 宮川 創 173

【書評・追悼文】
フランク・リヒテンバーク氏『トアバイタ語参照文法』を通して見る「東南ソロモン語群の二重否定について」*

落合 いずみ
京都大学

キーワード：オーストロネシア語族　オセアニア語派　トアバイタ語　記述言語学　二重否定

1　はじめに

本稿が紹介するのは『トアバイタ語参照文法』(Lichtenberk 2008a) である。本書第 1 章の説明によるとトアバイタ語はソロモン諸島マライタ島の西北部で話される言語であり、オーストロネシア語族オセアニア語派に属する。トアバイタ語に関する先行研究の歴史は比較的浅く、1920 年代 (Ray 1926) に始まる[1]。しかもトアバイタ語に関する文献は少なく詳細な記述がなされてこなかったようである。1981 年からトアバイタ語を研究し始めたリヒテンバークは 1984 年にトアバイタ語の文法概略を執筆する (Lichtenberk 1984)。それから 24 年後に、本書『トアバイタ語参照文法』が完成する。

本書はドゥ・グロイタームートン社の参照文法叢書の中の 1 つであり、現時点 (2017 年 3 月) において 72 種類の言語の参照文法が出版されている[2]。また現時点でオーストロネシア諸語を扱った叢書は本書、トアバイタ語 (Lichtenberk 2008a) を含め 6 つであるが (マドゥラ語 (Davies 2010)、キリヴィラ語 (Senft 2011)、トゥカンベシ語 (Donohue 2011)、ビカウ・タウマコ語 (Næss and Hovdhaugen 2011)、リンガラク語 (Barbour 2012)[3])、本書はこれらオーストロネシア諸語の参照文法の中で最も早く出版されている。

本書の大きな特徴は頁数の多さにある。本書は 1356 頁という膨大な頁数を有し第一巻 (676 頁まで) と第二巻 (677 頁から) の二冊から成る。この頁数はドゥ・グロイタームートン社の叢書の中でも群を抜き、1658 頁の中央アラスカ・ユピック語 (Miyaoka 2012) と 1370 頁のスレイビー語 (Rice 2011) に次いで 3 番目に多い。膨大なページ数を誇る本書は 40 にも及ぶ章と付録

* 草稿に対しご助言をいただいた野島本泰氏と内藤真帆氏にお礼申し上げる。なお本稿の不備はすべて評者の責任である。

[1] 当時は Malu または Malu'u という言語名で呼ばれたと言う (Lichtenberk 2008a:3)。

[2] ただし中には欠番の叢書もある。

[3] 叢書での言語名は Neverver である。

(2 つの談話資料) から構成される。本書についてポーリー (Pawley 2015) はリヒテンバーク氏への追悼文の中で以下のように述べている。

> The To'aba'ita grammar is among the most comprehensive ever done of any non-Indo-Europen language[4] (Pawley 2015:577).

評者も同感である。本書は「精緻」の一言に尽きる。本書中の例文はほとんどが談話を書き起こしたテキストを基にしており、書き起こしの作業に費やした年月と労力の膨大さを物語る。またこれらの例文によって示される文法的項目の 1 つ 1 つを分析・整理・編成し、同時に言語を記述するための文章を紡ぐ作業に費やした年月と労力の膨大さも読み手に迫るものがある。

また、ポーリー (Pawley 2015) はリヒテンバーク氏が文法的研究に並んで語彙的研究も重視していたことを述べている。このリヒテンバークの言語研究に対する考えは 2008 年においてトアバイタ語の参照文法 (Lichtenberk 2008a) と同時に辞書 (Lichtenberk 2008b) も出版していることからも見て取れる。文法的・語彙的考察の関連性についてリヒテンバークが残した言葉をポーリー (Pawley 2015:577) が引用している箇所が以下である[5]。

> Detailed grammatical analysis enabled a more accurate treatment of the grammatical elements in the dictionary than would have been the case otherwise. And the lexicographical work has been of great importance to the grammatical analysis. In any language, grammatical rules, patterns are of highly different degrees of generality. Few, if any, hold across the board. Many grammatical patterns are lexically sensitive; they hold for some but not all members of a certain word class. Grammatical rules, or patterns, are generalizations over various properties of individual lexical items. One cannot write a reasonably detailed grammar of a language without fairly extensive lexical information. (Lichtenberk 2008a:6)

2008 年出版の本書であるが、9 年後の現在あえて本書の書評を記すことにしたのは 2015 年に他界した著者、故フランク・リヒテンバーク氏を偲び追悼の念を著わすためである。本稿は『トアバイタ語参照文法』から、まず第 3 章 'Grammatical profile'「文法概略」を要約する (本稿 2 節)[6]。『トアバイタ語参照文法』のその他の章は各文法項目の詳細な記述であるが紙幅を鑑み第 17 章 'Negation'「否定構文」のみを紹介する。この 1 つの章を通して著者が 1 つの章、1 つの文法項目を丹念に組み立てていることを理解してもらいたい。否定構文の中でもとりわけ二重否定構文に重点を置くが、これは次節で紹介する内容の橋渡しの役目を担う。評者はリヒテンバーク氏の最期の学会発表であったと思われるオーストロネシア諸語・パプア諸語国際言語学会に居合わせた。発表題目は 'Double negation in Southeast Solomonic languages' (Lichtenberk

[4] Toqabaita と To'aba'ita [toʔabaʔita] は綴りは異なるが同一の言語を指す。リヒテンバークの表記では声門閉鎖音は *q* で表すことに留意されたい。

[5] Pawley (2015:577) の引用部では generality の直後がコンマであるが、本書 (Lichtenberk 2008a) に従いピリオドに改めた。

[6] トアバイタ語の音素目録と表記方法については Lichtenberk (2008a:40) を参照されたい。

2014) であり、リヒテンバーク氏の発表を初めて聞いた評者はこの発表に感銘を受けた。本稿第4節ではその発表概要を紹介する。

2　トアバイタ語文法概略

トアバイタ語の語順は主語―述語―その他である。自動詞は SVX (1)、他動詞は AVOX (2) の順である[7]。S と A の人称は動詞の前に置かれる主語標識によって表される。主語標識はさらに時制、アスペクト、否定などの文法範疇も示す。例えば、例 (1) の *ku* は一人称を表すと同時に非未来という時制を表す。またトアバイタ語は主要部標示型の言語であり、例 (2) にあるように直接目的語は接辞として動詞に付加する。

(1) Lichtenberk (2008:44)
Nau ku thaofa.
1SG 1SG.NFUT be.hungry
'I am hungry.'

(2) Lichtenberk (2008:44)
Nau ku riki-a doqora-mu i maa-na uusi-a.
1SG 1SG.NFUT see-3.OBJ sibling-2SG.PERS LOC point-3.PERS buy-DVN
'I saw your brother at the market place.'

普通名詞が単独で現れる場合は単数を表す (3)。普通名詞の後に *ki* という標識が置かれると複数を表す (4)[8]。代名詞には単数・双数・複数の区別の他、包括形・排他形の区別がある。

(3) Lichtenberk (2008:47)
kali wela naqi
little.SG child this
'this little child'

(4) Lichtenberk (2008:48)
kaala wela naqi ki
little.PL child this PL
'these little children'

所有表現には 2 つの構文があり、所有者と所有物との関係によってどちらの構文を用いるかが決まる。譲渡不可能の場合は接辞形の人称代名詞で表す (5)。譲渡可能な場合は主語標識の人称代名詞で表す (6)。

(5) Lichtenberk (2008:49)
thaina-da
mother-3PL.PERS
'their mother'

(6) Lichtenberk (2008:49)
biqu kera
house 3PL
'their house'

[7] S は自動詞の主語、A は他動詞の主語、V は動詞、O は目的語、X はこれら以外を表す。
[8] これらの例に現れる形容詞の形式は数に応じて変化する (Lichtenberk 2008:47)。

次節ではこれらの文法スケッチを基にトアバイタ語の否定構文 (本書第 17 章) について概観する。

3　トアバイタ語の否定構文

トアバイタ語の否定構文は 3 種類に分けられる。1 つ目は (i) 単一否定構文、2 つ目が (ii) 語彙的否定、3 つ目が (iii) 二重否定構文である。(i) 単一否定構文では否定は主語標識に *si* という音配列として組み込まれている (7)。否定を表す部位はこの主語標識のみである。この構文は用いられる主語標識が否定を表す替わりに時制・アスペクトを表す機能が無く、否定文において時制・アスペクトの区別が中和される。（ii）語彙的否定構文では、否定の要素は *aqi* という否定動詞によって表される (8)。この否定動詞は ‘not be so’, ‘not be the case’, ‘no exist’, ‘not be available’ など広範な意味を持つ。以下例文における太字は評者による[9]。

単一否定構文

(7) Lichtenberk (2008:734)

Keeroqa ***kesi*** *fula*.

3DU 3DU.NEG arrive

‘The two of them did not arrive.’

語彙的否定構文

(8) Lichtenberk (2008:734)

A: *Qo* *riki-a* *naqa*?

2SG.NFUT see-3SG.OBJ PRF

B: *Qe*=***aqi***.

3SG.NFUT=not.be.so

A: ‘Have you seen it?’

B: ‘No.’

例 (7) のような (i) 単一否定構文に比べ (iii) 二重否定構文のほうがより頻繁に用いられる。二重否定構文は (9) のように定式化される。

(9) Lichtenberk (2008:741)

(NP) [*qe aqi*] [negative.event.clause]

統語構造的に最下層に位置する否定構文節 (negative event clause) は (i) 単一否定構文の形式を採る。この否定構文節はさらに否定動詞 *aqi* に先行され、この否定動詞はさらに主語標識として三人称単数・非未来の *qe* を携える。第一要素として現れる名詞句は否定構文中の主語が主題化された場合に現れる位置を示したものであり必須ではない。二重否定構文の例を (10) に挙げる[10]。

[9] 以下例文中に見られる = は、直後の要素が接語であることを示す。

[10] 本書では例文に括弧を用い統語構造を示しているが、ここでは括弧を除いている。

二重否定構文

(10) Lichtenberk (2008:741)

Qe ***aqi*** ***kwasi*** *riki-a.*

3SG.NFUT NEGV 1SG.NEG see-SG.OBJ

'I haven't seen him.'

否定動詞 *aqi* に加え、否定構文節中の主語標識 *kwasi* が否定を表すことから、二重の否定が用いられていることになる。このような二重否定構文は一重否定構文に置き換えることも不可能ではない。しかし否定構文の主語が三人称の場合は二重否定構文が好まれる傾向がある。この傾向を示す例文が (11) である。一行目の三人称主語の節では二重否定構文が、二行目の一人称主語の節では単一否定構文が用いられている。

(11) Lichtenberk (2008:743)

*Nia e=**aqi*** ***si*** *naqo-fi nau,*

3SG 3SG.NFUT=NEGV 3SG.NEG face-TR 1SG

*nau **kwasi*** *naqo-fi-a.*

1SG 1SG.NEG front-TR-3.OBJ

'She would not face me, (and) I would not face her.' (In earlier times, this was the proper way for a man and a woman who were not husband and wife to be positioned when speaking to each other.)

二重否定構文の由来について、リヒテンバークが意見を述べた箇所がある (Lichtenberk 2008:747)。本来単一否定構文であったものが、否定動詞 *aqi* を導入し二重否定構文とすることにより何らかの強意を表すようになったのではないかと述べている。この否定構文の変遷について東南ソロモン語群にまで広げて考察したのが次節で紹介する Lichtenberk (2014) である[11]。

4 「東南ソロモン語群の二重否定について」(Lichtenberk 2014)

オーストロネシア語族オセアニア語派における下位分類に東南ソロモン語群がある。これはさらに 2 分岐するがそのうちの 1 つ、クリストバル・マライタ語群 Cristobal-Malaitan はさらに (a) 中央・北マライタ語群 Central and North Malaita、(b) 南マライタ・クリストバル語群 South Malaitan-Cristobal、ロング語 Lonngu に 3 分岐する。(a) に含まれるのがトアバイタ語、ラウ語 Lau、クワラアエ語 Kwaraqae、クワイオ語 Kwaio などであり、(b) に属するのがアレアレ語 'Are'are、ウラワ語 Ulawa などである。リヒテンバークは (a) 中央・北マライタ語群祖語において二重否定構文を創るという改新が起きたと主張し、トアバイタ語、ラウ語 (Featherstone-Santosuosso 2011)、クワラアエ語 (Macdonald 2010)、クワイ語 (Keesing 1985) から例文を引用している。以下、トアバイタ語以外の例文を挙げ、否定要素を太字で示す。

[11] 第 4 節は評者が聞いた 2014 年 5 月のリヒテンバーク氏の口頭発表の内容をまとめたものであるが、評者の記憶と当日の配布資料を基にしており、リヒテンバーク氏の主張を完全に理解しているとは言い難い。不備はすべて評者に帰する。

(12) Lau (Featherstone-Santosuosso 2011:35)

Daalu ***langi*** *dali=**si*** *dao ua mai.*

3PL NEGV 3PL.SBJ=NEG arrive still VENT

'They haven't yet arrived.'

(13) Kwara'ae (Macdonald 2010:348)

Bat ***nouaq*** *keil* ***kas*** *dao qua an kual ...*

but NEG 1PL(EXCL) NEG arrive yet LOC place

'But we still didn't reach the place...'

(14) Kwaio (Keesing 1975:181)

'Oo ***sia*** *age-a* ***mone****.*

2SG NEG do-3.OBJ NEG

'You can't do it.'

本発表の要点は単一否定から二重否定構文が作られるようになった過程にある。二重否定構文には二つの否定要素が含まれる。1 つはトアバイタ語の主語標識に用いられている音配列 *si* であり、他の中央・北マライタ語群の言語においても共通してみられる要素 (ラウ語 *si*、クワラアエ語 *kas* の最終音 *s*、クワイオ語 *sia*) である。この否定要素はクリストバル・マライタ語群祖語として **sia* と再建されるとする。もう 1 つの否定要素は **sia* の反映形よりも前に現れる形式でありトアバイタ語の *aqi*、ラウ語の *langi*、クワラアエ語の *nouaq*、クワイオ語の *mone* に当たる。

トアバイタ語を例に取ると、否定要素の *si* と *aqi* のどちらが旧来の否定形式であり、どちらが新しく二重否定構文の否定形式として加わったものであるかという疑問が起こる。そこでまずリヒテンバークはトアバイタ語において *si* が指小辞として用いられることを提起した (15)[12]。さらに文法化の傾向として部分詞や指小辞が二重否定の新たな否定要素として加わることが多いことを喚起した。

(15) Lichtenberk (2014)

si malefo qeri

DIM money that

'that small amount of money'

この議論の流れでは旧来の否定要素は *aqi* であったが、新たに指小詞の *si* が二重否定の第二否定要素として加わるようになったということになる。

ところがリヒテンバークの主張はそうではない。彼の主張は、*si* が本来の否定要素であったが、新たな否定要素 *aqi* が改新によって二重否定に取り込まれたというものである。その根拠になるのが否定要素 **sia* (クリストバル・マライタ祖語) の歴史的な古さである。もう 1 つの否

[12] Lichtenberk (2014) は同様の用法がラウ語にも見られることにも言及している。

定要素は各言語に特有の形式を呈しているため、各言語において比較的最近起きた改新と考えられるということであった。

5　おわりに

ポーリー (Pawley 2015:577) が追悼文においてリヒテンバーク氏の研究態度をよく表すものとして引用したと思われる言葉は 1 節で紹介した。この言葉は本書第 1 章「序論」からのものだが、この引用部分の直後 (第 1 章の最終段落) に、最も評者の胸を打った言葉が現れる。

> While my aim has been to produce a relatively detailed grammatical analysis of Toqabaqita, it would be naïve indeed to think that the present description is anywhere near comprehensive. Given the richness and complexity of human languages, and the fact that fully-functioning languages are not fixed, either lexically or grammatically, writing a fully comprehensive grammar of any such language is an unattainable goal in principle. It is with that in mind that this grammatical description of Toqabaqita is presented here. (Lichtenberk 2008a:6)

リヒテンバーク氏の言語記述研究に対する謙虚で真摯な姿勢が伺える。リヒテンバーク氏の心構え—1 つの言語を完全に記述することは不可能だということを理解した上で、できる限りを尽くし詳細な分析を提示するという姿勢は、言語の記述に携わる者に対する警鐘であると重く受け止めたい。

略号

1: first person, 2: second person, 3: third person, DIM: diminutive, DU: dual, DVN: deverbal noun, EXCL: exclusive, LOC: locative, NEG: negative, NEGV: negative verb, NFUT: nonfuture, OBJ: object, PERS: personal, PL: plural, PRF: perfect, SBJ: subject, SG: singular, TR: transitive suffix, VENT: ventive

参照文献

Barbour, Julie (2012)　*A grammar of Neverver*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Davies, William D. (2010)　*A grammar of Madurese*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Donohue, Mark (2011)　*A grammar of Tukang Besi*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Featherstone-Santosuosso, Giordana A. (2011)　Lau of North Malaita, Solomon Islands: A language description. Master's thesis, University of Auckland, Auckland.

Hill, Deborah (1992)　Longgu grammar. Doctoral dissertation, Australian National University.

Ivens, Walter G. (1929)　*A dictionary of the language of Sa'a-Mala-and Ulawa, South-East Solomon Islands*. Oxford: Oxford University Press.

Keesing, Roger M. (1985)　*Kwaio grammar* [Pacific Linguistics, B 88]. Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.

Lichtenberk, Frank (1984) To'aba'ita language of Malaita, Solomon Islands. *Anthropology Department Working Paper*, No.65. University of Auckland.

Lichtenberk, Frank (2008a) *A grammar of Toqabaqita*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lichtenberk, Frank (2008b) *A dictionary of Toqabaqita (Solomon Islands)*. Canberra: Pacific Linguistics.

Lichtenberk, Frank (2014) Double negation in Southeast Solomonic languages. Paper presented at the Seventh Austronesian and Papuan Languages and Linguistics Conference, School of Oriental and Asian Studies, University of London, May 16-17.

Macdonald, Daryl Eveline (2010) A grammar sketch of Kwaraqae. Doctoral dissertation, University of Waikato.

Miyaoka, Osahito (2012) *A grammar of Central Alaskan Yupik (CAY)*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Naitoro, Katerina (2013) A sketch grammar of 'Are'are: The sound system and morpho-syntax. Doctoral dissertation, University of Canterbury.

Næss, Åshild and Even Hovdhaugen (2011) *A grammar of Vaeakau-Taumako*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Pawley, Andrew (2015) Frantisek (Frank) Lichtenberk, 1945-2015: A tribute. *Oceanic Linguistics* 54:573-583.

Ray, Sidney H. (1926) *A comparative study of the Melanesian island languages*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rice, Keren (2011) *A grammar of Slave*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Senft, Gunter (2011) *Kilivila*. Berlin: Mouton de Gruyter.

受理日 **2017** 年 **3** 月 **31** 日

ジンポー語民話資料「蝉の鳴き声の由来」*

倉部慶太
東京外国語大学 / 南洋理工大学

キーワード：ジンポー語，カチン語，カチン人, ビルマ, ミャンマー，民話

1　はじめに

ジンポー語は、北東インドのブラマプトラ渓谷上流から北部ビルマ (ミャンマー) を通り中国雲南省西端部に跨がる地域に分布する、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属する言語である。母語話者人口は、ビルマに 630,000 人、中国に 37,000 人、インドに 5,000 から 6,000 人と推定される。ジンポー語はビルマ有数の民族のひとつであるカチン人の言語のひとつである。この言語は、言語的に多様なカチン人の間で共通語として通用している。

本稿の目的は、筆者が 2016 年 12 月に北部ビルマに位置するカチン州ミッチーナー市において行ったフィールドワークにより収集した民話資料のうち、「母よ、子よ」と題する資料の本文を語釈、翻訳、文法注釈とともに提示することにある。本民話は、カチン州の二大河川マリ川とンマイ川流域に生息する蝉の鳴き声に関する由来譚である。ヒマラヤ氷河に起源を持つマリ川とンマイ川は、カチン州北部においてそれぞれ並行的に流れるが、カチン州中部において合流し、ミャンマー最大の河川であるイラワジ川となる。その合流地点はカチン文化において特に重要な位置づけが与えられている。

本民話の要約は次の通りである。昔、母と子が食料を探してイラワジ川を北上したとき、マリ川とンマイ川の合流地点に到着した。効率よく食べ物を探すために、子はマリ川沿いを、母はンマイ川沿いを遡り、最後に上流の 2 つの川が合流する地点で再会しようと約束した。しかし、母と子は知らなかったのであるが、ンマイ川とマリ川は上流で二度と合流することはなかった。二人はお互いを探して呼び合いながら川を遡ったが、ついに再会することなく、空腹で死んでしまった。その場所で二人は蝉となり、子の蝉は「ヌーイー」(母よ) と鳴き、母の蝉は「シャーイー」(子よ) と鳴くようになった。そのために、今日においても、これらの川の流域に生息する蝉は、それぞれ鳴き声が異なるのである。

* 本稿を執筆するにあたり、オスロ大学 / 国立民族学博物館の鈴木博之氏から詳細なコメントをいただいた。ここに記して感謝申し上げる。筆者による現地調査は、平成 24-25 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)「ジンポー語の記述言語学的研究」(課題番号：12J02938)、平成 26-28 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)「北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション」(課題番号：14J02254)、平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「方向接辞からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相」(研究代表者：荒川慎太郎、課題番号 16H03414) の助成を受けている。

図 1　マリ川とンマイ川の合流地点 (筆者撮影 2011 年 2 月 27 日)

2　データ

筆者は、2009 年から 2017 年の期間、北部ビルマにおいてジンポー語を対象とした断続的なフィールドワークを行った。調査の一環として筆者はジンポー語による大量の語りを録音し、特に 2016 年からは複数の現地協力者と共同で民話の収集を精力的に行った。その結果、2009 年から 2017 年 3 月 11 日までの間に、196 名の語り手の協力のもと、計 1,908 本の語りの音声資料 (計 157 時間弱) が得られた。本稿で提示する民話はその成果のひとつである。本民話は 2016 年 12 月 23 日にミッチーナー市のドゥーカトン地区において行った対面調査により得られたものであり、調査協力者は 1942 年生の男性話者である。調査では、まず、リニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し、音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。対面調査後、筆者が正書法を用いて音声を文字に書き起こし、後日、別のコンサルタントの協力のもと、データの確認作業を進めた。

3　本文

本節では語釈、翻訳、文法注釈を付した民話本文を提示する。表記は Kurabe (2016, 2017) などに示した筆者による音素表記を用いる[1]。ジンポー語文法の詳細に関しては、上記文献を参照されたい。本資料は言語研究の利用に供するよう、翻訳部分はできる限り原語に即して翻訳してある。そのため、日本語としてやや不自然な部分があるが、これらは誤植ではない。また、

[1] 子音音素：/p, t, ts, c, k, ʔ, b, d, dz, j, g, ph, th, kh, s, ɕ, (h), m, n, ŋ, ʔm, ʔn, ʔŋ, r, l, ʔr, ʔl, w, y, ʔw, ʔy/。母音音素：/i, e, a, o, u, ə/。声調：/á, a, à, â/。

本稿では録音に忠実な記述をしているため、冗長な反復や本筋から外れる部分が含まれる。

(1) **yáʔ nday gò “ʔnû ʔî, ɕâ ʔî” màwmùy.**
now this TOP mother SFP child SFP tale
今これは「母よ、子よ」の物語[2]。

(2) **yáʔ dày-ní ʔánthe grày tsun-gərù ʔay məlìʔ-ǹmay-dzùp kóʔ ǹná phaŋ ʔay màwmùy ʔî, day rê.**
now this-day 1pl very say-be.noisy NMLZ Mali-Nmai-gather LOC ABL begin NMLZ tale SFP that COP
今、今日、私たちがとても語る、マリ川とンマイ川の合流地点から始まった物語ですね、それです[3]。

(3) **day màwmùy gò nday khu.**
that tale TOP this like
その物語はこのようです。

(4) **mòy ɕoŋ dèʔ gənù thèʔ gəɕà ŋà ʔay.**
long.ago before ALL mother COM child be DECL
昔、母と子がいました[4]。

(5) **gənù thèʔ gəɕà ŋà yàŋ gò ɕán ləkhôŋ gò nday khàʔ-kaw gərèt ǹná lè ʔî.**
mother COM child be when TOP 3du two TOP this river-side follow SEQ SFP SFP
母と子がいて、彼ら二人はこの (イラワジ) 川の岸に沿ってですね[5]。

(6) **khàʔ-kaw gərèt ǹná ɕèʔ sìmáy ni tam ʔay lè.**
river-side follow SEQ only food PL look.for DECL SFP
川岸に沿って、食料を探しましたね[6]。

---

[2] 「母よ、子よ」のように同格要素を並列する表現は、ジンポー語において広く観察される。並列要素の順序に関して、並列要素の音節数が同一である場合、高母音を含む並列要素が先行するという規則がある (倉部 2011 を参照)。

[3] 動詞 gərù は単独で「うるさい」の意を表すが、動詞 tsun「言う」と組み合わせると、(うるさいほど)「人口に膾炙する」という意味を表す。

[4] 向格 dèʔ は基本的に方向を示す格であるが、特に場所名詞や時間名詞とともに用いられると位置を標示する用途にも用いられる (倉部 2012 を参照)。接頭辞 gə- は親族名詞に付加され、一般名詞を形成する。通時的に 3 人単数の人称代名詞に由来すると推定される (Kurabe 2017:999–1000 を参照)。

[5] ɕán「彼ら二人」は 3 人称双数形である。ジンポー語の人称体系は双数に基づく対立を持つ。双数は全て末子音 n を持つが、これは廃れた数詞である ni「2」の残存である。現代語におけるより一般的な数詞「2」は ləkhôŋ である。

[6] 副助詞 ɕèʔ はそれ自体で「だけ、その時だけ、して初めて」の意を表すが、しばしば接続助詞 ǹná「～して」の後で語彙的意味を持たないつなぎの要素として用いられる。この用法は特に民話のジャンルで頻繁に観察される。

(7) **ʔè, ʔujó-sì ni ləphó ni pha ni ʔî.**
INTJ banana.bud-fruit PL banana.leaf PL what PL SFP
ええ、バナナの蕾やバナナの葉などですね[7]。

(8) **ɕá ʔay bòʔ lè.**
eat NMLZ sort SFP
食べる物ですよ[8]。

(9) **ləŋá-ʔutuŋ kóʔ ǹná khót, ɕán tam lùŋ wà rê ɕəlóy gò nday**
banana-section LOC ABL finish 3du look.for ascend VEN COP when TOP this
məlìʔ-ǹmay-dzùp kóʔ dù wà ʔay.
Mali-Nmai-gather LOC arrive VEN DECL
バナナの茎からありとあらゆるものを彼ら二人は探して (イラワジ川を) 上ったとき、このマリ川とンマイ川の合流地点に到着しました[9]。

(10) **ʔè, nday məlìʔ-ǹmay-dzùp kóʔ dù ʔay ɕəlóy gò gənù gò gərà khu tsun**
INTJ this Mali-Nmai-gather LOC arrive NMLZ when TOP mother TOP how like say
ʔay ʔi ŋa jaŋ "mà ʔè, ʔán ʔnû gò ɕərà mi kóʔ ɕà ràw tam yàŋ
DECL Q say when child SFP 1du mother TOP place one LOC only together look.for when
ləphó thèʔ sìmoŋ-sìmáy lóʔ-lóʔ ń-lû na rê."
banana.leaf COM COUP-food many-RED NEG-get IRR COP
ええ、このマリ川とンマイ川の合流地点に着いたとき、母は何と言ったかというと、「子よ、私たち母 (と子) はひとつの場所だけで一緒に探すとバナナの葉と食料をたくさん手に入れることができないでしょう。」

(11) **"day məjò naŋ gò ləpay-məgá ná khàʔ-je khu lùŋ ʔùʔ."**
that because 2sg TOP left-side GEN river-road like ascend IMP
「だから、あなたは左側の川を上りなさい。」[10]

(12) **"ʔnû gò ləkhrá-məgá ná khàʔ-je khu lùŋ wà na" ŋú tsun ʔay ɕəlóy**
mother TOP right-side GEN river-road like ascend VEN IRR QUOT say NMLZ when
"thó tsunbo kóʔ khrúm gàʔ" ŋú tsun ʔay.
up.there fork LOC meet HORT QUOT say DECL

---

[7] ʔujó-sìと呼ばれるバナナの蕾は、カチンの伝統料理によく用いられる。ləphóと呼ばれるバナナの葉は、伝統的なカチン料理を包む用途に使われ、同時に料理をのせる皿としての機能も果たす。複数名詞の列挙の最後に pha ni を置くと「～等」の意味を帯びる。

[8] 名詞 bòʔ はしばしば名詞節とコピュラ動詞を伴い、「～する種類のものだ」という意味を表す人魚構文 (角田 2011) を形成する。

[9] 助動詞 wà は本動詞 wà「帰る」に由来し、直示中心への移動、新しい出来事の生起を表す。

[10] 様態格 khu は名詞 khu「穴」に由来し、「～のように」、「～に沿って」、「～語で」など、様々な意味役割をマークする。

「母は右側の川を上ります」と言ったとき「あの上流の分岐点で会いましょう」と言いました[11]。

(13) **tsunbo ŋú ʔay nday khu ʔyô.**
fork say NMLZ this like SFP
(川の分岐点の図を描きながら) 分岐点というのはこのようなものですよ。

(14) **naŋ tsunbo ŋú ʔay ce ʔay kún.**
2sg fork say NMLZ know DECL Q
あなたは tsunbo「分岐点」という語を知っていますか。

(15) **khàʔ ləŋây mi ŋà s-ay ń-ráy.**
river one one be CSM-NMLZ NEG-COP
(ここに) 川がひとつあるではないですか。

(16) **khàʔ ləŋây mi nday khu lùy wà jaŋ ɕèʔ nday məgá má khàʔ gərán màt wà s-ay.**
river one one this like flow VEN when only this side also river divide COMPL VEN CSM-DECL
川がひとつこのように流れてきて、この方向にも川が分かれてしまっています。

(17) **nday má gərán màt wà ʔay.**
this also divide COMPL VEN DECL
こちらも分かれてしまっています。

(18) **nday kóʔ khrúm ʔay.**
this LOC meet DECL
(ひとつの川が一度分岐して再度上流で合流する楕円形の図を書きながら) ここで (2 つの川がまた) 合流します。

(19) **ré yàŋ gò nday khàʔ, nday gərán màt ʔay nday khàʔ ləŋây mi kóʔ ǹná ʔnîŋ ráy ǹná nday kóʔ dzùp ʔay ŋú ɕədùʔ ʔay.**
COP when TOP this river this divide COMPL NMLZ this river one one LOC ABL thus COP SEQ this LOC gather DECL QUOT think DECL
それで、この川、この別れてしまったこのひとつの川から、このようになって、(図を指さしながら) ここ (上流) で合流すると (母子は) 思いました[12]。

---

[11] 引用標識 ŋú は、本動詞 ŋú「～と言う」に由来する。動詞「言う」が引用標識へと文法化する例は、通言語的に珍しくない (倉部 2010 を参照)。

[12] 奪格と継起の接続助詞は同形であり、通時的に同一形態素に起源を持つと考えられる。この文に例示されるように、奪格は名詞に直接後続することはほとんどなく、場所格など別の格の後に後続することが多い。なお、属格 ná も奪格と継起の接続助詞と形態的類似性を示すが、これらは全て同一の通時的起源を持つと推測される。本来の属格は ʔàʔ であったが、現代語では ná が勢力範囲を拡

(20) **ń-rê.**

NEG-COP

違います。(イラワジ川は一度のみ分岐し、マリ川とンマイ川となりますが、その 2 つの川は上流では二度と合流しません。)

(21) **nday wa gò ʔnâŋ dèʔ nday wa gò ʔnâŋ dèʔ rê ɕánthe gò ń-ɕədùʔ ʔay.**

this man TOP here ALL this man TOP here ALL COP 3pl TOP NEG-think DECL

こいつはこちらへ、こいつは (別の方向の) こちらへ (流れている) と彼らは思いませんでした[13]。

(22) **ráy jaŋ gò gənù gò "ʔê, ɕâ ʔè, ʔán ləkhôŋ ràw ɕà ráy jaŋ gò ʔî**

COP when TOP mother TOP INTJ child SFP 1du two together ADV COP when TOP SFP

lóʔ-lóʔ ń-lû na rê."

be.many-RED NEG-get IRR COP

そうしたら、母は「ねえ、子よ、私たち二人は一緒にいればですね、(食料を) たくさん得られないでしょう。」

(23) **"day məjò naŋ gò ləpay-məgá ná khàʔ-je, khàʔ ʔnîŋ rê kóʔ ǹná ʔî,**

that because 2sg TOP left-side GEN river-road river thus COP LOC ABL SFP

ləpay-məgá dèʔ naŋ lùŋ s-ùʔ."

left-side ALL 2sg ascend DIST-IMP

「なので、あなたは左側の川 (マリ川)、川がこのようになって (分岐して) いるところから、左側へあなたは (川を) 上りなさい。」[14]

(24) "**ʔnû gò ləkhrá-məgá khu lùŋ na."**

mother TOP right-side like ascend IRR

「母は右側 (のンマイ川) から上ります。」

(25) **"wó tsunbo, nday tsunbo kóʔ khrúm gàʔ."**

over.there fork this fork LOC meet HORT

「あちらの (上流の) 分岐点、この分岐点で (また) 会いましょう。」(ふたつの川が再び会う地点でまた会いましょう)[15]

大している (倉部 2012 を参照)。

[13] 名詞 wa は本来ヒトを指すが、この文に例示される通り、同形式を用いてモノを指すこともできる。日本語の「やつ、こいつ」などと同様である。同様の例はビルマ語やチャック語 (藤原敬介氏, p.c., 2017) にも観察される。また、この文の参与者は二名であるため、厳密には双数形を用いるべきであるが、ここでは複数形が用いられている。このように、双数形を用いるべき場面で複数形を緩く用いる例が実際の発話では散見される。

[14] ジンポー語の命令は直示中心へ向かう方向への命令 (proximal command) と直示中心から離れる方向への命令 (distal command) の二項対立を持つ (Kurabe 2016, 2017 を参照)。

[15] ジンポー語の遠称指示詞は、高低に基づく三項対立を持つ。指示詞 wó は話者と相対的に同じ高さにある指示物を指し、thó は話者よりも高い位置、lé は話者よりも低い位置にある指示物を指す。

(26) **nday tsunbo ŋú ʔay.**
this fork say DECL
(筆者に対して) これは「分岐点」と言います。

(27) **ʔánthe jìŋphòʔ ni gò nday tsunbo ŋú ʔay phéʔ dim ce ʔay lè.**
1pl Jinghpaw PL TOP this fork say NMLZ ACC obstruct know DECL SFP
私たちジンポー人はこの (川の) 分岐点というのをよく遮りますよ[16]。

(28) **nday məgá ná khàʔ pík ǹná nday məgá ǹná ɕəléʔ, nday kóʔ ŋá khuy ɕá ʔay rê.**
this side GEN river close SEQ this side ABL expel this LOC fish hunt eat NMLZ COP
こちら側の川を遮って、こちら側から (魚を) 追い出し、ここで魚を釣って食べるのです。

(29) **day dzòn rê ŋú ɕədùʔ ʔay, ɕi gò.**
that like COP QUOT think DECL 3sg TOP
(マリ川とンマイ川も上流で) そのようになって (合流して) いると思いました、彼女は。

(30) **ráy ǹná ɕèʔ gəɕà mùŋ ləpay-məgá dèʔ, məlìʔ-khàʔ dèʔ lùŋ wà ʔay.**
COP SEQ only child also left-side ALL Mali-river ALL ascend VEN DECL
そうして、子供も左側へ、マリ川へ上りました。

(31) **nday məgá gò gənù lùŋ màt wà ʔay.**
this side TOP mother ascend COMPL VEN DECL
(図を指して) この (ンマイ川の) 側は母が上ってしまいました。

(32) **ráy jaŋ gò ɕán gò sa khray sa.**
COP when TOP 3du TOP go only go
すると、彼ら二人は (それぞれの川を上流の方向に) 行きに行きました。

(33) **jan dù wà tíʔ mùŋ "kôy, khrúm na kún, kôy, khrúm na kún" ŋú yàŋ gò gəɕà gò day khu ǹná lùŋ wà ǹná wó-rà kóʔ gò "ʔnû ʔê, ʔnû ʔê" ŋú gədè ɕəgá tíʔ mùŋ ń-thán.**
sun arrive VEN but also INTJ meet IRR Q INTJ meet IRR Q say when TOP child TOP that like ABL ascend VEN SEQ over.there-place LOC TOP mother SFP mother SFP QUOT how.much call but also NEG-answer
太陽が沈んでも「あら、会えるだろうか、あら、会えるだろうか」と言って、子はそのように (川を) 上って、あちらで「母よ、母よ」と何度呼んでも (母は) 答えません[17]。

---

[16] 動詞 ce「知る」は他の動詞とともに用いられると習慣や能力可能の意味を表す (倉部 2010 を参照)。
[17] 疑問語は疑問のほかに不定を表す際にも用いられる。不定を表す際には日本語と同様、副助詞 má「～も」を伴うことが多いが、副助詞は必須ではない (Kurabe 2016 を参照)。

(34) **wó-rà　　məgá ná　mùŋ "ɕâ,　ɕâ"　ŋú　ɕəgá tíʔ mùŋ ń-thán.**
over.there-place side　GEN also　child child QUOT call　but also　NEG-answer
あちら側の (人) も「子、子」と呼んでも (子は) 答えません。

(35) **ráy　jaŋ　gò　lùŋ　wà　məgaŋ lùŋ　wà　məgaŋ gò　tsan　ɕèʔ　tsan　wà**
COP　when　TOP　ascend　VEN　ahead　ascend　VEN　ahead　TOP　be.far　only　be.far　VEN
s-ay　lè　ʔî.
CSM-DECL SFP SFP
すると、(それぞれが) 先に上って先に上ってということで (マリ川とンマイ川は並行して走っており、交わることはないので、お互い) もう大変遠くなってしまったのですね[18]。

(36) **day məjò　gò　ɕán ləkhôŋ gò　ńthóy náʔ　wà　jaŋ　gò　ɕán ləkhôŋ gò　kóʔsi**
that because TOP 3du two　TOP day　spend VEN when TOP 3du two　TOP be.hungry
ǹná ʔî,　day kóʔ si　màt　s-ay　rê.
SEQ SFP that LOC die COMPL CSM-NMLZ COP
だから、彼ら二人は日が経つと彼ら二人は空腹になってですね、そこで死んでしまったのです。

(37) **nday gənù　má　si　ʔay.**
this　mother also die DECL
この母も死にました。

(38) **gəɕà　má　si　ʔay.**
mother also die DECL
子も死にました。

(39) **ráy　jaŋ　gò　ɕán gò　khra　tay　ʔay　rê.**
COP when TOP 2du TOP cicada become NMLZ COP
そして彼ら二人は蝉になったのです。

(40) **khra　ŋú　ʔay　ce　ʔay　ʔi.**
cicada say NMLZ know DECL Q
(筆者に対して) khra「蝉」という語を知っていますか。

(筆者、とっさに khra「蝉」という語の意味を思い出せず「知らない」と言う。)

[18] 助動詞 məgaŋ は本動詞の後に置かれ、先行する動作を表す。この助動詞を伴う動詞は、自動詞であれ他動詞であれ、先行される人物を対格で取るようになり、必須項がひとつ増える。したがって、この助動詞を伴う構文は適応構文であると見なすことができる (Kurabe 2016 を参照)。

(41) ***cicada* ŋa ʔay rê.**
cicada say NMLZ COP
(英語で) cicada と言うのです。

(42) **pyen ǹná ʔnâŋ kóʔ ŋoy ʔay rê.**
fly SEQ here LOC make.noise NMLZ COP
飛んでここで鳴くのです。

(43) **khra rê.**
cicada COP
蝉です。

(44) **khra-gənù rê.**
cicada-worm COP
虫の蝉です。

(45) **ce ʔay ń-ráy.**
know NMLZ NEG-COP
知っているでしょ？

(46) **khra.**
cicada
蝉。

(筆者、思い出して「ああ、蝉ですか」と言う。)

(47) **ʔè, ʔè, day, day.**
INTJ INTJ that that
はい、はい、それ、それ。

(48) **ʔè, day.**
INTJ that
はい、それ。

(49) **ʔè, day khra-gənù tay màt wà ʔay.**
INTJ that cicada-worm become COMPL VEN DECL
はい、その虫の蝉になってしまいました。

(50) **ré yàŋ gò khra-gənù tay màt wà ǹná gò ləpay-məgá ná gəɕà gò**
COP when TOP cicada-worm become COMPL VEN SEQ TOP left-side GEN child TOP
“ʔnû ʔî” ŋú ʔay khra tay màt wà ʔay.
mother SFP say NMLZ cicada become COMPL VEN DECL
それで、虫の蝉になってしまって、左側の (マリ川を上った) 子は「ヌーイー」(「母よ」)

と鳴く蝉になってしまいました。

(51) **khrá-məgá ná gənù gò "ɕâ ʔî" ŋú ʔay gənù tay màt wà ʔay.**
right-side GEN mother TOP child SFP say NMLZ worm become COMPL VEN DECL
右側の (ンマイ川を上った) 母は「シャーイー」(「子よ」) と鳴く虫 (蝉) になってしまいました。

(52) **ráy yàŋ gò yáʔ ʔánthe bùm-gá dèʔ gò, grày tsò ʔay bùm dèʔ nday khra day ɕəgá ʔay.**
COP when TOP now 1pl mountain-land ALL TOP very be.high NMLZ mountain ALL this cicada that call DECL
それで、今、私たちの山地では、とても高い山で、この蝉はそれを呼びます。(お互いを呼んで鳴きます。)

(53) **grày gəròt ʔay.**
very pull DECL
(蝉たちは) とても (声を) 引っ張ります。(声を長く引っ張って鳴きます。)

(54) **"ʔnûuuu ʔîiii" ŋa ǹná ɕəgá ʔay.**
mother SFP say SEQ call DECL
「ヌーイー」(「母よー」) と言って (蝉になった子は母を) 呼びます。

(55) **nday kóʔ, nday məgá dèʔ ʔè, məlìʔ-khàʔ-məgá kóʔ "ʔnû ʔî" ɕà ɕəgá ʔay.**
this LOC this side ALL SFP Mali-river-side LOC mother SFP only call DECL
ここで、この側で、マリ川の側では「母よ」とだけ呼びます。(蝉が鳴きます。)

(56) **ǹmay-khàʔ-məgá gò "ɕâaaa ʔîiii" ŋa ɕəgá ʔay.**
Nmai-river-side TOP child SFP QUOT call DECL
ンマイ川の側では「シャーイー」(「子よー」) と呼びます。(蝉が鳴きます。)

(57) **khra lè ʔî.**
cicada SFP SFP
蝉ですね。

(58) **day məgá kóʔ day ɕà ɕəgá ʔay.**
that side LOC that only call DECL
その (ンマイ川の) 側ではそれだけを呼びます。(蝉が鳴きます。)

(59) **ráy tîm ɕán ləkhôŋ gò gəlóy má ń-khrúm màt s-ay lè ʔî.**
COP but 3du two TOP when also NEG-meet COMPL CSM-DECL SFP SFP
しかし、彼ら二人はもう決して会わなくなってしまったのですね[19]。

(60) **khra tay ǹná yáʔ dù khrà "ʔnû ʔî, ɕâ ʔî" ŋú ʔay nday kóʔ ǹná phaŋ**
cicada become SEQ now arrive till mother SFP child SFP say NMLZ this LOC ABL begin
ǹná byin wà ʔay ŋa ʔay, nday màwmùy.
SEQ happen VEN DECL say DECL this tale
(母子は) 蝉になって今日まで「母よ、子よ」と鳴くのは、ここから始まって起こったと言います、この物語は。

(61) **ʔánthe jìŋphòʔ ni ʔàʔ màwmùy nday.**
1pl Jinghpaw PL GEN tale this
私たちジンポー人の物語これは。

(62) **day məjò gò nday məlìʔ-khàʔ ráy ŋà.**
that because TOP this Mali-river COP be
なので、(図を指して) これはマリ川です。

(63) **pay-məgá ná gò məlìʔ-khàʔ.**
left-side GEN TOP Mali-river
左側の (川) はマリ川。

(64) **khrá-məgá ná gò ǹmay-khàʔ.**
right-side GEN TOP Nmai-river
右側の (川) はンマイ川。

(65) **nday kóʔ ǹná màwmùy ləŋây mi prùt wà ʔay.**
this LOC ABL tale one one sprout VEN DECL
ここから物語がひとつ芽生えました。

(66) **mòy khra-gənù thèʔ ʔî, sàksè mədún lù ʔay khu ráy ŋà.**
long.ago cicada-worm COM SFP evidence show get NMLZ like COP be
昔、虫の蝉でですね (蝉を用いてですね)、(この出来事が起きた) 証拠を示すことができるということです。

[19] 接続助詞 tîm「～だが」は、逆接接続助詞 tíʔ「が」と累加副助詞 mùŋ「～も」の短縮により派生された形式である。

(67) **yáʔ gò "ʔnû ʔî, ɕâ ʔî" ŋú ʔay gò khra ráy tíʔ mùŋ**
now TOP mother SFP child SFP say NMLZ TOP cicada COP but also
ǹsén ń-búŋ ʔay.
voice NEG-resemble DECL
今日、「ヌーイー、シャーイー」(「母よ、子よ」) と鳴くのは、蝉であっても鳴き声は同じではありません。(ンマイ川流域に生息する蝉とマリ川流域に生息する蝉とは鳴き声が異なります。)

(68) **nday gò gənù phéʔ ɕəgá ʔay.**
this TOP mother ACC call DECL
これは母を呼んでいます。

(69) **nday məlìʔ-khàʔ-məgá ná gò**
this Mali-river-side GEN TOP
このマリ川の側の (蝉) は。

(70) **day məjò dày-ní "ʔnû ʔî" ŋa ʔay.**
that because this-day mother SFP say DECL
だから、今日「ヌーイー」(「母よ」) と鳴きます。

(71) **wó-rà məgá gəɕà phéʔ ɕəgá ʔay.**
over.there-place side child ACC call DECL
あちら側 (の蝉) は子を呼びます。

(72) **"ɕâ ʔî" ŋú ʔay dày-ní dù khrà ɕəgá ʔay.**
child SFP say NMLZ this-day arrive till call DECL
「シャーイー」(「子よ」) と言うのは、今日に至るまで (そう) 呼んでいます。

(73) **ʔè, day khu.**
INTJ that like
はい、そのように。

(74) **yáʔ day ləkhôŋ gò day khu ná ʔánthe jìŋphòʔ ná màwmùy thàʔ gədùn-gədùn**
now that two TOP that like GEN 1pl Jinghpaw GEN tale LOC be.short-RED
mi ráy tîm grày ʔəkhyàk ʔay màwmùy ləŋây mi rê.
one COP but very be.important NMLZ tale one one COP
今、その二人はそのような私たちジンポー人の物語の中で短いものですけれども、とても重要な物語のひとつです。

記号・略号

-	morpheme boundary	DIST	distal
1	first person	GEN	genitive
2	second person	HORT	hortative
3	third person	IMP	imperative
du	dual	INTJ	interjection
pl	plural	IRR	irrealis
sg	singular	LOC	locative
ABL	ablative	NEG	negative
ACC	accusative	NMLZ	nominalizer
ADV	adverbializer	Q	question
ALL	allative	QUOT	quotative complementizer
COM	comitative	RED	reduplicant
COMPL	completive	SEQ	sequential
COP	copula	SFP	sentence-final particle
COUP	couplet	TOP	topic
CSM	change-of-state marker	VEN	venitive
DECL	declarative		

参考文献

倉部慶太. (2010)「ジンポー語における動詞連続の文法化」『地球研言語記述論集 2』15–37.

倉部慶太. (2011)「ジンポー語における対句表現」『地球研言語記述論集 3』37–57.

倉部慶太. (2012)「ジンポー語の格標示」『京都大学言語学研究』31: 133–180.

Kurabe, Keita. (2016) A grammar of Jinghpaw. Ph.D. dissertation, Kyoto University. pp.668.

Kurabe, Keita. (2017) Jinghpaw. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages* (Second edition). 993–1010. London and New York: Routledge.

角田太作. (2011)「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1: 53–75.

受理日 2017 年 4 月 3 日

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案物語『裸麦の種子の由来』
—訳注と語りの特徴—

鈴木 博之　　四郎翁姆
オスロ大学　　オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、テクスト訳注、証拠性

1　はじめに

本稿は、チベット地域に伝わるとされている口承の物語『裸麦の種子の由来』のカムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案について言語学的訳注を施し、また語りの特徴を分析する。

物語『裸麦の種子の由来』は、チベット口承文学として外部には認知されており、出版物[1]にも収録され、インターネット上にも物語のあらすじが公開されている[2]。しかしながら、Lhagang 方言の話される地域、すなわち中国四川省甘孜藏族自治州康定市塔公鎮塔公村では、まったく伝わっていない。筆者はチベット文化圏東部のさまざまな地点で同物語の存在を尋ねてみたが、語れる者はおろか、物語を聞いたことがある人にすらいまだかつて出会ったことがない。

本稿の試みは、まず第二著者である Lhagang 方言母語話者に、公開されている『裸麦の種子の由来』の物語のあらすじをいったん漢語で覚えてもらい、その記憶に基づいて、Lhagang 方言によって物語を語ってもらうという手法をとったことである。調査票を見ながらの聞き取りとも、自然発話とも異なる発話資料となるが、発話において、「情報へのアクセス方法 (access to information)」および「情報源 (source of information)」に代表される証拠性 (evidentiality) が重要な機能を果たすチベット系諸言語 (Tournadre & LaPolla 2014) において、半ば人工的に語られた比較的長い発話の中で、証拠性がどのように標示されるかは興味深い問題である。

上述のように、本稿で記述する Lhagang 方言版の『裸麦の種子の由来』は、既存の漢語版に基づく翻案である。現地には伝わっていない物語であり、既存の版の忠実な翻訳でもない。当地における民話などの語りが失われつつある中で、まとまった内容をもつ長編の語りをいかに再現できるかという視点からも、本稿の試みに一定の注目すべき点があると考える。

本稿での分析は、鈴木・四郎翁姆 (2016) の文法の記述を前提としつつ、訳注部分で逐次参照し、補足事項が認められる場合には指摘する。また、語りの構成の分析、内容の解釈に当たっては、鈴木ほか (2015) の分析を随時参考にする。なお、音表記については本稿末尾を参照。

---

[1] 賈芝・孫剣冰編 (1964)、君島 (2013)（日本語版）など。漢語の原典が存在するが、未見。ほかにも《藏族民間故事選》(1980) などに含まれている。

[2] たとえば、http://www.tibetculture.net/whbl/ystd/yswx/mjwx/200712/t20071212_299085.htm（西藏文化網）など。この版が語りのベースであるため、文中で言及する場合には「西藏文化網版」と呼ぶ。

2　テクストと語釈および翻訳

『裸麦の種子の由来』の語りは、その内容の展開によって、大きく６段落に分かれる。本節で提示する各文は、段落数と文数によって示す。たとえば、(3.5) は第３段落の第５文という意味である[3]。

なお、語釈においては、一貫してゼロ形態である絶対格の標示を行わない[4]。

2.1　語釈

(1.1)　´ṇi ma ⁻ɦna ɦna-la　´ɦdʑaː po ´pɯ ʑə-tɕiʔ　ˆjoʔ-reʔ
むかしむかし-[位]　王子-[不定]　[存]
むかしむかし、王子がいました。

(1.2)　⁻kʰo　´mĩ-la　`ʔa tsʰo　ˆzeː-reʔ
3　名前-[位]　[人名]　言う-[判]
彼は名前をアツォといいました。

(1.3)　⁻kʰo　⁻ŋ̊kʰɛː pa-tɕiʔ　ˆjiː-reʔ
3　賢い-[不定]　[判]-[判]
彼は賢い人でした。

(1.4)　´ta rɔʔ　`ʰpoː pa ⁻tɕʰe　´reʔ
さらに　勇敢な　[判]
そして勇敢でもありました。

(1.5)　⁻ʰsɑ̃ ᵐba　´jɑː mo-tɕiʔ　´reʔ
心　よい-[不定]　[判]
善良な心を持っている人でした。

(1.6)　⁻mə　⁻tsʰɔ̃ ma-la　⁻za-ɦdʑɯ　´rɑʔ-ɦgo-gə　`tɕʰe tə
人　すべて-[位]　食べる-[名]　得る-[必]-[属]　ために
すべての人にとって食べ物が手に入るように、

(1.7)　⁻kʰo　´ᶯɖuʔ gə ´ɦdʑaː po　´zə kʰa　`sʰõ-ta　ˆnɛː-gə　⁻sʰa wuː-te
3　龍王　そば　去る-[接]　裸麦-[属]　種-[定]
⁻ʰʈə-sʰa　`sʰõ-zə reʔ
求める-[名]　去る-[過]
彼は龍王のそばへ向かい、裸麦の種を求めに向かいました。

---

[3] 段落内の文の切れ目は、必ずしも完全な文となっていない場合がある。非常に長い文になる例では、文中で区切りを設けている。また、逐次訳では、不自然な場合もあるが、それは意図して直訳としている部分である。繰り返しなどを省いた全体の訳文は **2.2** で提示する。

[4] ゼロ形態となる位格と混同する可能性があるが、名詞句の役割については訳注で解説する。

(2.1) ´te na ta ⁻kʰo ⁻ɦmɑː mi ´ɳə ɕʰɯ-ze ⁻ʈʰiʔ-nə ⁻ʰta ⁻ɦgoː-nə
それから 3 戦士 二十-[概] 連れる-[接] 馬 乗る-[接]
`sʰõ-zə reʔ
去る-[過]
それから、彼は 20 人ほどの戦士を連れて、馬に乗って行きました。

(2.2) ´rə `ʰtɕiʔ ⁻kə tsa `ʰtɕiʔ ´ɦgɛː-zə reʔ
山 一 のち 一 越える-[過]
山を１つまた１つと越えました。

(2.3) ⁻tɕʰɯ `ʰtɕiʔ ⁻kə tsa ⁻tɕʰɯ ´mã bo-tɕiʔ ´ɦgɛː-zə reʔ
川 一 のち 川 多い-[不定] 渡る-[過]
川を１つまた１つ、たくさんの川を越えました。

(2.4) ´tə na ta ´lã kʰa-la `kʰo-gə ⁻ɦmɑʔ ´ŋga re-tɕiʔ ´tuʔ ɦḍiː-gə
それから 路上-[位] 3-[属] 戦士 いくらか-[不定] 毒蛇-[能]
`sʰo ʰtɑʔ-nə `ɕʰə-zə reʔ
噛む-[接] 死ぬ-[過]
それから、路上で彼の戦士たちの何人かは毒蛇に噛まれて死にました。

(2.5) ´ŋga re-tɕiʔ ´ɦba mo reʔ-gə `sʰo ʰtɑʔ-nə `za-zə reʔ
いくらか-[不定] 野獣-[能] 噛む-[接] 食べる-[過]
何人かは野獣に噛まれて食べられました。

(2.6) ´ŋga re-tɕiʔ ´ta rɔʔ ´mə ɦguʔ-gə `ʰsɛʔ-zə reʔ
いくらか-[不定] また 野人-[能] 殺す-[過]
何人かはまた野人に殺されました。

(2.7) ´tə nə ta ´rə ⁻ɦgɯ ʰtɕɯ ´koː ɦgɯ ˆɦgɛː-tsʰaː
それから 山 九十九 越える-[達]
それから、99 の山を越えました。

(2.8) ⁻tɕʰɯ ⁻ɦgɯ ʰtɕɯ ´koː ɦgɯ-tɕiʔ ´ɦgɛː-tsʰaː ⁻ʰkɑʔ-la
川 九十九-[不定] 越える-[達] 時-[位]
99 の川をほとんど越えたとき、

(2.9) ´tə nə ta ⁻ʔa tsʰo ⁻kʰo ´rɔː ⁻ʰtɕiʔ ´mə tsʰe ˆma-l̥ɑː-zə reʔ
それから [人名] 3 自身 一 以外 [否]-残る-[過]
それから、アツォ自身１人を除いて誰も残っていませんでした。

(2.10) ´tə nə ta ¯kʰo ´rɔː ¯ʈə meʔ tɕiʔ ´ma-ʰʈɑʔ-nə `ŋ̊ũ tɕʰõ
それから 3 自身 少し [否]-恐れる-[接] 先へ
´ja ra `ⁿɖo-zə reʔ
上 行く-[過]
それから、彼自身少しも恐れず先の方へ上へ行きました。

(3.1) ´tə na ta ´ⁿɖuʔ gə ´ʱdʑaː po-gə ˆʱdoʔ-sʰa ¯ʰtseʔ ¯ʰkɑʔ-la
それから 龍王-[属] 住む-[名] 着く 時-[位]
それから、龍王の住むところに着いたとき、

(3.2) ´ⁿɖuʔ gə ´ʱdʑaː po-gə ¯ʔa tsʰo-gə ¯zeː-zə-gə ¯kʰo ˆnɛː-gə
龍王-[能] [人名]-[能] 言う-[過]-[属] 3 裸麦-[属]
¯sʰa wuː ´leː-sʰa ´ɦoː ¯zeː-ʱdʑɯ-tə `kʰo-la
種 取る-[名] 来る 言う-[名]-[定] 3-[与]
¯kʰɛː ´ma-leː-zə reʔ
承諾する [否]-[幹]-[過]
龍王はアツォが言った裸麦の種を取りに来たと言ったことを承諾しませんでした。

(3.3) ´tə na ta ¯ʔa tsʰo-gə ´lo tʰɑʔ ˆmeʔ-nə
それから [人名]-[属] 方法 [存/否]-[接]
それから、アツォの方法がなくなって、

(3.4) ´tə na ta ´ʱʑə ʱdɑʔ-la ˆroʔ pa ´ʱzo-roʔ ˆzeː-zə reʔ
それから 山神-[与] 助ける-[依頼] 言う-[過]
それから、山神に「助けてください」言いました。

(3.5) ´tə na ta ´ʱʑə ʱdɑʔ-gə ˆroʔ pa ´ʱzo-nə
それから 山神-[能] 助ける-[接]
それから、山神が助けて、

(3.6) ¯ʔa tsʰo-gə ´ⁿɖuʔ gə ´ʱdʑaː po-tə ˆnɔ̃-la ˆnɛː-gə ¯sʰa wuː-tə `ʰkɯ-zə reʔ
[人名]-[能] 龍王-[定] 家-[位] 裸麦-[属] 種-[定] 盗む-[過]
アツォは龍王の家から裸麦の種を盗みました。

(4.1) ´tə na ta ¯ʈə meʔ tɕiʔ ´ma-ᵑgo ¯tsa la ´ⁿɖuʔ gə ´ʱdʑaː po-gə ´ko-nə ta
それから 少しも経たないうちに 龍王-[能] 気づく-[接]
`tsʰiʔ kʰa `za-nə ta
怒る-[接]
それから少しも経たないうちに龍王に気づかれて、龍王は怒って、

(4.2) ¯ʔa tsʰo ¯pʰa-la ´tɕʰə ʱgɛ ´ʱdoʔ ʰtɕiʔ-la ¯ʰʈɯ-zə reʔ
[人名] あれ-[与] 犬 単独の-[位] 変身させる-[過]
あのアツォを１匹の犬に変えました。

(4.3) ´te na ta ´ʱʑə ʱdɑʔ-gə ¯kʰo-la ˆzeː-nə ta
それから 山神-[能] 3-[与] 言う-[接]
それから山神が彼に言うには、

(4.4) ¯tɕʰoʔ ˆpo mo ˆʰtɕiʔ-gə `tɕʰoʔ-la ´ma-ʱga-na ¯tɕʰoʔ
2 娘 一-[能] 2-[与] [否]-愛する-[接] 2
¯mə luː `loː-sʰa ¯ʰka-sʰa reʔ ˆzeː-zə reʔ
人間の身 帰る-[名] 難しい-[可] 言う-[過]
「お前は、１人の娘がお前を愛さなければ、お前が人間の身に戻ることは難しいだろう」と言いました。

(5.1) ´te na ta ¯ʰsɑ̃ ᵐba ´jɑː mo-la ˆlɛː ´jɑː mo ˆjoʔ-nə ta
それから 心 よい-[与] 縁 よい [存]-[接]
それから、よい心にはよい縁があって、

(5.2) ¯ʈə meʔ tɕiʔ ´ma-ᵑgo ¯tsa la ¯tɕʰə ʱgɛ-´ⁿdə ¯sʰa ʱnɛː-te-gə ¯ʰpõ ᵐbo-gə
少しも経たないうちに 犬-この 地域-[定]-[属] 領主-[属]
´po mo ¯ᶯɖẽ wa ´teː-gə `ʱga-nə ta
娘 中間の それ-[能] 愛する-[接]
少しも経たないうちに、この犬はその地域の領主の真ん中の娘が愛して、

(5.3) ´tə na ta ´jõ ̥leʔ ¯mə ˆreʔ-zə reʔ
それから 再び 人 なる-[過]
それから再び人になりました。

(6.1) ´tə na ta ¯mə ¯tsʰõ ma-gə ¯sʰa wuː-tə ´rɑʔ-tsʰaː ¯ʰkɑʔ-la
それから 人 すべて-[能] 種-[定] 手に入れる-[達] とき-[位]
それから、人々みなが種を手に入れたとき、

(6.2) ´teː `sʰa wuː `ʰtɑʔ-nə ˆʑĩ `ʱmo-nə `ʰka lɛː ˆʱdʑɑʔ-nə ta
それで 種 まく-[接] 畑 耕す-[接] 一生懸命働く-[接]
それで、種をまき畑を耕し一生懸命働いて、

(6.3) ´tə nə ta ¯ʰtsɑ̃ ᵐba ´ʑĩ ᵐbo ¯za-ʱdʑɯ ˆrɑʔ-zə reʔ
それから ツァンパ おいしい 食べる-[名] 手に入れる-[過]
それからおいしいツァンパという食べものを手に入れました。

(6.4) ´tə na ta ¯kʰo tsʰo-gə `ʰsɑ̃-nə ta ¯sʰa wuː ¯kʰɔː-ᵑ̊kʰɛ-ⁿdə
それから 3.[複]-[能] 思う-[接] 種 持ってくる-[名]-これ
`ɺa-gə `ʰtõ-zə-gə ¯tɕʰə ʱgɛ-tə ´reʔ `ʰsɑ̃-zə reʔ
神-[能] 送る-[過]-[属] 犬-[定] [判] 思う-[過]
それから彼らが思うことには、「種をもってきたのは神が送った犬である」と思いました。

(6.5) ´ka de `l̥a-gə ˉtɕʰə ʱgɛ-tə ˉkʰɔʔ ´ma-ɦoː-zə ˉna
もし 神-[能] 犬-[定] 連れる [否]-来る-[過] [接]
ˉkʰo tsʰo `ʔa ⁿɖa ˉʰtsã ᵐba ´ʑĩ ᵐbo ˉza-ʱdʑɯ
3.[複] こんな ツァンパ おいしい 食べる-[名]
´rɑʔ-ˆma reʔ ˉʰsã-zə reʔ
手に入れる-[状/否] 思う-[過]
もしも神がその犬を連れてこなかったなら、彼らはこんなおいしいツァンパという食べものを手に入れてはいなかったと思いました。

(6.6) ´tə nə ta `taː wɑː tə ´poʔ pa ˉtʰã tɕeʔ ˉtɕʰə ʱgɛ-tɑ ´ⁿɖeː wa
それから 今まで チベット人 すべて 犬-[共] 関係
´jɑː mo ˆjoʔ-reʔ
よい [存]
それからこれまでチベット人はみな犬との良い関係をもち続けています。

(6.7) ´tə nə ta ˉtʰã tɕeʔ-gə ˉtɕʰə ʱgɛ-tə-gə ´ṇi ma `ʱna-la ˉʰtsã ᵐba
それから みんな-[能] 犬-[定]-[能] 昔-[位] ツァンパ
`kʰɔː-zə reʔ `ʰsã-nə
持ってくる-[過] 思う-[接]
それからみんなはその犬が昔にツァンパを持ってきたと思い、

(6.8) ´tə nə ta ˉmə `tsʰɔ̃ ma `kʰo-la `ʰka tʰeː ´zeː-ʱdʑɯ `tɕʰe tə
それから 人 みんな 3-[与] ありがとう 言う-[名] ために
それからみな人々がそれに「ありがとう」と言うために、

(6.9) ˉlo ´re re-la ´nɛː `ʰtɕeː-tsʰaː ˉna ˉʰtsã ᵐba ˉʰsaː pa
年 それぞれ-[位] 裸麦 収穫する-[達] [接] ツァンパ 新しい
ˉza `ʰkɑʔ-la
食べる とき-[位]
毎年裸麦の収穫を終えて、新しいツァンパを食べるとき、

(6.10) ˉmə `tsʰɔ̃ ma-gə ´tã ᵐbo ˉʰtsã ᵐba ˉloʔ loʔ-tɕiʔ ˉʱdzə-nɛː
人 みんな-[能] まず ツァンパ団子-[不定] こねる-[接]
ˉtɕʰə ʱgɛ-la ˆʱʑiː-lə reʔ
犬-[与] 与える-[未]
人々はみな、まずツァンパ団子をこねて、犬にあげるのです。

2.2　翻訳：物語『裸麦の種子の由来』

むかしむかし、１人の王子がいました。彼は名前をアツォといいました。彼は賢く勇敢でもありました。また、善良な心を持っている人でした。すべての人にとって食べ物が手に入るように、彼は龍王の下へ、裸麦の種を求めに向かいました。

それから、彼は 20 人ほどの戦士を連れて、馬に乗って行きました。山を１つまた１つと越えました。川を１つまた１つとたくさん越えました。それから、路上で彼の戦士たちの何人かは毒蛇に噛まれて死にました。何人かは野獣に噛まれて食べられました。何人かはまた野人に殺されました。それから、99 の山を越え、99 の川をほとんど越えると、アツォ自身１人を除いて誰もいなくなりました。それから、彼自身少しも恐れることなく、先の方へ上へ行きました。

それから、アツォが龍王の住むところに着いたとき、龍王はアツォが裸麦の種を取りに来たと言ったことを承諾しませんでした。それから、アツォは方法がなくなって、それで、山神に「助けてください」と言いました。それから、山神が助けて、アツォは龍王の家から裸麦の種を盗みました。

それから少しも経たないうちに龍王に気づかれ、龍王は怒って、あのアツォを１匹の犬に変えました。それから山神が彼に、「お前は、１人の娘がお前を愛さなければ、お前が人間の身に戻ることは難しいだろう」と言いました。

それから、よい心にはよい縁があって、少しも経たないうちに、この犬はその地域の領主の真ん中の娘によって愛され、それから再び人になりました。

それから、人々がみな種を手に入れたとき、種をまいて畑を耕し一生懸命働いて、おいしいツァンパという食べものを手に入れました。それから彼らは「種をもってきたのは神が送った犬である」と思いました。もしも神がその犬を連れてこなかったなら、彼らはこんなおいしいツァンパという食べものを手に入れることはできませんでした。それから、これまでチベット人はみなその犬との良い関係をもち続けています。それから、みんなは犬が昔にツァンパを持ってきたと思い、人々がみな犬に「ありがとう」と言うために、毎年裸麦の収穫を終えて、新しいツァンパを食べるとき、人々はみなまずツァンパ団子をこねて、犬にあげるのです。

3　訳注

訳注は、まず全般的に現れる現象に関してはじめにまとめて述べ、続いて２節に示した文番号を指示して、それぞれについて与える。特筆すべき事例が見当たらない文番号の箇所については、記述を省略する。

なお、訳注で述べる現象は、先行する記述である鈴木・四郎翁姆 (2016) を参照し、また適宜引用しつつ解説する。本稿で分析する物語は、同論文が記述する言語を話す世代層（青年層）によるものであるため、発音や文法構造が均質的であるという予測による。なお、鈴木ほか (2015) が扱う物語の話し手もまた同世代であることから、これらを参照することで見出される相違点は、およそ「人工的な語り」を特徴づける性格のものであるということが指摘できる。

全般について

この物語の発話では、各発話の最後に伝聞標識が現れないのが特徴的である。これはすなわち、この物語が口承で伝えられていないことを示唆している。聞き及んだことで、かつ自ら確認していない事柄については、伝聞標識を伴うのが通例である Lhagang 方言[5]にとって、文字情報によって内容を覚えた場合、伝聞標識が現れる傾向にないということを示唆している。これは、伝聞標識を含まない漢語を原文として参照していることとは関連がないと考える。本稿の語りは、語りのモードで発話されており、忠実な翻訳を行っているのではないからである。情報源が目で見て確認した「確かなものである」という判断のもとでは、伝聞標識が付加されないと考える。

また、出来事の描写に当たっては一貫してアオリスト[6]が用いられ、目撃証拠性がかかわる完了形[7]は用いられない。状態の描写に当たっては判断動詞や存在動詞が用いられるため、時間、アスペクトに関する表示には制限がある[8]。このため、この物語は語りとして全体的に静的な印象を与える構造を示している。

これらの特徴は、おそらく人工的に創出された物語であるために際立っていると考える。口承で伝わった物語の語りでは、こういった特徴は認められない[9]。

(1.1)

/ˊ^{ɦ}dʑaː po ˊpɯ ʐə/は、その声調領域が示唆するように、２つの語/ˊ^{ɦ}dʑaː po/「王」と/ˊpɯ ʐə/「息子」を並列した複合語である。語と語の接続に属格標識は用いられない。

/ˊ^{ɦ}dʑa po/という語は、本稿では「王」と訳出しているが、Lhagang 方言では、歴史の文脈によって「領主」として用いられる。しかし、この物語には、別に/˗^{h}põ ^{m}bo/「領主」が登場する(5.2)。物語中では架空の王国を設定しているため、歴史の文脈とは異なる訳語を与えている。

不定標識/-tɕiʔ/は、主部の名詞の不定性を表すことを第一目的として現れているわけではなく、しばしば語調を整える際に現れ、それが定/不定によって異なる語形をもつと考えることができる。いわゆる「不定冠詞」とは役割が異なる[10]。「１つ」を強調するときには、(4.4) にあるように独立の声調をもつ数詞「１」を用いる。さらに「１個体」を強調するときには、(4.2) にあるように/ˊ^{ɦ}doʔ ^{h}tɕiʔ/という形態を用いる。

---

[5] 鈴木ほか (2015:125)、鈴木・四郎翁姆 (2016:73) 参照。

[6] 鈴木・四郎翁姆 (2016:68-69) 参照。アオリストは「一般的に過去と呼ばれるカテゴリーに非常に近く、実際 Lhagang 方言の TAM 体系の中では「過去」と呼んでも差し支えない」(2016:68)。しかしながら、Lhagang 方言に時制としての「過去」が認められるかどうかは、詳しく検討する必要がある。

[7] 鈴木・四郎翁姆 (2016:69-71) 参照。

[8] 鈴木・四郎翁姆 (2016:51) 参照。

[9] 鈴木ほか (2015) の分析を参照。

[10] 鈴木・四郎翁姆 (2016:42) では、不定標識として/-ʑiʔ/のみを挙げているが、「「１」は名詞とともに用いられるとき、/ˊtɕiʔ/という異形態をもつ」(2016:41) ともあり、これらの中間的な形態として/-tɕiʔ/があると考えてよいだろう。

存在を表す動詞/ˆjoʔ-reʔ/は、ひとかたまりで１つの存在動詞として扱う[11]。

物語の設定は現在より過去におかれているが、動詞/ˆjoʔ-reʔ/は通常 TAM 接辞を取らないため、/ˊṇi ma ˉʱna ʱna-la/「むかしむかし」という時間を表す表現が語りの時間設定を担っている。

(1.2)

/ˆzeː-reʔ/は、「言う」という動詞に習慣/判断を示す判断動詞と同形態の TAM 要素がついている[12]。物語を語るうえで、この習慣/判断を表す TAM 接辞は状態の表現に用いられる。

(1.3)

/ˉᵑ̊kʰɛː pa/「賢い」は形容詞で、述語の一部になっている。これに/-tɕiʔ/が付加されているが、これは数詞「１」と関連があるものの、数詞ではなく、また語りにおいては独立した声調領域を形成しないことから、不定標識であると考える[13]。

/ˆjiː-reʔ/は、２つの判断動詞の語幹が連続した形式である[14]。これは (1.5) に現れる判断動詞と交換できるが、(1.4) に現れる判断動詞とは交換できない。動詞に先行する/-tɕiʔ/の有無による可能性があるが、子細に検討する余地がある。

(1.4)

形容詞/ˋʰpoː pa ˉtɕʰe/「勇敢な」は、２つの声調領域をもつ複合語と解釈する。最終音節の/ˉtɕʰe/は、単独で「大きい」の意味である。

(1.6)

/ˋtɕʰe tə/に先行するのは名詞句である必要がある。(6.8) 参照。ただし、TAM 接辞がついた動詞に名詞化接辞はつかないようであり、TAM 接辞の後ろに属格が現れている[15]。/-ʱgo/はそれ自体名詞化標識として機能しないと考える。

動詞「得る」の受け取り手（受益者）は位格で表示される。この格は脱落可能であるため、文法格の中の与格とは異なる。

---

[11] 鈴木・四郎翁姆 (2016:53-56) 参照。

[12] 鈴木・四郎翁姆 (2016:65-67) 参照。

[13] 鈴木・四郎翁姆 (2016:57-58) では、形容詞に後続するこの要素を独立の声調をもつ数詞と解釈しているが、おそらく自然発話および語りにおいては、もはや先行する形容詞と同一の声調領域内に含まれた接辞であると考えるのが妥当である。これにより、/-tɕiʔ/は鈴木・四郎翁姆 (2016:42) に記述のある不定標識/-ʑiʔ/の異形態と考える。

[14] 鈴木・四郎翁姆 (2016:52) では、この形式には「当然であるという含意がある」とする。

[15] 格標識は、通常名詞句に付加すると考えるが、鈴木・四郎翁姆 (2016) は動詞句への付加について記述していない。しかし、チベット系諸言語では、格標識は動詞句にも付加され、接続詞の役割を果たす（Tournadre 2010）。本稿 (6.10) などを参照。

(1.7)

/ˊⁿɖuʔ gə ˊʱdʑaː po/は、２つの語/ˊⁿɖuʔ/「龍」と/ˊʱdʑaː po/「王」が属格で結ばれてできている複合語である。(1.1) にある「王の息子」と異なり、この複合語には属格標識が現れている。これは、複合語の第１要素が１音節語であることと関連がある。

名詞「龍王」に後続するのは/ˊzə kʰa/「そば」という位置名詞[16]であり、直前の名詞に属格を要求せず、また位格なしに場所を示しうるが、ここでは独立した声調をもつ。位置名詞が独立した声調をもつかどうかは、その形態的特徴とともに、文中での意味も関係している。特に複音節からなる位置名詞は、概して独立の声調をもつ。

動詞/ˉsʰõ, ˉsʰoː/（文中では接尾辞があるため/ˋsʰõ-/となる）は、通常命令形で用いられる[17]が、過去の文脈において用いられる場合については、「描写で設定される地点より離れる」すなわち「去る」の意味で理解される。この時点で王子は自分の国に戻ってくることが想定されていないとも解釈できる。

物語の中で文と文をつなぐ接続語[18]には多くの音形が認められ、/-ta/や/-nə/、/-nə ta/などは、直接動詞に付加され、動詞の声調領域に取り込まれている。この形態素の直前の動詞は基本的に語幹のみであり、接尾辞類を取らない。TAM 関連は文末をしめくくる動詞が表示する。

文末に現れる/-zə reʔ/は、語源を考えれば、アオリスト標識/-zə/と判断動詞/ˊreʔ/からなる。しかし、このように分析的に語釈をつけるのは、共時的な特性を必ずしも反映するものではないため、/-zə reʔ/をひとかたまりにして扱う[19]。

(2.1)

冒頭の/ˊte na ta/は、この語りにおいて頻繁に繰り返される語で、「それから、それで」と訳せるものである。/ˊte nə ta/、/ˊtə nə ta/という音形も認められる。

/ˉʱmɑː mi/は「戦士」と訳してあるが、「軍人、軍隊」という原義のほか、現代語の文脈では「警察」にも用いられる。Lhagang 方言の本来語であると考えるが、音形上は文語音の様相を呈している。

数詞に後続する/-zə/は大きい数に付加され、概数を表す[20]。

---

[16] 鈴木・四郎翁姆 (2016:40) 参照。

[17] 鈴木・四郎翁姆 (2016:56) 参照。

[18] 鈴木・四郎翁姆 (2016:83) に/nə/という形式についての解説があるが、「接続語」という範疇は認めていない。語りにおいては、/nə/以外にも多くの形態が文と文の接続の役割を担い、かつ独立した声調をもたないことから、これらの形態をまとめて「接続語」と呼ぶことにした。

[19] 関連する記述は鈴木・四郎翁姆 (2016:61-71, 84) 参照。

[20] 鈴木・四郎翁姆 (2016) に記載がない用法である。たいていは「20」以上のきりのいい数に付加される。

(2.2)

/˩kə tsa/は時間的な「後」という意味で用いられるが、ここでは動詞「越える」がこの語の前に省略されていると解釈し、「越えたのちに超える」という意味を表しているものと理解する。

(2.3)

/˩kə tsa/については、直前の (2.2) を参照。

不定を表す/-tɕiʔ/は後置される修飾語に付加され、名詞句であることを表すときにも用いられ、必ずしも不定を表さない[21]。

(2.4)

この文においては、被動者「戦士」が行為者「毒蛇」より前に来る語順を取り、両項とも有生物であるため、行為者には強調の意味がなくても能格標識が必要とされる[22]。和訳には受け身を当てている。

文末には２つの動詞「噛む」と「死ぬ」があり、接続語/-nə/で結ばれているが、後者は１項動詞で、「戦士」がその項に該当する。このような動詞の配列の場合、「毒蛇」が「戦士」よりも前に現れることはできないという。これが統語的制約によるものであるか、語用論的な現象であるかは、子細に検討する余地がある。

(2.5)

この文も (2.4) と同様、被動者「いくらか（戦士）」が行為者「野獣」に先行しているため、行為者に能格標識が現れる。

動詞も同様に２つ存在するが、いずれも２項動詞で、要求する格も変わらないため、いずれも和訳には受け身を当てている。

(2.6)

この文も (2.4, 2.5) と同様、被動者「いくらか（戦士）」が行為者「野人」に先行しているため、行為者に能格標識が現れる。

(2.8)

/˩^{h}kɑʔ-la/「～の時に」の直前の動詞には TAM 接辞類がつかなくてもよい。ここでは「越え終わった」と到達したことを強調するために/-ts^{h}aː/が現れていると解釈する。

---

[21] 鈴木・四郎翁姆 (2016:57-58) で記述があるのは、述部を形成する形容詞に付加される場合のみであり、名詞句であることを表す場合に使用される例は、当該箇所 (2016:49-50) を見ても記述がないが、不定標識 (2016:42) の記述にある例に相当する。本稿の (1.3) の訳注も参照。

[22] 鈴木・四郎翁姆 (2016:45) 参照。

(2.9)

/ˊmə tsʰe/「以外」を用いて「～以外～しない」という意味を表す場合、文末の動詞は語幹に否定辞がつく。形態論上/ˋl̥ɑː-zə ˆma-reʔ/が通例である[23]が、ここでは/ˆma-l̥ɑː-zə reʔ/という、TAM 接辞群に含まれる判断動詞に否定辞がつかない構造のみが許容される。

(2.10)

/ˊrɔː/「自身」は、ここでは独立した声調をもっているが、/ˉkʰo-rɔː/という接尾辞の形式になる場合も認められる。

最後の動詞/ˋⁿɖo-/「行く」は、(1.7, 2.1) のように/ˉsʰõ/「去る」ではない。(2.2) から (2.9) までの道のりを越えたということから、描写の地点に戻ってくる可能性が高いと語り手が判断したからである。

/ˉʈə meʔ tɕiʔ/「少し」は、ここでは後続の否定辞とともに「少しも～ない」のように、否定の徹底性を意味している。

(3.1)

名詞「龍王」につく格標識は、能格ではなく属格であり、後続の/ˆʱdoʔ-sʰa/「住むところ」にかかっている。動詞/ˊʱdoʔ/は通常能格をとらないからである。

名詞化接辞/-sʰa/は、これ自体で位置名詞を形成することもでき、位格標識をとらなくても、文が成立する。

(3.2)

この文には２度「言う」が現れる。最初の「言う」には属格標識がついており、次の「言う」の名詞化した形式を修飾している。そして、/ˉzeː/「言う」に囲まれた部分がアツォ王子のセリフであると解釈する。ただし、３人称代名詞が現れているように、完全な直接引用ではない[24]。全体の直訳としては、「アツォ王子が言った、『～』と言ったこと」というように、「言う」が重複している。しかし、語りで引用を挟む場合には、引用の始めに動詞「言う」を置くことの方が通例であるようで、このような構成は不自然ではないと考える。同様のことが (4.3)-(4.4) にかけても現れる。

最初の「言う」には、語幹にアオリストの接辞がついて過去であることを明示したのちに属格標識がついている。属格は、被修飾語に前置された関係節を修飾節にするときに任意で付加できる要素である[25]。格標識に先行するが名詞句であると考えるならば、アオリストの接辞は名詞化接辞と解釈できる。(6.4) 参照。

「龍王」の能格標識は、この文の最後の動詞/ˉkʰɛː ˊleː/「承諾する」とつながっている。なお、

[23] 鈴木・四郎翁姆 (2016:68) 参照。

[24] 類似の構文が鈴木ほか (2015) にも認められる。

[25] 鈴木・四郎翁姆 (2016:50) には、属格標識を伴わない例のみが記述されている。

この動詞は２つの語で１かたまりとなる語であるが、動詞語幹は第２音節部分であり、接辞類はすべて第２音節側に付加される。

(3.3)

「アツォ」に付加される格標識は、属格か能格か、文構造の解釈の仕方によって、２通りに分かれる。テクストの語釈に示したのは、能格ではなく属格であるとの解釈で、後続の「方法」を修飾している。動詞/ˊmeʔ/が存在動詞であるため、能格は取りえないからである。もう１つの解釈は、「アツォ」は (3.4) の最後の動詞「言う」の行為者で、能格であるというものである。(3.4) には行為者が現れていないため、このような解釈もまた許容される。

(3.4)

/ˆroʔ pa ˊ^{ɦ}zo-roʔ/「助けてください」はアツォのセリフであると解釈する。/-roʔ/は丁寧な依頼を表す助辞[26]である。/ˆroʔ pa ˊ^{ɦ}zo/[27]は１かたまりで動詞となっていると考える。

(3.6)

「盗む」について、和訳では「龍王の家から盗む」としているが、表現方法に従えば「龍王の家で盗みをはたらく」という構造になっている。

(4.1)

/¯ʈə meʔ tɕiʔ ˊma-^{ŋ}go ¯tsa la/「少しも経たないうちに」は、厳密には/¯ʈə meʔ tɕiʔ/, /ˊma-^{ŋ}go/, /¯tsa la/と分けられ、それぞれ「少し」、「[否]-過ぎる」、「後」と語釈を与えられるが、ここでは便宜上１まとまりの時間を表す句として解釈している。

動詞/ˊko/は「気づく」の意味で行為者を能格で標示することができる。「分かる」の意味では能格はとらないのが通例であるが、(4.4) にもあるように、語りの中では能格の用法が自然発話に基づく記述と若干異なっている可能性もある。

(4.2)

人名に指示詞がつく場合がある。この場合、和訳にあるような「あの～」というニュアンスを与える。

/ˊ^{ɦ}doʔ ^{h}tɕiʔ/は「１個体」であることを強調するときに用いる。形態論上は数詞とはいえないが、意味的には数詞「１」の代わりをしていると考える。

動詞/¯^{h}ʈɯ/「変身させる」は、「ある人/ものを全く異なる別の人/ものに変える」という意味で用いられる。

---

[26] 鈴木・四郎翁姆 (2016:72) 参照。

[27] この動詞の第３音節/ˊ^{ɦ}zo/は、本来/ˊ^{ɦ}zu/「する」であると考える。先行する音節の母音に影響を受けて/o/になったのではないかと推測する。

(4.3)

(3.2) と同様に、「言う」はこの文末とともに、(4.4) の文末にも現れ、繰り返されている。

(4.4)

文頭の２人称代名詞は、後続の文の中に適切な位置が見つからないため、主題化され単独の要素となっていると理解する。

/ˆpo mo ˆʰtɕiʔ-gə/「１人の娘」の能格標識は/¯ᶠiga/「愛する」の行為者を示す。通常の会話においては、「愛する」などの感情動詞について、感情の抱き手が能格標識を伴うことはないとみられる[28]。(5.2) にも同様の例が認められる。文脈に沿って考えると、「愛するようになる」という、単なる感情を表現する以外に状態変化の意味がある可能性があるが、現段階ではこの能格標示は語りの中でのみ有効なものであると考える。

接続語/-na/は、(6.5) や (6.9) のように、通常独立した声調をもつが、ここでは声調をもたない形で現れている。

動詞/¯loː/「戻る」は１項動詞であると理解する。しかしここでは絶対格で２項とっているように見える。/¯mə luː/「人間の身」は位格におかれていると考え、位格標識が脱落したものと考える。

(5.1)

文末の動詞/ˆjoʔ/には、文脈上/ˆjoʔ-reʔ/と出てくるべきところが、/-nə ta/「～て」があるため、すべての TAM 接辞部分が示されなくなっている。(1.7) 参照。一方この現象は、存在動詞/ˆjoʔ-reʔ/が１かたまりの存在動詞として成立しておらず、分析可能であるという１つの証拠になっていると考えることができる[29]。

(5.2)

動詞「愛する」の直前にある/-gə/は、(4.4) と同様に能格標識であると考え、「領主の真ん中の娘によって愛される」に近いニュアンスがある。「愛する」対象は「犬」であるが、与格が現れていないのは通常の文構造から考えればほぼありえない。まず、「犬」が先に発話に現れているのは、主題標識を伴っていないものの、主題化と考えられる。ところがこのとき、話者の頭の中に文末の動詞が「愛する」であるということが思い浮かんでいなかった可能性がある。もしかすると、語りの筋書きを瞬間的に忘れたか、内容が混乱した可能性も指摘できる。というのも、流布しているいずれの版においても、「真ん中の娘」に愛されるという筋書きは存在しない

[28] 鈴木・四郎翁姆 (2016:46) 参照。

[29] 鈴木・四郎翁姆 (2016:53-56) 参照。動詞に後続する諸要素について、分析的に語釈を与えるか、ひとかたまりとして語釈を与えるか、判断の難しい部分である。

からである[30]。

(5.3)

動詞/´reʔ/「なる」は判断動詞と同一の形態であるが、TAM 接辞が付加できる点で判断動詞とは異なる。

(6.2)

この文の行為者は、(6.1) に現れる/¯mə `tsʰõ ma/「人々みんな」である。また、いずれの動詞も TAM 接辞群を伴っておらず、文がまだ続いていくことを示している。

文頭の接続詞/´teː/は、周りが/´tə na ta/であるのと比べれば、形態に異なりがあるが、語りにおける接続語句は、文の切れ目を表す場合もあればフィラーの一種である可能性もあり、固定された語ではなく、いくつかの形態が認められるものと言ってよいだろう。

この文に現れる/`sʰa wuː/「種」は他と異なり、下降調で現れる。後続語との声調の対比のために現れる韻律的特徴として理解する。Lhagang 方言に文法上有意な声調交替は認められない。

(6.3)

この文の行為者もまた、(6.1) に現れる/¯mə `tsʰõ ma/「人々みんな」である。

この文では、/¯ʰtsɑ̃ ᵐba ´ʐĩ ᵐbo/「おいしいツァンパ」と/¯za-ᶦdʐɯ/「食べ物」は、「おいしいツァンパを食べること」という名詞句の読みではなく、「おいしいツァンパという食べ物」のように同格であると解釈しなければ文意が通らない。(6.5) にも同様の例が出てくる。

(6.4)

動詞/`ʰsɑ̃/「思う」が、(3.2), (4.3)-(4.4) における「言う」と同様に、引用文の前後に 2 度出てくる。これが引用文の前後の構造であると考える。

動詞「送る」には、(3.2) と同様、語幹にアオリストの接辞がついて過去であることを明示したのちに属格標識がついている。

動詞/¯kʰɔː/「持ってくる」は、(6.5) にあるように/¯kʰɔʔ/となる場合がある[31]。より正確な語義は「手を用いずに持ってくる」であり、「手を用いて持ってくる」と区別される。「犬」は擬人化されていないようである[32]。

---

[30] 西藏文化網版では、単に「3 人姉妹」となっている。第 2 著者が参照していない君島 (2013) では「3 人姉妹の末娘」となっている。

[31] このような現象については、Suzuki & Sonam Wangmo (2015a) の記述を参照。また、具体例については、Suzuki & Sonam Wangmo (2015b) の Lhagang-A および Lhagang-B の語彙を参照。

[32] 君島 (2013) では、犬は首に種の入った袋を身につけていることになっている。この動作は、Lhagang 方言では/¯kʰɔː/で表される。

(6.5)

文頭の/ˊka de/は文語で用いられる形式であるが、語りの中でも用いられる。

/ˋʔa ⁿɖa/「このような」は/˜ʰtsɑ̃ ᵐba/「ツァンパ」を修飾する。

(6.6)

この文は所有構文をとるはずであるであるが、所有者である/ˊpoʔ pa ˜tʰɑ̃ tɕeʔ/「チベット人みな」には標示されるべき与格[33]が現れていない。脱落しているものと理解せざるを得ない。もしくは、発話時には動詞が存在動詞となるとは考えていなかったなどの理由もあるだろう。

名詞/ˊⁿɖeː wa/「関係」は関係がある対象となる名詞に共格標識を要求する。存在動詞が/ˆjoʔ-reʔ/であるため、この発話内容は直接観察した知識によるのではなく、常識的判断として述べられている。

(6.7)

名詞/˜tʰɑ̃ tɕeʔ/「みんな」に付加されている能格標識は、文末の動詞/ˋʰsɑ̃/「思う」の行為者を示しており、名詞句/˜tɕʰə ᶠᶦgɛ-tə/ 「その犬」に付加されている能格標識は、動詞/˜kʰɔː/「持ってくる」の行為者を示している。

(6.8)

ここでの/ˋʰka tʰeː/「ありがとう」は直接引用とも間接引用とも解釈できる。発言内容が短ければ、動詞「言う」などを引用の前後で繰り返す必要がないのかもしれない。

/ˋtɕʰe tə/「～のために」は、(1.6) で出てきたときには直前の動詞句に属格標識がついていたが、ここではそれが存在しない。

(6.9)

この文中に現れる/˜na/は条件を表すものではなく、単なる接続語として機能しているように見える。ただし、独自の高声調を担う。

(6.10)

ここに現れる/-tɕiʔ/は「１つ」という意味でもなく、かといって先行する語が形容詞でもないが、文の構成に必要とされるようである。総称を表している可能性もあるが、Lhagang 方言においてこのような用法が一般的であるとはいえない[34]。

/-nɛː/は接続語と解釈しているが、奪格標識と同一の形態で、「～してから」という順序を表している[35]。

---

[33] 鈴木・四郎翁姆 (2016:46, 54) 参照。

[34] 鈴木・四郎翁姆 (2016) には記載がない。詳細な調査が必要である。

[35] 格標識と接続語の関係については、Tournadre (2010) を参照。

最後の動詞には/-lə reʔ/という未完了の TAM 接辞がついているが、これは反復行為を表すときに用いられるもので、未完了アスペクトが表現されているものと理解する。

4　まとめ

本稿では、カムチベット語 Lhagang 方言による物語『裸麦の種子の由来』の記述言語学的分析と訳注を行った。この物語は Lhagang 方言の口承には存在せず、文字化された内容を基に、Lhagang 方言による翻案を通じてどのような言語特徴が現れるのかを見た。特徴的な点としては、語りの全体において伝聞標識が用いられないこと、過去を表す TAM 接辞群が一貫してアオリストであることなどが認められた。また、能格の用法において通常の会話では現れないパターンが存在することが分かった。

付録：Lhagang 方言の音体系とその表記

・音節構造

最大の音節構造（分節音の配列）は次のようである。

$^{C}C_{i}GVC$

このうち C_i（初頭主子音）と V（音節核の母音）が必須であり、C_iV を音節の最小構成とみなすことができる。

・子音

主子音（C_i）位置に現れる要素の一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	pʰ	tʰ	ʈʰ			kʰ	
	無声無気	p	t	ʈ			k	ʔ
	有声	b	d	ɖ			g	
破擦音	無声有気		tsʰ		tɕʰ			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʑ			
摩擦音	無声有気		sʰ		ɕʰ			
	無声無気	ɸ	s	ʂ	ɕ		x	h
	有声		z		ʑ		ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ȵ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ȵ̊		ŋ̊	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有声	w				j		

・母音

舌位置による一覧は次のようである。

i　ʉ　ɯ　u

e　ə　o

ɛ　ɔ

a　ɑ

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している

・超分節音素

語単位における次のピッチパターンが認められる。

¯：高平　　´：上昇　　`：下降　　ˆ：上昇下降

略号一覧

文法機能語で略号を作らないものは直接 [　] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。

2 ..... 2 人称
3 ..... 3 人称
[能] .....能格
[与] .....与格
[属] .....属格
[位] .....位格
[名] ..... 名詞化標識
[定] ..... 定標識
[不定] ..... 不定標識
[概] ..... 概数標識
[判] ..... 判断動詞
[存] ..... 存在動詞
[幹] ..... 動詞語幹
[未] ..... 未完了
[必] ..... 必要未来
[過] ..... アオリスト
[達] .....達成
[否] ..... 否定辞
[接] ..... 接続語

参考文献

賈芝、孫劍冰編 (1964)「犬になった王子」『黒いりゅう　白いりゅう』（君島久子　訳）岩波書店（原版〈青稞種子的來歴〉賈芝、孫劍冰編《中国民間故事選　第一集》1958 年、人民文學出版社）

君島久子 (2013)『犬になった王子』岩波書店

鈴木博之、四郎翁姆 (2016)「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』８, 21-90

電子版：https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集　（2017 年４月４日閲覧）

鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015)「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』7 , 111-140
電子版：https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集 （2017 年 4 月 4 日閲覧）

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2015a) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* Vol. 32, 153-175.
電子版：http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_32_05.pdf （2016 年 12 月 18 日閲覧）

—— (2015b) Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: Vocabulary of two sociolinguistic varieties. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 10, 245-286.
電子版：http://hdl.handle.net/10108/85072 （2016 年 12 月 5 日閲覧）

Tournadre, Nicolas (2010) The Classical Tibetan cases and their transcategoriality: From sacred grammar to modern linguistics. *Himalayan Linguistics* 9.2: 87-125.
電子版：http://escholarship.org/uc/item/94d0447c （2016 年 12 月 5 日閲覧）

Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263.

中央民族學院少数民族語言文學系藏語文教研室藏族小組 編 (1980)《藏族民間故事選》上海文藝出版社

Origin of highland barley's seeds, adapted and narrated in Lhagang Tibetan —text, annonation, and analysis of narration mode—

Hiroyuki SUZUKI Sonam Wangmo

abstract

This article presents a story named *Origin of highland barley's seeds* narrated in the Lhagang dialect of Minyag Rabgang Khams Tibetan with linguistic glossing, translation, and annotation. This story is not transmitted in the speech community of Lhagang Tibetan, but well known as one of the Tibetan traditional oral stories in Chinese, circulated as a part of books as well as online articles. The present version is artificially composed: after memorising several Chinese versions, the second author, native speaker of Lhagang Tibetan, narrated without referring to the Chinese text. Therefore, it is of an experimental nature as a linguistic material and we will examine how the narrative style has been influenced by the translation process other than a general analysis of a narrative.

The analysis shows that:

- this narrative version lacks a hearsay marker, probably because it is not orally transmitted;
- aorist is a default TAM marker in the narrative; and,
- irregular use of the ergative marker is attested.

受理日 2017 年 4 月 4 日

音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際
—チベット文化圏南東端のチベット系諸言語を例に—

鈴木 博之
オスロ大学

キーワード：カムチベット語、香格里拉方言群、地理言語学、音変化、ABA 分布

1　はじめに

地理言語学的な研究において、ある言語現象が複数の言語・方言間で ABA 分布（周圏分布）を示しているとき、当該言語・方言の系統的関係にかかわらず、この現象の間に一定の歴史的な変化もしくは伝播が存在すると解釈する[1]。地理言語学の分析対象は、多くが語彙形式であり、音形式については、たとえ ABA 分布を示しているとしても、あまり注目されていない。音対応は方言分類を行うときに重要な指標となることが多いものの、音韻変化それ自体は自律的に起こりうる性格のものであると理解されているからであろう。

チベット系諸言語[2]について見ると、方言研究の蓄積は豊富である（金鵬　主編 1983、西 1986、瞿靄堂 1990、格桑居冕・格桑央京 2002、江荻 2002、張濟川 1993, 2009 など）が、地理言語学的研究は進んでいるという状況にはない（鈴木 2015b, 2016a）。筆者による東チベット地域を中心とする地理言語学的研究においても、多くは語彙形式を取り上げてきた[3]。その中で鈴木 (2016b) は、中国雲南省迪慶藏族自治州香格里拉市で話されるカムチベット語の一部が、音形式について ABA 分布の状態を示していることを、具体例と言語地図によって例示している。もちろん、同論文が扱う範囲内で生じている言語現象については、この説明が成立していることは確かである。しかしながら、同論文が解決しているのは、当該地域の範囲に含まれる言語の音変化の過程が ABA 分布の定義通りに分布し、逆周圏分布ではないことに限られており、ABA 分布が成立しているのかそのように見えるだけなのかといった根本的な疑問が残されている。言語地図の作成範囲を指定する理論的根拠は存在しないため、言語地図に採録された範囲の外側に分布する言語の状況がいかなるものであるかという疑問が常に残る。

本稿では、鈴木 (2016b) の議論および結論について、扱う範囲を雲南省で話されるカムチベッ

[1] ある点を中心に同心円状に分布する現象について、外側を古い形式、中心部を新しい形式と考える。地理言語学の一般的な方法論については、柴田 (1969) を参照。

[2] チベット系諸言語は ‘Tibetic languages’ の訳で、従来の「チベット語方言 Tibetan dialects」に代わる概念である。詳細は Tournadre (2014)、Tournadre & Suzuki (forthcoming) を参照。現在のところ、雲南で話されている土地のチベット系言語はカムチベット語のみである。

[3] たとえば、鈴木 (2007, 2008b, 2014c)、Suzuki (2009, 2012b, 2013, 2014, 2015, 2016ab, 2017ab)、Suzuki & Sonam Wangmo (2016) など。

ト語全体まで拡張し、地理言語学の方法論に基づいて、次の２点を検証する。

1. 対象とする言語現象が見せる ABA 分布の外側が、当該 ABA 分布の範囲外にあること
2. ABA 分布となる現象が、ABA 分布外から受けた影響によって成立していないこと

地理言語学は通常方言区画の議論と一線を画する（大西 2014）が、カムチベット語のように方言区画が明確でなく、また方言話者の歴史も文献に詳細な記載がないような場合[4]、音形式の ABA 分布が成立するという事実は方言区画を考えるうえでの重要な根拠となりうる。

本稿では、まず雲南省で話されるカムチベット語の筆者の方言調査地点の概要と先行研究の概観を示す。続いて、上述の２点について、それぞれ１節を当てて議論する。なお、本稿で用いる言語データは断りのない限り筆者自身が収集したものである。音形式の表記には音声記号を用い、表記の枠組みは鈴木 (2005)、朱曉農 (2010)、Suzuki (2016c) に従う。また、本稿で掲げる地図は注記しない限り ArcGIS online を用いて描画したものである。

2　雲南のカムチベット語の概観と先行研究

まず、雲南のカムチベット語方言に関する先行研究を整理しておきたい。Zhang (1996) には、1950 年代に行われた少数民族言語の一斉調査の際に行われたチベット系諸言語の分布地点とみなせる一覧が提示されており、それによると、６地点の変種が記録されたと考えられる。その名称とそれに相当する現在の行政区分名を掲げる[5]。

- 中甸：迪慶州香格里拉市建塘鎮
- 東旺：迪慶州香格里拉市東旺郷
- 徳欽：迪慶州徳欽県升平鎮
- 奔子欄：迪慶州徳欽県奔子欄郷
- 塔城：迪慶州維西県塔城鎮
- 大坡崗：迪慶州徳欽県奔子欄郷打撲貢村

ただし、これまでに行われた記述研究については大部分が建塘鎮に属する方言に集中し、それ以外についてはあまり記述がないという点も指摘できる。建塘鎮で話される変種の先行研究には、陸紹尊 (1990)、Hongladarom (1996)、Wang (1996)、《中甸県誌》(1997:147-153)、《雲南省誌》(1998:421-441)、《迪慶藏族自治州誌》(2001:1281-1293)、蘇郎甲楚 (2007)、王曉松 (2008) 、趙金燦 (2010)、趙金燦・李玉朋 (2014) のようなものがあげられる。また、このため、建塘鎮の変種が雲南チベット語を代表すると広く認識されているが、実際はそうであるとは言えない（鈴木 2008a）。また、これらの方言についての比較的まとまった記述文法はいくつか提出されており、吹亞頂方言を扱う鈴木 (2014a)、勺洛方言を扱う鈴木 (2011)、斯嘎方言を扱う鈴木 (2012a)、そして彭丁方言を扱う Bartee (2007) などがあげられる。これらを見渡すと、各種方言間の全般

[4] 地理言語学における言語現象の解釈には、歴史史料を参考にすることが多い。逆に言えば、歴史史料が存在しない場合、複数の可能性がある解釈の中からより適切なものを選ぶのは困難になる。

[5] 本稿では、地点・方言名をすべて漢字で表記する。

的な文法的特徴は類似の類型をもっているものの、細かい点では際立つ異なりが認められる。たとえば、チベット系諸言語を特徴づける文法的カテゴリーに証拠性 (evidentiality) というものがある（Tournadre & LaPolla 2014）が、Hongladarom (2007) と Suzuki (2012a, 2017c) はともに雲南で話される方言を記述しているけれども、異なりが大きい。

次に、筆者の調査に基づいた雲南北西部で話されるカムチベット語の分布の様子を提示する[6]。図１は雲南省北西部のカムチベット語分布地点について、筆者が現地調査を行って方言資料を収集した地点の一部を示している。

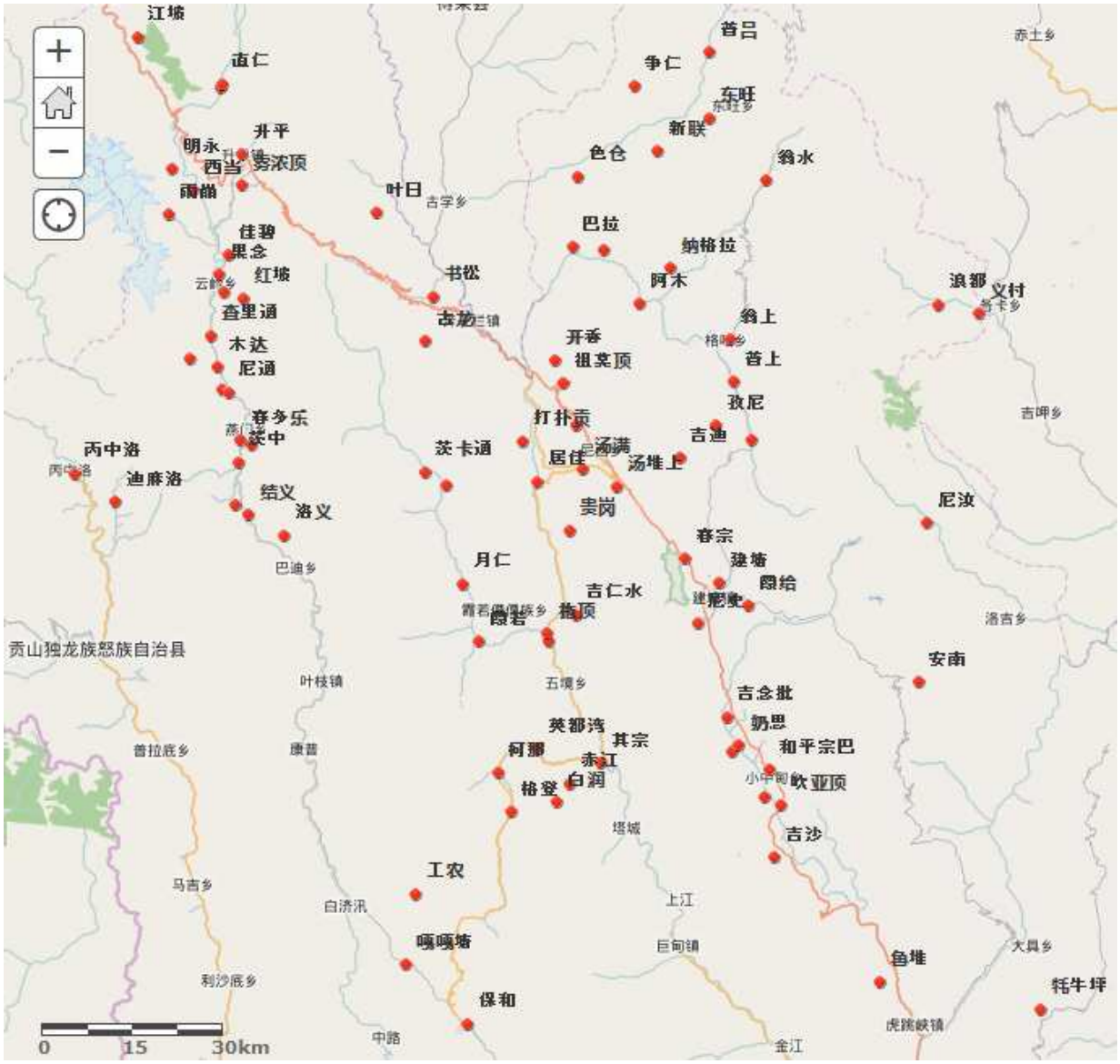


図１　雲南省北西部のカムチベット語分布地点

これらは地理言語学の研究を視野に入れた、自然村を単位とする方言調査の地点である。しかしながら、そもそも図１の調査地点は地理言語学的研究を行うことを目的として記述された

[6] 詳細な地点情報は本文末の付録を参照。

地点ではなく、地点の選定に理論的根拠があるわけではない。当初思い描いていたのは、行政村単位での調査であるが、それでは記述しきれない方言差が見込まれるようになったため、自然村単位での調査に切り替えている。この調査方法は、現在雲南省のチベット系諸言語にのみ、段階的に適用されている[7]。このため、今後も調査地点は増加することが見込まれる。

この地域に分布するカムチベット語に関して、鈴木 (2015a) は次のような分類を提示している[8]。

1. 香格里拉方言群
   （a）建塘 [rGyal-thang] 下位方言群
   （b）雲嶺山脈東部下位方言群
   （c）維西塔城 [mTha’-chu] 下位方言群
   （d）翁上 [dNgo] 下位方言群
   （e）浪都 [La-mdo] 下位方言群
2. 得榮德欽 [sDe-rong ’Jol] 方言群
   （a）雲嶺山脈西部下位方言群
   （b）奔子欄 [sPom-rtse-rag] 下位方言群
   （c）羊拉 [gYag-rwa] 下位方言群
   （d）丙中洛 [Bod-grong] 下位方言群
   （e）巴拉 [’Ba’-lhag] 下位方言群
3. 郷城 [Cha-phreng] 方言群
   （a）東旺 [gTor-ba-rong] 下位方言群

以上の分類を地図上の地点に反映させたものを図２として掲げる。この分類は雲南省に分布するものだけにしぼった記述であり、地理的に連続する雲南省外の方言については含まれていないことに注意が必要である[9]。なお、本稿では以上に示した分類に用いられる 1-3 の番号と a-e の下位分類記号を、方言分類に言及する場合に一貫して参照する。

上記の分類と、本節冒頭に掲げた中国側の調査研究の地点を対照すると、中甸（1a）、東旺（3a）、徳欽（2a）、奔子欄（2b）、塔城（1c）、大坡崗（1b）となる。すなわち、中国側の調査研究ではただ６地点のみが記録されたが、それぞれ鈴木 (2015a) の枠組みに照らしてみれば、上に示したように、異なる群に属していることが明らかであるから、結果的には雲南のチベット系諸言語の多様性を反映するような調査が行われたといえる。なお、これら６地点はすべて図１に示された地点にも含まれている。なお、1950 年代の調査記録と現代の調査記録の間には、表

[7] 他の地域では行政村単位はおろか、郷鎮単位での調査も不十分である。

[8] 鈴木 (2015a) のうち、香格里拉方言群については、鈴木 (2016b) で若干の修正が適用されている。以下に記述するのは、2017 年３月現在の研究を踏まえたものである。

[9] たとえば、郷城方言群の分布地域の中心は、香格里拉市に北接する郷城県内（四川省）にある。雲南省内で話されているのは、(3a) のみである。また、これらの方言群の中には、過去にある程度の話者集団を形成して移民したグループがあり、地理的に不連続な地域にも同一の方言群に属する方言が認められる。本稿では、これらについても取り上げない。

記法の異なりはあるとしても、それぞれの地点について同一の方言群に属している方言であると解釈できる。すなわち、直近の 60 年間に話者の大規模な移住及び言語転換は、言語現象からは想定されない。

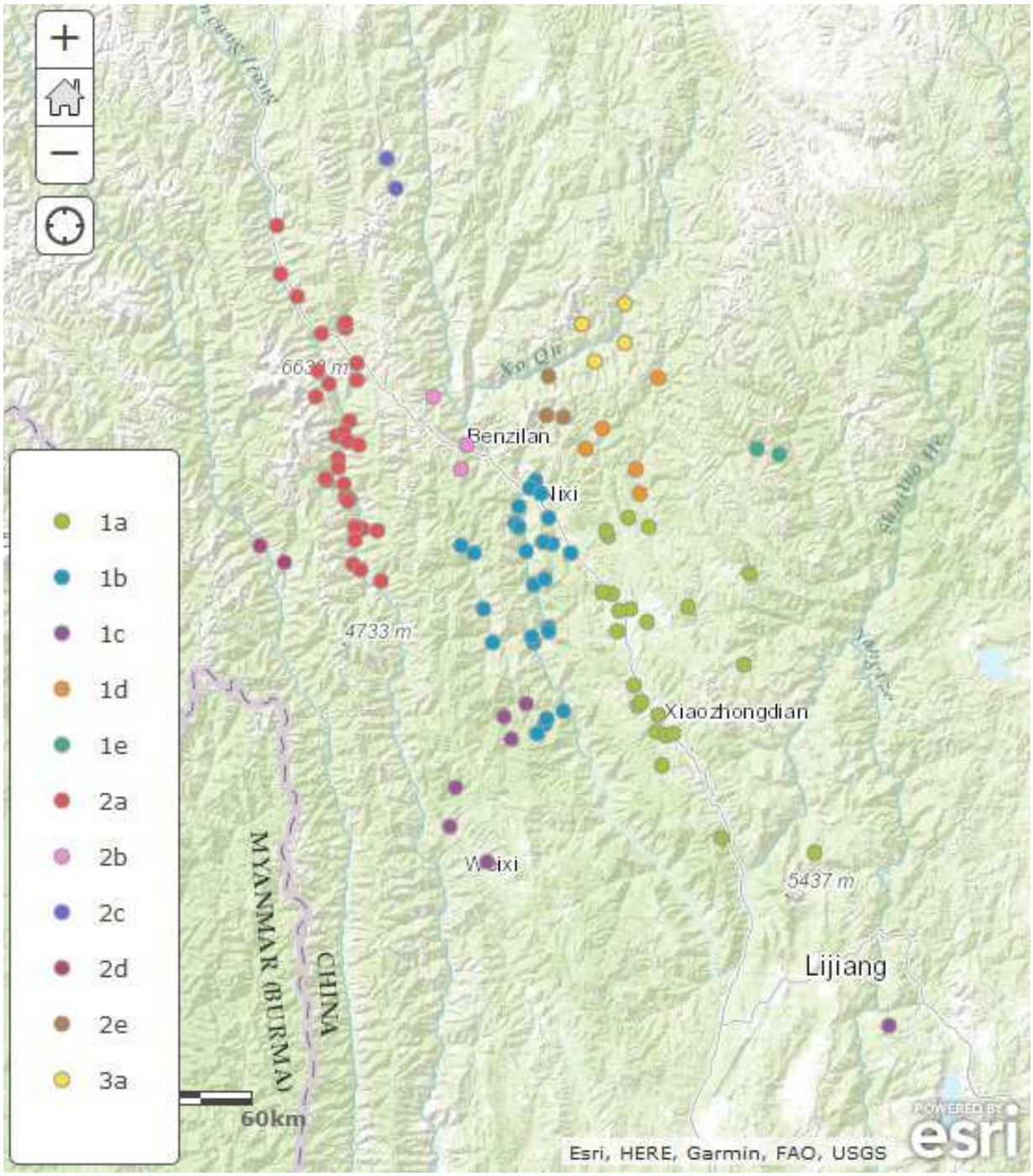


図 2　雲南省のカムチベット語の方言分類

ひとくちに雲南のカムチベット語といっても非常に地域差の激しいものであり、《迪慶藏族自治州誌》(2001:1281)、《迪慶藏族自治州民族誌》(2001) などの総合的な記述には地域差について言及があるものの、具体的な言語学上の特徴については、図 1 に示したように全体的に取り上

げてみて初めて具体像が理解できるようになった。本稿では、この研究の過程で明らかとなった、ABA 分布を示す音特徴について、地域的差異が最も大きく認められる特徴を取り上げ、現象の解釈に関する議論を行う。

なお、本稿の地図に反映される地点数は最大で 108 地点である。

3　音特徴の分類の視覚化：ABA 分布を示す地域の切り出し

前節に述べた通り、先行研究に従えば雲南のカムチベット語の変種は主に３つの方言群に分類されることが分かっている。鈴木 (2015a) の議論の基盤は、最も早い段階で鈴木 (2008a) に提示されている。それによると、方言分類は音特徴に基づいて行われていることが分かる。チベット系諸言語の分類については、瞿靄堂・金效静 (1981)、西 (1986)、西田 (1987) などで議論され、音声現象に関する共通の改新に基づく分類が最も説得力があると考えられている。しかしながら、鈴木 (2015b, 2016a) も指摘するように、共通の改新と類型的特徴の類似に関する区別への理解が乏しい先行研究が多いのも事実である[10]。本稿ではこの問題については議論せず、議論の対象となる地域の諸方言に特化した音声現象に関する共通の改新を具体例とともに提示し、それに基づき議論を進める。

本節では、雲南のカムチベット語について、言語地図を提示することによって、鈴木 (2015a) のいう３つの方言群が際立つ音特徴の違いを示すかという問題について考察する。具体的な分析は言語地図上の記号に反映させるように工夫している[11]。本稿の主たる議論は ABA 分布を示す事例の解釈方法であり、雲南のカムチベット語の類型とその分布を示すことではない。したがって本節では、ABA 分布を示す方言群を切り出せるかどうかという点についての簡潔な議論にとどめることにする。

3.1　地図化する音特徴

本稿で議論を展開するにあたり、地図を用いて方言差異を視覚化するのに適するのは、扱う方言の間に一定の差異が認められるものに限定される。もちろん方言差異がないことを示すために地図を作成したり[12]、既定の基準に従って差異の有無にかかわらず地図を作成したりすること[13]はありうる。しかし、これらは本稿の議論の目的とは異なるため、取り上げない。

雲南のカムチベット語諸方言の音対応について、歴史的視点から最も際立つ音特徴は前部硬

---

[10] これに関する具体的な問題点、およびチベット系諸言語全体を対象にした分類方法については、Tournadre (2014) を参照。

[11] 地理言語学で用いる言語地図は、地図上に配される記号（はんこ）によって、対象言語の類型や歴史が把握できるようにすることが理想的である。本節で掲げる図を特徴づけるため、前節に示した図２において方言所属の異なりを単に色で表現している。

[12] 鈴木 (2007), Suzuki (2012b) による「ぶた」のチベット系諸言語の語形式を扱った事例が該当する。これと対照的になっているのが、「子ぶた」の語彙形式で、語形式が非常に多様である。

[13] たとえば Shirai et al. (2015), Suzuki et al. (2016), Ebihara et al. (2016), Iwasa et al. (2017), Kurabe et al. (2017ab) などは Studies in Asian Geolinguistics という東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行われている共同研究の成果である。扱うテーマによって、差異が多様なものと比較的安定しているものなど、テーマ間に差が認められる。

口蓋系列と硬口蓋系列についての蔵文との音対応である。この点について鈴木 (2016b) が詳しい議論をし、４種類の蔵文対応形式を総合的に見ることで方言を分類することが可能であるとした。この４種類とは、次のようである[14]。

- 蔵文 Ky 対応形式[15]
- 蔵文 Kr 対応形式[16]
- 蔵文 Py 対応形式[17]
- 蔵文 Pr 対応形式[18]

これらを総合的に見ることで、鈴木 (2016b) の扱う範囲の方言群（1a, 1b）には次の４つの類型があると結論づけている[19]。

表１：香格里拉方言群（1a, 1b）における蔵文形式と口語形式との対応関係

<table>
<tr><th></th><th>蔵文 Ky</th><th>蔵文 Kr</th><th>蔵文 Pr</th><th>蔵文 Py</th></tr>
<tr><td>第１類</td><td rowspan="2">/tɕʰ, tɕ, dʑ/</td><td rowspan="2">/cʰ, c, ɟ/</td><td>/çʰ, ç, ʝ/</td><td>/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
<tr><td>第２類 A</td><td colspan="2">/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
<tr><td>第２類 B</td><td colspan="2">/tɕʰ, tɕ, dʑ/</td><td>/çʰ, ç, ʝ/</td><td>/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
<tr><td>第３類</td><td colspan="2">/tɕʰ, tɕ, dʑ/</td><td colspan="2">/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
</table>

ところが、表１から分かるように、４種の音対応のうち蔵文 Ky 対応形式と蔵文 Py 対応形式は方言間で差異を示していない。このため、雲南のカムチベット語についてこの２つを地図化しても一様な分布を示すにとどまることになる。もちろん、先行研究のいう「総合的に見ること」とは、個別の音対応だけに注目するのではなく、複数の特徴の合流と対立の維持についても考慮に入れる必要があることについて述べているのであるが、表１については、すでに合流と対立の維持について既知のことであり、言語地図も鈴木 (2016b) に提示してあるため、あえて本稿では個別の音対応に注目し、蔵文 Kr 対応形式および蔵文 Pr 対応形式の２点につき、地図を作成する。

もちろん、以上に言及した蔵文対応形式以外にも特徴的な差異が認められるけれども、これらについては、先行研究におけるチベット系諸言語の方言学的研究における記述[20]や、また個別方言の記述を参照されたい[21]。

---

[14] ただし、各方言によって例外もしくは下位区分を設ける必要がある。なお、チベット文字の表す音価については、格桑居冕・格桑央京 (2004) を参照。

[15] 蔵文 k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[16] 蔵文 k, kh, g に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[17] 蔵文 p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[18] 蔵文 p, ph, b に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[19] 鈴木 (2016b:100) の表を一部改変して掲げる。

[20] 江荻 (2002) や張濟川 (2009) を参照。

[21] 雲南のカムチベット語については、鈴木 (2013ab, 2014b, 2016c, 2017)、Suzuki (2008, 2009, 2014) などの議論がある。

3.2　言語地図と考察

以下に蔵文 Kr 対応形式および蔵文 Pr 対応形式の言語地図を掲げる。

まず蔵文 Kr 対応形式について地図化する（図３）。蔵文 Kr 対応形式は、具体的に *khrag*「血」、*skra*「髪」、*gro*「小麦」などの初頭子音に現れる音を想定する。

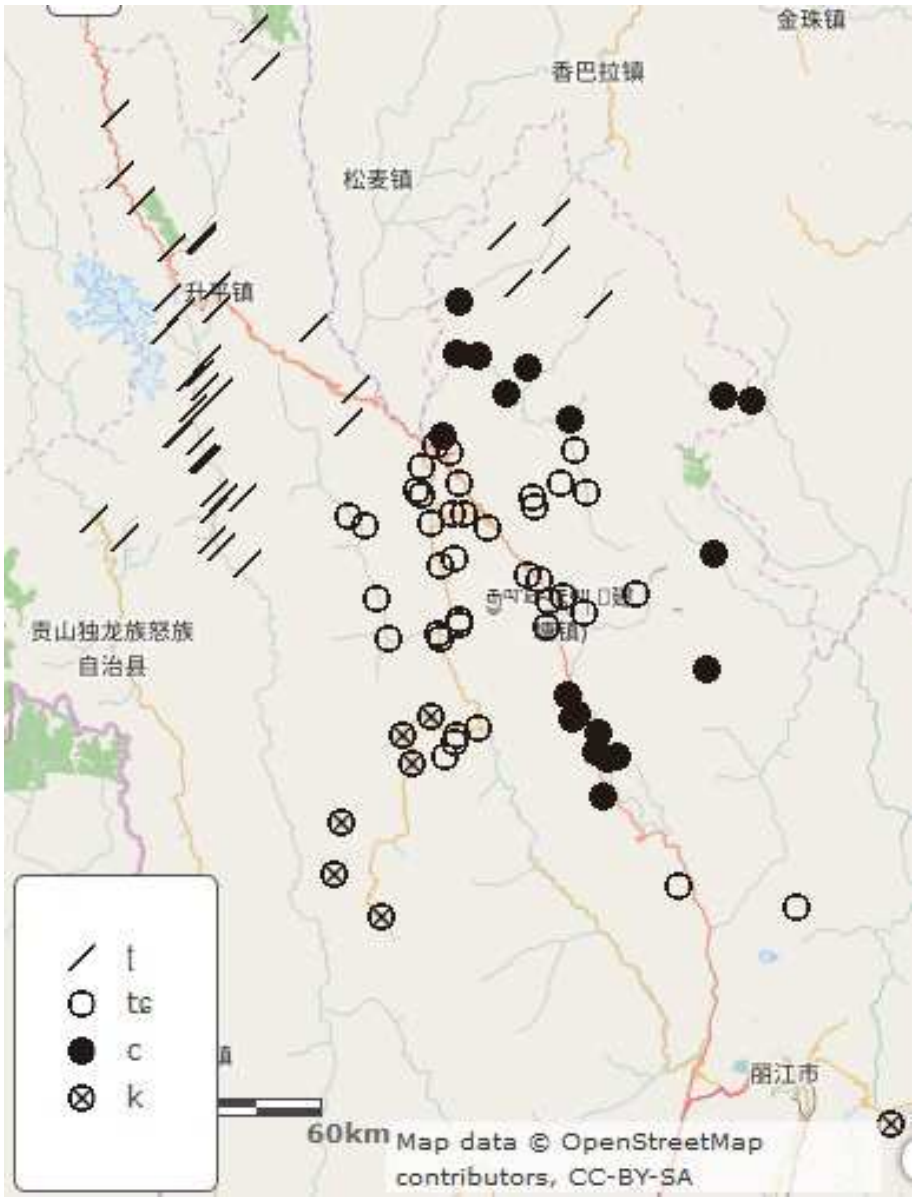


図３　蔵文 Kr 対応形式（簡略表記）

凡例中の ‘ʈ’ はそり舌閉鎖音及びそり舌破擦音の両方を含む。‘c’ には硬口蓋閉鎖音及び硬口蓋化軟口蓋閉鎖音の両方を含む。いずれにせよ、地図化するにあたっては単純化した。

図３上の記号に反映されているように、この地域には２つの大きな類型がある。これらは斜線と円形の記号に分けて示している。言語地図には分析の最終結果のみが反映されるため、どの音特徴が斜線に分類されるか円形に分類されるかについて、地図それ自体が解釈を示すことは

ない。異なる円形の記号が互いに関連するといえるのは、たとえば鈴木 (2016b) や鈴木 (2013a) などの個別的、具体的研究に基づく判断となる。この部分の議論は本稿の目的との関係が希薄であるため、割愛する。

次に蔵文 Pr 対応形式について地図化する（図４）。蔵文 Pr 対応形式は、具体的に *phra*「細い」、*sprin*「雲」、*brag*「崖」などの初頭子音に現れる音を想定する。

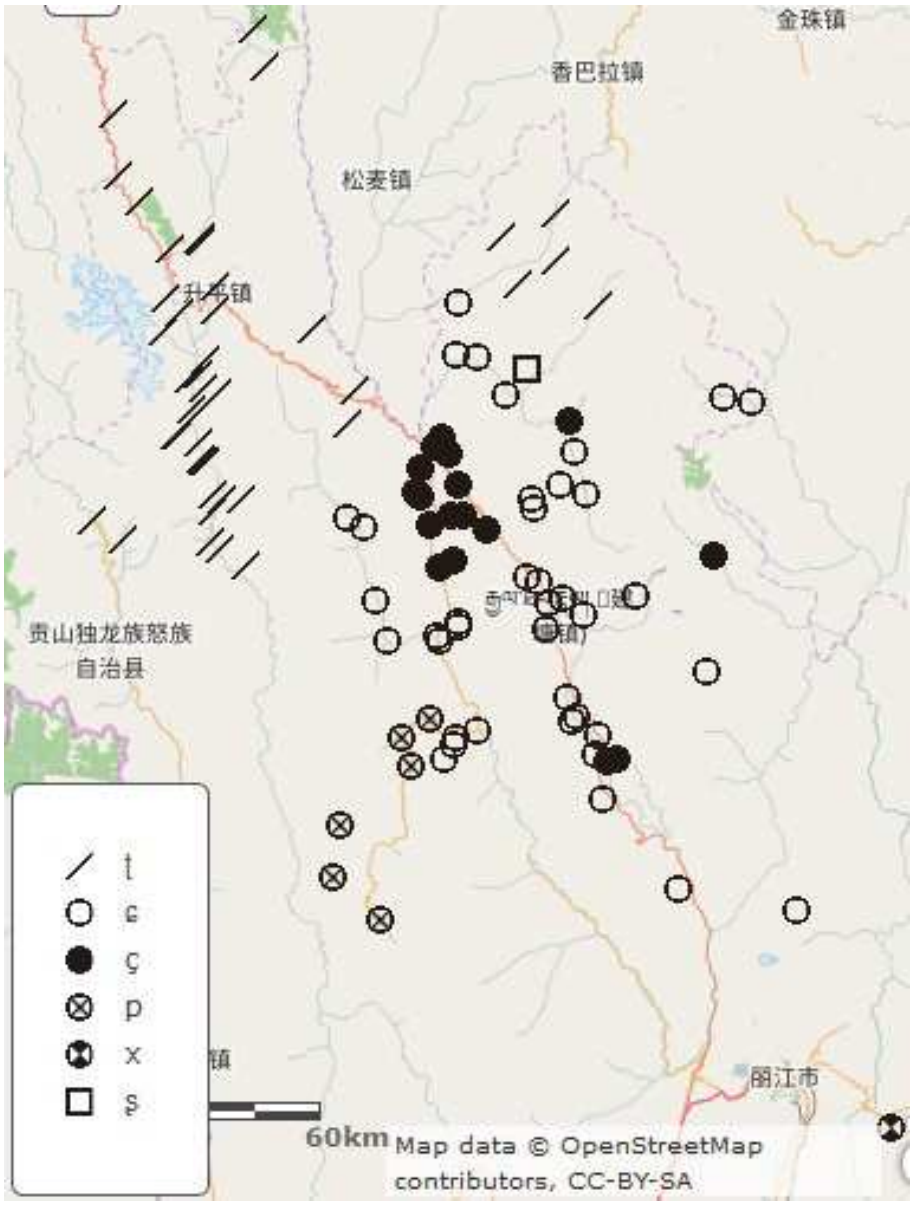


図４　蔵文 Pr 対応形式（簡略表記）

凡例中の ‘ʈ’ はそり舌閉鎖音及びそり舌破擦音の両方を含む。

図４上の記号も、図３と同じく分布の面で２つの大きな類型がある。これらもまた斜線と円形の記号に分けて示している。これらに加えて、図４には四角の記号で示された形式もある。図３と図４に用いられた音対応を表す記号は、調音位置の点において互いに関連している。両図の斜線記号はそり舌閉鎖/破擦音を示し、円形記号は主に口蓋音に関連づけられている。

図３、図４のデータを総合してみると、２つともにほとんどの地点が斜線と円形の２種に分かれ、ほとんどの地点で記号の形態が一致している。表１に示したように、地図化した２つの蔵文形式は互いに関連しており、これらが関連づけられないという結果が出れば、それは従来のチベット系諸言語の研究[22]上まれな事例であるといえるから、図３と図４が示す結果はチベット系諸言語の方言研究としてある程度期待される帰結であるといえる。ここで問題にすべきは、斜線と円形になぜ分かちうるかという点である。言い換えれば、ここでなされるべき説明は、これら２種が音変化の過程で交差しないという事実である。

斜線で示される地点の諸方言については、表１に含まれていない。このため、これらの方言が示す音対応を、表１にならって以下にまとめてみる。

表２：得榮徳欽方言群（2a）における蔵文形式と口語形式との対応関係

	蔵文 Ky	蔵文 Kr	蔵文 Pr	蔵文 Py
X 類	/tɕ^{h}, tɕ, dʑ/	/ʈ^{h}, ʈ, ɖ/		/ɕ^{h}, ɕ, ʑ/
Y 類	/tɕ^{h}, tɕ, dʑ/	/ʈ^{h}, ʈ, ɖ/		/ʂ^{h}, ʂ, ʐ/

表２に示されるように、得榮徳欽方言群（2a）に属する諸方言は、香格里拉方言群に属する諸言語と異なり、これら４種の蔵文対応形式について、際立つ異なりが認められない。X 類と Y 類の根本的な異なりは、ただ蔵文 Py の音対応における調音位置において示されるにとどまる。また、蔵文足字が y か r かによって音対応が分かれ、後者の場合一律そり舌閉鎖音に対応する点が特徴的である。

表１と表２を比べれば分かるように、これらは４つの蔵文対応形式間の音対応の相互的関係について、まったく異なる類型を示している。そして、表１は蔵文 Ky と蔵文 Kr、蔵文 Pr と蔵文 Py という蔵文基字に基づく２つのグループに分かれ、表２は蔵文 Ky と蔵文 Py、蔵文 Kr と蔵文 Pr という蔵文足字に基づく２つのグループに分かれている。この異なりは個別の音対応ではなく、体系全体における音対応の類型の異なりを意味する。そしてそれに基づいて、図３、図４における円形と斜線記号で示される方言が異なる類型をもつ方言群であると判断できるいうことである。

もちろん、以上の説明では円形もしくは斜線で示してある方言群が内部でひとまとまりになっているかどうかは説明できない。事実、斜線で示してある地点の方言は、得榮徳欽方言群 (2) および郷城方言群 (3) に属するすべての方言が含まれている[23]。しかしながら、本節の目的は円形で示された方言群を切り出すことであるから、以上の点を説明する必要性は現段階ではないということに注意が必要である[24]。本節の議論は表１と表２に示される音対応の類型が互いに異なっていることを示すことができていれば十分である。

[22] たとえば江荻 (2002)、張濟川 (2009) などを参照。

[23] これは江荻 (2002) などを参照すれば分かるように、多くのチベット系諸言語で認められる音対応であるといえる。

[24] しかしながら、得榮徳欽方言群 (2) と郷城方言群 (3) がどのように分かれるのかを詳細に議論した研究は未見である。両方言群の特徴を兼ね備えた方言、巴拉方言 (2e) もまた存在する（鈴木 2012b）ため、十分な方言地点数を確保して議論をする必要がある。

4　ABA 分布を示す香格里拉方言群の解釈

前節の議論において、香格里拉市を中心とする地域に分布する方言と徳欽県および香格里拉市北部に分布する方言の間には音変化の側面で異なる音変化の過程を経て成立していることを示した。一方、後者の方言については方言間に認められる音対応が一様であることが分かるが、前者については複数の音対応が存在していることが分かる。しかも、その分布は香格里拉市建塘鎮を中心とする地域を中心に同心円状の分布を示し、地理言語学でいうところの ABA 分布に近い状態を呈している。しかし、これは音韻特徴であって、語形式ではない。

地理言語学においては、ABA 分布は主に語形式や形態論的、形態音韻論的現象の解釈に用いられることが多い（有元 2014 参照）。音変化については例外が比較的多く、ABA 分布が成立していると判断するのに躊躇する例が多く認められるといえる。しかしながら、音変化の ABA 分布は、特定の地域と言語状況においては成立しうるのではないかと解釈できるということを、本節で考察する。

4.1　考慮すべき音韻特徴の範囲とその背景

前節で掲げた４つの蔵文形式に関する香格里拉方言群の事例（表１）について、鈴木 (2016b) は第１類が最も古態的であり、第３類が最も変化の進んだものであると分析する。加えて、第２類の音変化の類型に２種類ある点について、それが香格里拉方言群の中において下位分類を設けられる１つの言語学的根拠になると考えている。

しかしながら、図３、図４に示した円形記号は、表１には含まれない音対応を示しているものも存在する。より単純な事例を示す図３について見ると、音対応として ‘k’ と書かれた分類が相当する。この対応関係を持つ方言は維西塔城下位方言群（1c）に分類される方言であるが、鈴木 (2013a) に記述されるように、この音変化が起きた背景にナシ（納西）語との接触という外的要因を認めることができる。この点において、維西塔城下位方言群は音変化の歴史について明確な分類基準が認められるということになる。歴史的発展が明らかであり、建塘下位方言群 (1a) や雲嶺山脈東部下位方言群 (1b) との一定の距離が認められる以上、この種の方言は本稿で考察する ABA 分布の外側に位置すると考える。

加えて、もう１つの問題がある。それは香格里拉方言群に属さないいくつかの方言が、図３、図４ともに香格里拉方言群（1）と同様の特徴を示していることにある。それは巴拉、色倉の２地点であり、両者とも (2e) に属する。これらは歴史言語学的分析によって所属が議論されており、（鈴木 2012b）、当該の音変化は香格里拉方言群（1）の影響を受けて成立したと見込まれる。これは ABA 分布が系統関係を越えて成立している好例であり、地理言語学的分析によって明らかになる特徴である。しかしながら、本節の議論では、１つの系統に属すると認められる方言の音特徴とその変化の順序について考察することを目的とするため、(2c) の点を言語地図に組み込まない。

さて、以下に図３、図４において円形で示された地点の中で維西塔城下位方言群の地点を除いた地点について、表１に採用した分類に基づき分類記号を与えた地図を掲げる。

図 5　香格里拉方言群（1a, 1b, 1d, 1e）の音対応の類型

以上の分布を見ると、ABA 分布のように見えるのは、建塘鎮を中心とし、第１類を最も外側、第３類を最も内側とする形式である。このように考える場合、尼西郷の南西地域以南、金沙江及びその支流流域にかけて地理的に連続して位置する地域の方言が示す第３類は、ABA 分布の外側に位置すると判断する。この地域に共通する背景としては、傈僳（リス）族との雑居が進んでいる点、かつ地理的に金沙江流域という交通路でつながっている点などがあげられる。また、維西塔城下位方言群 (1c) の分布地域にも隣接している。

本稿では ABA 分布の外側にある諸方言については議論の対象としないため、これ以上深く立ち入らないが、以上に述べた背景が方言形成に与えた影響については、稿を改め議論する余地がある。

4.2　歴史的背景を考慮した ABA 分布の理解

ABA 分布を見るとき、扱う言語現象の中心はたいてい当該地域の政治的、経済的中心地である。香格里拉方言群についても例にもれず、言語現象の中心は同地域の政治的、経済的な中心である建塘鎮にあるといってよい[25]。

音特徴が ABA 分布の様相を示すとき、それが地理言語学でいう ABA 分布であると考えるには、次のような要件が必要とされると筆者は考えている。

- 音変化のそれぞれが互いに歴史言語学的に密接な関連があるという分析が可能であること
- 言語現象の中心とみなされる地域が、一定の時間、政治的、経済的な中心をなしていること
- 現象の分布地域が歴史的に見て一定の時間互いに関連していることが明らかであること

これらは、チベット文化圏について実際の言語現象にあたってみた場合、決して多くある事例とは言えない。地理言語学では分析対象の地域の歴史的背景について、何らかの文献を参照することが多い。ところがチベット文化圏については、特定の地域を除き詳細な歴史が記載されていないことが通例で、地理言語学的分析を決定づける根拠がそもそも希薄であり、より厳密な分析を経た言語事実に頼らなければならない側面がある。

逆に、歴史言語学的考察を経て、音変化の歴史あるいは相対年代の順序が明らかになる地理的に連続して分布する一連の方言区域が認められる場合、もしそれが ABA 分布のような様相を呈しているならば、これを周辺とは異なる１つの独立方言群[26]と認定する根拠にすることが可能ではないだろうか。もちろん、ABA 分布を示す方言とそうでない方言は言語地図を作成しても画一的に分かつことができず、異なる方言群が交差する地域では一見するとどちらの方言群に属するのか不明な場合がある。香格里拉市においても、詳細な音変化の分析を通して方言所属が明らかになるという例が認められる[27]。

そもそも ABA 分布は、方言群を越えて見いだせる部分も存在し、それが地理言語学的研究の１つの貢献でもある。音変化については１方言群内で閉じた、いわば保守的な特徴が相対的に多いかもしれないが、そもそも方言区画を定めるためにこの種の議論があるのではなく、方言形成の側面から見て、ある地点から同心円状に発展していると見える地域には独立した方言群の中心が存在する、と理解することが重要であるという点が強調されるべきである。

特に方言差異が激しいにもかかわらず、諸事情により「１言語」とみなされてきた言語を研究する際には、この理解が方言形成や方言区画の研究に非常に大きな影響を与えることになるといえる。

---

[25] 《中甸県誌》(1997)、《迪慶藏族自治州誌》(2001) などに記載の歴史沿革、また王恒傑 (1995) や呉光范 (2009) の記述を参照。

[26] あるいは場合によっては「独立言語」とみなすことができるかもしれない。

[27] 具体例については、鈴木 (2010, 2012b) を参照。

5　まとめ

本稿では、冒頭に次の２点を提起した。

1. 対象とする言語現象が見せる ABA 分布の外側が、当該 ABA 分布の範囲外にあること
2. ABA 分布となる現象が、ABA 分布外から受けた影響によって成立していないこと

１については、図３、図４および表１と表２の異なりから見て取れるように、明確な形でデータを示した。２については、4.2 節の議論において、同心円状の現象の中央部分が、政治的、経済的な中心地であり、ABA 分布が地理言語学的に意義のある形で成立している条件を備えていることを示した。よって、本稿で目指した議論は達成されたと考える。

本稿の分析対象とした雲南地域については、それがチベット文化圏の周縁部に位置し、かつ他民族との交流も多い点で、各地点間の方言差異も豊富に認められ、加えて一部については、音変化の歴史に他言語の深い関与が認められるという特別な状況を呈している。それゆえ、１つの地理的に連続した区域に分布する方言間に、容易に異なりを見出すことができる。音変化について ABA 分布のように見える状況が成立しているのが地図を作成することで明瞭になるというのは、非常にまれな事例であるといえるかもしれない。

現段階では、チベット系諸言語の自然村単位における方言調査が実施されているのはほぼ雲南に限られている。それゆえ、細かな言語差異が他のチベット文化圏で認められるかどうか確言はできない。しかしながら、もし他の地域で酷似する現象が認められる場合、音変化についても ABA 分布を認めることができる方言群が出てくるかもしれない。もしも同様の事例が現れたとき、本稿が１つの事例研究として参考になるだろう。

[付記]

雲南省のカムチベット語諸方言の調査に当たっては昆明市の瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮の関係各位の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。

筆者による現地調査の一部については、平成 25-28 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B)「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167）、平成 28 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722）の補助を受けている。

参考文献

有元光彦 (2014)「音韻ルールの方言周圏論」小林 編 189-207

大西拓一郎 (2014)「言語地理学と方言周圏論、方言区画論」小林 編 145-161

小林隆 編 (2014)『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』東京：ひつじ書房

柴田武 (1969)『言語地理学の方法』東京：筑摩書房

鈴木博之 (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23

—— (2007)「川西民族走廊・チベット語方言における「ぶた」を表す語」『京都大学言語学研究』第 26 号 31-57

—— (2008a)〈迪慶藏語是康巴藏語中的 “一個” 次方言嗎〉《康定民族師範高等専科學校學報》第３期 6-10

—— (2008b)「チベット語における「心」「太陽」「月」の方言地理学的分析—“香格里拉” と *sems kyi nyi zla* の対応に関連して—」『京都大学言語学研究』第 27 号 23-48

—— (2010)「カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2010-35 巻１号 231-264

—— (2011)「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』３, 1-35

—— (2012a)「カムチベット語燕門・斯嘎[Sakar] 方言の文法スケッチ」稲垣和也編『地球研言語記述論集』４（大西正幸博士還暦記念号）, 123-158

—— (2012b)「カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴」『国立民族学博物館研究報告』2012-37 巻１号 53-90

—— (2013a)〈雲南維西藏語的 r 介音語音演變—兼談 “兒化” 與 “緊喉” 之交叉關係—〉《東方語言學》第 13 輯 20-35

—— (2013b)「カムチベット語塔城・格登 [sKobsteng] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第８号 123-161
電子版：http://hdl.handle.net/10108/75672 （2017 年４月４日アクセス）

—— (2014a)「カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ」千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』６, 1-40
電子版：https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集 （2017 年４月４日閲覧）

—— (2014b)〈尼汝藏語的小舌輔音與其藏文對應規律〉《東方語言學》第 14 輯 1-12

—— (2014c)〈雲南藏語土話中的特殊数詞形式：其地理分布與歷史来源〉《南開語言學刊》第２期 68-76

—— (2015a)〈建塘藏語土話研究的幾個意義〉徐建華主編《雲南藏學研究（二）》184-197

—— (2015b)〈藏語方言學研究的基礎問題〉《東方藏區諸語言研究》3-18 四川民族出版社

—— (2016a)〈藏語方言學研究與語言地圖：如何看待 “康方言”〉《民族學刊》第２期 1-13+92-94

—— (2016b)「/ɟ/が語る音変化史—カムチベット語香格里拉方言群における硬口蓋系列音素についての覚え書き—」『言語記述論集』８, 91-103
電子版：https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集 （2017 年４月４日閲覧）

—— (2016c)〈香格里拉藏語亞浪話的鼻音系統〉《東方語言學》第 16 輯 115-123

—— (2017)〈麗江永勝県大安藏語的來歷初探：通過與納西族的接觸如何演變〉《藏學學刊》第 14 輯 250-263

西義郎 (1986)「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11 巻４号 837-900 + 1 地図

西田龍雄 (1987)「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社

Bartee, Ellen Lynn (2007) *A Grammar of Dongwang Tibetan*. Doctoral dissertation, University of California at Santa Barbara.

Ebihara, Shiho, Satoko Shirai, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Hiroyuki Suzuki, & Ikuko Matsuse (2016) Milk: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics III —Milk—*, 14-17. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag3_milk_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: A preliminary report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2, 69-92.

—— (2007) Evidentiality in Rgyalthang Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 30.2, 17-44.

Iwasa, Kazue, Satoko Shirai, Keita Kurabe, Shiho Ebihara, Hiroyuki Suzuki, & Ikuko Matsuse (2017) Wind: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics IV —Wind—* (in press)

Kurabe, Keita, Satoko Shirai, Kazue Iwasa, Shiho Ebihara, Hiroyuki Suzuki, & Ikuko Matsuse (2017a) Iron: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics V —Iron—* (in press).

—— (2017b) Means to count noun: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics VI —Means to count noun—* (in press).

Shirai, Satoko, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Hiroyuki Suzuki, & Shiho Ebihara (2015[2016]) Sun: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics I —Sun—*, 14-17. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag1_sun_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Suzuki, Hiroyuki (2008) */l/ - /j/ interchange in Shangri-La Tibetan*. Paper presented at 41st International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (London)

—— (2009) Preliminary report on the linguistic geography for multicoloured Tibetan dialects of Yunnan. In Makoto Minegishi, Kingkarn Thepkanjana, Wirote Aroonmanakun, & Mitsuaki Endo (eds.) *Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium*, 267-279. Fuchu: Global COE Program ‘Corpus-based Linguistics and Language Education,’ Tokyo University of Foreign Studies.

—— (2012a) Multiple usages of the verb snang in Gagatang Tibetan (Weixi, Yunnan). *Himalayan*

Linguistics 11.1, 1-16. Online: https://escholarship.org/uc/item/774554sm （accessed 12 December 2016）

—— (2012b) Tibetan *pig*s revisited: Multiple *piglet*s with a *sow* in Yunnan Tibetan and beyond. *Papers from the First International Conference on Asian Geolinguistics*, 79-88.

—— (2013) The words for ‘rain’ and ‘wind’ in Tibetic languages spoken in the Ethnic Corridor. *Papers from the First Annual Meeting of the Asian Geolinguistic Society of Japan*, 58-67.

—— (2014) Issues in the lexical complexity in Eastern Tibetic languages : from a cat’s eye. *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics* 116-125.

—— (2015) A geolinguistic description of terms for ‘sun’ in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics I —Sun—*, 79-85. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag1_sun_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

—— (2016a) A geolinguistic description of terms for ‘rice’ in Tibetic languages of the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics II —Rice—*, 52-59. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag2_rice_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

—— (2016b) Geolinguistic analysis of ‘milk’ in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics III —Milk—*, 30-35. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag3_milk_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

—— (2016c) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99-125.

—— (2017a) Geolinguistic analysis of ‘wind’ in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics IV — Wind—* (in press)

—— (2017b) Notes on the word form for ’iron’ with a voiced initial in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics V —Iron—* (in press)

—— (2017c) The evidential system in Zhollam Tibetan. In Lauren Gawne & Nathan W. Hill (eds.) *Evidential Systems in Tibetan Languages*. Mouton de Gruyter. (in press)

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2016) Cultural contexts of the expansion of a Tibetan word *’bras* ‘rice’ in the easternmost Tibetosphere. In Mitsuaki Endo (ed.) *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics*, 72-79. Online: https://publication.aa-ken.jp/papers_3IC_Asian_geolinguistics_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Suzuki, Hiroyuki, Satoko Shirai, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Shiho Ebihara, & Ikuko Matsuse (2016) Rice plant: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics II —Rice—*, 12-14. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag2_rice_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129. Walter de Gruyter.

Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues

and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263.

Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker).

Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalthang Tibetan phonology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 55-67.

Zhang, Jichuan (1996) A Sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133.

《迪慶藏族自治州誌》編纂委員會 (2001)《迪慶藏族自治州誌》昆明：雲南民族出版社

江荻 (2002)《藏語語音史研究》北京：民族出版社

金鵬　主編 (1983)《藏語簡誌》北京：民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》北京：民族出版社

—— (2004)《實用藏文文法教程 [修訂本]》成都：四川民族出版社

陸紹尊 (1990)〈藏語中甸話的語音特點〉《語言研究》第 2 期 147-159

閔江海主編 (2001)《迪慶藏族自治州民族誌》深圳：深圳匯源彩色印刷有限公司

瞿霭堂 (1990)《藏語韻母研究》青海民族出版社

瞿霭堂、金效静 (1981)〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第 3 期 76-84

蘇郎甲楚 [bSod-nams rGya-mtsho] (2007)〈再論中甸藏語方言〉《蘇郎甲楚藏學文集》130-142 昆明：雲南民族出版社

王曉松 (2008)〈對中甸藏語方言的粗淺認識—從語音上看中甸方言的特點和規律〉《王曉松藏學文集》368-378 昆明：雲南民族出版社

《雲南省誌》編纂委員會 (1998)《雲南省誌　卷五十九　少数民族語言文字誌》昆明：雲南民族出版社

雲南省中甸県地方誌編纂委員會 (1997)《中甸県誌》昆明：雲南民族出版社

王恒傑 (1995)《迪慶藏族社會史》北京：中国藏学出版社

呉光范 (2009)《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》昆明：雲南人民出版社

張濟川 (1993)〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 北京：中央民族學院出版社.

—— (2009)《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》北京：社會科學文獻出版社.

趙金燦 (2010)〈拉薩藏語與香格里拉藏語之比較〉《四川民族學院學報》第 1 期 25-28

趙金燦、李玉朋 (2014)〈建塘藏語聲調實驗〉《四川民族學院學報》第 1 期 64-68

朱曉農 (2010)《語音學》北京：商務印書館

付録：雲南省のチベット系言語の調査地点（本稿で扱う範囲に限る）

本稿図２に示される範囲における調査地点の一覧は以下のようである。本稿の地点・方言名は、若干の例外を除き、自然村名に基づいて名づけている[28]。簡便のため、以下の略号を用いる。

州級　D=迪慶州；L=麗江市；N=怒江州

県級　X=香格里拉市；W=維西県；D=徳欽県；U=玉龍県；Y=永勝県；G=貢山県

郷・自然村名の欄には、必要に応じて行政村名を（　）に入れて示す。

地点名	州	県	郷・自然村名
建塘	D	X	建塘鎮錯古龍村
霞給	D	X	建塘鎮霞給村
洛茸	D	X	建塘鎮洛茸村
尼史	D	X	建塘鎮尼史村
旺池卡	D	X	建塘鎮旺池卡村
春宗	D	X	建塘鎮春宗村
共比	D	X	建塘鎮共比村
吉迪	D	X	建塘鎮吉迪村
奶都	D	X	建塘鎮奶都村
孜尼	D	X	建塘鎮孜尼村
吉念批	D	X	小中甸鎮吉念批村
奶司	D	X	小中甸鎮奶司村
期學谷	D	X	小中甸鎮期學谷村
和平宗巴	D	X	小中甸鎮小中甸村（宗巴）
申科丁	D	X	小中甸鎮申科丁村
吹亞頂	D	X	小中甸鎮吹亞頂村
塘批	D	X	小中甸鎮塘批村
吉沙	D	X	小中甸鎮吉沙村
魯堆	D	X	虎跳峡鎮魯堆村
安南	D	X	三壩鄉安南村
尼汝	D	X	洛吉鄉尼汝村
初古	D	X	格咱鄉初古村
浪都	D	X	格咱鄉浪都村
浪都義村	D	X	格咱鄉浪都義村
普上	D	X	格咱鄉普上村

[28] 迪慶州の地名を網羅したものに呉光范 (2009) があり、以下に示す大部分は同書に含まれているが、一部漢字表記が異なるものがある。

地点名	州	県	郷・自然村名
翁上	D	X	格咱郷翁上村
阿木	D	X	格咱郷阿木村（木魯）
納格拉	D	X	格咱郷納格拉村
爭茸	D	X	格咱郷爭茸村
翁水	D	X	格咱郷翁水村
普呂	D	X	東旺郷普呂村（躍進）
習克	D	X	東旺郷習克村（中心）
爭仁	D	X	東旺郷爭仁村
新聯	D	X	東旺郷新聯村
色倉	D	X	東旺郷色倉村
新陽	D	X	尼西郷新陽村
祖莫頂	D	X	尼西郷祖莫頂村
南哈	D	X	尼西郷南哈村
開香	D	X	尼西郷開香村
布喀	D	X	尼西郷布喀村
巴拉	D	X	尼西郷巴拉村
湯堆上村	D	X	尼西郷湯堆上村
湯滿	D	X	尼西郷湯滿村
肯古	D	X	尼西郷肯古村
居佳	D	X	尼西郷居佳村（江東）
勝里	D	X	尼西郷勝里村（江東）
貴光	D	X	尼西郷貴光村（江東）
吉仁水	D	X	五境郷吉仁水村
吉仁	D	X	五境郷吉仁村
澤通	D	X	五境郷澤通村
其宗	D	W	塔城鎮説朋通村（其宗）
赤江	D	W	塔城鎮赤江村（巴珠）
白潤	D	W	塔城鎮白潤村（巴珠）
下龍農	D	W	塔城鎮下龍農村（巴珠）
英都灣	D	W	塔城鎮英都灣村
柯那	D	W	塔城鎮各洛村（柯那）
格登	D	W	塔城鎮格登村
本村	D	W	永春郷本村
嘎嘎塘	D	W	攀天閣郷勺洛村（嘎嘎塘）
工農	D	W	攀天閣郷工農村
結義	D	W	巴迪郷結義村

地点名	州	県	郷・自然村名
洛通	D	W	巴迪郷洛通村
甲功	D	D	羊拉郷甲功村
都拉頂	D	D	羊拉郷都拉頂村
古龍	D	D	奔子欄鎮古龍村
永泥	D	D	奔子欄鎮永泥村（書松）
葉日	D	D	奔子欄鎮葉日村
打撲貢	D	D	奔子欄鎮打撲貢村
亞浪	D	D	奔子欄鎮亞浪村
拖頂	D	D	拖頂郷拖頂村
相多	D	D	霞若郷相多村
月仁	D	D	霞若郷月仁村
石茸	D	D	霞若郷石茸村
茨卡通	D	D	霞若郷茨卡通村
升平	D	D	升平鎮阿墩子村
霧濃頂	D	D	升平鎮霧濃頂村
工打	D	D	升平鎮工打村（阿東）
直仁	D	D	升平鎮直仁村（阿東）
娘義	D	D	升平鎮娘義村（阿東）
子都	D	D	升平鎮子都村（阿東）
佛山	D	D	佛山郷佛山村
巴美	D	D	佛山郷巴美村
江坡	D	D	佛山郷江坡村
明永	D	D	雲嶺郷明永村
西當	D	D	雲嶺郷西當村
雨崩	D	D	雲嶺郷雨崩村
佳碧	D	D	雲嶺郷佳碧村
果念	D	D	雲嶺郷果念村
八日達	D	D	雲嶺郷八日達村
九農頂	D	D	雲嶺郷九農頂村
紅坡	D	D	雲嶺郷紅坡村
査里頂	D	D	雲嶺郷査里頂村
査里通	D	D	雲嶺郷査里通村
永支二村	D	D	雲嶺郷永支二村
永支三村	D	D	雲嶺郷永支三村
木達	D	D	燕門郷木達村
尼通	D	D	燕門郷尼通村

地点名	州	県	郷・自然村名
葉卡	D	D	燕門郷葉卡村
谷扎	D	D	燕門郷谷扎村
春多樂	D	D	燕門郷春多樂村
拖拉	D	D	燕門郷拖拉村
貢娘	D	D	燕門郷貢娘村
斯嘎	D	D	燕門郷斯嘎村
茨中	D	D	燕門郷茨中村
巴東	D	D	燕門郷巴東村
牦牛坪	L	U	大具郷雪花村
大安	L	Y	大安郷下村
丙中洛	N	G	丙中洛郷日當村
迪麻洛	N	G	棒塔郷迪麻洛村

受理日 2017 年 4 月 8 日

藤原 敬介（2017）『言語記述論集』9:65-94

マルマ語会話文資料

藤原敬介
京都大学

主要語句：マルマ語、ビルマ語、音韻論、形態論、形態統語論

1　はじめに

本稿ではバングラデシュ・チッタゴン丘陵でマルマ人（Marma: 仏教徒、人口 20 万人ほど）によってはなされるマルマ語（チベット・ビルマ語派ビルマ語群）の会話文を紹介する。この会話文はビルマ語の教科書である加藤［2015］にみられる全 20 課の会話文をマルマ語に翻訳したものである[注1]。マルマ語はビルマ語アラカン方言とちかい関係にある言語である。標準的なビルマ語（以下、単にビルマ語としるす）の単語を同源形式のマルマ語におきかえれば意味が通じることがおおい。ただし、文法形式を中心に、ビルマ語とマルマ語とで同源形式ではないばあいも散見される。なお、マルマ語とビルマ語アラカン方言とはある程度相互理解が可能であるとおもわれるけれども、ビルマ語とは発音の乖離がおおきく、相互理解が不可能である。マルマ語話者が標準ビルマ語にふれる機会は通常はなく[注2]、ビルマ語話者がマルマ語にふれることもない。マルマ語話者の大半はバングラ語（ベンガル語）との二言語話者であり、マルマ語の中にはバングラ語からの借用語も多数みられる。

翻訳にあたっては、筆者にマルマ語をおしえてくれているオン・チャイン・ヌン・マルマさん（ʔɔŋcháiŋnŭŋ marəma: 1978 生、ラージョストリ出身）にご協力いただいた。

マルマ語の資料としては Bernot［1966］が民話を紹介し、フランス語とマルマ語の対訳をあげている。ただし言語学的な分析はなされていない。筆者によるものとしては、マルマ語の機能語をあつかった Huziwara［2008］の附録として語釈をつけた民話を一編提示したことがあるほか、藤原［2015］でもチャック語の民話と比較する形式で紹介したことがある。マルマ語文法についてまとまった記述は存在しないけれども、Bernot［1958］や藤原［2003］は音韻論をあつかい、Huziwara［2011］は名詞化を中心に文法の概略をのべている[注3]。このほか、社会言

注1 加藤［2015］はビルマ語圏での言語調査において文法調査票としても使用しうる。たとえば Kurabe［2012］は、加藤［2015］の旧版である加藤［1998］にみられる会話文をジンポー語に翻訳し、訳注をつけたものである。

注2 マルマ人は仏教徒であり、説法はマルマ人の僧によってマルマ語でおこなわれる。僧の中にはビルマで修行してきた人もおおい。そのような僧の言語には、ビルマ語の影響がみられることがある。ビルマで修行した僧を通じて、一部のビルマ語がマルマ人社会にはいってきている可能性はある。近年はビルマのテレビ番組やインターネットの動画サイト、あるいは市販される DVD などでビルマ語にふれる機会もありうる。ただし、大多数のマルマ語話者は、ビルマ語と直接接触することなく生活している。なお、マルマ人は伝統的にはビルマ文字を使用しているけれども、マルマ人の中でビルマ文字のよみかきができる人は、特別な教育をうけた人にかぎられる。マルマ人の文字については藤原［2011］も参照。

注3 Ashaduzzaman & Rashel［2007–2008］は文法形式の概略を提示しているけれども、音素分析がなされておらず、このままの形式で資料として利用するのは困難である。

語学的な研究として Maggard et al.［2007］、ビルマ語とラカイン語との比較音韻論をあつかった Davis［2014］などにマルマ語についての記述がみられる。

2　表記上の注意

本稿におけるマルマ語は筆者による音素表記である。

音素は/p, ph, b, t, th, d, c, ch, j, k, kh, g, ʔ, θ, ʃ, h, m, hm, n, hn, ŋ, hŋ, l, hl, r, hr, w, y; i, e, a, ɔ, o, u, ə/である。音節構造は $(C_0ə)C_1(C_2)(C_3)V_1V_2(C_4)$ とまとめることができる。$(C_0ə)$ は軽音節であり、固有の声調をもつことはない。C_0 には/hm, hl/をのぞくすべての子音が確認されている。C_1 にはすべての子音があらわれうる。C_2 には/r, w, y/が、C_3 には/w/が、C_4 には/ʔ, ŋ/があらわれうる。V_1 にはすべての母音が、V_2 には/i, u/のみがあらわれうる。ただし、V_1V_2 のくみあわせとしてありうるのは/ai, oi, ɔi, ou/のみであり、原則としてはいずれも閉音節であらわれる[注4]。声調としては低声調（アクセント記号なし）と高声調（鋭アクセント記号 ˊ でしめす）、上昇調[注5]（曲アクセント記号 ˇ でしめす）が弁別的である。

マルマ語には、ビルマ語と同様に、有声交替（voicing alternation）とよばれる現象がある。有声交替とは無声閉鎖音の語頭子音が複合語を形成して語中にあらわれるとき、対応する有声閉鎖音に変化する現象のことである。有声交替しうる子音のくみあわせは次のとおりである: *p* > *b*, *t* > *d*, *c* > *j*, *k* > *g*[注6]。ただし、声門閉鎖音の後では有声交替しない。たとえば使役をあらわす-*ci*/-*ji* “-CAUS” は、声門閉鎖音のあとでは *θɔʔ-ci* “drink-CAUS” のように、それ以外の環境では *cá-ji* “eat-CAUS” のようにあらわれる。なお本稿では、有声交替しうる語であっても、文中であらわれている形式で言及する。

3　マルマ語会話文

以下の会話文は加藤［2015］にみられる会話文をマルマ語に翻訳したものである。例文番号は加藤［2015］での課に対応する。たとえば（1）は第一課の会話文である。日本語訳は、多少不自然であっても、逐語訳にちかい訳をつけるようにした。なお、バングラデシュでの実態にあわせて、加藤［2015］にみられる地名などを変更している箇所がある。また、必要に応じて初出時に注をつけている。たとえば *jə* “what” が *ja* “what” の縮約形式であることは (7) A5 で指摘するので、(20) A1 で同様の訳注をつけることはしない。

注4 原則にあわないものについては適宜訳注でのべる。

注5 上昇調において母音は緊喉母音となる。標準的なビルマ語の下降調に対応する。なお、ビルマの南東端ではなされるメルギー方言［Kato 2012］やパロー方言［大塚 2014］でも、緊喉母音は上昇調である。標準的なビルマ語をはさんで西側のマルマ語と東側のメルギー方言やパロー方言でみられる上昇調が古形である可能性を、この事実は示唆する。

注6 Bernot［1958］には *θ* > *ð* という交替もみられる。しかし、筆者の観察の範囲では、確認されない。なお、ビルマ語では無声有気音類も対応する有声無気音類に変化しうる。しかし筆者が観察しているマルマ語ではそのような語例が確認されていない。また、ビルマ語では綴字上の無声子音が語中で有声化することにともない、先行する軽声音節の初頭子音までが綴字上は無声子音であっても有声化する。しかし、マルマ語においては軽声音節の初頭子音までが有声化することはない: ‘language’ WrB <ca_kaa>, SpB [zəgá], Marma *cəgá*。

(1)A1: *de θu ʔúŋbaŋ =lɔ́?*

this thing coconut.tree =PQ

これはココヤシの木ですか

注 1 マルマ語の指示詞には三種類ある。すなわち近称の *de*、中称の *yáŋ*、遠称の *thú* である。

注 2 *θu* は人に対しても物に対しても使用されうる。ここでは物をさしている。

注 3 *=lɔ́* "=PQ" は、口語ビルマ語の*=lá*ではなく、文語ビルマ語の*=lɔ́*と対応する。このように、マルマ語の形式は文語ビルマ語と対応することがある。

B1: *mə- houʔ (=pa).*

NEG be.right =POL

いいえ

注 1 マルマ語の否定文では、動詞の直前に否定辞をつけるだけでよい。ビルマ語では、動詞の直前に否定辞がくるだけでなく、動詞のあとにも否定文であることをしめす標識があらわれる。

注 2 ビルマ語において丁寧の*=pa* は頻繁にもちいられる。だがマルマ語においては *=pa* がないからといって特にぞんざいな表現ということはない。*=pa* はあまりもちいられない。本稿において*=pa*/*=ba* "=POL" がほとんどあらわれないのは、そのためである。

B2: *yáŋ θu tháiŋbaŋ (=ba).*

that thing toddy.palm.tree =POL

それはオウギヤシの木です

A2: *de θu ja =lé?*

this thing what =CQ

これは何ですか

B3: *yáŋ θu θəraʔpaŋ (=ba).*

that thing mango.tree =POL

それはマンゴーの木です

(2)A1: *măphru niŋ kɔ́ŋ (=re) =lɔ́?*

PSN stay be.good =RLS =PQ

マー・プルー、元気ですか

注 *niŋ* "stay" は、ビルマ語では *ne* に対応する。マルマ語においては、頭子音が鼻子音であり母音が高母音であるとき、語末に*-ŋ* があらわれる。

B1: *niŋ kɔ́ŋ =re.*

stay be.good =RLS

元気です

B2: *ʔɔŋthwáiŋ =gá?*

PSN =TOP

オン・トワインは

注 ビルマ語原文では文末は*=gɔ́*である。このビルマ語形式に語源的に直接対応するマルマ語は未確認である。

A2: *niŋ kɔ́ŋ =re.*

stay be.good =RLS

元気です

A3: *ŋa ʔəgŭ jí lá =phŏ.*

1 now market go =FUT

私は今市場に行きます

注 1 マルマ語の人称詞としては、一人称 *ŋa*（普通体）、*kywaiŋdɔ*（謙譲体）、二人称 *maiʔ*（目下の男性）、*naŋ*（目下の女性）、*kobaŋ*（敬体）、三人称 *de θu*（この人）、*yáŋ θu*（その人）などがある。いずれも語類としては名詞に属する。これらの人称詞は文中の必須要素ではない。文脈から理解可能であれば、明示的にはあらわれないことのほうがおおい。

注 2 未来の出来事をあらわすばあい、ビルマ語では非現実法が多用されるけれども、マルマ語においては未来標識の*=phŏ*が多用される。*=phŏ*は、話者が未来においておこなわれると確信をもっているばあいに使用される傾向にある。確信度がひくいばあいには、非現実法の*=me* が使用される傾向にある。

A4: *lɔiʔ =phŏ =lɔ́?*

follow =FUT =PQ

ついて来ますか

B3: *houʔ =te.*

be.right =RLS

はい

注 1 肯定の返事としては、ほかに *ʔiŋ* や *ʔoi* がある。*ʔoi* は、開音節で二重母音があらわる例外的な語例である。

注 2 *=te* “=RLS” は声門閉鎖音の後でのみあらわれる。その他の環境では*=re* “=RLS” があらわれる。両者は相補分布している。語源的にも関連しているとおもわれる。ただし共時的には、*t* と *r* が交替する例がほかに確認されていない。

B4: *lɔiʔ =phŏ.*

follow =FUT

ついて行きます

B5: *ŋa =lé ʔəgŭ jí lá =phŏ pyaŋ -niŋ =re.*

1 =too now market go =FUT do -CONT =RLS

私も今市場に行こうとしていたところです

注 *-niŋ* “-CONT” は動詞 *niŋ* “stay” が助動詞として使用されているものである。このように、マルマ語の助動詞のおおくは、動詞が文法化したものである。

(3)A1: *ʔɔŋthwáiŋ, ja cá =phǒ =lé?*

PSN what eat =FUT =CQ

オン・トワイン、何を食べますか

B1: *ŋa wɔʔθáháŋ cá =phǒ.*

1 pig.meat.dish eat =FUT

私は豚肉のおかずを食べます

B2: *măphru =lé wɔʔθáháŋ cá =phǒ =lɔ́?*

PSN =too pig.meat.dish eat =FUT =PQ

マー・プルーも豚肉のおかずを食べますか

A2: *mə- cá.*

NEG- eat

食べません

A3: *ŋa wɔʔθá mə- krɔiʔ.*

1 pig.meat NEG- like

私は豚肉が好きではないです

B3: *ja háŋ krɔiʔ (=te) =lé?*

what dish like =RLS =CQ

何のおかずが好きですか

A4: *kraʔθáháŋ krɔiʔ =te.*

chicken.meat.dish like =RLS

鶏肉のおかずが好きです

(4)A1: *thəmɔ́ŋ cá -brí =bya =lɔ́?*

rice eat -end =PRF =PQ

ご飯をもう食べましたか

注 1 *thəmɔ́ŋ* “rice” は、ビルマ語の綴字からは *thəmáŋ* となることが予想される。*thəmɔ́ŋ* という形式は、むしろビルマ語アラカン方言にちかい。

注 2 *-brí* “-end” は動詞 *brí* “end” が助動詞として使用されているものである。この動詞は*=bya* “=PRF” とも関係しているかもしれない。

B1: *cá -brí =bya.*

eat -end =PRF

もう食べました

B2: *măphru =gá?*

PSN =TOP

マー・プルーは

A2: *mə- cá -ră =θĭ.*

NEG- eat -can =still

まだ食べていません

注 *-ră* “-can” は動詞 *ră* “get” が助動詞として使用されているものである。文脈により “-can” の意味にもなれば、たとえば (8) B5 のように “-must” の意味にもなる。

A3: *ŋa mwaiʔ -niŋ =bya.*

1 get.hungry -CONT =PRF

私はもうお腹が空いてしまっています

B3: *yə =pɔiŋ cho =ge, ŋa mŭŋdi kywé =phŏ.*

that =ESS say =COND 1 rice.noodle treat =FUT

そのように言うなら、私が米麺をおごります

注 *yə*は *yáŋ* “that” が縮約した形式である。*yə=pɔiŋ cho=ge* “that=ESS say=COND” は *hlɔʔ=ke* “?=COND” ともいう。*hlɔʔ* 単独の意味は不明である。

A4: *ʔəcɔiʔ =lɔ́ʔ*

real =PQ

本当ですか

注 *ʔəhmaiŋ=lɔ́ʔ* “right=PQ” ということもできる。

A5: *ja =ma =lé?*

what =LOC =CQ

どこでですか

注 マルマ語の*=ma* “=LOC” は、ビルマ語では無声鼻音をもつ*=hma* で対応する。

B4: *ʔəphaʔθá +chɔiŋ =ma.*

friend +shop =LOC

友人の店で

B5: *cá =rŏ kɔ́ŋgɔ́ŋ kɔ́ŋ =re.*

eat =SEQ very be.good =RLS

食べてとても良いです

B6: *hlɔʔ =ke, lɔiʔ +la.*

? =COND follow +come

では、ついて来てください

注 *lɔiʔ+la* “follow+come” は *lɔiʔ-lai* “follow-come.IMP” ということもできる。*lai* は命令文でのみ使用される特別な形式であり、開音節で二重母音があらわれる例外的な形式でもある。

(5)A1: *ŋa hnaʔphraiŋ khərí thwɔʔ =phŏ.*

1 tomorrow travel go.out =FUT

私は明日旅に出ます

B1: *ja =dǒ lá =phǒ =lé?*

what =ALL go =FUT =CQ

どちらに行きますか

注 *ja=dǒ* “what=ALL” は *ja=go* “what=OBJ” ということもできる。一般に移動の目的地を標示するには方向格と目的格のいずれを使用してもよい。

B2: *phəlɔ́ŋkhyoiʔ =lɔ́?*

PLN =PQ

コックス・バザールですか

注 *phəlɔ́ŋkhyoiʔ* は *phəlɔ́ŋ* “gentleman; Westerner” + *khyoiʔ* “hold” と分析できる。東インド会社の役人であった Hiram Cox（1760–1799）が赴任した土地であるところからコックス・バザール（Cox’s Bazar）とよばれるようになった。マルマ語では、人名そのものではなく「西洋人」という単語を使用している。なお、倉部慶太氏によると、*phəlɔ́ŋ* という形式は、タイ語の [falàŋ] “a person of white race” と同源形式ではないか、ということである。

A2: *mə- houʔ.*

NEG- be.right

いいえ

A3: *cɔiʔtəgɔ́ŋ lá =phǒ.*

PLN go =FUT

チッタゴンに行きます

注 チッタゴン（Chittagong）はバングラデシュ第二の都市であり、マルマ人が居住するチッタゴン丘陵からちかい港町である。

B3: *ja =nă lá =phǒ =lé?*

what =COM go =FUT =CQ

何で行きますか

注 *=nă* “=COM” は道具をあらわすこともできる。なお、共同格としての用法は (5) B4 などにみられる。

A4: *garí =nă lá =phǒ.*

car =COM go =FUT

車で行きます

A5: *garí +tikaiʔ =lé we -brí =bya.*

car +ticket =too buy -end =PRF

車の切符もすでに買いました

B4: *ʔəθǔ =nă lá =phǒ =lé?*

who.OBL =COM go =FUT =CQ

誰と行きますか

注 *ʔəθǔ* “who.OBL” は *ʔəθu* “who” の斜格である。助詞の直前で低平調が上昇調に変調する。類似した現象はビルマ語にもみられる。

A5: *ʔəphaʔθá =nă ʔətu lá =phŏ.*

friend =COM together go =FUT

友人と一緒に行きます

(6)A1: *măphru, ʔəphă =gá ja ʔəlouʔ louʔ =ca =lé?*

PSN father =TOP what work(n) work(v) =NMLS =CQ

マー・プルー、お父さんは何の仕事をしているのですか

B1: *kuŋpaní =ma louʔ =te.*

company =LOC work(v) =RLS

会社で働いています

A2: *ʔəmwĭŋ =gá ja louʔ =ca =lé?*

mother =TOP what work(v) =NMLS =CQ

お母さんは何をしているのですか

B2: *jí rɔ́ŋ =re.*

market sell =RLS

商売しています

B3: *ʔəmyúmyú waiŋ rɔ́ŋ =re.*

various article sell =RLS

いろいろな物を売っています

A3: *ja =ma rɔ́ŋ =ca =lé?*

what =LOC sell =NMLS =CQ

どこで売っているのですか

B4: *jí =thé =ma rɔ́ŋ =re.*

market =place.inside =LOC sell =RLS

市場の中で売っています

B5: *ʔəmwĭŋ +chɔiŋ =gá lu krɔiʔ myá =re.*

mother +shop =TOP man like be.many =RLS

母の店は好きな人が多いです

(7)A1: *măprhu =ma jəpaiŋ +caʔouʔ hĭŋ =re =lɔ́?*

PSN =LOC Japan +book exist =RLS =PQ

マー・プルーのところには日本の本がありますか

注 マルマ語における所有表現は “A=*ma* B *hĭŋ=re*”「A のところに B がある（A は B をもっている）」と表現する。

B1: *hĭŋ =re.*

exist =RLS

あります

A2: *hmya =ʔouʔ hǐŋ =re =lé?*

how.much =CL:book exist =RLS =CQ

何冊ありますか

注 マルマ語における類別詞は単独では使用されない。(7) A2 のように疑問語とともに、または (7) B2 のように数詞とともに使用される。なお、類別詞は通常は「数詞-類別詞」の辞順で使用される。ただし、一の位が零となる数（位どりの単位の数）数をかぞえるときには「名詞-bɔ́ŋ|-pɔ́ŋ 数詞」または「名詞 + *ʔə*-類別詞 数詞」という形式が使用される。たとえば「二十人」は、次のように表現されうる:（A）*lu-bɔ́ŋ hnɔiʔ+che* “man-COL two+ten”、（B）*lu+ʔə-yɔʔ hnɔiʔ+che* “man+PRFX-CL:man two+ten”。

B2: *che =ʔouʔ =hlɔʔ hǐŋ =re.*

ten =CL:book =almost exist =RLS

十冊ほどあります

A3: *myá =re =hnɔ́ŋ.*

be.many =RLS =SFP

たくさんですね

注 *=hnɔ́ŋ* は*=hnɔ́*や *məhnɔ́*ともいえる。

A4: *ŋǎ =ma tə =ʔouʔ =té hǐŋ =re.*

1.OBL =LOC one =CL:book =only exist =RLS

私のところには一冊だけあります

注 1 *tə*は *tɔiʔ* “one” が弱化した形式である。

注 2 *=té* “=EMPH” は類別詞にのみ付加する。

A5: *jə =pɔiŋ pyaŋ =rǒ rǎ =ca =lé?*

what =ESS do =SEQ get =NMLS =CQ

どのようにして手に入れたのですか

注 *jə=pɔiŋ* “what=ESS” は *ja=pɔiŋ* “what=ESS” が縮約した形式である。

B3: *ʔəphaʔθá tə =yɔʔ jəpaiŋ =gǎ pǒ =rǒ pí =re.*

friend one =CL:man Japan =ABL send =SEQ give =RLS

友人が一人日本から送ってくれました

注 加藤［2015］では動詞連続で表現されているところでも、マルマ語では動詞連続をもちいず、*=rǒ* “=SEQ”（日本語の「テ形」に相当）が多用される傾向にある。マルマ語と隣接するビルマ語アラカン方言でも類似した傾向があり、インド・アーリア語との接触による影響が示唆されている［Vittrant 2015］。動詞連続ではなく副動詞を使用することは、地域的な特徴といえるかもしれない。

(8)A1: *ʔɔŋthwáiŋ de nǐŋ ja =dǒ lá -khyaŋ =re =lé?*

PSN this day what =ALL go -want =RLS =CQ

オン・トワインは今日どこへ行きたいですか

注 *de nǐŋ* “this day” は *ŋənǐŋ* “today” ともいう。

B1: *ŋa de nĭŋ balăgáta +jadi =dŏ lá -khyaŋ =re.*

1 this day PLN +pagoda =ALL go -want =RLS

私は今日バラガタ・パゴダへ行きたいです

注 *balăgáta+jadi* は、マルマ人の中心都市であるバンドルバン（Bandarban: マルマ語では *rwadɔ*）の郊外にある仏塔。

B2: *de =gă garí =nă lá -ră =re =lɔ́?*

this =ABL car =COM go -must =RLS =PQ

ここから車で行かなければなりませんか

注 *de=gă* "this=ABL" は弱化して *də=gă*と発音されることもある。

A2: *garí =nă lá =phŏ mə- lo.*

car =COM go =FUT NEG- need

車で行く必要はありません

注 *mə-lo* "NEG-need" は *ʔəlo mə-hĭŋ* "need NEG-exist" ということもできる。

A3: *balăgáta +jadi =gá pá =re.*

PLN +pagoda =TOP be.near =RLS

バラガタ・パゴダは近いです

注 *pá=re* "be.near=RLS" は *ʔəpáʃe* "near(n)" ということもできる。

A4: *θwá =rŏ lá =phŏ ră =re.*

walk =SEQ go =FUT can =RLS

歩いて行くことができます

注 *θwá* "walk" に語源的に対応するビルマ語は「行く」という意味で使用される。*lá* "go" に語源的に対応するビルマ語は、あまり使用されない。

B3: *dŏdɔlé ŋa dəgŭ ʔəkhri na (-niŋ) =re.*

however 1 now foot pain(v) -CONT =RLS

しかし、私は今足が痛いです

B4: *riʔʃa =nă lá -hnɔiŋ =re =lɔ́?*

rickshaw =COM go -can =RLS =PQ

リキシャで行くことができますか

注 *-hnɔiŋ* は可能をあらわす助動詞である。本動詞としては無声鼻音ではない *nɔiŋ* "be.able.to" という形式が使用される。

A5: *lá -hnɔiŋ =re.*

go -can =RLS

行くことができます

A6: *yáŋ =pɔiŋ cho =ge, riʔʃa =nă lá =phŏ.*

that =ESS say =COND rickshaw =COM go =FUT

そのように言うなら、リキシャで行きます

B5: *ja =hlɔʔ pí -ră =phǒ =lé?*

what =almost give -must =FUT =CQ

どれくらい（お金を）あげるべきですか

A7: *ŋá +che =hlɔʔ pí -ră =phǒ.*

five +ten =almost give -must =FUT

50（タカ：バングラデシュの通貨単位）くらいあげないといけないでしょう

(9)A1: *ʔəme, de (ʔə)ná =ma tibi róŋ =ca chɔiŋ hǐŋ =re =lɔ́?*

sister.VOC this place.beside =LOC TV sell =NMLS shop exist =RLS =PQ

姉さん、この近くにテレビを売る店はありますか

注 1 *ʔəme* “sister.VOC” は年長の女性に対する呼びかけ語。

注 2 マルマ語における名詞修飾表現では、動詞句に名詞化標識=*ca*（または未来標識=*phǒ*）がついた名詞修飾節が主要部名詞に先行する。いわゆる（A）「内の関係」と（B）「外の関係」のいずれもが可能である:（A）「彼が食べた魚」*θu cá=ca ŋá* “3 eat=NMLS fish”、（B）「魚を焼いたにおい」*ŋá kaŋ=ca ʔəco* “fish grill=NMLS smell”。

B1: *hǐŋ =re.*

exist =RLS

あります

B2: *ʔəgǔ garí thwɔʔ -khǎ =ca nera +bá =ma hǐŋ =re.*

now car go.out -VEN =NMLS place +be.near =LOC exist =RLS

今、車が出てきた場所の近くにあります

注 *+bá* “+be.near” は *pá* “be.near” の頭子音が複合語内で有声化した形式。

B3: *twǐ =lɔ́?*

meet =PQ

見えますか

A2: *houʔ =te.*

be.right =RLS

はい

A3: *twǐ =bya.*

meet =PRF

見えました

A4: *ŋa tibi +ʔəgrí lo -khyaŋ =re.*

1 TV +big need -want =RLS

私はテレビの大きいのが欲しいです

A5: *yáŋ chɔiŋ =ma tibi +ʔəgrí hǐŋ =re =lɔ́?*

that shop =LOC TV +big exist =RLS =PQ

その店にテレビの大きなのはありますか

B4: *thú chɔiŋ =ma ʔəgrí =ca mə- hǐŋ (=hrǒ) thaŋ =re.*

that shop =LOC big =DEF NEG- exist =QUOT think =RLS

その店に大きなのはないと思います

注 1 *=ca* は、一般的には動詞に後続して名詞化する機能をもつ。ただし、ここでみられるように、名詞に後続して定辞としても機能しうる。*=ca* のさまざまな用法について詳細は Huziwara［2011］を参照。

注 2 *(=hrǒ)* "=QUOT" は*=hǒ*または*=phǒ*ともいえる。

B5: *ʔəʃe cho =ge, hǐŋ -hnɔiŋ =re.*

small say =COND exist -can =RLS

小さいのならありえます

A6: *houʔ =lɔ́ʔ*

be.right =PQ

本当ですか

A7: *ja =baŋ phrɔiʔ -li, lá +krě =phǒ.*

what =EMPH become -CMPL go +watch =FUT

ともあれ、行ってみます

注 *-li* は、たとえば (11) A3 などにみられるように、しばしば過去の標識として使用される。しかし、この用例のようにかならずしも過去の事態をあらわすとはいえない用例もあることから、本稿では CMPL という語釈をつけている。

A8: *kíjǔ taŋ =re.*

thank put.on =RLS

ありがとうございます

B6: *taŋ -θá mə- hǐŋ.*

put.on -need.NMLS NEG- exist

そうする必要はありません

注 *taŋ-θá* "put.on-need.NMLS" のかわりに *prɔ́-θá* "say-need.NMLS" ということもできる。

(10)A1: *mɔŋhlǎ =gá búθí yu =rǒ pí =re.*

PSN =TOP calabash.fruit take =SEQ give =RLS

モン・ラーがユウガオの実をもってきてくれました

A2: *búθí =go bəjɔŋ cá -ră =phǒ =lé?*

calabash.fruit =OBJ how eat -can =FUT =CQ

ユウガオの実はどのように食べられますか

A3: *de =ʔətɔ́iŋ kɔiʔ =rǒ cá -ră =ca =lɔ́ʔ*

this =ESS bite =SEQ eat -can =NMLS =PQ

このまま噛んで食べるのですか

B1: *mə- cá -ră.*

NEG- eat -can

食べられません

B2: *ʔəkhwaiŋ khwa =rŏ cá -ră =phŏ.*

skin.of.fruit peel =SEQ eat -must =FUT

皮を剥いて食べないといけません

B3: *búθí =gá prouʔ =rŏ cá =ge, kɔ́ŋ =re.*

calabash.fruit =TOP boil =SEQ eat =COND be.good =RLS

ユウガオの実は煮て食べるとおいしいです

注 ユウガオの実はビルマでは油で揚げて食べることがおおい。しかしチッタゴン丘陵では油で揚げることはない。湯で煮て食べる。

B4: *cá -khyaŋ =ge, ʔəgŭ prouʔ =rŏ pí =phŏ.*

eat -want =COND now boil =SEQ give =FUT

食べたければ、今、煮てあげます

—

B5: *prouʔ -prí =bya.*

boil -end =PRF

もう煮おわりました

B6: *mré +krĕ =mai.*

taste(v) +watch =HRT

味見してみてください

注 *=mai* “=HRT” は開音節で二重母音があらわれる例外的な語例である。

A4: *kɔ́ŋ =phŏ =puŋ.*

be.good =FUT =shape

おいしそうです

注 文末の*=puŋ* “=shape” は「～のようだ・～しそうだ」という意味。*=phŏ* “=FUT” だけでなく、*=re* “=RLS” も先行しうる: 「雨がふりそうだ」*mú rwa=phŏ=puŋ* “rain rain(v)=FUT=shape”、「雨がふったようだ」*mú rwa=re=puŋ* “rain rain(v)=RLS=shape”。*=re* のあとには有声交替した*=buŋ* という形式があらわれてもよい。また、*=ca* “=NMLS” が先行するときは、有声交替した*=buŋ* という形式のみがあらわれる: 「雨がふったようだ」*mú rwa=ca=buŋ* “rain rain(v)=NMLS=shape”。

B7: *de ʔəkhyɔiŋre =nă tŏ =rŏ cá =mai.*

this sauce =COM dip =SEQ eat =HRT

このソースをつけて食べてください

B8: *jə =pɔiŋ =lé?*

what =ESS =CQ

どうですか

A5: *kóŋgóŋ kóŋ =re.*

very be.good =RLS

とても良いです

A6: *măphru jəpaiŋ lá =rŏ yáŋ =ma rɔ́ŋ =ge, kɔ́ŋ =phŏ.*

PSN Japan go =SEQ that =LOC sell =COND be.good =FUT

マー・プルーさんは日本に行って、そこで売れば良いです

A7: *kóŋgóŋ rɔ́ŋ -ră =phŏ.*

very sell -can =FUT

とても売れるでしょう

B9: *mə- hmrɔ̌ŋ =gĕ.*

NEG- elevate =NEG.IMP

持ち上げないでください（お世辞を言わないでください）

(11)A1: *θəmwíŋ, de ŋəniŋ kyɔ́ŋ mə- lá =lɔ́?*

daughter this today school NEG- go =PQ

娘よ、今日は学校に行かないのかい

B1: *ŋəniŋ kyɔ́ŋ poiʔ =rama lá =phŏ mə- lo.*

today school close =because go =FUT NEG- need

今日は学校が閉まっているので、行く必要がありません

注 *=rama* “=because” は*=ra=ma* “=place=LOC” と分析しうる（加藤昌彦氏の指摘による）。

B2: *ʔəba =lé yúŋ mə- lá =lɔ́?*

father =too office NEG- go =PQ

父さんも会社に行かないの

A2: *ŋəniŋ ʔəwáiŋ na =rama mə- lá =bya.*

today belly pain(v) =because NEG- go =PRF

今日はお腹が痛いのでもう行かなかった

A3: *ŋyăgă mŭŋdi ʔəmyágrí cá -li =rama.*

yesterday rice.noodle very.much eat -CMPL =because

昨日、米麺をたくさん食べたので

B3: *ʔəba =gá =lé kyáiŋmarí =go tə =phĕ =hlɔʔ θədĭ prŭ =mai.*

father =TOP =too health =OBJ one =CL:piece =almost attention do =HRT

お父さんも健康に少しくらい注意してください

A4: *θədĭ prŭ =gəlé =θɔʔ phrɔiʔ -ləkhă =re.*

attention do =even =up.to become -CMPL.VEN =RLS

注意しても、（腹痛に）なってしまった

注 1 *=gəlé* “=even” は*=ge=lé* “=COND=too” が縮約した形式であると推定される。

注 2 *-ləkhă* “-CMPL.VEN” は *lá-khă* “go-VEN” が縮約した形式であると話者から説明

されることがある。ただし、縮約していない形式は未確認である。

A5: *mə- tá -hnɔiŋ.*

NEG- oppose -can

どうしようもない

B4: *ʔəba =go ʔəmwĭŋ təkhatəri chu =gəlé =θɔʔ lúŋwă ná mə- thɔŋ =hnɔ́ŋ.*

father =OBJ mother often scold =even =up.to absolutely ear NEG- ear.listen =SFP

お父さんをお母さんがしばしば叱るのに、まったく聞かないですね

注 *ná+thɔŋ* は全体で「聞く」という意味である。*ná*は名詞であり単独で「耳」という意味がある。他方、*thɔŋ* が動詞であることは否定辞の *mə-*が前接することからわかるけれども、単独では「聞く」という意味にはならない。

B5: *kɔ́ŋgɔ́ŋ khaʔ =ca =məhnɔ́.*

very be.difficult =NMLS =SFP

とてもむずかしいですね、もう

注 *məhnɔ́*は否定辞の *mə-*に文末助詞の *hnɔ́*がついたものと分析しうる。ただし、否定辞は動詞につくのが通則であり、文末助詞につく例は他に確認されていない。そこで本稿では全体をひとつの文末助詞と解釈している。

A6: *wiŋ =ma ʔəmwĭŋ hnɔiʔ =yɔʔ hĭŋ =ca =pɔiŋ =hnɔ́ŋ.*

house =LOC mother two =CL:man exist =NMLS =ESS =SFP

家にお母さんが二人いるようだなあ

(12)A1: *ŋa mrɔiʔ =ná =go lá -khyaŋ =re.*

1 sea =place.beside =OBJ go -want =RLS

私は海のそばに行きたいです

A2: *phəlɔ́ŋkhyoiʔ =nă ʔəwăgywáiŋ ja θu po kɔ́ŋ =lé?*

PLN =COM PLN what thing be.more be.good =CQ

コックス・バザールとポトゥアカリではどちらがより良いですか

注 *ʔəwăgywáiŋ* は、*ʔəwă* “mouth” と *kywáiŋ* “island” からなる複合語と分析しうる。バングラデシュでポトゥアカリ（Patuakhali）として知られるこの地は、ガンジス河の河口にあり、いくつもの島のようにつらなっている地域である。

B1: *phəlɔ́ŋkhyoiʔ =ká ʔəwăgywáiŋ =thaʔ po (=rŏ) kɔ́ŋ =re thaŋ =re.*

PLN =TOP PLN =than be.more =SEQ be.good =RLS think =RLS

コックス・バザールの方がポトゥアカリよりも良いと思います

B2: *ja =phŏ mrɔiʔ =ná =go lá -khyaŋ =ca =lé?*

what =PURP sea =place.beside =OBJ go -want =NMLS =CQ

何のために海のそばに行きたいのですか

A3: *ŋa mrɔiʔ (=ko) kɔ́ŋgɔ́ŋ krɔiʔ =te.*

1 sea =OBJ very like =RLS

私は海がとても好きです

B3: *ŋa =lé =θɔʔ krɔiʔ =te.*

1 =too =up.to like =RLS

私も好きです

B4: *ŋa rɔʔ -phú =re =ʔəthé =ma ʃáiŋmatiŋ ʔəhlă -chúŋ =bya.*

1 arrive -EXP =RLS =place.inside =LOC PLN beautiful -SUPL =PRF

私が行ったことがある中でセントマーチンが一番美しかったです

注 *ʃáiŋmatiŋ* はセントマーチン島（St. Martin Island）とよばれるバングラデシュ最南端の島であり、リゾート地である。コックスバザールからちかい。

A4: *houʔ =te =lɔ́ʔ*

be.right =RLS =PQ

そうですか

A5: *yáŋ =pɔiŋ cho =ge, ŋa ʃáiŋmatiŋ lá -khyaŋ =re.*

that =ESS say =COND 1 PLN go -want =RLS

そのように言うなら、私はセントマーチンに行きたいです

B5: *ŋă wiŋ =ma ʃáiŋmatiŋ =ʔəkrɔ́ŋ =go rwí =ca caʔouʔ hĭŋ =re.*

1.OBL house =LOC PLN =about =OBJ write =NMLS book exist =RLS

私の家にセントマーチンについて書いた本があります

注 *ŋă*は「私」の斜格であるけれども、機能的には所有をあらわす。

B6: *wiŋ =go lɔiʔ =laiʔ (=pa).*

house =OBJ follow =IMP =POL

家について来てください

B7: *ʔəgŭ pí -lɔiʔ =phŏ*

now give -CMPL =FUT.

今、あげてしまいましょう

注 *-lɔiʔ* “-CMPL” は動詞 *lɔiʔ* “follow” が助動詞として使用されているものである。

A6: *ʔá +na =re.*

power +pain(v) =RLS

すいません

注 *ʔá+na* “power+pain(v)” は全体としては「申し訳ない」という意味。

B8: *ʔá mə- na =gĕ.*

power NEG- pain(v) =NEG.IMP

遠慮しないでください

(13)A1: *măphru yúdəyă =pɔiŋ prɔ́ -daiʔ (=ca) =lɔ́ʔ*

PSN Thai =ESS speak -can =NMLS =PQ

マー・プルーはタイ人のように（タイ語を）話すことができますか

注 *-daiʔ* “-can” は動詞 *taiʔ* “know” が助動詞として使用されているものである。能力可能をあらわす。

B1: *mə- prɔ́ -daiʔ.*

NEG- speak -can

話すことができません

B2: *mɔŋhlă =gáʔ*

PSN =TOP

モン・フラーは

A2: *néné (=ra) prɔ́ -daiʔ =te.*

little.bit =EMPH speak -can =RLS

少しだけ話すことができます

A3: *ʔəyaŋ =kha tə =hnɔiʔ =hlɔʔ θaŋ -phú =re.*

time.before =time.when one =CL:year =almost learn -EXP =RLS

以前一年ほどやったことがあります

B3: *tərouʔ +cəgá =lé prɔ́ -daiʔ =te =lɔ́ʔ*

Chinese +language =too speak -can =RLS =PQ

中国語も話せますか

A3: *tərouʔ +cəgá =gá kɔ́ŋgɔ́ŋ prɔ́ -daiʔ =te.*

Chinese +language =TOP very speak -can =RLS

中国語はとてもよく話せます

A4: *ʔəʃe =kha =gá wiŋ =ná =gă tərouʔ +wagrí tə =yɔʔ ŋă =go*

small =time.when =TOP house =place.near =ABL Chinese +old.man one =CL:man 1.OBL =OBJ

nĭŋdɔ́iŋ θaŋ +pí =ca.

everyday learn +give =NMLS

小さい時、家の近くの中国人のおじいさんが毎日私に教えてくれたのです

注 *θaŋ* の意味が “learn” ではなく、ここでは *+pí* “+give” をともなうことにより、“teach” となっている。

B4: *yáŋ =pɔiŋ cho =ge, ʔáŋgəloiʔ =pɔiŋ =lé kɔ́ŋgɔ́ŋ prɔ́ -daiʔ =ca =bya.*

that =ESS say =COND British =ESS =too very speak -can =NMLS =PRF

そのように言うなら、イギリス人のようにも（英語を）とても話すことができるのですね

A5: *houʔ =te.*

be.right =RLS

はい

A6: *prɔ́ -daiʔ =te.*

speak -can =RLS

話すことができます

B5: *tɔ =re, tɔ =re*

be.clever =RLS be.clever =RLS

すごい、すごい

(14)A1: *ʔɔŋthwáiŋ =gá tə =haʔtaʔ tə =kha cɔ́ŋ +chəra =bɔ́ŋ =ma cɔ́ŋ taŋ*

PSN =TOP one =CL:week one =CL:time guitar +teacher =place.near =LOC guitar learn *-niŋ =re.*

-CONT =RLS

オン・トワインは一週間に一度ギターの先生のところでギターを学んでいます

B1: *ʔɔŋthwáiŋ nɔʔ tə =haʔtaʔ ja ʔəkhyiŋ =ma la (=rŏ) taŋ =phŏ =lé?*

PSN next one =CL:week what time =LOC come =SEQ learn =FUT =CQ

オン・トワインは次の週は何時に来て学びますか

C1: *ŋĕgă che =nari =hlɔʔ =ma la -hnɔiŋ =phŏ =lɔ́?*

morning ten =CL:hour =almost =LOC come -can =FUT =PQ

朝十時に来ることができますか

注 *ŋĕgă* “morning” は *ŋĕ=gă* “night=ABL” と分析可能であるとおもわれる。

B2: *ŋă =ma ŋĕgă ʔəkhyiŋ mə- hĭŋ.*

1.OBL =LOC morning time NEG- exist

私は朝に時間がありません

B3: *mrŏ =thé =go lá -jəra hĭŋ =rama.*

town =place.inside =OBJ go -NMLS:things.to.do exist =because

町の中に行く用事があるので

C2: *yáŋ =pɔiŋ cho =ge, ŋyăphaʔ lé =nari =hlɔʔ =ma ră =phŏ =lɔ́?*

that =ESS say =COND afternoon four =CL:hour =almost =LOC can =FUT =PQ

そのように言うなら、午後四時ごろは可能ですか

注 *ŋyăphaʔ* “afternoon” は *ŋyă=phaʔ* “night=direction” と分析可能であるとおもわれる。

B4: *houʔ =te, ră =re.*

be.right =RLS can =RLS

はい、可能です

B5: *yáŋ =pɔiŋ cho =ge, ŋyăphaʔ lé =nari =hlɔʔ =ma khyă =phŏ.*

that =ESS say =COND afternoon four =CL:hour =almost =LOC put.down =FUT

そのように言うなら、午後四時にしましょう

B6: *ʔɔŋthwáiŋ cɔ́ŋ taŋ -ră =ca pyɔ =re =lɔ́?*

PSN guitar learn -can =NMLS be.happy =RLS =PQ

オン・トワインはギターを学べるのが楽しいですか

C3: *kɔ́ŋgɔ́ŋ pyɔ =re, chəra.*

very be.happy =RLS teacher

とても楽しいです、先生

C4: *cɔ́ŋ +ʔəθaiŋ =gá kɔ́ŋgɔ́ŋ ná +thɔŋ =rŏ kɔ́ŋ =re.*

guitar +sound =TOP very ear +ear.listen =SEQ be.good =RLS

ギターの音はとても聞き心地が良いです

C5: *yáŋ =ʔəkrɔ́ŋ =ma ŋa kɔ́ŋgɔ́ŋ krɔiʔ =te.*

that =reason =LOC 1 very like =RLS

その理由で、とても好きです

(15)A1: *helo, ʔúkyɔnáiŋ +wiŋ =gă =lɔ́ʔ*

hello PSN +house =ABL =PQ

もしもし、ウー・キョー・ナインの家からですか

注 *helo* は電話でもちいられる間投詞である。英語の *hello* がバングラ語の *hælo* 経由で借用されたものとおもわれる。

A2: *măphru =nă cəgá prɔ́ -khyaŋ =re.*

PSN =COM language speak -want =RLS

マー・プルーと話をしたいです

B1: *tə =khyaʔ =ʃe kɔiŋ +thá.*

one =CL:time =DIM hold +put

しばらく（受話器を）もっておいてください

注 マルマ語において動詞は何らかの述部標識をともなってあらわれる傾向にあることを考慮すると、ゼロ形態素が命令文の標識であるとかんがえることもできる。

C1: *helo.*

hello

もしもし

A3: *helo, măphru =lɔ́ʔ*

hello PSN =PQ

もしもし、マー・プルーですか

A4: *ŋyăgă mɔŋhlă khwí ʔəkɔiʔ khaiŋ =re =hlaiʔ.*

yesterday PSN dog bite(n) suffer =RLS =HS

昨日モン・フラーが犬にかまれたそうです

注 1 *ŋyăgă* “yesterday” は *ŋyă=gă* “night=ABL” と分析可能であるとおもわれる。

注 2 マルマ語において受身的な表現は「被動作主-動作主 *ʔə*-動詞 *khaiŋ* “suffer”」の形式で表現される。

A5: *ʔəgŭ θu =dŏ ʔətudu lá =rŏ ʔá pí -gaiʔ -ră =phŏ.*

now 3 =ALL together go =SEQ power give -VPL -must =FUT

今、彼のところに一緒に行って、元気づけないと（力をあげないと）いけません

注 *-gaiʔ* “-VPL” は動詞があらわす動作の主体が複数いることをしめす。

C2: *houʔ =te, lá =phŏ =hnɔ́ŋ.*

be.right =RLS go =FUT =SFP

はい、行きましょうよ

A6: *yáŋ =pɔiŋ cho =ge, phúŋgríkyɔ́ŋ =ná =ma caʔouʔ phaiʔ =rŏ*

that =ESS say =COND Buddhist.monastry =place.near =LOC book read =SEQ

=ʔətɔ́iŋ cɔ̌ŋ -niŋ =me.

=at.the.same.time wait -CONT =IRR

そのように言うなら、お寺の近くで本を読みながら待っています

C3: *ŋa θŭ =bɔ́ŋ =ma lá =re =kha ʔəmré =dɔ́iŋ mŭŋdi yu =rŏ lá =re.*

1 3.OBL =place.near =LOC go =RLS =CL:time often =every rice.noodle take =SEQ go =RLS

私は彼のところに行くときはいつも米麺を持っていきます

C4: *laʔchɔŋ ʔəne =nă we =rŏ lá -ră =me.*

gift state =COM buy =SEQ go -can =IRR

おみやげとして買って行くことができます

A7: *houʔ =te, ră =re.*

be.right =RLS can =RLS

はい、できます

C5: *tənáʔ =kha lá -khĭ =me.*

for.a.while =time.when go -ANDV =IRR

しばらくしたら行ってみます

注 *-khĭ* “-ANDV” は「行って～する」という意味の助動詞である。主語は一人称で、*=me* “=IRR” に先行する例しか確認されていない。類似した助動詞に*-khi* があり、そちらは一人称以外でもちいられるようである。ビルマ語の*-khɛ̂*に対応するようにみえる。ただし、このビルマ語の形式に直接的に対応するマルマ語の形式は、音対応から判断して*-khă* “-VEN” である。

C6: *yə =hlɔʔ =pya =hnɔ́ŋ.*

that =almost =PRF =SFP

これくらいですね（それじゃあね）

(16)A1: *ʔɔŋthwáiŋ marəma +thɔŋ =ma ja louʔ =phŏ la =ca =lé?*

PSN Marma +circle =LOC what work(v) =PURP come =NMLS =CQ

オン・トワインはマルマ地域に何をするために来たのですか

注 *marəma+thɔŋ* “Marma+circle” とは、マルマ人の王の支配地域のことであり、現地では「マルマ・サークル（Marma Circle）」とよばれる。現在の行政区分としては、チッタゴン丘陵のバンドルバン県に相当する。本稿では「マルマ地域」と訳した。

B1: *ŋa marəma +cəgá taŋ =phŏ marəma +thɔŋ =go la =ca.*

1 Marma +language learn =PURP Marma +circle =OBJ come =NMLS

私はマルマ語を学ぶためにマルマ地域に来たのです

A2: *marəma +thɔŋ =go rɔʔ =ca ja =hlɔʔ hĭŋ =bya =lé?*

Marma +circle =OBJ arrive =NMLS what =almost exist =PRF =CQ

マルマ地域に着いたのは、すでにどれくらいですか

B2: *che =lă =hlɔʔ hĭŋ =bya.*

ten =CL:month =almost exist =PRF

すでに十ヶ月ほどです

A3: *marəma +thɔŋ mə- la =khaŋ =gă yáŋ =ma taŋ +thá =ca =lɔ́ʔ*

Marma +circle NEG- come =time.before =ABL that =LOC learn +put =NMLS =PQ

マルマ地域に来ないうちから、あちら（日本）で学んでおいたのですか

B3: *lúŋwă mə- taŋ -khă.*

absolutely NEG- learn -VEN

まったく学んできませんでした

B4: *də =dŏ rɔʔ =hma că =rŏ taŋ =ca.*

this =ALL arrive =only.after begin =SEQ learn =NMLS

こちらに着いてからはじめて学びはじめたのです

A4: *che =lă =nă də =hlɔʔ prɔ́ -daiʔ =ca =lɔ́ʔ*

ten =CL:month =COM this =almost speak -can =NMLS =PQ

十ヶ月でこれくらい話すことができるのですか

A5: *ʔăiŋʔɔ́ -jəra kɔ́ŋ =re.*

be.surprised -NMLS:things.to.dobe.good =RLS

驚くべきことですね

B5: *ʔəyaŋ prɔ́ -daiʔ =yɔŋ tɔdɔ krújá -ră =re.*

fast speak -can =so.as.to quite make.an.effort -must =RLS

はやく話すことができるように、とても努力しなければなりませんでした

A6: *marəma +tékhráŋ =lé cho -daiʔ =te =lɔ́ʔ*

Marma +song =too say -can =RLS =PQ

マルマの歌も言う（歌う）ことはできますか

A7: *cho -daiʔ =ke, tə =bouʔ =hlɔʔ cho pră =jaiŋ.*

say -can =COND one =CL:song =almost say show =IMP

言う（歌う）ことができるなら、一曲ほど言って（歌って）みせてください

B6: *tékhráŋ cho pră =phŏ hraʔ =te.*

song say show =FUT be.ashamed.of =RLS

歌を言って（歌って）みせるのは恥ずかしいです

B7: *nɔʔ =kă (=ra) cho pră =me.*

next =ABL =EMPH say show =IRR

またの機会に言って（歌って）みせます

(17)A1: *ŋa marəma +thɔŋ rɔʔ =kədɔ́iŋ =gă =baŋ lɔŋki tə =kha =lé mə- waiʔ*

1 Marma +circle arrive =since =ABL =EMPH loin.cloth one =CL:time =even NEG- wear *-phú.*

-EXP

私はマルマ地域に来て以来、腰布を一度も履いたことがないです

注 *=kədɔ́iŋ=gă(=baŋ)* が全体で「～して以来」という意味である。

A2: *de =ʔəkróŋ =ma ʔəgŭ lɔŋki we -khi =phŏ.*

this =reason =LOC now loin.cloth buy -ANDV =FUT

この理由で、今、腰布を買いに行きます

A3: *marəma +thɔŋ =ma niŋ -dúŋ =kha lɔŋki waiʔ =ke, kɔ́ŋ =re, mə- houʔ*

Marma +circle =LOC stay -CONT =CL:time loin.cloth wear =COND be.good =RLS NEG- be.right *=lɔ́ʔ*

=PQ

マルマ地域に居るあいだは、腰布を履くといいです、そうではないですか

注 *=dúŋ=kha* は動詞に後続して全体で「～しているあいだ」という意味である。

B1: *houʔ =te.*

be.right =RLS

はい

B2: *lɔŋki waiʔ -θăŋ =re.*

loin.cloth wear -should =RLS

腰布を履くべきです

B3: *ʔɔŋthwáiŋ =gá lɔŋki waiʔ =rŏ hĭŋ =ge, naiŋŋaiŋkráθá =hŏ be θu =lé θĭ =phŏ mə- houʔ.*

PSN =TOP loin.cloth wear =SEQ exist =COND foreigner =QUOT which someone

=too know =FUT NEG- be.right

オン・トワインが腰布を履いていれば、外国人と誰かがわかることはないでしょう

注 *be* が疑問語として使用されることはすくなく、この例のように不定の意味で使用される傾向にある。疑問語としては *ja* が一般的である。

—

A4: *de lɔŋki ja =hlɔʔ =lé?*

this loin.cloth what =almost =CQ

この腰布はどれくらい（いくら）ですか

C1: *tə -thɔŋ.*

one -thousand

千（タカ）です

A5: *jí krí =re.*

price be.big =RLS

値段が大きい（高い）です

A6: *jí ʃɔ̌ =mai.*

price decrease =HRT

値段を下げてください

C2: *de jí hmaiŋ =re.*

this price be.corrrect =RLS

この値段は正しいです

C3: *ʃɔ̌ =rŏ mə- ră.*

decrease =SEQ NEG- can

下げることはできません

A7: *ʃɔiʔ +ra thá =phŏ =lɔ́?*

eight +hundred put =FUT =PQ

八百（タカ）にしますか

C4: *yáŋ =pɔiŋ cho =ge, ʃɔiʔ +ra +ŋá +che thá +pí =me.*

that =ESS say =COND eight +hundred +five +ten put +give =IRR

そのように言うなら、八百五十（タカ）にしてあげましょう

C5: *de =thaʔ ʃɔ̌ =rŏ mə- ră.*

this =than decrease =SEQ NEG- can

これよりも下げることはできません

(18)A1: *douʔkhă =ye, coiʔ ŋyɔiʔ =te.*

unhappiness =SFP heart be.dirty =RLS

嫌だなあ、気分が悪い

A2: *khaiŋtha +lúŋbraiʔ cwaiʔ -ləkhă =bya.*

body +whole be.wet -CMPL.VEN =PRF

体全体がすでに濡れてしまった

注 *-ləkhă* “-CMPL.VEN” は、非一人称主語でのみあらわれるようである。

B1: *ja phrɔiʔ =ca =lé?*

what become =NMLS =CQ

何が起こったのですか

B2: *mú pĭ -ləkhă =ca =lɔ́?*

rain be.pressed.down -CMPL.VEN =NMLS =PQ

雨に降られたのですか

A3: *houʔ =te.*

be.right =RLS

はい

A4: *thí mə- pa =bɔ́iŋ wiŋ =gă thwɔʔ la -mwǐŋ =re.*

umbrella NEG- be.with =NEG.SEQ house =ABL go.out come -unintentionally =RLS

傘を持たずに家からうっかり出てきてしまいました

注 *-mwǐŋ* “-unintentionally” は動詞 *mwǐŋ* “forget” が助動詞として使用されているものである。

A5: *də =hlɔʔ ʔəmyá mú rwa =me mə- thaŋ =rama.*

this =almost many rain rain(v) =IRR NEG- think =because

これほどたくさん雨が降ると思わなかったので

B3: *cɔiʔtəgɔ́ŋ (=ma) cho =ge, mú +raθi =ma nǐŋdɔ́iŋ =pɔiŋ də =hlɔʔ rwa =re =ye.*

PLN =LOC say =COND rain +season =LOC everyday =ESS this =almost rain(v) =RLS =SFP

チッタゴンと言えば、雨季には毎日これくらい雨が降りますよ

A6: *hnaʔphraiŋ =kha =gá rwa =phŏ =lɔ́ʔ*

tomorrow =CL:time =TOP rain(v) =FUT =PQ

明日は降りますか

B4: *rwa -khyaŋ =ge, rwa =phŏ.*

rain(v) -want =COND rain(v) =FUT

降りたいなら降るでしょう（降るかもしれません）

A7: *ŋa =gá jəpaiŋ lumyú phrɔiʔ =rama kɔ́ŋgɔ́ŋ mə- θĭ.*

1 =TOP Japan people become =because very NEG- know

私は日本人なので、よく知らないです

A8: *ŋa jəpaiŋ =ma niŋ -dúŋ =kha ja =go lá lá thí mə- pa =bɔ́iŋ lá =phŏ ʔá =re.*

1 Japan =LOC stay -CONT =CL:time what =OBJ go go umbrella NEG- be.with =NEG.SEQ go =FUT be.accustomed.to =RLS

私が日本に居るときは、どこへ行くときも傘を持たずに行く習慣がありました

注 *ja* におなじ動詞を二回連続して付加することにより、「たとえ～でも」という意味をあらわす。

B5: *de myaʔhna +θouʔ +pəwa =nă ʔəpráŋ θouʔ -pəlɔiʔ =mai.*

this face +wipe +cloth =COM fast wipe -CMPL =HRT

このハンカチではやく顔を拭いてしまいなさい

注 *-pəlɔiʔ* “-CMPL” は *bɔiʔ-lɔiʔ* “shoot-CMPL” が縮約した形式であると話者から説明されることがある。ただし、縮約していない形式は未確認である。

B6: *ʔəʔí mwiŋ =phŏ krɔ́ŋ -ră =rama.*

cold reach =FUT fear -can =because

風邪をひくと怖いから

(19)A1: *ŋa hnaʔphraiŋ (=kha)　dəgá lá -ră　=phŏ.*

1　tomorrow　=time.when PLN　go -must =FUT

私は明日ダカに行かなければなりません

A2: *gari =nă　lɔiʔ　(=rŏ) pŏ　(=rŏ) pí　=phŏ (=ca)　lu　=go　hra　-niŋ　=ca.*

car　=COM follow =SEQ　send =SEQ　give =FUT　=NMLS man =OBJ search -CONT =NMLS

車でついてきて送ってくれる人を探しているのです

注 名詞修飾表現において未来の事態を表現するときには、*=phŏ=ca* “=FUT” だけでなく *=phŏ=ca* “=FUT=NMLS” によっても名詞修飾節を形成することができる。

B1: *ŋa lɔiʔ　+pŏ　-ră　=ji.*

1　follow +send -can =OPT

私がついていって送ることができますように（私に送らせてください）

注 祈願をあらわす*=ji* “=OPT” は、(19) A9 であらわれる使役の助動詞*-ji* と本来的にはおなじものであるとおもわれる。ただし、使役のときは動詞に直接つくから接辞である一方、祈願は (20) B4 のように*=ba* “=POL” に後続しうるので接語である。

B2: *chəramă　=ʔətwɔʔ cho =ge,　ku.ŋyiŋ (pí) -ră　=phŏ (=gá).*

teacher.female =for　say　=COND help(v)　give -must =FUT　=TOP

先生のためと言うなら、助けてあげるべきです

注 *=ʔətwɔʔ* “=for” をもちいて名詞修飾表現を形成することもできる:「彼のための本」*θŭ=ʔətwɔʔ caʔouʔ* “3.OBL=for book”。

A3: *kíjŭ　taŋ　=re.*

thank put.on =RLS

ありがとうございます

A4: *ŋă　gari =gá　pyaʔ -ləkhă　=bya =nă　tu　=re.*

1.OBL car　=TOP break -CMPL.VEN =PRF　=COM be.similar =RLS

私の車は壊れてしまったのと同じです

A5: *caʔ　hnú　=rŏ　=ra　mə-　ră　-li　=bya.*

machine wake.up =SEQ =EMPH NEG- can -CMPL =PRF

エンジンをかけても、もうできなくなりました

B3: *ŋa pyaŋ =rŏ　pí　=phŏ.*

1　repair =SEQ give =FUT

私が直してあげます

B4: *ŋa =gá　caʔ　cho =ge,　ja　mə-　cho kŏ　=ma　ko　pyaŋ　-daiʔ =te.*

1　=TOP machine say　=COND what NEG- say　self.OBL =LOC self repair -can　=RLS

私は機械と言えば、何であれ、自分で直すことができます

A6: *houʔ　(=te) =lɔ́ʔ*

be.right =RLS　=PQ

そうですか

A7: *ʔəgǔ =hma θĭ =re.*

now =only.after know =RLS

今はじめて知りました

A8: *mə- taiʔ -khyaŋ =yɔŋ chɔŋ -khǎ =ca =lɔ́ʔ*

NEG- can -want =so.as.to pretend.to.do -VEN =NMLS =PQ

できないふりをしていたのですか

A9: *nɔʔ tə =kha tə =khŭ tə =khŭ pyaŋ -jəra hĭŋ =ge,*

next one =CL:time one =CL:thing one =CL:thing repair -NMLS:thing.to.do exist =COND

ʔɔŋthwáiŋ =go pyaŋ -ji =phŏ.

PSN =OBJ repair -CAUS =FUT

次に一回何か直すべきものがあれば、オン・トワインに直させます

注 使役をあらわすには*-ji* “-CAUS” だけでなく、動詞 *khɔ́iŋ* “order” に由来する助動詞 *-khɔ́iŋ* を使用することもできる。

B5: *houʔ =te, rǎ =re, chəramǎ.*

be.right =RLS can =RLS teacher.female

はい、できます、先生

(20)A1: *ʔɔŋthwáiŋ jə =kha jəpaiŋ (=go) praiŋ =phŏ =lé?*

PSN what =time.when Japan =OBJ return =FUT =CQ

オン・トワインはいつ日本に戻りますか

B1: *hnɔiʔ =lǎ =ʔəprouʔ (=kha) praiŋ =phŏ.*

two =CL:month =time.after =time.when return =FUT

二ヶ月後に戻ります

B2: *ʔəcɔiʔcɔiʔ =ma =gá kɔ́ŋgɔ́ŋ mə- praiŋ -khyaŋ =θĭ.*

real =LOC =TOP very NEG- return -want =still

本当はまだ戻りたくありません

A2: *jə =kha marəma +thɔŋ =go praiŋ la =phŏ =lé?*

what =time.when Marma +circle =OBJ return come =FUT =CQ

いつマルマ地域に戻ってきますか

B3: *phrɔiʔ -hnɔiŋ =ge, de hnɔiʔ =thé =ma nɔʔ tə =kha praiŋ la =phŏ.*

become -can =COND this year =place.inside =LOC next one =CL:time return come =FUT

できるなら今年の内にもう一度戻ってきたいです

B4: *ʔəyaŋ praiŋ la -hnɔiŋ =ba =ji =hŏ chŭ +tɔ́ŋ +pí =mai.*

fast return come -can =POL =OPT =QUOT prayer +ask.for +give =HRT

はやく戻ってこられるようにと祈りをささげてください

注 ここの*=ba* “=POL” は省略できないようである。

A3: *yə =dǒ praiŋ rɔʔ =ke, ŋə =rǒ =go mwǐŋ +lá =phǒ thaŋ =re.*

that =ALL return arrive =COND 1 =PL =OBJ forget +go =FUT think =RLS

あちら（日本）に戻り着いたら、私たちを忘れていくと思います

注 *ŋə=rǒ* “1=PL” は *ŋa=rǒ* “1=PL” が縮約した形式である。

B5: *ŋa tə =kha =lé marəma +thɔŋ =go mwǐŋ =phǒ mə- houʔ.*

1 one =CL:time =too Marma +circle =OBJ forget =FUT NEG- be.right

私は一度もマルマ地域を忘れることはありません

A4: *jəpaiŋ praiŋ (=rǒ) rɔʔ -prí =ge, ja louʔ =phǒ =lé?*

Japan return =SEQ arrive -end =COND what work(v) =FUT =CQ

日本に戻り着きおえたら、何をしますか

B6: *marəma +ʔəcáʔəca =nă paiʔθaiʔ =ca caʔouʔ =ko rwí =phǒ coiʔ +kú +thá =re.*

Marma +food =COM be.related =NMLS book =OBJ write =FUT heart +cross.over +put =RLS

マルマの食事に関係する本を書こうと心に決めています

記号・略号一覧

<A>	A は文字転写
/A/	A は音素表記
[A]	A は音声表記
(A)	A は任意の要素
A > B	A は B に変化する
A|B	A と B は条件変異
+	複合語境界
-	接辞境界
=	接語境界
1, 3	人称（それぞれ１人称、３人称）
ABL（ABLative）	奪格
ALL（ALLative）	方向格
C（Consonant）	子音
CAUS（CAUSative）	使役
CL（CLassifier）	類別詞
CMPL（CoMPLetive）	完遂
COL（COLective）	集合
COM（COMitative）	共同格

COND（CONDitional）	条件
CONT（CONTinuous）	継続
CQ（Content Question marker）	補足疑問標識
DEF（DEFinite marker）	特定
DIM（DIMinutive）	指小辞
EMPH（EMPHatic）	強意
ESS（ESSive）	様態格
EXP（EXPeriential）	経験
FUT（FUTure）	未来
HRT（HORTative）	勧誘
HS（HearSay）	伝聞
IMP（IMPerative）	命令
IRR（IRRealis）	非現実法
LOC（LOCative）	場所格
n（noun）	名詞
NEG（NEGative）	否定
NMLS（NOMinaLiSer）	名詞化標識
OBJ（OBJective）	目的格
OBL（OBLique）	斜格
OPT（OPTative）	祈願
PL（PLural）	複数
PLN（PLace Name）	地名
POL（POLite）	丁寧
PQ（Polar Question marker）	諾否疑問標識
PRF（PeRFect）	完了
PRFX（PReFiX）	接頭辞
PSN（PerSonal Name）	人名
PURP（PURPosive）	動作目的
QUOT（QUOTative）	引用
RLS（ReaLiS）	現実法
SEQ（SEQuential）	継起
SFP（Sentence Final Particle）	文末小辞
SpB（Spoken Burmese）	口語ビルマ語
SUPL（SUPerLative）	最上級

TOP（TOPic）	主題
v（verb）	動詞
V（Vowel）	母音
VEN（VENitive）	来辞
VOC（VOCative）	呼格
VPL（Verbal PLural marker）	動詞複数標識
WrB（Written Burmese）	文語ビルマ語

参考文献

大塚行誠. 2014.　「ビルマ語パロー方言基礎語彙」『アジア・アフリカの言語と言語学』8: 163–200.

加藤昌彦. 1998.　『エクスプレス・ビルマ語』白水社.

加藤昌彦. 2015.　『ニューエクスプレス・ビルマ語』白水社.

藤原敬介. 2003.　「マルマ語の音声に関する考察」『京都大学言語学研究』22: 237–300.

藤原敬介. 2011.　「マルマ人の文字」『遡河』16: 67–73.

藤原敬介. 2015.　「マルマ語の民話「三つのねがい」」『印度民俗研究』14: 99–116.

Ashaduzzaman, Mohammad and Md. Mostafa Rashel. 2007–2008.　Morphosyntactic analysis of Marma language. *The CDR Journal* 3/4: 143–156.

Bernot, Denise. 1958.　Rapports phonétiques entre le dialecte marma et le birman. *Bulletin de la société de linguistique de Paris* 53: 273–294.

Bernot, Denise. 1966.　"Êtes-vous fâchée, Belle-Mère?," Conte Marma. En Ba Shin et al. (eds.), *Papers on Asian history, religion, languages, literature, music folklore, and anthropology: essays offered to G. H. Luce by his collegues and friends in honour of his seventy-fifth birthday*, vol. I. Ascona, Switzerland: Artibus Asiæ Publishers. pp. 59–66.

Davis, Heidi A. 2014.　Consonant correspondences of Burmese, Rakhine and Marma with initial implications for historical relationships. MA Thesis, University of North Dakota.

Huziwara, Keisuke. 2008.　An overview of grammatical particles in Marma. Paper presented at the 41st International Conference on the Sino-Tibetan Languages and Linguistics, SOAS, University of London, UK.

Huziwara, Keisuke. 2011.　Nominalization and related phenomena in Marma. In G. Hyslop, S. Morey and M. W. Post (eds.), *North East Indian Linguistics Volume 3*. New Delhi: Cambridge University Press India. pp. 105–119.

Kato, Atsuhiko and Khin Pale. 2012.　The Myeik (Beik) dialect of Burmese: sounds, conversational texts, and basic vocabulary. 『アジア・アフリカ言語文化研究』83: 117–160.

Kurabe, Keita. 2012.　Jingpho dialogue texts with grammatical notes. 『アジア・アフリカの言語と言語学』7: 121–153.

Maggard, Loren, Sayed Ahmad and Mridul Sangma. 2007.　*The Marma and Rakhine communities*

of Bangladesh: a sociolinguistic survey. Dhaka: SIL Bangladesh.

Vittrant, Alice. 2015. Expressing motion: the contribution of Southeast Asian languages with reference to East Asian languages. In N. J. Enfiled and Bernard Comrie (eds.), *The languages of Mainland Southeast Asia: the state of the art*. Berlin: De Gruyter Mouton. pp. 586–631.

（附記）草稿段階で加藤昌彦氏と倉部慶太氏から有益なご意見をいただいた。本稿は科学研究費補助金（課題番号 16K02691）による研究成果の一部である。

受理日 2017 年 4 月 10 日

山本 恭裕（2017）『言語記述論集』9:95-114

枠付け類型論における様態の種類が与える構文選択への影響

—タガログ語のデータから—

山本恭裕

京都大学大学院

キーワード：タガログ語、オーストロネシア語族、枠付け類型論、移動様態表現

1　はじめに

本研究の目的は、複雑な移動事象を構成する様態の種類の違いが、移動の経路を表す言語表現（以下「経路」とする[1]）の実現位置にどのように影響するのかを、タガログ語[2]のデータに基づいて検証することである。移動事象を構成する各意味要素は、言語ごとに異なる形態統語的単位によって表現される (Talmy 1985)。Talmy (1991; 2000) は移動の中核的な意味要素である「経路」が節のどの構成素によって表されるかに基づき、2 つの言語類型を提案している。つまり、「経路」を主に主動詞（語根）によって表現する「動詞枠付け型言語 (verb-framed language)」と、「経路」を主に付属要素[3]によって表現する「付随要素枠付け型言語 (satellite-framed language)」という 2 類型である。

しかし、近年の複数の研究 (Croft et al. 2010; Beavers et al. 2010) が、1 つの言語内における類型論的多様性を報告している。つまり、ある言語が移動を表現するとき、異なる類型タイプに特徴付けられる複数の構文が使用可能ということである。こうした報告例と合致して、タガログ語もどちらの

---

[1] 経路、様態といった移動事象の意味要素の定義は第 2 節で扱う。

[2] タガログ語はオーストロネシア語族西マラヨ・ポリネシア語派に属し、フィリピン共和国ルソン島中部マニラ首都圏およびその周辺で話されている。述部先行型であり、典型的な他動詞構文における語順は VSO である。ただし、人称代名詞は必ず節の 2 番目の位置に現れる前接語 (enclitics) であり、それらが述語に先行する位置を占めるケースも存在する。また、本言語は複雑な動詞形態論を持ち、ヴォイス、アスペクト、動作主性に関して屈折する。特に複雑な体系であるヴォイスはフォーカスシステムと呼ばれ、形態的に行為者ヴォイス (*-um-/mag-* など)、被動作者ヴォイス (*-in-*)、場所ヴォイス (*-an*)、その他ヴォイス (*i-*) の 4 つの範疇が区別される。本稿では、タガログ語が対称的なヴォイス体系 (Symmetrical voice system: Himmmelmann 2005) を持つという仮説を採用する。つまり、それぞれのヴォイス範疇の間に派生関係はなく、項の降格なども生じていないと考える。格配列については、行為者ヴォイスの場合、行為者 (actor) が NOM によって、被行為者 (undergoer) が GEN によって表示される。その他 3 つのヴォイスにおいては、行為者が GEN によって、被行為者が NOM によって表示される（意味役割については Van Valin 2005; Van Valin and LaPolla 1997 を参照のこと）。

[3] 付随要素 (satellite) に対する Talmy の本来の定義は “the grammatical category of any constituent other than a noun-phrase or prepositional-phrase complement that is in a sister relation to the verb root. It relates to the verb root as a dependent to a head.” (2000: 102) である。しかし、Talmy (2009) では、この用語は動詞と姉妹関係でない前置詞や後置詞も含んでいる。本稿では、後者の定義を採用し、主動詞に従属する要素を付随要素と呼ぶ (詳しい議論については Matsumoto (2003) も参照) 。

類型パタンでも移動事象を描写しうる（例文中の太字は経路要素を、斜体は様態要素を表す。また下線は主動詞[4]を表す）。

(1) Satellite-framed[5]

L<um>utang ang lata **pa-labas** ng kueba

PFV:AV:float NOM can PA-out GEN cave

'The can floated out of the cave.'

(2) Verb-framed

Pa-lutang na **l<um>abas** ang lata ng kueba.

PA-float LK PFV:AV:go.out NOM can GEN cave

'The can floated out of the cave.'

(1) と (2) の両方の例において、「缶が浮かんで洞窟から出る」という同一の事象が描写されているが、その表現の仕方は異なる。(1) の例では、経路 *labas* 'out' は接辞 *pa-* (Schachter and Otanes 1972) を付加され、移動様態（以下では単に「様態」と呼ぶ）を表す主動詞 *lumutang* 'to float' に従属する構成素として表されている。一方 (2) の例では経路は主動詞で表され、様態が従属要素として表現されている。すなわちタガログ語では経路と様態が主動詞の位置において競合関係にあると言え、話者はどちらの要素を主動詞で表すか（あるいはどちらを付随要素で表すか）を選択する必要があることを意味する。

こうした点を踏まえ、本研究では次の 2 つの問題を検証する：まず、(I) 複雑な移動事象を表現する際、タガログ語話者は動詞枠付け型と付随要素枠付け型のどちらの構文による描写を選好するか、また、 (II) 何かしらの選好が存在する場合、その選好は異なる種類の移動事象において一貫しているのかという 2 点である。これら 2 つの課題に対して、映像描写タスクにより収集した自発的な発話データと、作例に対するタガログ語母語話者の文法性判断に基づいて検証を行う。

異なる種類の移動事象という点に関して、より具体的には、本研究は異なる様態の種類を含む移動事象に焦点を当てる。本研究では移動の原因となるか否か、という点において様態を区別する。そして結論として次のことを示す：タガログ語では、移動の原因となる様態は主動詞あるいは付随要素のどちらでも実現可能であるが、主動詞で表現されることが好まれる。そのため経路を付随要素として表現する傾向が強い（付随要素枠付け型）。一方、移動との因果関係が薄い、あるいはそれを認めにくい様態は、文法的に主動詞の位置に生起することができない。従って、そのような様態を含む移動事象は動詞枠付け型構文や従属接続を含む複雑文によって描写される。この点を言い換えると、タガロ

---

[4] 本稿におけるタガログ語の主動詞の認定については、3.1 で詳しく議論する。

[5] 本稿の例文の表記は、基本的にタガログ語の正書法に従う。正書法では、軟口蓋鼻音 [ŋ] は 'ng' により表される。また属格 [naŋ] は 'ng' と表記される。そのほか、正書法で声門閉鎖音はハイフン '-' により表記されるが、本稿では形態素境界を表すものと区別するために国際音声記号 'ʔ' を用いる。なお、語頭及び語末の声門閉鎖音は正書法にならい明示しない。

グ語話者の構文選択は様態の種類に敏感であり、移動の原因となる様態ほど主動詞の位置を占めやすい傾向があると言える（表1）。

表1　様態の種類と生起位置

移動の様態の種類	統語的な生起位置
移動の原因となる様態	主動詞が好まれる
移動の原因でない様態	主動詞に依存する付随要素、複雑文の一方の節の主動詞（主動詞は不可）

本稿は次の通りに構成される。第2節では、様態という概念が Talmy (1991; 2000) の枠付け類型論においてどのように位置づけられるかという点と、さらにその下位分類に関して論じる。第3節では、タガログ語の移動事象描写に使用される構文の特徴を概観し、さらに当該類型論において重要となる、タガログ語の節主要部の認定について議論する。第4節では、データ収集に使用した映像描写実験について説明し、その実験結果および発見を報告する。第5節では、異なる種類の様態を含む移動事象の描写について、タガログ語話者の文法性判断に基づき議論を行う。第6節で2つの問題に対する研究を纏める。第7節で本研究を結論づける。

2　様態とその下位分類

Talmy (1991; 2000) の類型論は、複雑事象の核となる「枠付け事象」 (Framing event) が各言語でどの様に表現されるかに着目することから、「枠付け類型論」 (Framing typology) と呼ばれる。枠付け事象は、複雑事象の時間的輪郭を規定するものと定義され、本研究で議論する移動事象においては、経路要素がこれにあたる。Talmy の議論における複雑事象は、こうした枠付け事象に加え、それを補足する「共事象」 (Co-event) などから構成されるものと規定される。本研究が注目する様態はこの共事象の1種と見なされ、次のように特徴付けがなされる：

> “In the Manner relation, ... the Co-event co-occurs with the Motion event and is conceptualized as an additional activity that the Figure of the Motion event exhibits—an activity that directly pertains to the Motion event but that is distinct from it. In this conceptualization, the Co-event can “pertain” to the Motion event in several ways, such as by interacting with it, affecting it or being able to manifest itself only in the course of it.” (Talmy 2000: 45)

Talmy が述べているように、この定義の下では、様態として機能する共事象と移動事象の間にいくつかの関係性があり得る。たとえば階段を走って上がる移動の場合、移動者の走る行為が上方向への位置変化を生じさせており、走る行為を止めれば移動そのものも止まる。つまり、様態と移動は明確に因果の関係にある。一方、人間がくるくる回りながら坂をのぼるといった移動の場合、くるくる回る行為は移動に付随するものであり、移動の原因となっているとは考えにくい。

このような違いに関連して、Allen et al. (2007) は前者を本来的な様態 (Manner-Inherent) 、後者を偶発的な様態 (Manner-Incidental) と呼び、成人の英語話者がこの区別に敏感であることを述べている。Allen et al. はアニメーションを用いた発話実験を行い、その結果、成人英語話者は本来的な様態を含む移動について、偶発的な様態を含む移動よりも有意に高頻度で単節の（付随要素枠付け型）構文を用いて描写したことを報告している。またその一方で、偶発的な様態を含む移動は、従属節を含む複文や複数の文など、統合度の低い構文でより頻繁に描写されたという。

様態の本来性／偶発性という区別は、Croft et al. (2010) における様態と経路の組み合わせの典型性や、Talmy (2000) における付随 (Concomitance) と様態 (Manner) の区別ないし連続性と類似した概念であると考えられる（他にも Wienold 1995 や Slobin 1997; 2000 を参照）。Talmy は、付随事象が移動を補足する例として *She wore a green dress to the party* や *I whistled past the graveyard* を挙げている (2000: 46)。これらの描写において、緑色のドレスを着用することや口笛を吹くことが移動の原因となっているとは考えにくい。

また、Allen et al. (2007) の研究に関して注意すべきこととして、彼らの議論が構文の「選好」についてのみ行われているという点を指摘できる。ある事象の描写に、ある特定の構文が使用されなかったとき、他の構文がより好まれたという場合と、その構文が使用できなかったという場合がありうる。そのため本研究では、前述した 2 つの様態（あるいは様態と付随）を区別した上で、タガログ語話者の構文選好と生起可能性の両方を検証する。

3　移動事象の描写に使用される構文の特徴

ここでは、移動事象の描写に関わるタガログ語の構文を概観する。まず、そのような構文として冒頭の例 (1) を再び以下で提示する。本構文ではヴォイス接辞を有する動詞と接頭辞 *pa-*を付加された語根を 1 つずつ含むものが存在する。この構文において、経路要素はヴォイス接辞を付加されて、あるいは接辞 *pa-* を付加されて実現しうる。本稿ではこの構文を *pa-* 構文と呼ぶこととする。

(1)　L＜um＞utang　ang　lata　**pa-labas**　ng　kueba
PFV:AV:float　NOM　can　PA-out　GEN　cave
‘The can floated out of the cave.’

この構文では、 *pa-* により複数の経路を表示することが可能である (3)。また (4) や (5) が例示するように、動詞と *pa-* を付加された要素がそれぞれ異なる行為主体を取ることもありうる。

(3)　Nag-lakad　si　Maria　**pa-tawid**　ng　kalsada　**pa-punta**　sa　akin.
PFV:AV-walk　P.NOM　Maria　PA-cross　GEN　street　PA-go　LOC　1SG.OBL
‘Maria walked across the street to me.

(4)　Ini-hagis　ng　lalaki　ang　lata　**pa-labas**　sa　bintana.
PFV:cv-throw　GEN　man　NOM　can　PA-go.down　LOC　window

'The man threw the can out of the window.'

(5) H<in>ila-ø niya ako **pa-tayo**.
PFV:pull-PV 3SG.GEN 1SG.NOM PA-stand.up
'He pulled me to my feet.'

2 つ目は、リンカー (linker; LK) を用いた構文である。タガログ語のリンカー *na* （先行する語が母音で終わる場合は =*ng* ）は抽象性の高い文法要素であり、その前後の要素のあいだに何らかの文法的関係が存在することを示す。以下が例示するように、このリンカーが複雑移動などの並行事象を表現するのにも用いられる (長屋 2016; Schachter and Otanes 1972)。以下では本構文を並行事象構文と呼ぶ。

(6) Nag-ma~madali=ng **l<um>abas** si Ricky.
IPFV:AV:hurry=LK PFV:AV:go.out P.NOM Ricky
'Ricky rushed out of the room.'

(7) <Um>i~iyak siya=ng **<um>alis** sa kuwarto.
AV:IPFV:cry 3SG.NOM=LK PFV:AV:leave LOC room
'S/he left the room crying.'

この構文は、*pa-* 構文と異なる文法特徴をいくつか有する。まず、上の例にわかるように、この構文にはヴォイス接辞を付加された動詞が 2 つ見られる。第 2 に、次の (8) のように、そのうち一つの動詞は常に未完了形のアスペクトで実現しなければならないという制約を持つ。さらに、2 つの動詞の行為者は同一でなければならない (9)。

(8) *Nag-madali=ng l<um>abas si Ricky. (cf. 6)
PFV:AV-hurry=LK PFV:AV:go.out P.NOM Ricky
'Ricky rushed out.'

(9) *Nag-lu~luto si Nanay na nag-ba~basa ako.
IPFV:AV:cook P.NOM mother LK IPFV:AV:read 1SG.NOM
'My mother cooked while I was reading.'

ここまで概観した 2 つの構文を組み合わせることも可能である。この点を例 (10) で例示する。

(10) T<um>a~takbo=ng **l<um>abas** ang lalaki pa-punta sa akin.
IPFV:AV:run=LK PFV.AV:out NOM man PA-go LOC 1SG.OBL
'The man ran out toward me.'

こうした構文に加えて、タガログ語には経路を表す前置詞もいくつか存在する。 *sa* 'to, at, from'; *mula* 'from'; *hanggang* 'reaching'; *buhat* 'from'; *galing* 'originate from' などがそれである。こうした空間的前置詞を含む移動表現は以下のようなものである。

(11) Nag-lakad ako **mula** sa bahay ko **hanggang** sa kampus.
PFV:AV-walk 1SG.NOM from LOC house 1SG.GEN reaching LOC campus
'I walked from my house to the campus.'

(12) P<um>unta siya sa airport **galing** sa TriNoma.
PFV:AV:go 3SG.NOM LOC airport originate.from LOC TriNoma
'Jenn went to the airport from TriNoma.'

3.1 主動詞の認定

Talmy (1991; 2000) の類型論では、経路を主動詞か付随要素のどちらで表現するかが問題となるため、対象言語の各構文において、主動詞をどのように認定するかという点を明らかにしておく必要がある。本稿では、文が表現する事象全体のアスペクト的性質を決定する動詞を主動詞と認定する。たとえば、以下の 2 つの例は、文全体が既に終結した事象を表している。従って上の基準により、完了アスペクトの標示を受けている動詞が主動詞となる。(13) のような *pa-* 構文においては、アスペクト標示を唯一受けている *lumakad* 'to walk' が主動詞と見なされる。一方、 (14) のような並行事象構文では、アスペクト標示を受けている二つの動詞のうち *umuwi* 'to go home' が主動詞となる。

(13) *L<um>akad* si Mhawi **pa-akyat** sa bundok.
PFV.AV:walk P.NOM Mhawi PA-climb LOC mountain
'Mhawi walked up the mountain.'

(14) *K<um>a~kanta* =ng **<um>uwi** si Lucy.
IPFV:AV:sing=LK PFV:AV:go.home P.NOM Lucy
'Lucy went home singing.'

しかしながら、全てのケースでこの基準が適応できるわけではない。 (15) のように、文により表現される事象が進行中の場合、両方の動詞が未完了アスペクトの標示を受ける。この場合、どちらが節の主要部であるか判断できない（他の基準については長屋 2016 を参照のこと）。言い換えると、主動詞は必ずアスペクト標示を受けるが、アスペクト標示を受けているからといって主動詞であるとは言えない、ということになる。

(15) *K<um>a~kanta* =ng <um>u~uwi si Lucy.
IPFV:AV:sing=LK IPFV:AV:go.home P.NOM Lucy
'Lucy is going home singing.' or 'Lucy is singing while going home.'

4　研究１：構文選好

4.1　実験

本研究ではまず、ビデオ刺激を用いてタガログ語話者から移動事象の描写データを収集した。実験は 2011 年の 11 月から 12 月に実施された。

被験者として、マニラ首都圏出身の 7 人のタガログ語話者（年齢：20 代から 40 代；女性 4 人と男性 3 人）の参加を得て、人やものが移動する 10 個のビデオクリップを各々に描写してもらった。刺激映像は筆者が作成したもので、9 個の自律移動と 1 個の使役移動から構成される。テスト段階は、移動を含まない練習用の映像から始まる。表 2 は、ビデオクリップで描かれる事象をリストしたものである。これらは事象の理想化された特徴に過ぎないことに留意されたい。

実験参加者にはラップトップのディスプレイ上で、各クリップのあとの 15 秒の休止時間において映像の描写を 1、2 文で行うようにと指示される。実験参加者には映像だけでなく、音声情報もヘッドフォンを通して与えられる。

表 2　刺激映像の内容

#	Event
P-1	男性がボトル飲料を飲んでいる
M-1	缶が坂を転がり落ちる
M-2	男性がフェンスをよじ上る
M-3	2 人の男性と 1 人の女性が走ってビルから出る
M-4	女性が階段を歩いて降りる
M-5	女性が歩いてカメラの前を横切る
M-6	男性が横断歩道を歩いて渡る
M-7	男性が塀から飛び降りる
M-8	ボールが跳ねながら階段から落ちる
M-9	ボールが壁に当たって跳ね返る
M-10	男性が台車を押してカメラに向かって歩く

Notes: P- practice; M- motion event

4.2　結果

実験の結果として、タガログ語話者は動詞枠付け型構文よりも、付随要素枠付け型構文を好んで使用することが明らかとなった（図 1）。話者が刺激映像で描かれた経路と様態の両方に言及する場合、様態を主動詞の位置で表し、経路を付随要素で表現するケースが多かった（78%）。そして、従属接続や等位接続など、異なる節で経路と様態が表現された割合が 13% であり、経路が動詞で、様態が付随要素で表現された割合が 9% であった。

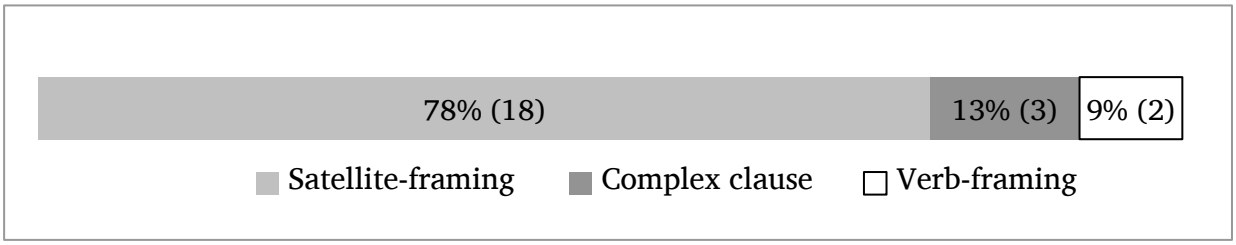


図1 各類型パタンの割合（トークン数）

ここからは具体的なデータを見ていく。まず、全体で 18 例見られた付随要素枠付け型構文を観察する。次の例において、経路は接辞 *pa-* を付加された付属要素として実現している。

(16) May mga tao＝ng *nag-ma～madali* **pa-baba** ng hagdan.
there.be PL person＝LK IPFV:AV:rush PA-go.down GEN stairs
'There is a person who is rushing down the stairs.' (M-3)

(17) *Nag-la～lakad* yung babae **pa-baba** ng hagdan.
IPFV:AV:walk DIS.NOM woman PA-go.down GEN stairs
'The woman is walking down the stairs.' (M-4)

(18) *T＜um＞alon* **pa-baba** yung lalaki.
PFV.AV:jump PA-go.down DIS.NOM man
'The man jumped down.' (M-7)

次の筆者の作例 (19) が示すように、これらの例では経路と様態の位置を入れ替えて、経路を主動詞により、様態を接辞 *pa-* の付加により表現することも可能である[6]。従って、話者たちは動詞枠付け構文による描写が不可能だったわけではなく、付随要素枠付け型の構文を好んで使用したと言える。

(19) *Pa-talong* **b＜um＞aba** yung lalaki. (cf. 17)
PA-jump.LK PFV.AV:go.down DIS.NOM man
'The man jumped down.'

また、以下の例 (20)、(21)、(22)、(23) では、経路が前置詞により表現されている。さらに (24) では、2 つの付随要素により経路が表現されている。

[6] 入れ替えにより表現の自然さや文法性が変化することはこれらのデータでは見られないが、実験には参加していない 1 人のインフォーマントから、(19) のような表現はより教科書的な印象を受けるというコメントをもらった。彼女によると、日常会話では (18) のような構文のほうが口語的・一般的なように感じるとのことであった。しかし、全ての被験者がこれと同様の印象あるいは直観を持っているわけではなかった。

(20) *T<um>alon* ang lalaki **mula** sa mataas na lugar.
PFV.AV:jump NOM man from LOC high LK place
'The man jumped down from the high place.' (M-7)

(21) *L<um>undag* siya **sa** bakod.
PFV.AV:jump 3SG.NOM LOC fence
'He jumped off the fence.' (M-7)

(22) Doon *t<um>alsik* yung bola **sa** pader.
there PFV.AV:splash DIS.NOM ball LOC wall
'The ball splashed to the wall.' (M-9)

(23) May *t<um>albog* na bola **mula** kung saan.
there.be PFV.AV:bounce LK ball from somewhere
'There was a ball coming from somewhere and it bounced back.' (M-9)

(24) *T<um>a~takbo* sila **pa-labas** **galing** sa isa=ng building.
IPFV:AV:run 3SG.NOM PA-out originate.from LOC one=LK building
'They are running out of a building.' (M-3)

次に、描写に使用された動詞枠付け型構文を見る。本実験での使用例は僅か 2 例であった。うち 1 つは、(25) の並列事象構文である。

(25) May **na-laglag** na bola=ng *t<um>a~talbog* sa hagdan.
there.be PFV.POT:fall LK ball=LK IPFV:AV:bounce LOC stair
'There was a ball bouncing off the stairs.' (M-8)

もう 1 つの動詞枠付け型構文は (26) の例である。この例文で描写されている、ペットボトルを掴むという事象が道を渡る事象の原因となっていることを想定することは難しい。つまり、この事象は偶発的な様態と言える。(26) で表現されている事象を付随要素枠付け型構文で表現することは難しく、この点で本節でみた他の例とは異なる。

(26) **T<um>a~tawid** siya sa kalsada *hawak* ang isa=ng bottle.
IPFV:AV:cross 3SG.NOM LOC street hold NOM one=LK bottle
'He is crossing the street holding a bottle.' (M-6)

本実験において出現した様態表現は、本来的な様態として機能しているものがほとんどであった。それを (27) にリストする。

(27) *gulong* ‘to roll’, *takbo* ‘to run’, *lakad* ‘to walk’, *lundag* ‘to jump’, *hira* ‘to pull’, *madali* ‘to rush’, *talon* ‘to jump’, *talbog* ‘to bounce’, *talsik* ‘to splash’, *tulak* ‘to push’

一方、偶発的な様態は (26) の 1 例しか観察されなかった。この例において、偶発的な様態が付随要素として実現したという点は興味深い。この点をさらに検証するため、次節ではそうした種類の様態と経路の組み合わせがどのように表現されるのかを見る。

5 研究２：異なる様態のコード化

次の例のように、タガログ語では経路を主動詞で表し、様態を付随要素で表すことが可能であり、さらに 2 要素の統語的ステータスを入れ替えることも可能であるということを前節までで確認した[7]。

(28) a. *Pa-takbo*＝ng **p＜um＞asok** sa kuwarto ang lalaki.
PA-run＝LK PFV.AV:enter LOC room NOM man
‘A man ran into the room.’

b. *T＜um＞akbo* ang lalaki **pa-pasok** sa kuwarto.
PFV.AV:run NOM man PA-enter LOC room
‘A man ran into the room.’

(29) a. *Pa-kandirit* na **＜um＞akyat** ng hagdan si Leo.
PA-skip LK PFV.AV:climb GEN stair P.NOM Leo
‘Leo skipped up the stairs.’

b. *K＜um＞andirit* si Leo **pa-akyat** ng hagdan.
PFV.AV:skip P.NOM Leo PA-climb GEN stair
‘Leo skipped up the stairs.’

前節の実験結果から、2 つの類型パタンのどちらも使用可能な場合、タガログ語話者が好んで付随要素枠付け型構文を選択するということが明らかになった。しかし、前節で観察された付随要素枠付け型構文の主動詞は *lakad* ‘to walk’ や *takbo* ‘to run’ など、移動を引き起こす典型的な様態がほとんどであった。そのため、移動を引き起こす典型的なもの以外の様態と経路の組み合わせにおいても、タガログ語話者が同様の構文選好を示すのかという点が未解決である。本節では、移動の原因とならない偶発的な様態と経路の組み合わせがどのように表現されるかを見て行く。本節で検証する経路 (30) と様態 (31) は以下のものである。

[7] 1 人のインフォーマントは (28)、(29) の 2 例において (b) の方、つまり付随要素枠付け型の構文の方がより一般的であるとコメントした。しかし注 4 で述べたように、このような直観を全ての話者が持つ訳ではない。

(30) **Path**（経路）

tawid ‘to cross’, *labas* ‘to go out’, *baba* ‘to go down’, *pasok* ‘to enter’, *punta* ‘to go’, *akyat* ‘to ascend’

(31) **Manner**（様態）

sayaw ‘to dance’, *tawa* ‘to laugh’, *sigaw* ‘to shout’, *ikot* ‘to spin’, *kain* ‘to eat’, *dabog* ‘to stamp’

この研究では、これらの経路と様態を組み合わせた作例の文法性判断を、タガログ語話者への面談調査を行って確認した。結果としては、これらの様態は節の主動詞として実現できないことがわかった。この事実は、タガログ語話者の構文選択は様態の種類に敏感であり、言語そのものを分類する Talmy の類型論をそのままこの言語に適応することはできないことを意味する。

次の例が示すように、*sayaw* ‘to dance’ と *tawid* ‘to cross’ の組み合わせでは、経路が主動詞として実現する。様態の方を主動詞として表現した場合、非文法的と判断される。

(32) a. *Pa-sayaw* siya＝ng **t<um>awid** sa daan.
PA-dance 3SG.NOM＝LK PFV.AV:cross LOC road
‘S/he crossed the road dancing.’

b. **S<um>ayaw* siya **pa-tawid** sa daan.
PFV.AV:dance 3SG.NOM PA-cross LOC road
‘S/he crossed the road dancing.’

並行事象構文でもこの組み合わせを表現できるが、ここでも経路が主動詞の位置を占める。

(33) a. *S<um>a~sayaw* siya＝ng **t<um>awid** sa daan.
IPFV:AV:dance 3SG.NOM＝LK PFV.AV:cross LOC road
‘S/he crossed the road dancing.’

b. **S<um>ayaw* siya＝ng **t<um>a~tawid** sa daan.
PFV.AV:dance 3SG.NOM＝LK IPFV:AV:cross LOC road
‘S/he crossed the road dancing.’

次の経路と様態の組み合わせは *ikot* ‘to spin’ と *pasok* ‘to enter’ である。以下の例が示すように、この組み合わせの描写においても付随要素枠付け型の構文は使用できない。なお、ここでは (34a) の並行事象構文のみが使用可能である。(35b) では経路が主動詞で表されているが、*pa-* 構文がここでは非文法的と判断された[8]。

[8] 同様の経路と様態の組み合わせにおいて、人が移動する場合では動詞枠付け型の *pa-* 構文は使用可能である。

(34) a. *<Um>i~ikot* na **p<um>asok** sa kuwarto ang trumpo.
IPFV:AV:spin LK PFV.AV:enter LOC room NOM top
'The top entered the room spinning.'

b. **Umikot* na **p<um>a~pasok** sa kuwarto ang trumpo.
PFV.AV:spin LK IPFV:AV:enter LOC room NOM top
'The top entered the room spinning.'

(35) a. **Umikot* ang trumpo **pa-pasok** sa kuwarto.
PFV.AV:spin NOM top PA-enter LOC room
'The top entered the room spinning.'

b. **Pa-ikot* na **p<um>asok** sa kuwarto ang trumpo.
PA-spin LK PFV.AV:enter LOC room NOM top
'The top entered the room spinning.'

さらに、*sigaw* 'to shout' 及び *dabog* 'to stamp' と *baba* 'to go down' の組み合わせについても、動詞枠付け型構文が使用される。

(36) *sigaw* 'to shout' + *baba* 'to go down'；並行事象構文

a. *S<um>i~sigaw* na **b<um>aba** ng hagdan si Kevin.
IPFV:AV:shout LK PFV.AV:go.down GEN stair P.NOM Kevin
'Kevin went down the stairs shouting.'

b. **S<um>igaw* na **b<um>a~baba** ng hagdan si Kevin.
PFV.AV:shout LK IPFV:AV:go.down GEN stair P.NOM Kevin
'Kevin went down the stairs shouting.'

(i) Pa-ikot na p<um>asok sa kuwarto ang lalaki.
PA-spin LK PFV:AV:enter LOC room NOM man
'A man entered the room spinning'

(ii) *<Um>ikot ang lalaki pa-pasok sa kuwarto.
PFV:AV:spin NOM man PA-enter LOC room
'A man entered the room spinning.'

つまり (34d) の不適格性は単純に経路と様態の組み合わせに由るものではなく、主語の有生性に関する構文制約に原因があると考えられる。本稿ではこれ以上この問題を扱わないが、本稿が焦点を当てている様態だけでなく、移動者に関わるこうした意味的性質なども構文選択に影響を与えていることが示唆される。

(37) *sigaw* 'to shout' + *baba* 'to go down'； *pa-* 構文

a. *Pa-sigaw* na **b<um>aba** ng hagdan si Kevin.
PA-shout LK PFV.AV:go.down GEN stair P.NOM Kevin
'Kevin went down the stairs shouting.'

b. **S<um>igaw* si Kevin **pa-baba** ng hagdan.
PFV.AV:shout P.NOM Kevin PA-go.down GEN stair
'Kevin went down the stairs shouting.'

(38) *dabog* 'to stamp' + *baba* 'to go down'

a. *Pa-dabog* siya=ng **b<um>aba** sa hagdanan.
PA-stamp 3SG.NOM PFV.AV:go.down LOC stair
'S/he went down the stairs stamping.'

b. **Nag-dabog* siya **pa-baba** ng hagdanan.
PFV:AV:stamp 3SG.NOM PA-go.down LOC stair
'S/he went down the stairs stamping.'

同様に、*tawa* 'to laugh' と *labas* 'to go out' の組み合わせでも、様態ではなく経路が主動詞として実現する。この組み合わせでは、*pa-* 構文は文法的ではあるものの、少し不自然な表現となり (39c)、並行事象構文による描写がもっとも自然と判断された。

(39) a. *T<um>a~tawa*=ng **l<um>abas** ng kuwarto ang mga bata=ng lalaki.
IPFV:AV:laugh=LK PFV.AV:go.out GEN room NOM PL young=LK man
'The boys went out of the room laughing.'

b. **T<um>awa*=ng **l<um>a~labas** ng kuwarto ang mga bata=ng lalaki.
PFV.AV:laugh=LK IPFV:AV:go.out GEN room NOM PL young=LK man
'The boys went out of the room laughing.'

c. *?Pa-tawa*=ng **l<um>abas** ng kuwarto ang mga bata=ng lalaki.
PA-laugh=LK PFV.AV:go.out GEN room NOM PL young=LK man
'The boys went out of the room laughing.'

また以下の例、*tawa* 'to laugh' と *akyat* 'to ascend' (40) 及び *sigaw* 'to shout' と *labas* 'to go out' (41) というように、異なる経路との組み合わせでも同様の特徴が観察される。従って、経路の種類自体はその経路の出現位置や構文の使用可能性に関わらないということがわかる。

(40) *tawa* 'to laugh' + *akyat* 'to ascend'

a. *T<um>a~tawa*=ng <**um>akyat** ng hagdan ang mga bata=ng lalaki.
IPFV:AV:laugh=LK PFV.AV:ascend GEN stair NOM PL young=LK man
'The boys went up the stairs laughing.'

b. **T<um>awa* ang mga bata=ng lalaki **pa-akyat** ng hagdan.
PFV.AV:laugh NOM PL young=LK man PA-ascend GEN stair
'The boys went up the stairs laughing.'

c. ?*Pa-tawa*=ng <**um>akyat** ng hagdan ang mga bata=ng lalaki.
PA-laugh=LK PFV.AV:ascend GEN stair NOM PL young=LK man
'The boys went up the stairs laughing.'

(41) *sigaw* 'to shout' + *labas* 'to go out'

a. *Pa-sigaw* na **l<um>abas** ng bahay ang babae.
PA-shout LK PFV.AV:go.out GEN house NOM woman
'The woman came out of the house shouting.'

b. *S<um>i~sigaw* na **l<um>abas** ng bahay ang babae.
IPFV:AV:shout LK PFV.AV:go.out GEN house NOM woman
'The woman came out of the house shouting.'

c. **S<um>igaw* ang babae **pa-labas** ng bahay.
PFV.AV:shout NOM woman PA-go.out GEN house
'The woman came out of the house shouting.'

ここまで観察したように、偶発的な様態と経路を単節で表すとき、様態が主動詞として実現することは許されないことが明らかとなった。従ってそれらの組み合わせを単節で表現する場合、経路を主動詞として、様態を付随要素として表す必要がある。この点は、主動詞として実現することが好まれる本来的な様態と対照的である。しかしながら、こうしたパタンを示さないものも観察された。(42) が例示するように、*kain* 'to eat' と *punta* 'to go' の組み合わせは *pa-* 構文でも並行事象構文でも表現できない。

(42) a. **Pa-kain* siya=ng **p<um>unta** sa eskwelahan.
PA-eat 3SG.NOM=LK PFV.AV:go LOC school
'S/He went to school eating.'

b. ***K<um>ain** siya pa-punta sa eskwelahan.
PFV.AV:eat 3SG.NOM PA-go LOC school
'S/He ate while going to school.'

c. **K<um>a~kain* siya=ng **p<um>unta** sa eskwelahan.
IPFV:AV:eat 3SG.NOM=LK PFV.AV:go LOC school

'S/He went to school eating.'

以下の (43) が例示するように、この組み合わせは *habang* 'while' により導入される従属節を含む複雑文により表現される。こうした複雑文においては、様態と経路を表す要素はそれぞれの節において主要部として機能している。Talmy (1991; 2000) の類型論は単節における複雑事象の表現を対象とするため、この構文は当該類型論のどちらのパタンにも属さない。

(43) *K<um>a~kain*[9] siya habang **p<um>u~punta/pa-punta** sa eskwelahan.
IPFV:AV:eat 3SG.NOM while IPFV:AV.go PA-go LOC school.
'S/He was eating while going to school.'

第 5 節の (41) 以外の例文では、2 つの単純な事象（例えば (39) では「女性が叫ぶ」という事象と「女性が家から出る」という事象）が、単節に統合されて表現されていると考えることができる。しかしこの (41) の例では、2 つの事象が単節には統合されず、それぞれ一つの節によって表現されている。この事実は、偶発的な様態の実現の仕方が均質的でないことを意味し、従って今後更なるデータの収集と意味論的分析が必要となる。

最後に、本節で観察したデータを纏めると以下の表 3 のようになる。

表 3　移動事象のシチュエーションと使用可能な構文

シチュエーション	構文（類型）
DANCE + CROSS	*pa-* 構文（動詞枠付け）；並行事象構文（動詞枠付け）
SPIN + ENTER	並行事象構文（動詞枠付け）
SHOUT + DOWN	*pa-* 構文（動詞枠付け）；並行事象構文（動詞枠付け）
SHOUT + GO OUT	*pa-* 構文（動詞枠付け）；並行事象構文（動詞枠付け）
STAMP + DOWN	*pa-* 構文（動詞枠付け）
LAUGH + GO OUT	並行事象構文（動詞枠付け）；ʔ*pa-* 構文（動詞枠付け）
LAUGH + ASCEND	並行事象構文（動詞枠付け）；ʔ*pa-* 構文（動詞枠付け）
EAT + GO	主節 + *habang* 従属節

[9] 完了アスペクトの *kumain* はここで使用できず、未完了アスペクトの標示 *kumakain* となる。なお (42) の例文では未完了・完了に関わらず非文となる。

6　2つの研究のまとめ：様態の形態統語的統合度

第4節と第5節において、異なる種類の様態と経路の組み合わせがどのように表現されるかを観察した。第4節で主に観察した本来的な様態は主動詞として実現する傾向が強い。第5節で観察した偶発的な様態は多くの場合主動詞に従属する付随要素として実現するが、*kain* 'to eat' と *punta* 'to go' の組み合わせでみたように、経路とは別の節において（偶発的な）様態が実現する場合もあった。従って言語そのものを分類する Talmy の類型論を直接タガログ語に適応することはできない。しかし、特定の移動事象の描写に使用される構文の分布パタンを捉える上で、枠付け類型論による構文の特徴付けが有効であることを本節で議論する。

ここで、前節までで観察した様態の実現位置の違いを、単純移動[10]を表す節への、様態の形態統語的な統合度の違い (Lehmann 1988; Van Valin and LaPolla 1997) と捉えると、以下のような統合度に関する階層が提示できる[11]。本階層は、右側に行くほど統合度が低くなることを意味する：

(44)　様態の統合度の階層

主動詞	<	付随要素	<	従属接続	<	等位接続
（付随要素枠付け）		（動詞枠付け）				

等位接続の場合、様態は移動を表す節からは統語的に独立しており、従って統合度がもっとも弱い。従属接続の場合、様態は単独で一つの節の述語として機能する。しかしながら、一方の節は他方に依存しており単独では立てず、様態と単純移動が形態統語的に等位接続と比較してより高い度合いで統合されていると言える (Lehmann 1988: "hierarchical downgrading")。また様態が付随要素として実現する場合は、節ではなく単語として、主節内部に生起する。この点で (44) の階層において、より右側に位置するものよりも統合度が高い (Lehmann ibid. : "syntactic level")。ここでも様態は形式的にもアスペクト的解釈においても主動詞に依存しており、主節に完全に統合されているわけではない。そして階層のもっとも左に位置するケースでは、様態は主動詞として実現し、文全体が表現する事象のアスペクト的性質を決定する。このとき経路は接頭辞 *pa-* による派生あるいは前置詞など、ヴォイス接辞もアスペクト標示も持たない構成素として実現する。様態は他の構成素に依存しておらず、節内部に完全に統合されていると言える (Croft et al. 2010: 222)。

第4節の実験結果と第5節のデータを (44) の階層に写像すると以下の結果が得られる。

---

[10] 移動者 (Figure)、経路 (Path)、参照地 (Ground) から構成される (Talmy 2000: 221)。

[11] この階層は主に Lehmann (1988) が提案する階層に基づいている。Lehmann は複数の独立した階層を立てているが、ここではそれらを統合している。また、本階層は Croft et al. (2010) が提示した階層とも類似している。2つの違いは、Croft et al. (2010) の階層が構文の形態統語的統合度であるのに対し、本研究の階層は様態表現の統合度に関わるものであるという点である。

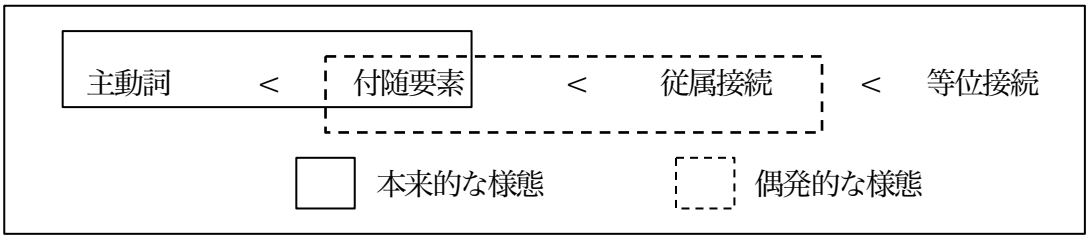


図２ 様態の統合度階層とタガログ語の対応関係

偶発的な様態は形態統語的にもっとも強く統合された位置で実現することができず、付随要素として、または従属接続を含む複雑文において生起するため、階層の中間の 2 つの地点をカバーする。一方、本来的な様態は主動詞または付随要素で表現されることが可能なため、形態統語的に強い統合度を示す左側の 2 つの地点をカバーする。つまり、移動事象に対して原因という強い関わりを持つ様態は形態統語的により統合度が高い位置に生起し、こうした直接的な関係を持たない様態はより統合度の低い位置に生起するという、意味と形式の類像的な関係 (Van Valin 2005) が見られる：

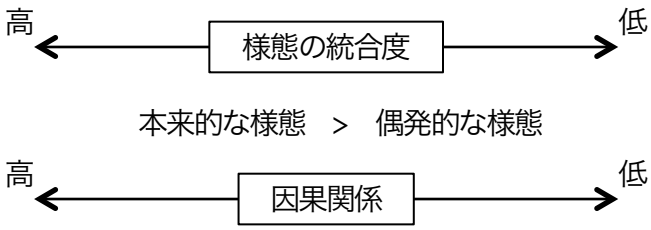


図３ 様態の原因性と統合度の類像性

複雑移動表現のこのような類像的性質は、以下に引用するように Croft et al. (2010) でも指摘されている：

> “more typical or natural process + result combinations in complex events will be encoded in more highly integrated morpho-syntactic constructions …” (Croft et al. 2010:225)

Croft et al. (2010) は様態と経路の組み合わせにおける典型性が、描写に使用される構文の形態統語的統合度に影響すると述べているが、彼らが検証したシチュエーションタイプは種類が少なく、さらに典型性は言語コミュニティごとの文化に左右されうる概念であることが知られている (Enfield 2002)。従って、移動の複数のシチュエーションタイプの描写方法がどのように多様であるかを示した本研究は、彼らの主張を精緻化する上で重要なデータを提供する。

7 結論

本研究は Talmy (1991; 2000) の枠付け類型論において、タガログ語がどのように振る舞うのかを観察した。タガログ語では、動詞枠付け型と付随要素枠付け型構文の両方を移動事象の描写に使用できる。本研究では、(I) タガログ語話者がどちらの類型タイプの構文を好んで使用するのか、また (II)

その選好が異なる種類の移動表現においても一貫しているのか、という 2 つの問いを検証した。

異なる種類の移動表現に関して、本研究では、移動の原因であるか否かという点で 2 種類の様態を区別した。本来的な様態を含む移動事象を描写する場合、タガログ語話者は好んで付随要素枠付け型構文を使用する。しかし、偶発的な様態を含む移動事象の描写に同タイプの構文を用いることはできず、代わりに動詞枠付け型構文や従属接続を含む複雑文が使用される。つまり、タガログ語話者の構文選択は様態の種類に敏感であり、タガログ語の類型も移動事象の（様態の）種類によって変化する。この事実は、言語そのものを分類する Talmy の類型論をそのままこの言語に適応することはできないことを意味する。そのため本研究ではこの分類を構文レベルで応用し、それぞれの構文における様態の生起位置の違いを形態統語的な統合度の違いとして提示した。そしてその階層により、因果関係が強いほど形式的な統合度も強くなるという、意味と形式の類像的関係を指摘できることを示し、また、言語内における構文的多様性に説明を与えた。

本研究は次の 2 つの示唆を持つ。まず、本研究で観察された構文の分布傾向は、英語 (Allen et al. 1997) やフィリピン北部のイロカノ語 (Yamamoto 2015)、またはラオ語 (Enfield 2002) にも見られることが報告されている。従って、枠付け類型論を、構文の分布パタンを捉える枠組みとして展開できる可能性がある。今後は豊富な種類の様態の検証が必要となるとともに、様態という意味範疇の粒度の高い分析が重要である。

2 つ目は、移動表現の類型論を節接続というより大きな領域の中に位置づけられるという可能性である。意味と形式の類像性は、補文や副詞節といった節接続によって表現される意味領域で指摘されてきた (Van Valin and LaPolla 1997; Lehmann 1988)。移動表現の分布が類像性という概念で捉えられるとすれば、そうした広い意味領域・階層の中に移動事象を位置づけることも可能となるかも知れない。

略号

AV-行為者ヴォイス, DIS-遠称, GEN-属格, IPFV-未完了, LK-リンカー, LOC-所格, NOM-主格, OBL-斜格, P-固有名詞, PA-接頭辞 *pa-*, PFV-完了, PL-複数, PV-被動作者ヴォイス, POT-偶発・非意図, SG-単数, 1-一人称, 3-三人称, ＜＞-接中辞, “＝”-接語化, “～”-重複

参考文献

Allen, Shanley, Aslı Ozyürek, Sotaro Kita, Amanda Brown, Reyhan Furman, Tomoko Ishizuka, and Mihoko Fujii (2007). Language-specific and universal influences in children's syntactic packaging of manner and path: a comparison of English, Japanese, and Turkish, *Cognition* 102, 16-48.

Beavers, John, Beth Levin, and Shiao Wei Tham (2010). The typology of motion expressions revisited. *Journal of Linguistics* 46, 331-377.

Croft, William, Jóhanna Bar.dal, Willem Hollmann, Violeta Sotirova, and Chiaki Taoka (2010).

Revisiting Talmy's typological classification of complex events. In Hans C. Boas (ed.), *Contrastive construction grammar*, 201-235, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Enfield, N. J. (2002). Cultural logic and syntactic productivity: associated posture constructions in Lao. In Enfield (ed.), *Ethnosyntax: explorations in grammar and culture*, 231-258. Oxford University Press, Oxford.

Himmelmann, Nikolaus P. (2005). The Austronesian languages of Asia and Madagascar: typological characteristics. In Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelmann (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 110–181. London: Routledge.

Kawachi, Kazuhiro (2014). Patterns of expressing motion events in Kupsapiny. In Osamu Hieda (ed.), *Recent advances in Nilotic linguistics*, 103-136, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo.

Lehmann, Christian (1988). Towards a typology of clause linkage. In John Haiman and Sandra A. Thompson (eds.), *Clause combining in grammar and discourse*, 181-225. Amsterdam: John Benjamins.

Matsumoto, Yo (2003). Typologies of lexicalization patterns and event integration: clarifications and reformulations. In Shuji Chiba et al. (eds.), *Empirical and theoretical investigations into language: a festschrift for Masaru Kajita*, 403-417, Kaitakusha, Tokyo.

長屋 尚典 (2016) タガログ語のリンカー並行事態構文と節連結. 日本言語学会第153回大会予稿集, 354-359.日本言語学会

Schachter, P. & F. T. Otanes (1972). *Tagalog reference grammar*. Berkeley: University of California Press.

Slobin, Dan I. (1997). Mind, code, and text. In Joan Bybee, John Haiman, and Sandra A. Thompson (eds.), *Essays on language function and language type: dedicated to T. Givón*, 437-467, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Slobin, Dan I. (2000). Verbalized events: a dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In Susanne Niemeier and René Dirven (eds.), *Evidence for linguistic relativity*, 107-138, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Talmy, Leonard (1985). Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (Ed.), *Language typology and lexical descriptions: Vol. 3. Grammatical categories and the lexicon* (36–149). Cambridge: Cambridge University Press.

Talmy, Leonard (1991). Path to realization: a typology of event conflation, Proceedings of the seventeenth annual meeting of the Berkeley Linguistics Society, 480-519.

Talmy, Leonard (2000). *Toward a cognitive semantics, Vol. II: Typology and process in concept structuring*, MIT Press: Cambridge, MA.

Talmy, Leonard (2009). Main verb properties and equipollent framing. Jiansheng Guo, Elena Lieven, Nancy Budwig, Susan Ervin-Tripp, Keiko Nakamura, and Seyda Ozcaliskan (eds.), *Crosslinguistic approaches to the psychology of language: Research in the tradition of Dan Isaac Slobin* (389-402). New York: Psychology Press.

Van Valin, Robert D., Jr. (2005). *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge: Cambridge University Press.

Van Valin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla (1997). Syntax: Structure, Meaning, and Function, Cambridge University Press, Cambridge.

Wienold, Götz (1995). Lexical and Conceptual Structures in Expressions for Movement and Space: With Reference to Japanese, Korean, Thai, and Indonesian as Compared to English and German. In Urs Egli, Peter E. Pause, Christoph Schwarze, Arnim von Stechow, and Götz Wienold (eds.), *Lexical Knowledge in the Organisation of Language*, 301-340, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Yamamoto, Kyosuke (2015). The degree of clause integration in motion expressions in Ilocano. Presented at NINJAL International Symposium: Typology and Cognition in Motion Event Description. National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan. 24 January, 2015.

受理日 2017年4月10日

古本 真（2017）『言語記述論集』9:115-171

スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法概略と民話資料二編

古本 真
日本学術振興会／大阪大学*
makomako1986@gmail.com

キーワード：スワヒリ語マクンドゥチ方言、文法概略、民話資料

1　はじめに

本稿では、スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法概要と民話資料を提示する。2 節では、マクンドゥチ方言の基本情報と文法概略について述べる。3 節では、筆者が収集した民話資料を提示する。

2　マクンドゥチ方言概要

2.1　マクンドゥチ方言の基本情報

スワヒリ語は東アフリカ沿岸部に 20 前後の地域変種（方言）が存在することが知られている (Nurse & Hinnebusch 1993: 5–14)。マクンドゥチ方言は、そうした地域変種の一つである。Nurse は、スワヒリ語の諸方言を北部諸方言と南部諸方言に分けているが、この分類では、マクンドゥチ方言は南部諸方言に分類される (Nurse 1982: 168)。マクンドゥチ方言のことを話者たち自身は、カエ方言 (Kikae) と呼ぶ。また、先行研究ではハディム方言 (Kihadimu) と呼ばれることもあるが、本稿では地域名に即して、マクンドゥチ方言 (Kimakunduchi) と呼ぶことにする[1]。なお、標準スワヒリ語や、その標準スワヒリ語の土台となったウングゥジャ方言 (Kiunguja) は区別せずにスワヒリ語と呼ぶことにする。

先行研究に従えば、マクンドゥチ方言の話者はタンザニア連合共和国ザンジバル・ウングゥジャ島の南部地域に分布しているとされる[2] (Whiteley 1959: 43, Nurse & Hinnebusch 1993: 11)。正確な話者数はわからないが、2012 年タンザニア国勢調査[3]によればマクンドゥチ郡[4]の

* 本研究は、JSPS 科研費 13J03150 及び 16J03295 の助成を受けている。この研究のためにデータを提供してくれた Zainabu Khatibu Bonde 氏、Sigombe Haji Choko 氏、草稿の段階から有益な助言を与えてくれた白田理人氏、宮川創氏には、ここに記して謝意を表します。

[1] ウングジャ島北部のトゥンバトゥ島では、マクンドゥチ方言と言語的に異なるスワヒリ語の地域変種、トゥンバトゥ方言が話されている。このトゥンバトゥ島の方言話者たちは、自分たちの方言をカイェ方言 (Kikaye) と呼ぶ。トゥンバトゥ方言との混同をさけるために、本稿では、マクンドゥチ方言をカエ方言と呼ぶことは避ける。

[2] マクンドゥチ郡在住の話者によれば、現在、カエ方言に近似する変種の話者がいるのは、主にブウェジュウ (bwejuu) から、マクンドゥチにかけての、ウングジャ島南東部であると推測される。

[3] http://www.nbs.go.tz/ 参照。

[4] 統計にマクンドゥチ郡そのものの人口は掲載されていない。ここに挙げる数字はマクンドゥチ郡を構成する六つの行政地域（Nganani, Kijini, Mzuri, Kajengwa, Kiongoni, Tasani）の人口の合計である。

人口は 11,742 人である。本稿で提示する文法に関するデータは基本的に、マクンドゥチ郡のカジェングワ、ンガナニという地域の話者から得られたものである。

マクンドゥチ方言とスワヒリ語の間には、語彙、音調、名詞や動詞の屈折形式などに違いがある。

2.2 音韻的特徴

2.2.1 音素目録と表記

マクンドゥチ方言の音素目録は以下のように提示することができる。[ ] 内の表記は IPA によるより近似的な音価である。本稿では、例示の際は [ ] 外の表記を斜体にして用いる。この表記は概ねスワヒリ語の正書法に対応する。

表 1：母音

i		u
e [ɛ]	o [ɔ]	
	a	

表 2：子音

p		t		ch [ʧ]	k	
p^h		t^h		ch^h [$ʧ^h$]	k^h	
mb		nd		nj [ndʒ]	ng [ŋg]	
b [ɓ]		d [ɗ]		j [ʃ],	g [ɠ]	
f [ɸ]	th [θ]	s	sh [ʃ]			h
v [β]	dh [ð]	z			gh [ɣ]	
m [m~m̩]		n (n̩)		ny [ɲ]	ng’ [ŋ]	N
		l r				
w				y [j]		

/m/ には、[m] と [m̩] という条件異音が存在する。母音の直前では [m]、子音の直前では [m̩] となる。本稿では、成節的な場合は、*m̩*と表記する。/N/ は成節的で、その調音点は未指定で後続する子音に同化する。つまり、/N/ の実現形と /m/ の実現形は区別できない場合がある。成節的な /N/ と /m/ の違いは、前者の音価決定には形態音韻論的操作が関わっているのに対して、後者はそうでないという点にある。/n̩/ は*-langan̩za*「修理する」という語にのみ現れる[5]。/th, dh, gh/ は、借用語にのみ観察される。

[5] *-langan̩za* の *n̩* は、/N/ の異音の一つとみなし、/n̩/ は音素としてたてない分析も可能かもしれない。本稿では、音価決定に形態音韻論的操作が関わるものを /N/、そうでないものを /n̩/ としている。

2.2.2　音節構造

V, CV, C_1C_2V, C という音節構造が認められる。C_1C_2V の C_2 として現れるのは /w, y/ である。子音単独で一つの音節をなすことができるのは、成節鼻音の/m [m̩], N/ である。なお、いくつかの接頭辞、後接語は、これらの成節鼻音で実現される（/m/: 1 クラス・3 クラス・18 クラス名詞接頭辞、二人称複数主語接辞、三人称単数目的語接辞、18 クラス主語接辞・目的語接辞、/N/: 一人称単数主語接辞、動作主標識接語）。/m/ は単独で形態素をなさない場合もあるが、/N/ は必ず単独で形態素となる。

2.2.3　プロソディ

マクンドゥチ方言に語の意味の弁別に寄与する声調が存在する可能性がいくつかの先行研究で指摘されているが (Whiteley 1959: 47, Racine-Issa 2002: 27)、これらの研究で挙げられている通りの声調の実現は筆者の調査では確認されていない。二音節や三音節の名詞を観察する限りでは、音節間でピッチが平坦に推移している場合が多く、声調と呼ぶに値する現象は今のところ見つかっていない。それ以外のプロソディ特徴については未確認である。

2.3　語順と形態法

基本語順は SVO であるといえる。ただし、この語順は固定的ではなく、ある程度の交替がゆるされる。語順の決定には、情報構造も関与していると考えられる。節内においては主要部標示型で、主語や目的語と一致する標識が動詞に現れる。名詞句内では、主名詞に修飾要素が後続する。ただし、指示詞は名詞の前後に現れることができる[6]。名詞句においては、従属部標示型で、名詞修飾要素が、主名詞に応じて異なる形式で現れる。

形態的類型は基本的に、統合的・膠着的であり、接頭辞型の形態法をもつ。複合や重複も観察されるが、生産的な語形成法であるかは、現段階では断定できない。ただし、後述する動詞連続を複合とみなした場合、この語形成法は生産的であるといえる。

2.4　名詞類

単独で述語の項となることができるものを、名詞類として分類すると、名詞類には、名詞、形容詞、代名詞、指示詞、所有詞、疑問詞が含まれる。また、属辞でマークされた項も単独で述語の項となる。不定形接辞 *ku-*でマークされた動詞語幹、準体言接頭辞でマークされた動詞語幹も、単独で述語の項となるが、この二つについては本節では扱わない。

[6] 指示詞は、名詞の後に現れる場合、他の修飾語と同様に名詞を限定的に修飾する一方、前に現れる場合は、指示詞と名詞は同格的な意味関係にあり、後続する名詞によって、指示詞の指示対象がなんであるかが具体的に説明されているという違いがあると現段階では考えている。例えば、指示詞が名詞に先行すると、「どれが欲しいの」という疑問文の答えにはならない。これは、名詞に先行する指示詞は、複数の選択肢の中から一つを限定することができないためであると考えられる。

2.4.1　名詞と名詞クラス

マクンドゥチ方言の名詞は、名詞句の主要部になるという特徴をもつ。また名詞そのものの固有の性質として、どの名詞クラスに属しているかが決まっている。言い換えれば、すべての名詞は、有限個のいずれかの名詞クラスに必ず属している。

名詞と一致する要素（形容詞、指示詞、所有詞、属辞、動詞人称接辞）の形式から、マクンドゥチ方言には、13 の名詞クラスが存在すると考えられる。それぞれのクラスに対して、1~10, 15, 16, 18 と番号が付すことにする。この番号はバントゥ諸語研究で共通して用いられるものを援用している。なお、Racine-Issa (2002: 30–49) は 11 クラスと 17 クラスも独立したカテゴリーとして認めているが、名詞と一致する要素の形式を分類基準とした場合、この二つのクラスに属するとされる名詞と、3 クラス、15 クラスに属する名詞とを区別することはできない[7]。

表 3 に、それぞれのクラスに属する代表的な名詞と指示詞、所有詞、属辞、形容詞を挙げる。多くの名詞は、［接頭辞－語幹］と分析することができ[8]、接頭辞の形式はそれぞれのクラスで、概ね一貫している。形容詞もほとんどの場合、名詞と同じ形式の接頭辞を有する。以下の表では、接頭辞と語幹の間に形態素境界を示すハイフンを付すが、民話テキストでは、複合語と、後述する指大化名詞、指小化名詞を除き、こうしたハイフンは挿入しない。

表 3：名詞とその一致要素の形式

	名詞	指示詞近称	所有詞「私の」	属辞	形容詞「小さい」
G1	*ṃ-tʰu*「人」	*yuno*	*yangu~wangu*	*ya~wa*	*ṃ-dogo*
G2	*wa-tʰu*「人」（複数）	*wano*	*wangu*	*wa*	*wa-dogo*
G3	*ṃ-kono*「腕」	*uno*	*wangu*	*wa*	*ṃ-dogo*
G4	*mi-kono*「腕」（複数）	*ino*	*yangu*	*ya*	*mi-dogo*
G5	*tunda*「果物」	*lino*	*lyangu*	*lya*	*dogo*
G6	*ma-tunda*「果物」（複数）	*yano*	*yangu*	*ya*	*ma-dogo*
G7	*ki-tʰu*「物」	*kino*	*changu*	*cha*	*ki-dogo*
G8	*vi-tʰu*「物」（複数）	*vino*	*vyangu*	*vya*	*vi-dogo*

[7] Racine-Issa (2002) は Meinhof (1932: 128) に代表されるスワヒリ語の名詞分類に従っているようである。一般にバントゥ諸語研究やスワヒリ語研究では、名詞と一致する要素の形式よりも、名詞接頭辞の形式が名詞分類に際して優先される (Katamba 2003: 103, 112, Contini-Morava 1994)。名詞接頭辞が、名詞クラスを示す標識であるということを前提として、名詞接頭辞を名詞の分類基準とする場合、例えば、名詞接頭辞をもたない名詞は一つの名詞クラスに分類されてしまう。このように名詞を分類すると、修飾語や述語との一致という現象を説明することができない。こうした問題を考慮すると、名詞接頭辞を名詞クラス標識とみなす分析は不適当にみえる。本稿ではこの問題を踏まえて、名詞接頭辞ではなく、一般に文法的性の分類基準とされる名詞と一致する要素の形式を、名詞クラスの分類基準とする。これに伴い、名詞クラスを表すグロスとして G ‘gender’ を用いることにする。

[8] 本稿では、形態的特徴の説明のために、名詞を接頭辞と語幹に分けて提示するが、接頭辞と語幹が別々にレキシコンに登録されているかどうかについては、別途議論する必要があるだろう。

	名詞	指示詞近称	所有詞「私の」	属辞	形容詞「小さい」
G9	*n-guo*「服」	*ino*	*yangu*	*ya*	*n-dogo*
G10	*n-guo*「服」（複数）	*zino*	*zangu*	*za*	*n-dogo*
G15	*mahaa*「場所」	*kuno*	*kwangu*	*kwa*	*ku-dogo*
G16	*mahaa*「場所」	*vano*	*vangu*	*va*	*va-dogo*
G18	*mahaa*「場所」	*ṃno*	*mwangu*	*mwa*	*mu-dogo~ṃ-dogo*

以下で、それぞれのクラスに属する名詞の特徴を簡単に述べる。10 クラスまでの名詞は、基本的に、奇数番号のクラスに単数を表す名詞が、直後の偶数クラスに同じ意味の複数を表す名詞が属している。以下では、奇数クラスと続く偶数クラスは分けずに説明する。15, 16, 18 はそれぞれ、動詞不定形（15 クラス）、場所名詞（15, 16, 18 クラス）のクラスとなる。

2.4.1.1　1/2 クラス

このクラスに分類される名詞は、典型的には *ṃ-(~mu-~mw-)/wa-(~w-)*という接頭辞をもち、有生物を指示対象とする。しかし、借用語の多くは、この接頭辞をもたない（例 : *askari*「兵、警察官」）。また、なかには語頭が 9/10 クラスの名詞と同様に前鼻音化阻害音や有気音、鼻音 *ny* となるものもある（例 : *n-dege*「鳥」）。こうした名詞は単複で音形に違いはない。なお、少数だが有生物を指示対象とする名詞でも、他のクラスに属するものがある（例 : *bata*「アヒル」、*ki-tu*「ヤマネコ」）。複数形の所有詞だけが、10 クラスの形式となる名詞も存在するが、こうした名詞は、概ね親族関係を表す名詞である。

2.4.1.2　3/4 クラス（3/10 クラス）

このクラスに分類される名詞は、単数形の接頭辞の形式で大きく二つに分けることができる。一方は *ṃ-(mw-)/mi-*という接頭辞をもつタイプである。もう一方は、*u-/mi-*という接頭辞をもつタイプである。後者のタイプの名詞の中には、複数形が二つ存在するものがある。一方の複数形は 4 クラスに属しており、*mi-*という接頭辞をもつ。もう一方の複数形は 10 クラスに属しており、語頭の形式もそれに即して、前鼻音化閉鎖音、有気音、鼻音 *ny*、摩擦音のいずれかになる（例 : *u-limi*（単数）*/mi-limi*（4 クラス複数）*/n-dimi*（10 クラス複数）「舌」）。また、単数形の接頭辞が *u-(w-)*となる名詞の中には、10 クラスの複数形しかもたないものもある（例 : *u-ngo/ny-ungo*「手箕」）。

植物を指示対象とする名詞はこのクラスに属する（例 : *ṃ-gomba/mi-gomba*「バナナの木」、*u-jiti/mi-jiti*「木」）。ただし、このクラスには植物以外を指す名詞も多く存在する。

2.4.1.3　5/6 クラス

5 クラスの名詞は、多くの場合、接頭辞をもたない。6 クラス名詞の接頭辞は *ma-*である。ただし、二音節名詞の中には、少数ではあるが、*ji-no/me-no*「歯」、*di-cho/ma-cho*「目」のよ

うに、接頭辞をもつものもある。なお、*me-no, di-cho* の不規則な形式の接頭辞は、通時的変化の結果生じたものであると考えられる。6 クラスの *ma-*という接頭辞は、他のクラスに属する名詞の語幹に付され、派生を引き起こすことがある。こうした派生では、複数性が明示されていると考えられる（例：*n-guo* >> *ma-guo*「服」）。

2.4.1.3　7/8 クラス

このクラスに分類される名詞は、*ki-/vi-*という接頭辞をもつ。このクラスに属する名詞の意味的な特徴を一般化することは難しい。例えば、言語名は *ki-*という接頭辞を伴い、7 クラス属する。（例：*ki-kae*「カエ方言」、*ki-japani*「日本語」）。

2.4.1.4　9/10 クラス

このクラスに属する固有語は、語頭が前鼻音化閉鎖音、有気音、鼻音 *ny*、摩擦音のいずれかになる。このクラスの名詞接頭辞として、調音点未指定の鼻音がたてられることもある (Racine-Issa 2002: 41–42)。本稿では、そのような接頭辞はみとめないが[9]、説明の際は、便宜上、接頭辞とみなしうる部分とそれ以外の部分にハイフンを付す。このクラスには借用語も多く含まれている。借用語は接頭辞を持たない。9 クラスと 10 クラスの名詞が単複の対を成す場合、単数を表す 9 クラスの名詞と複数を表す 10 クラスの名詞の音形は同じである。

2.4.1.5　15, 16, 18 クラス

これらのクラスには、語彙化した名詞がほとんど存在しない。15 クラスには動詞不定形、15, 16, 18 クラスには場所名詞が属しているが、動詞不定形は動詞語幹に接頭辞 *ku-*を付加することによって、場所名詞は、他のクラスの名詞に*-ni* という接尾辞が付加することによって、形成される。唯一これらのクラスに固有の名詞として挙げられるのは *mahaa*「場所」くらいである。これらのクラスに属する場所名詞の指示対象の詳細については別稿に譲るが、概ね、以下のような違いがあると考えられる。

- 15 クラス：聞き手が知らないと話し手が想定する不定の場所。
- 16 クラス：聞き手も知っていると話し手が想定する定の場所。
- 18 クラス：ある場所、モノの内部。

2.4.1.6　指大化と指小化

民話中では、指大化、あるいは指小化された名詞が散見される。以下でこの二つの派生について簡単に説明する。

指大化された名詞は 5/6 クラスに属する。指大化には、派生前の接頭辞の脱落（例：*n-dege*「鳥」 >> *dege*「巨鳥」）、派生前の接頭辞と接頭辞 *ji-*との交替（例：*n-dege*「鳥」>> *ji-dege*

[9] 9/10 クラス名詞については、共時的に分析可能な名詞接頭辞があるわけではなく、かつての名詞接頭辞の名残として語頭に共通する特徴があると考える方がよいだろう。

「巨鳥」)、派生前に接頭辞を持たなかった名詞に *ji-*という接頭辞を付加（例：*shetani* 「お化け>> *ji-shetani*「化け物」)、というタイプがある。中には、*ji-*という接頭辞を二つ伴う名詞もあるが、これらの語幹は二音節で初頭音が母音であるか、一音節である（例：*ny-oka* >> *j-oka* >> *ji-j-oka*「ヘビ」、*m̩-tʰu* >> *ji-tʰu* >> *ji-ji-tʰu*「人」)。5 クラス名詞を修飾する形容詞は、語幹の初頭音が母音であるものを除き、ふつう接頭辞をもたないが、もっとも有標な指大化形式の名詞を修飾する際は、*ji-*という接頭辞をもつ（例：*dege kubwa, ji-dege ji-kubwa*「大きな巨鳥」)。他の名詞接頭辞は単複で交替するが、指大化を表す *ji-*という接頭辞は *ma-*とは交替せず、複数形を形成する際 *ma-*が *ji-*に前接する（例：*ma-ji-dege*「巨鳥（複数)」)。

指小化された名詞は 7/8 クラスに属しており、*ki-/vi-*という接頭辞をもつ（例：*n-dege*「鳥」>> *ki-dege/vi-dege*「小鳥」)。指小化された名詞は、接頭辞 *ki-*の直後に *ji-*という接頭辞を伴うこともある（例：*n-dege*「鳥」>>*ki-ji-dege/vi-ji-dege*「小鳥」)。

なお、民話中では、基本的に、名詞接頭辞と語幹を形態素分析した形で提示しないが、指大化、および指小化された名詞については、接頭辞とそれ以外の部分を分けて提示する。

2.4.2　形容詞

典型的な形容詞は、①一致する名詞に応じて異なる接頭辞をもつ（例：表 3 の*-dogo*「小さい」)、②名詞を直接修飾することができる、③コピュラ動詞*-wa* なしでも叙述することができる、という特徴をもつ。典型的な形容詞の接頭辞は名詞接頭辞と同形である（3 クラスは *m̩-*か *mw-*)。この形態的特徴だけみると、名詞と形容詞の区別は難しいようにも思われるが、名詞が文脈的な支えなしで単独で述語の項となるのに対して、形容詞は、修飾していると想定可能な主名詞が文脈から明らかでない限り、単独では現れないという違いがある。

数量詞についても、直接名詞を修飾できる、典型的な形容詞と同様の形態特徴をもつ（「6」、「7」と「9」以降の数詞を除く）ということを踏まえると、形容詞に分類することができるだろう。ただし、数量詞は、遊離可能という点で、典型的な形容詞とは異なる（例：*wanafuzi wengi wa-ja* (students many.G2 3PL.SM-come.PFV) 非遊離／*wanafuzi wa-ja wengi* (students 3PL.SM-come.PFV many.G2) 遊離「たくさんの学生が来た」)。

また、①の特徴をもたず、修飾する名詞によって形式が変わらないが、名詞を直接修飾して、単独で叙述可能なものがある。こうしたものも形容詞に分類する（例：*ghali~hali*[10]「高い」)。こうした名詞の多くは借用語だが、借用語であれば接頭辞を伴わないという一般化は成立しない（例：*-laini*「やわらかい」、*-haba*「少ない」)。

上述の形容詞は、例えば、1/2 クラスの名詞だけでなく、3/4 クラス、5/6 クラスというように、異なるクラスの名詞を修飾可能で、形式的な交替があるかどうかは別にして複数のクラスにまたがるパラダイムを有していると言えるが、中には、1/2 クラスの名詞だけを修飾可能なものも存在する（例：*m̩-choyo/wa-choyo*「ケチな」)。Racine-Issa (2002: 52) は、こうしたものは名詞とみなされるかもしれないと述べているが、文脈の支えなしで項とはならない

[10] 話者によってどちらの形式を用いるかは異なる。

ことを踏まえると、形容詞に分類するのが妥当だろう。1/2 クラスの名詞だけを修飾可能であるという特徴は、こうした形容詞の意味的な特徴によるものと考えられる。

上記以外に、形容詞のような意味をもつが、直接名詞を修飾できず、叙述にはコピュラ動詞-*wa* が必須のものが存在する。これらは、接頭辞として分析可能な部分の有無にかかわらず、対応する名詞と一致しない（例 : *hai*「生きている（接頭辞無）」、*u-chi*「裸（接頭辞有）」）。また、これらは動詞を修飾することはできる。こうしたものを形容詞と分類すべきか、あるいは副詞という品詞を設定してそこに分類すべきかについては、本稿では判断を保留する。

2.4.3　代名詞

代名詞には、自立的なものと、拘束的なものが存在する。自立的なものは、指示対象の人称によって、異なる形式となる。本稿ではこうした代名詞を人称代名詞と呼ぶ。人称代名詞は、二人称単数と、三人称単数に限り、短縮形がある。なお、三人称複数の形式は、2 クラスの中称の指示詞と同形である。これらは同一の語彙と認められるかもしれない。

表 4：人称代名詞

	単数	複数
一人称	*mie*	*suwe*
二人称	*we~weye*	*nyuwe*
三人称	*ye~yeye~yeyeye*[11]	*wao*

拘束的な代名詞を、本稿では、拘束代名詞と呼ぶ。拘束代名詞は、指示対象の人称か名詞クラスに応じて異なる形式となる。一、二人称複数に対応する形式はない。この拘束代名詞は準体言接辞と基本的に同形である。現れる環境としては、共格標識 *na*=「～とともに、～も」の直後、所有を表す動詞-*na* の直後（1~10 クラスの拘束代名詞に限る）、コピュラ動詞-*wa* の直後（15, 16, 18 クラスの拘束代名詞に限る）が挙げられる。所有を表す動詞-*na* やコピュラ動詞-*wa* が、拘束代名詞でマークされた場合、拘束代名詞の指示対象に応じた項は現れることもあれば、現れないこともある。この特徴から、拘束代名詞は、後述する主語接辞や目的語接辞と同じように、項との一致を示す機能ももっていると考えられる。

なお、コピュラ動詞が、拘束代名詞を伴う場合、主語の指示対象がある場所に存在することを表す。このことを踏まえ、本稿では、コピュラ動詞の直後に現れる 15, 16, 18 クラスの拘束代名詞に存在を示すグロス EXIST を付す。また、アスペクトやムードを表す接頭辞がなく、単に不在を表す場合は、この拘束代名詞と、後述する否定接頭辞 1 と主語接辞とだけで述語をなす（例 : *wa-wa-ko* (3SG.PL-COP.PFV-EXIST)「彼らがそこにいる（存在）」／*ha-wa-ko* (NEG-3PL.SM-EXIST)「彼らがそこにいない（不在）」）。

[11] *yeyeye* という形式はエリシテーション調査では多くの場合、容認されなかったが、談話資料の中では確認できる。また、Racine-Issa (2002: 63) も *yeyeye* という形式を提示している。

表 6：拘束代名詞

1SG	2SG	3SG/G1	3PL/G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G15	G16	G18
mi	*we*	*e*	*o*	*o*	*yo*	*lyo*	*yo*	*cho*	*vyo*	*yo*	*zo*	*ko*	*vo*	*mo*

2.4.4 指示詞

指示詞は近称、中称、遠称の三系列から成る。近称と遠称の指示詞基本形の初頭音節は、1 クラスを除いて、主語接辞と同形である。近称と中称には、基本形に加えて、重複形と縮約形が存在する。近称の重複形は、基本形の初頭音節が重複した形式とみなすことができる。中称については、多くの場合、基本形の最後の音節が重複した形式とみなすことができるが、その型に当てはまらないものもある（5, 7, 8, 15, 16 クラス）。また重複形の最終音節を削除したとみられる形式も観察される（例：*vivi, vivyo, vavo, kuku*）。遠称には近称や中称のような特異な形式の重複形は存在しないが、完全重複のような形式で用いられることがある。縮約形の音形は、近称が基本形の第一音節、中称が基本形の第二音節に対応している。

表 7：指示詞

	近称	近称重複	近称縮約	中称	中称重複	中称縮約	遠称
G1	*yuno*	*yuyuyu~yeyeyu*	*=yu*	*uyo*	*yuyoyo~yeyeyo*	*=yo*	*yulya*
G2	*wano*	*wawawa*	*=wa*	*wao*	*waoo*	*=o*	*walya*
G3	*uno*	*uuu*	*=u*	*uo*	*uoo*	*=o*	*ulya*
G4	*ino*	*iii*	*=i*	*iyo*	*iyoyo*	*=yo*	*ilya*
G5	*lino*	*lilili*	*=li*	*ilyo*	*lilyolyo*	*=lyo*	*lilya*
G6	*yano*	*yayaya*	*=ya*	*yayo*	*yayoyo*	*=yo*	*yalya*
G7	*kino*	*kikiki*	*=ki*	*icho*	*kichocho*	*=cho*	*kilya*
G8	*vino*	*vivivi*	*=vi*	*ivyo*	*vivyovyo*	*=vyo*	*vilya*
G9	*ino*	*iii*	*=i*	*iyo*	*iyoyo*	*=yo*	*ilya*
G10	*zino*	*zizizi*	*=zi*	*izo*	*izozo*	*=zo*	*zilya*
G15	*kuno*	*kukuku*	*=ku*	*uko*	*kukoko*	*=ko*	*kulya*
G16	*vano*	*vavava*	*=va*	*avo*	*vavovo*	*=vo*	*valya*
G18	*ṃno*	*mumumu*	*=mu*	*umo*	*mumomo*	*=mo*	*ṃlya*

基本形と重複形は、名詞を修飾することも、単独で項として現れることもできるが、縮約形は名詞を修飾することができない。縮約形は、述語の後に現れて、述語の前に現れる（あるいはあると想定できる）構成素を照応する。現れる位置は、述語の後であれば、述語の直後である必要はなく、述語に後続する項や副詞要素の直後に現れることもある（例：*mwalimu yuno ka-ja jana=yu* (teacher DEM.PROX.G1 3SG.SM-come.PFV yesterday=DEM.PROX.G1)「この先生は、昨日来た」）。なお述語の前に構成素が二つある場合、どちらの構成素も縮約形で照応されうるが、二つの縮約形が同時に現れることはできない。

10 クラスまでの近称と中称の指示詞の直後に、それぞれ*-ku/-va, -ko/-vo* が付加され、もっぱら現場指示のために用いられる指示詞も存在する（例：*yuno-ku, yuno-va, uyo-ko, uyo-vo*）。付加される*-ku/-va, -ko/-vo* は 15, 16 クラスの近称と中称に由来すると考えられる。15, 16 クラスの指示詞は、場所を指す指示詞である。つまり、このタイプの指示詞は、有生物やモノを指す指示詞と場所を示す指示詞が複合して形成されていると言える。

1~10 クラスについては、基本的に、近称と中称だけが現場指示用法をもつ。中称で指示できないより遠くのものは、上記の複合的な指示詞のうち、有生物やモノを指す 1~10 クラスの指示詞と 15 クラスの中称の指示詞を複合させたもので指示する。また、近称の指示詞が文脈指示のために用いられていると断言できる例は現段階では確認できない。中称と遠称には文脈指示用法がある。

重複形は、先行文脈にある対象もしくは発話場面に存在する対象を取り立てるために用いられているようである。

2.4.5　所有詞

所有詞は、所有者の人称と所有物の名詞クラスに応じて異なる形式となる。1 クラスの所有詞は 2 クラスの所有詞と同じ形式で現れることがあるが、これはスワヒリ語からの影響であると考えられる。スワヒリ語では 1 クラスと 2 クラスの所有詞は同形である。同様のスワヒリ語からの影響は属辞でも観察される。15, 16, 18 クラスの所有詞が単独で用いられた場合、「所有者が存在する場所」という意味を表される。15, 16, 18 クラスの属辞で項がマークされる場合も、同様に「項の指示対象が存在する場所」という意味になる。

表 8：所有詞

	1SG	2SG	3SG	1PL	2PL	3PL
G1	*yangu~wangu*	*yako*	*yake*	*yetu*	*yenu*	*yao*
G2	*wangu*	*wako*	*wake*	*wetu*	*wenu*	*wao*
G3	*wangu*	*wako*	*wake*	*wetu*	*wenu*	*wao*
G4	*yangu*	*yako*	*yake*	*yetu*	*yenu*	*yao*
G5	*lyangu*	*lyako*	*lyake*	*lyetu*	*lyenu*	*lyao*
G6	*yangu*	*yako*	*yake*	*yetu*	*yenu*	*yao*
G7	*changu*	*chako*	*chake*	*chetu*	*chenu*	*chao*
G8	*vyangu*	*vyako*	*vyake*	*vyetu*	*vyenu*	*vyao*
G9	*yangu*	*yako*	*yake*	*yetu*	*yenu*	*yao*
G10	*zangu*	*zako*	*zake*	*zetu*	*zenu*	*zao*
G15	*kwangu*	*kwako*	*kwake*	*kwetu*	*kwenu*	*kwao*
G16	*vangu*	*vako*	*vake*	*vetu*	*venu*	*vao*
G18	*mwangu*	*mwako*	*mwake*	*mwetu*	*mwenu*	*mwao*

また所有者が二人称単数、三人称単数で、所有物が親族関係を表す名詞の場合、所有詞は弱化した形式*=wo/=yo/=lyo*（所有者：二人称単数、所有物：単数）、*=we/=ye/=lye*（所有者：三人称単数、所有物：単数）、*=zo*（所有者：二人称単数、所有物：複数）、*=ze*（所有者：三人称単数：所有物単数）となる。所有物が単数の場合に、いくつかのバリエーションがあるが、どの形式が現れるかは語彙的に決まっている。この違いというのは、それぞれの親族名詞が、歴史的に見た場合、もともと別の名詞クラスに属していたことを示唆すると考えられる。なお、*kaka*「兄」、*dada*「姉」、*baba*「父」、*mama*「母」の所有者はこの弱化形ではなく、通常の所有詞で表される。また親族名詞の語末母音が *a* となる場合、三人称複数の所有詞以外には、通常の形式に加えて、初頭の子音 *y* が脱落した*=angu/=ako/=ake/=etu/=enu* という形式が存在する。これは *kaka*「兄」、*dada*「姉」、*baba*「父」、*mama*「母」にも当てはまる。*mwana/wana*「子供」と *mwezi/wezi*「友達」は、所有者が一人称単数、一人称複数、二人称複数、三人称複数（*mwezi/wezi*「友達」のみ）の場合、形態的に所有詞とより融合が進んだ形式が観察される（例：*mwanangu*「私の子供」、*mwenetu*「私たちの子供」、*mwenenu*「あなたたちの子供」）。

民話中では、所有詞には、my, your, his/her, our, their というグロスを付す。POSS というグロスは、後述する*-na* で表される所有表現に対して用いる。

2.4.6　属辞でマークされる項

属辞でマークされる項は、先行する名詞を修飾する。属辞の形式は修飾する名詞の名詞クラスによって異なる。本稿では、この属辞には英語の of をグロスとして付す。属辞でマークされた項によって主名詞の所有者（例：*ṃke ya=mwanangu* (wife of.G1=my.child)「私の子供の妻」）、主名詞の特徴（例：*ṃkono wa=soto* (hand of.G3=left)「左手」）、目的（*ku-na-ki-chaka cha=nini* (2SG.SM-IPFV-G7.OM-want of.G7=what)「あなたは何のためにそれが欲しいの？」などが表される。属辞でマークされる項は、修飾する主名詞が明示されずに用いられることもある（例：*ya=kwaza ka-fu* (of.G1=first 3SG.SM-die.PFV)「最初の（子）は死んだ」）。15 クラスの *kwa=*は、主名詞を修飾するためではなく、動詞を修飾するために用いられることもある。こうした用法では、道具（例：*tw-ende kwa=honda* (1PL.SM-go.subj of.G15=motor.bike)「バイクで行こう」や、原因が表される（例：*juma ka-fu kwa=malaria* (PN 3SG.SM-die.PFV of.G15=malaria)「ジュマはマラリアで死んだ」）。なお、準体言は属辞に後続することはできない。

2.4.7　疑問詞

名詞類に分類される疑問詞は、名詞を修飾することがないタイプと、修飾することができるタイプに分けることができる。前者のタイプの疑問詞には、*nini*「何」、*nani*「誰」、*wapi*「どこ」、*lini*「いつ」がある。*viko*「どこ」という疑問詞もあるが、おそらくこれは古語であり、ほとんど使われることがない[12]。後者のタイプの疑問詞には、*gani*「どんな」、*-ngavi*「いくつ

[12] BAKIZA (2012: 132) には *viko*「どこ」という語彙が掲載されている。現存する話者でも、より伝統的な形で話そうとした場合に、この語彙を使うことがある。

の」、*-vi*「どの」が挙げられる。*-ngavi* と*-vi* は一致する名詞の名詞クラスに応じて、異なる接頭辞をとる。*-ngavi* の接頭辞は形容詞と同様に名詞接頭辞と同形である。*-vi* の接頭辞は 1 クラスを除いて、動詞語幹をマークする主語接辞と同形である。1 クラスは *yu-vi* という形式になる。疑問詞には、これら以外に、*=je*「何、どのように」、*jaje*「どのように」がある。*=je* は、ホストとなる語の品詞を選ばない接語として現れる場合が多いが、単独で用いられることもある。*jaje* は*=je* と *ja=*「ように」という二つの語が複合して形成されている可能性が指摘できる。なお、*nini* は節中の名詞と同じ位置に現れることが一般的だが、動詞活用形中の動詞語幹の位置や、名詞中の語幹の位置に現れることもある（例：*ka-na-nini* (3SG.SM-IPFV-what)「彼がなんだって？」）、*ṃ-nini*「なんていう木？」、*ki-nini*「何語？」）。

2.5　動詞の活用

マクンドゥチ方言の動詞は、基本的に、2.5.1 で示す活用形をもち、2.5.2 で示す AM 接辞、2.5.4 で示す否定接辞、2.5.6 で示す人称接辞でマークされうる。ただし、いくつか例外的な動詞が存在する。*-ebu*「いらない」は否定接辞、主語接辞、目的語接辞をとる形式しかない。所有の*-na* は目的語接辞や、AM 接辞*-na-*「未完結」、*-mena-*「起動」、*-a-*「完結」でマークされず、2.5.8 で述べる通り、準体言も特殊な形式で実現される場合がある。*-ijua*[13]「知る」、*-kaza*「好ませる」、*-chukia*「嫌わせる」は、AM 接辞*-na-*「未完結」でマークされない。

2.5.1　活用形

動詞の活用形は以下のように提示することができる。なお、本稿では、概ね単独で文を成すことができるかどうかを基準に、定形と非定形を分けている。

• 定形

a.（否定接辞 1）－主語接辞－AM 接辞－（目的語接辞）－語幹　基本形
b.（否定接辞 1）－主語接辞－（目的語接辞）－語幹　完結形
c. *hu*－（目的語接辞）－語幹　習慣形

• 非定形

a. 主語接辞－*ka*－（目的語接辞）－語幹　継起条件形
b. 主語接辞－（否定接辞 2）－*nge*－（目的語接辞）－語幹　反実仮想形
c. (*ka*)－（目的語接辞）－語幹　命令形
d. 主語接辞－（否定接辞 2）－(*ka*)－（目的語接辞）－語幹　接続形
e. *ku*－（否定接辞 2）－（目的語接辞）－語幹　不定形
f. *ṃ*－（否定接辞 2）－（AM 接辞）－（目的語接辞）－語幹　主語準体言形
g. 主語接辞－（否定接辞 2）－（AM 接辞）－準体言接辞－（目的語接辞）－語幹 準体言形

[13] 語幹に複数の異形態がある動詞があるが、そうした動詞について、本稿では、引用形式として基本語幹を提示する。語幹の形式については、2.5.3 節を参照されたい。

なお、接続形と命令形は、ともに命令表現で用いられることがある点や、後述する接続語幹が現れうる点が共通しているが、命令表現として用いられる際の複数の聞き手の標示方法（命令形：接語=*ni*、接続形：二人称複数主語接辞 *m̩-*）やモーダル表現との共起の可否（命令形不可、接続形可）に違いがある。また、2.5.3 で語幹について説明するが、接続語幹は、接続形だけでなく命令形にも接続語幹が現れる場合があることには留意されたい。また、準体言形は、Racine-Issa (2002: 153) が、formes relatives（関係節形）と呼んでいるものに対応する。準体言という文法概念については柴谷 (2014) を、マクンドゥチ方言の準体言については古本 (2016) を参照されたい。

2.5.2 AM 接辞

AM 接辞は、アスペクト・ムードを表す接頭辞である。AM 接辞として以下のものが挙げられる。なお、それぞれの接辞に付したラベルはあくまで便宜上のものである。

• AM（アスペクト・ムード）接辞

a.*-cha-*「未実現 (irrealis)」
b.*-na-*「未完結 (imperfective)」
c.*-me-/-ne-*「完了 (perfect)」
d.*-mena-/-nena-*「起動 (inchoative)」
e.*-li-*「完結否定 (perfective-negative)」
f. *-ja-*「完了否定 (perfect-negative)」
g.*-a-*「完結 (perfective)」（主語準体言のみ）
h.*-ø-*「完結 (perfective)」（準体言のみ）[14]
i. *hu-*「習慣」（習慣形のみ）
j. *-ka-*「継起・条件 (consecutive/conditional)」（継起条件形、命令形、接続形のみ）
k.*-nge-*「反実仮想 (counterfactual)」（反実仮想形のみ）

基本形には、*-cha-, -na-, -me-, -mena-, -li-, -ja-*が現れる。主語準体言形には、*-cha-, -na-, -ne-, -nena-, -a-*が現れる。*-ne-*と*-nena-*は、直前に現れる *m̩-*という主語準体言接辞に応じて、*-me-*と*-mena-*が異化した結果生じた形式であると考えられる。準体言形には*-cha-, -na-, -me-, -ø-*が現れる。*-ka-*「継起・条件」は、継起条件形に現れる場合は継起か条件を、接続形や命令形に現れる場合は「行く」と訳すことができるような、話し手が現在いる位置からの離脱を示す機能が表される[15]。

---

[14] 他の AM 接辞との交替から、便宜的に *ø* という AM 接頭辞を提示する。

[15] 本稿では、それぞれの接辞、語幹が特定の機能を有しているという立場はとらない。特定の機能を有する接辞や語幹を組み合わせることによってではなく、特定の形態統語素性が指定され、その形態統語素性を実現する規則によって、動詞活用形が実現されると考えている。AM 接辞*-ka-*が継起条件形に現れるか、接続形や命令形に現れるかで、表される事象は異なり、接辞が特定の機能を有していると考えた場合、二つの*-ka-*を仮定する必要があるように思われる。しかし、本稿のような形態論の立場をとる場合、そのような仮定は必要にならない。

なお、*-enda*「行く」は AM 接辞*-na-*でマークされず、主語接辞と動詞語幹だけで、未完結を表すことができる。この形式には、必ず別の要素が後続する。また、主語が一人称単数の場合、主語接辞はなく、語幹は *nda* という形式になる。

2.5.3 語幹

マクンドゥチ方言の多くの動詞は、基本語幹、完結語幹、接続語幹と呼ばれる三つの形式的に異なる語幹をもつ。語幹末の母音部分を末母音と呼ぶことにすると、基本語幹と接続語幹の末母音は、それぞれ *a, e* となる。完結語幹の形式にはいくつかのヴァリエーションがある。最も典型的な形式の完結語幹では、語幹の次末音節の母音と同じ母音が末母音として現れる。語幹の次末音節が成節鼻音 *m̩*となる動詞の完結語幹の末母音は *u* となる。一音節語幹の完結語幹の形式は、基本語幹の形式に応じて分類することができる。基本語幹が *Ca* という形式の場合、完結語幹も *Ca* という形式になる。このタイプの動詞として、*-ja*「来る」、*-kʰa*「与える」、*-wa*「コピュラ」が挙げられる。基本語幹が *Cya* という形式の場合、完結語幹は *Ci* となる。このタイプの動詞として、*-lya*「食べる」、*-nya*「雨が降る、糞をする」、*-nywa*「飲む」が挙げられる。なお、*-nywa*「飲む」は、半母音 *w* を含んでいるという点で他の動詞と異なる。基本語幹が *Cwa* の場合、完結語幹は *Cu* となる。このタイプの動詞として、*-fwa*「死ぬ」、*-gwa*「落ちる」、*-pwa*「潮が引く」、*-ivwa*「熟す」が挙げられる。なお、*-ivwa*「熟す」は、非一音節であるという点で他の動詞とは異なる。以下に、一般化した語幹の形式と、それに当てはまる動詞の三つの語幹の形式を提示する。表 9 中では、末母音とそれ以外の部分の間にハイフンを付すが、本稿の他の部分ではこうした境界は示さない。

表 9：語幹の形式

	完結語幹	基本語幹	接続語幹	例
a.	***…CV₁(C)-*** *V₁*	***…CV₁(C)-a***	***…CV₁(C)-e***	*-som-o/-soma/-some*「読む」
b.	***…VṃC-u***	***…VṃC-a***	***…VṃC-e***	*-cheṃk-u /-cheṃk-a/-cheṃk-e* 「沸く」
c.	***C-a***	***C-a***	***C-e***	*-j-a/-j-a/-j-e*「来る」
d.	***C-i***	***Cy-a***	***Cy-e***	*-l-i/-ly-a/-ly-e*「食べる」
e.	***C-u***	***Cw-a***	***Cw-e***	*-f-u/-fw-a/-fw-e*「死ぬ」

-cha「夜が明ける」、*-chwa*「日が沈む」、*-ijua*「知る」、*-ta*「卵を産む」、*-langaṇza*「修理する」の完結語幹は、上のどのタイプにも当てはまらない不規則な形式となる。以下にこれらの動詞語幹の形式を提示する。*-ijua*「知る」の肯定形での完結語幹の形式は、基本語幹と同様である。否定形では、*-iji* という形式が現れるが、この形式から推測される、**-ija* という形式の基本語幹は存在しない。*-langaṇza*「修理する」には*-langaṃza* という異形態が存在する。どちらの異形態を用いるかは、話者によって異なるが、基本語幹*-langaṃza* に対応する完結語幹は *-langaṃzu* となる。

表 10：不規則な形式の完結語幹

	意味	完結語幹	基本語幹	接続語幹
a.	「夜が明ける」	*-ch-e*	*-ch-a*	*-ch-e*
b.	「日が沈む」	*-chw-e*	*-chw-a*	*-chw-e*
c.	「知る」	*-iju-a/-ij-i*	*-iju-a*	*-iju-e*
d.	「卵を産む」	*-t-i*	*-t-a*	*-t-e*
e.	「修理する」	*-langaṇz-i*	*-langaṇz-a*	*-langaṇz-e*

基本語幹、完結語幹、接続語幹という三つの語幹の分布は以下のように記述できる。

• 語幹の分布

a. 基本語幹： 完結形、接続形以外の活用形と一部の命令形（接頭辞なし、もしくは一人称単数の目的語接辞のみでマークされる場合）

b. 完結語幹： 完結形

c. 接続語幹： 接続形と接頭辞でマークされる命令形（一人称単数の目的語接辞のみでマークされる場合を除く）

2.5.7 で派生動詞についで述べるが、派生動詞のうち、受動動詞は、完結語幹を持たない。受動動詞の完結形には、基本語幹が現れる。また、多くの借用語動詞は、一つの語幹しかもたず、その語幹が、すべての活用形に現れる。なお、民話中のテキストでは、完結語幹でなくても、完結形であれば、語幹に PFV という「完結」を示すグロスを付す。また、*-ja*「来る」には上記の三つの語幹に加えて、*njo* という形式の命令語幹がある。この命令語幹は、（接頭辞のない）命令形に現れる。なお、*-leta*「もたらす」は例外的に、接頭辞のない命令形でも、接続語幹が現れる。これら以外の動詞では、命令形に基本語幹や接続語幹が現れるが、そうした動詞についても命令形であれば、IMP という命令を示すグロスを付す。

動詞語幹の中には、無意味形態素 *ku-*を伴った異形態が存在するものがある。この *ku-*でマークされるのは、一音節語幹と融合母音語幹（初頭母音が直前の形態素末の母音とサンディを起こすタイプの語幹）である。①目的語接辞がない、②語幹の直前に特定の接辞（AM 接辞*-cha-, -na-, -me-, -mena-, -li-, -nge-, -a-*、準体言接辞）が現れる、という条件が満たされた場合、*ku-*を伴った異形態が現れる。また、一音節語幹と、*-enda*「行く」、*-isa*「終える、終わる」、*-aza*「始める、始まる」は、動詞に同一節内に属する別の要素が後続する場合、随意的にこの *ku-*は脱落する。

2.5.4　極性

動詞の定形では、基本的に否定極性は *ha-*という接頭辞で表される。本稿ではこの接頭辞 *ha-*を否定接辞 1 と呼ぶ。主語が一人称単数、二人称単数、三人称単数の場合は、主語との一致、否定極性はかばん形態素で表される。それぞれの形式は *si-, hu-, ha-*となる。*-na-*「未完結」、*-cha-*「未実現」、完結語幹は否定接辞 1 と共起することができる。*-me-*「起動」、*-mena-*「起動進行」は否定接辞 1 と共起できない。*-li-*「完了否定」、*-ja-*「起動否定」は義務的に否定接辞 1 と共起する。完結形に否定接辞が現れる場合、「～しなかった」「まだ～していない」という意味にはならず、「（これから）～しない」という意味になる[16]。完結の肯定は完結形によって表されるが、完結の否定は、AM 接辞の*-li-*「完結否定」で表される。

非定形の否定極性は*-si-*という接頭辞で表される。本稿ではこの接頭辞を否定接辞 2 と呼ぶ。接続形では AM 接辞*-ka-*と否定接辞 2 は共起できない。主語準体言形、準体言形ともに、否定接辞 2 と共起できる AM 接辞は*-cha-*「未実現」のみである。主語準体言形、準体言形には、否定接辞 2 はあるが、AM 接辞がなく、否定極性だけ表され、アスペクトやムードが表されない形式が存在する。なお、主語準体言形や準体言形における、未実現以外の否定極性は、完結の AM 接辞でマークされたコピュラ動詞*-wa* の主語準体言形や準体言形に否定の基本形が後続することにより表される。

2.5.5　AM 接辞、語幹、否定接辞の共起関係

以下に、定形、主語準体言形、準体言形における AM 接辞、語幹、否定接辞の共起関係をまとめる。

表 11：定形における AM 接辞、語幹、否定接辞の共起関係

	AM 接辞	語幹	否定接辞との共起
未完結	*-na-*	基本語幹	可
未実現	*-cha-*	基本語幹	可
完了	*-me-*	基本語幹	不可
起動	*-mena-*	基本語幹	不可
完結否定	*-li-*	基本語幹	義務
完了否定	*-ja-*	基本語幹	義務
完結	無	完結語幹	可

[16] ただし *ijua*「知る」と *goma*「できる」の完結形が否定接辞と共起する場合は、単に「知らない」、「できない」という意味になる。

表 12：主語準体言形と準体言形における AM 接辞、語幹、否定接辞の共起関係

	AM 接辞		語幹		否定接辞との共起	
	主語準体言	準体言	主語準体言	準体言	主語準体言	準体言
未完結	*-na-*	*-na-*	基本語幹	基本語幹	不可	不可
未実現	*-cha-*	*-cha-*	基本語幹	基本語幹	可	可
完了	*-ne-*	*-me-*	基本語幹	基本語幹	不可	不可
起動	*-nena-*	―	基本語幹	―	不可	―
完結否定	―	―	―	―	―	―
完了否定	―	―	―	―	―	―
完結	*-a-*	*-ø-*	基本語幹	基本語幹	不可	不可

2.5.6　人称接辞

動詞活用形に現れる人称接辞として、主語接辞、目的語接辞、主語準体言接辞、準体言接辞がある。これら四つは、一致する項が同一節内に必ずしも現れる必要がないという点で共通している。これは、四つの人称接辞が、一致を示すだけでなく、代名詞的な機能も有しているためであると考えられる。

主語接辞は、主語の主名詞の人称もしくは名詞クラスに一致する接頭辞で、主語接辞のスロットがある活用形では概ね義務的に現れる。現れないのは、定形でかつ、主語が一人称単数、AM 接辞が*-na-*「未完結」、*-nge-*「反実仮想」の場合、あるいは、同様に主語が一人称単数で、AM 接辞なしの*-na*「所有」や後述するコピュラ*-ngali* が述語となる場合である[17]。定形で主語が一人称単数、アスペクト・ムードが未実現の場合、分析的な *N-cha-*という形式だけでなく、融合的なかばん形態素 *chʰa-*が現れることもある。また、主語が一人称単数でアスペクト・ムードが継起・条件の場合も、*N-ka* という形式だけでなく、*ha-*というかばん形態素で現れることがある。二人称単数と三人称単数の主語接辞は、定形ではそれぞれ *ku-, ka-*、非定形では *u-, a-*となる。

目的語接辞は、目的語の主名詞の人称もしくは名詞クラスに一致する接頭辞で、目的語があっても現れない場合がある。目的語が二人称複数の場合、目的語接辞のスロットには、二人称単数の目的語接辞と同形の*-ku-*、三人称単数の目的語接辞と同形の*-ṃ-*、三人称複数の目的語接辞と同形の*-wa-*のいずれかが現れ、それに加えて、語幹の後ろに聞き手が複数であることを表す接語*=ni* が現れる。目的語接辞のスロットには、再帰接辞*-ji-*も現れうる。

主語準体言接辞は、*ṃ-/mw-*という形式である。*mw-*という形式は AM 接辞が*-a-*の場合にのみ現れる。それ以外の環境では *ṃ-*という形式である。主語準体言接辞は、1 クラスの名詞、

[17] 一見すると、後続する形態素の初頭音が鼻音の場合、*N-*という一人称単数の主語接辞は脱落するという形態音韻規則が存在するようにも思われる。しかし、準体言形では、AM 接辞が*-na-*の場合でも、必ず一人称単数の主語接辞 *N-*は現れる必要があり、そのような形態音韻規則では、一人称単数の主語接辞が現れないことを説明できない。

一人称単数、二人称単数、三人称単数の人称代名詞と一致する。

準体言接辞は、一致する主名詞[18]の名詞クラスに応じて異なる形式になる。準体言接辞の形式は概ね、拘束代名詞と同形だが、準体言接辞には拘束代名詞と異なり、1 クラスに *ye~yo* という異形態が存在する。この二つは AM 接辞-*ø*-でマークされる場合に現れる。

以下に、主語接辞、目的語接辞、準体言接辞を提示する。融合母音語幹の前に現れてサンディが生じた場合の形式は以下には挙げない。詳しくは Racine-Issa (2002: 79-91) を参照されたい。なお、本稿では、サンディにより生じた母音は、便宜上語幹部分に含めて提示する。

表 13：主語接辞と目的語接辞の形式

	主語接辞	目的語接辞	準体言接辞
1SG	*nyi~N*[19]	*nyi/N*	―
1PL	*tu*	*tu*	―
2SG	*ku~u*	*ku*	―
2PL	*ṃ~mu*[20]	*ku~ṃ/mu~wa*	―
3SG/G1	*ka~ke*[21]*~a*	*ṃ~mu*[22]	*e~ye~yo*
3PL/G2	*wa~we*	*wa*	*o*
G3	*u*	*u*	*o*
G4	*i*	*i*	*yo*
G5	*li*	*li*	*lyo*
G6	*ya*	*ya*	*yo*
G7	*ki*	*ki*	*cho*
G8	*vi*	*vi*	*vyo*
G9	*i*	*i*	*yo*
G10	*zi*	*zi*	*zo*
G15	*ku*	*ku*	*ko*
G16	*va~ve*	*va*	*vo*

[18] 実際に現れるかどうかは別として、多くの場合、準体言接辞と一致する名詞が存在すると考えられる。しかし、準体言接辞と一致する主名詞を仮定することができない場合もある（例：5 クラス「理由」、8 クラス「様態」「時」）。

[19] 一人称単数の主語接辞は、子音で始まる語幹や目的語接辞、否定接辞 2-*si*-が後続する場合、*nyi*-と *N*-の自由交替が容認される。筆者の観察の限り、後続する形態素の初頭音が *w, y* 以外の場合、*N*-で現れることが多い。AM 接辞-*cha*-, -*me*-, -*mena*-, -*ka*-が後続する場合は、義務的に *N*-となる。目的語接辞は、子音で始まる語幹が後続する場合、義務的に *N*-となる。

[20] 非融合母音語幹が後続する場合、*mu*-となる。子音で始まる形態素が後続する場合、*ṃ*-と *mu*-は自由交替する。

[21] 三人称単数主語接辞の *ke*-という異形態は、AM 接辞-*me*-が後続する場合に現れる。三人称複数の *we*-、6 クラスの *ye*-、16 クラスの *ve*-も同様の環境で現れる。

[22] 後続する語幹の初頭音が子音の場合、*ṃ*-となる。非融合母音語幹が後続する場合、*mu*-となる。

	主語接辞	目的語接辞	準体言接辞
G18	*m̩~mu*[23]	*m̩~mu*	*mo*

2.5.7　派生動詞

マクンドゥチ方言では、他の多くのバントゥ諸語と同様に、語根に拡張接尾辞が付加されることで、派生動詞が形成される。この拡張接尾辞を伴うことにより、「受動 (passive)」「適用 (applicative)」「使役 (causative)」「状態 (stative)」「反転 (reversive)」「相互 (associative)」などの意味が付加される。拡張接尾辞を含んだ語幹は、［語根－拡張接尾辞－末母音］という形式になる。拡張接尾辞の形式は以下の通りである。

• 拡張接尾辞の形式 (Racine-Issa 2002: 92–102)

受動：*-w-, -lw-, -ligw-, -legw-, -igw-, -egw-*

適用：*-i-, -e-, -li-, -le-*

使役：*-z-, -iz-, -ez-, s, -ish-, -esh-*

状態：*-ik-, -ek-*

反転：*-u-*

相互：*-an-*

傾向として、*l* を伴った形式（受動、適用）は、語根末が母音の場合現れる。*i* と *e* の交替（受動、適用、使役、状態）は、語根に含まれる母音が *i, u, a* か *e, o* かによる。それ以外の違いは語彙の特性によるものと考えられる。また、拡張接尾辞が複数現れることもある。例えば、拡張接尾辞が二つ現れる場合、適用＋受動、適用＋相互、使役＋適用、使役＋相互、反転＋受動、反転＋適用、反転＋使役、反転＋相互、反転＋状態、相互＋使役、相互＋適用、状態＋相互というパターンがある (Racine-Issa 2002: 102–105)。

なお、民話中で派生動詞が現れる場合、語幹を分析した形では提示しない。

2.5.8　コピュラ動詞-*wa* について

コピュラ動詞-*wa* には、他の動詞にはないテンスやアスペクトを表す活用形がある、完結に活用した場合（定形、主語準体言形、および準体言形）、他の活用形と異なる特殊な機能をもつ、助動詞的用法があるという、三つの特徴がある。以下でその三点について説明する。

コピュラ動詞-*wa* は、特殊な屈折パラダイムをもっており、特殊な活用形は、補充形で実現される[24]。以下にその補充形を挙げる。

[23] 後続する形態素が母音で始まる場合、*mu* となる。後続する形態素が子音で始まる場合、*mu* と *m̩* は自由交替する。

[24] *-evu* と*-ngali* は、他のコピュラ動詞-*wa* の活用形と、意味だけでなく、必ず後続するコピュラ補語を必要とする、場所を表す拘束代名詞でマークされることができるという特徴を共有しており、このことを理由に、コピュラ動詞の補充形とみなすことができる。

• コピュラ動詞の補充形

-evu「過去」

-ngali「持続 (persistive)」

-li[25]

まず、*-evu* は過去を表す形式である。他の動詞には、過去を示す活用形は存在しない。この *-evu* は、主語が二人称単数、三人称単数の場合、動詞の定形に現れる主語接辞でマークされる。*-evu* も融合母音語幹と同様に、サンディが生じるタイプの形態素である。*-ngali* では、「まだ～である」という持続 (persistive) が表される。*-ngali* をマークする主語接辞は、主語が一人称単数の場合現れない。二人称単数、三人称単数の場合は、非定形に現れる *u-, a-*が現れる。*-li* は*-wa* の完結形に対応する否定形と、準体言中に現れる。完結形に対応する否定形は、［否定接辞 1－主語接辞－*li*］という形式で、「～にいない」「～でない」といった意味を表す。なお、2.4.3 で述べた通り、コピュラ動詞*-wa* の完結形に 15, 16, 18 クラスの拘束代名詞が後続した［主語接辞－*wa*－拘束代名詞］という形式は、「そこにいる」というような意味を表すが、これに対応する否定形では、*-li* は用いられず、［否定接辞 1－主語接辞－拘束代名詞］という形式になる。また、*-li* は、コピュラ動詞が準体言内の主動詞となる際にも現れる。*-li* が現れるのは、準体言の主動詞となるコピュラが AM 接辞でマークされず、準体言接辞*-vyo-, -ko-, -vo-, -mo-*でマークされる場合である。この際の形態素の順序は、準体言形とは異なり、［主語接辞－*li*－準体言接辞］となる。

コピュラ動詞*-wa* には、主語の状態変化を示す用法と主語の場所を示す用法がある。*-wa* が AM 接辞でマークされる場合は、基本的にその AM 接辞に応じたアスペクトやムードに関する情報が表される。しかし、完結形や、主語準体言及び主語準体言中で AM 接辞*-a-, -ø-*「完結」でマークされる場合は、単にコピュラ節を形成する機能のみを担う。コピュラが完結に活用した場合、コピュラに後続するのは、①主語の性質や状態を示す名詞や形容詞、②主語の所有者を表す所有詞か属辞でマークされた項、③主語の存在する場所を示す名詞である。

コピュラ動詞には、テンス・アスペクト・ムードに関する情報を付加する助動詞的用法もある。この用法ではコピュラ動詞としての機能は表されない。形式的には、*-wa* の基本形や、*-evu, -ngali* に動詞の活用形が後続する。*-wa* をマークする AM 接辞としては、*-cha-, -na-, -me-, -mena-, -ka-, -nge-*が確認されている。*-wa* の完結形には、他の動詞は後続しない。後続する動詞は、基本的に定形である。先行するコピュラ動詞が*-evu, -ngali* の場合には継起条件形も後続する。

また、コピュラ動詞*-wa* の主語準体言形や準体言形に、他の動詞の定形が後続することにより、準体言が形成される。*-wa* が、他の AM 接辞でマークされる場合は、その AM 接辞によって表されるアスペクトやムードが準体言に付加されるが、*-a-, -ø-*「完結」でマークされる場合は、アスペクトやムードに関する情報が準体言に付加されることはない。つまり、*-a-, -ø-*でマークされる*-wa* は、準体言を形成する機能のみを担っていると考えられる。

[25] *-li* はサバキ祖語の*-li- ‘be’ (Nurse & Hinnebusch 1993: 649) に遡ると考えられる。

2.5.9 *-na*「所有」について

所有を表す*-na* も他の動詞とは異なるパラダイムを有する。まず所有の*-na* は*-na-*「未完結」、*-mena-*「起動進行」、*-a-, -ø-*「完結」ではマークすることができない[26]。また、テンス・アスペクト・ムードに関する情報を付加する助動詞のコピュラが現れた場合、他の動詞では、2.5.6 で述べた場合を除き主語接辞が義務的に現れるのに対して、*-na* では現れないことがある。また、*-na* では、前述のとおり、拘束代名詞で所有物との一致を標示されるという点も他の動詞と異なる。AM 接辞のない準体言では［*m̩*－*na*］、［主語接辞－*na*－準体言接辞］[27]という形式になる点も他の動詞とは異なる。

この他の所有の*-na* の特徴として、まず、定形で主語が一人称単数の場合、主語接辞が現れないということが挙げられる。また 15、16、18 クラスの主語接辞で*-na-*がマークされた場合、*-na* に後続する名詞が指示する対象が存在することが表される。

2.6 語境界について

2.6.1 接語

それ自体が単独で生起しないことと、ホストとなる語はそれなしでも成立しうること、ホストとの間にポーズがないことを基準に接語という単位を設定することにする。この基準に当てはまるものとして、後接語 (proclitic)：受動文の動作主標識 *nyi*=、属辞、否定コピュラ *si*=、*ja*=「～のように」、背景標識 *njo*=[28]、共格標識 *na*=、前接語 (enclitic) ：指示詞弱化形、所有詞の弱化形、程度の低さを表す=*ga*「ちょっと、少し」、聞き手が複数であることを示す =*ni* が挙げられる。*nyi*=と属辞の後には、準体言を除く名詞類が現れうる。*si*=, *ja*=の後には名詞類が現れうる。*njo*=のあとに典型的に現れるのは、名詞類だが、名詞化されていない動詞の活用形も現れる。*na*=は「～も、～とともに」という 随伴だけでなく、二つの要素をつなぐ機能も有しており、項だけでなく、節もこの二つの要素になることがある。このため、*na*=には名詞類だけでなく、名詞化されていない動詞の活用形も後続する。指示詞の弱化形、=*g*a、=*ni* はホストは、特定の語類に属するものに限定されない。*nyi*=はホストの初頭音が *w, y* 以外の子音の場合、しばしば *N*=という形式に弱化する。=*ga* はホストの後に現れることが一般的だが、動詞の基本形では、AM 接辞と語幹の間にも現れうる（例：*tu-na=ga-soma* (1PL.SM-IPFV=bit-study)「我々はちょっと勉強している」）。

2.6.2 動詞連続

-ja「来る」、*-enda*「行く」、*-isa*「終わる」、*-aza*「始まる」には、接頭辞を伴わない無標の動詞語幹（あるいは目的語接辞でマークされた動詞語幹）が後続する。この動詞連続の間に

---

[26] 話者によっては*-na-*「未完結」*-mena-*「起動」、*-ø-*「完結」で所有の *na* をマークする形式を容認するが、実際に使われることはないと考えられる。

[27] 準体言化される項が主語（所有者）の場合に限り、他の動詞と同じ［主語接辞－準体言接辞－*na*］という形態素順も容認される。

[28] 背景情報を取り立てる際に用いられる。

は、自立語を挿入することはできない。挿入できるのは、接語の*=ga* くらいである。AM 接辞と語幹の間にも、自立語は挿入することはできないが、*=ga* は挿入することはできる。このことから、本稿では、動詞連続における二つの動詞語幹のつながりは、AM 接辞と語幹と同程度のものとみなし、二つの動詞語幹の間には、AM 接辞と語幹の間と同様に、ハイフンを付すことにする。

-ja, -enda, -isa, -aza は無意味形態素 *ku-*を伴いうる動詞だが、*-ja* と*-enda* は、他の動詞の語幹が後続する際は、この *ku-*が脱落する形式もよく観察される。また、*-ja, -enda* の直後に現れる動詞語幹は必ず無標でなければならないが、*-isa, -aza* のあとには無標のものだけでなく、不定形も現れる。

-ja が前部に現れる動詞連続では、元の「来る」という意味が希薄化している活用形がある。*-ja* が AM 接辞*-na-*「未完結」、*-cha-*「未実現」、*-ka-*「継起条件」でマークされる場合は、未来[29]、AM 接辞*-li-*「完結否定」、*-a-*「完結（主語準体言）」、*-ø-*「完結（準体言）」でマークされる場合は、過去を表す。

2.6.3　所有の*-na*、及びコピュラ動詞*-wa* と後続する要素の関係

2.5.8 節で、所有表現について述べたが、スワヒリ語にも同様の所有表現が存在する。スワヒリ語の正書法では、この所有の*-na* と後続する所有物を表す表現は分かち書きされる。本稿でも、スワヒリ語の慣例に従って、*-na* と所有物を表す名詞を分かち書きする。ただし、マクンドゥチ方言では、この二つの間に、別の自立語を挿入することができない。このことを踏まえると、所有の*-na* と後続する名詞との間には、語境界と呼ぶほどの境界はないと考えられる。

また、コピュラ動詞*-wa* についても、非助動詞的に用いられる場合、補語との間に他の自立語を挿入することはできないが、本稿では、*-wa* と補語は分かち書きする。

3　民話資料

3.1　民話資料の概要

民話資料は二編ある。この二編は連続して語られており、以下のテキスト中には、民話の本編だけでなく、語りの冒頭と最後、二編の民話の間に録音された筆者との会話も含まれている。

この民話の語り部は、10 歳前後から 20 歳前後まで、マクンドゥチ郡を離れ、ウングジャ島中部のトゥングゥのおじ夫妻の下で暮らしている。おじ夫妻はともにマクンドゥチ方言話者である。この二編の民話は、語り部がトゥングゥで暮らしていた時に、おばから口頭で伝えられたものである。なお、この語り部は読み書きはほとんどできない（数字を読むことはできるようである）。

二編の民話ともに、小鬼 (*jimwi*) が女性に化けて、その女性の夫をだますという話である。

[29] *-ja* の接続形に、他の動詞の接続形が後続する場合も、未来が表される。

この民話の録音の直前に、この言語のプロソディを調べるために「彼はカボチャが欲しい」という文を繰り返し語り部に発音してもらったことが、語り部が小鬼の登場する民話を話してくれたきっかけとしてある。小鬼の好物はカボチャである。

言語的に特筆すべき点としては、登場人物のセリフ及び歌におけるスワヒリ語へのスイッチ（(21) (22) (23) (38) (39) (40) (102) (103) (104) (127) 等）と、小鬼のセリフにおける歯茎音の口蓋化（(147) (149) (155) (173)）が挙げられる。スワヒリ語へスイッチしていることは、プロソディ（語の次末音節の卓立）、スワヒリ語の語彙の使用、スワヒリ語特有の屈折形から見て取れる。テキスト中にみられるスワヒリ語の語彙とスワヒリ語の屈折形として以下のようなものが挙げられる。

- スワヒリ語の語彙

  teleṃka「降りる」、*penda*「好む」、*pendeza*「好ませる（使役）」、*taka*「欲する」、*mimi*「私」*weza (wezi)*「できる」

- スワヒリ語の屈折形

  wangu「私の（1 クラス所有詞）」（cf. マクンドゥチ *yangu*）、*si-wezi*「私はできない」（cf. マクンドゥチ *si-gomo*）、*ku-koga*「沐浴すること（不定形）」（cf. マクンドゥチ *k-oga*）、*na-ona*「私は見る（感じる）」（cf. マクンドゥチ *na-kona*）、*la=*「の（5 クラス属辞）」（cf. マクンドゥチ *lya=*）、*ka-tw-ambia*「彼女は我々に言った」（マクンドゥチ対応表現なし）

上に挙げたもののうち、スワヒリ語の動詞の活用形について簡単に述べておく。まず、*si-wezi* の *wezi* という語幹の形式では、スワヒリ語で現在否定を表す際の語幹末母音の変化 *a* >> *i* がみられる。この語形変化はマクンドゥチ方言にはない。*ku-koga* では、*koga* 自体が語幹として分析され、それに *ku-*という不定形接頭辞が付加されている。マクンドゥチ方言では「沐浴する」という動詞の不定形は *k-oga* という形式である。*na-ona* の *ona* という動詞は、未完結の*-na-*でマークされる場合、マクンドゥチ方言では必ず、無意味形態素 *ku-*を伴い *k-ona* という形式になる。無意味形態素がない形式というのはマクンドゥチ方言の形式ではない。*ka-tw-ambia* の *ka-*という接頭辞は、三人称単数と完結を示すスワヒリ語のかばん形態素である。この形態素はマクンドゥチ方言にはない。

小鬼のセリフの中で口蓋化しているとみられる語彙は以下の通りである。( ) 内には、口蓋化していない語形を挙げる。なお、*yamaa, maia* にみられる変化は口蓋化ではないが、まとめて提示することにする。

- 口蓋化している語彙

  yamaa (jamaa)「仲間」、*uchamu (utamu)*「甘さ」、*nye (je)*「何（疑問標識）」、*kichu (kitʰu)*「物」、*ka-chw-ambia (ka-tw-ambia)*「彼女は我々に言った」、*maia (maria)*「マリア（人名）」、*ṃcho-ni (ṃto-ni)*「川で」、*chw-enja (tw-enda)*「我々は行く」、*ṃkonyo (ṃkono)*「手」、*ya (la)*「の（5 クラス属辞）」、*chu-lye (tu-lye)*「食べよう」

本稿に掲載したもの以外でも、この語り部の語る民話の小鬼のセリフでは、一貫してこうした口蓋化が観察される。おそらく、小鬼というキャラを特徴づけるために、口蓋化が用いられていると考えられる。

話者と録音に関する情報は次の通りである。

- 収録日：2016 年 9 月 18 日
- 収録場所：話者の自宅の軒先（マクンドゥチ郡マタズィ集落）
- 収録時間：14 分 3 秒
- 話者：Zainabu Khatibu Bonde 氏、収録時推定 60 代前半、女性、マタズィ集落出身
- 隣席者：Zainabu 氏の娘（10 代前半）、本稿の筆者

民話のテキストは一行目に形態素境界付きの音韻表記、二行目にグロス（形態素ごとの意味・文法情報）、三行目に日本語訳をつけている。グロスに用いている略号については、稿末の略号一覧を参照されたい。一行目中のピリオドは、ピリオドの前後に明らかなポーズがあることを示す。このポーズは、文境界とは必ずしも一致しない。聞き取れなかった部分には ? を記している。二行目のピリオドは、一つの形態素が複数の意味や機能を持つことを示す。形態素が現れないことが形態音韻論的、もしくは形態論的に説明できるもの、かばん形態素については、複数の機能をグロス間にコロンを付すことで示す。マクンドゥチ方言のある一つの語に対応する英語が複数の語から成る場合は、英語の語と語の間に下線を付している。三行目の (?) は日本語訳が不確かであることを示す。また、全体に丸かっこが付されているものは、筆者の発話である。

3.2 民話資料テキスト

(1) *hadithi gani.*
story what_kind
「どんなお話かって？」

(2) *hadithi ivi.*
story which
「どのお話かって？」

(3) *(ku-na-goma.)*
(2SG.SM-IPFV-be_able)
（「できますか。」）

(4) ee *na-i-goma.*
INT IPFV:1SG.SM-G9.OM-be_able
「ええ、できる。」

(5) *i-si-chukue muda.*
G9.SM-NEG-take span
「（お話は）時間がかからないほうがいい？」

(6) *haya tw-ende.*
FIL 1PL.SM-go.SUBJ
「わかった、行きましょう（始めましょう）。」

(7) *ny-imbe=vyo hea.*
1SG.SM-sing.SUBJ=DEM.MED.G8 but
ny-imbe=vyo. na-kwimba=vyo.
1SG.SM-sing.SUBJ=DEM.MED.G8 IPFV:1SG.SM-sing=DEM.MED.G8
「だけど、歌ってもいい？歌ってもいいの？歌いますよ。」

(8) *paukwa.*[30]
tale_opening
「お話を始めます。」

(9) *(pakawa.)*
reply_to_tale_opening
「始めて。」

(10) *a-li-ondokea.*[31] *makame wa=makame.*
3SG.SM-PST-leave.APPL PN of.G1=PN
「マカメの子、マカメというものがおりました。」

[30] *paukwa* は物語を始めるときの決まり文句である。聴衆は *pakawa* と応答する。
[31] この語り部の民話はほぼ必ず、*a-li-ondokea* という動詞が冒頭に現れる。この動詞の活用形にみられる*-li-*は、スワヒリ語の「過去」を表す接頭辞である。

(11) *makame wa=makame yulya.* *a-ka-wa.*
PN of.G1=PN DEM.DIST.G1 3SG.SM-CONS/COND-COP
ka-wa *ṃji* *ka-wa* *kiambo-ni* *vao.*
3SG.SM-COP.PFV town.HESIT 3SG.SM-COP.PFV village-LOC their.G16
「そのマカメの子、マカメは、自分の街、自分の村におりました。」

(12) *kazi* *yake* *a-k-enda* *a-ka-rudi* *mwitu-ni.*
work his/her.G9 3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-come_back forest-LOC
「彼は仕事で、森へ行ったり来たりしていました。」

(13) *mwitu-ni* *uko* *k-enda* *a-ka-kat^{h}a* *majengo.*
forest-LOC DEM.MED.G15 3SG.SM-go:IPFV 3SG.SM-CONS/COND-cut buildings
「そこの森に、彼は建物を壊しに行きます。」

(14) *siku moja.* *ṃsitu-ni* *kulya.*
one day.G9 forest-LOC DEM.DIST.G15
「ある日、そこの森でのこと。」

(15) *makame wa=makame ha-na* *ṃke.*
PN of.G1=PN 3SG.SM.NEG-POSS wife
「マカメの子、マカメには妻がいません。」

(16) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」[32]

(17) *a-ø-vyo-wa* *ha-na* *ṃke.*
3SG.SM-PFV-G8.NMLZ-COP 3SG.SM.NEG-POSS wife
a-ka-ṃ-ona *bibi* *ka-kaa* *juu* *ya=ujiti.*
3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-see lady 3SG.SM-sit.PFV above of.G9=tree
「彼に妻がいないときに、彼は、木の上に座っている女性を目にしました。」

[32] この表現は、会話の最中によく観察される。確認のために用いられる定形的な表現と考えられる。なお、スワヒリ語では、マクンドゥチ方言の *ku-sikii* の直訳にあたる *u-me-sikia* (2SG.SM-PFV-hear)「あなた聞いた？」という表現がよく使われる。

(18) *juu ya=ujiti bibi mwanaṃke ka-na-ji-chana nywele.*
above of.G9=tree lady woman 3SG.SM-IPFV-REFL-separate hair
「木の上で、女性は髪をとかしています。」

(19) *a-ka-sema uyo+ko njo=ṃpenzi wangu.*
3SG.SM-CONS/COND-tell DEM.MED.G1+DEM.MED.G15 BGR=lover my.G1
「彼は言いました。『あそこにいる人こそ、私の愛する人だ。』」

(20) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(21) *a-ka-mw-ambia bibi teleṃka basi.*
3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-tell lady get_down.IMP FIL
「彼は言いました。『お嬢さん、ちょっと降りてきてください。』」

(22) *teleṃka bibi yulya bibi*
get_down.IMP lady DEM.DIST.G1 lady
a-ka-shuka kulya juu ya=ujiti.
3SG-CONS/COND-get_down DEM.DIST.G15 above of.G9=tree
「『降りてきてください、お嬢さん。』その女性は、その木の上から降りてきました。」

(23) *a-ø-vyo-kuja valya chʰi-ni*
3SG.SM-PFV-G8.NMLZ-come DEM.DIST.G16 ground-LOC
aa bibi na-ku-penda. mwanaṃke u-me-ni-pendeza.
INT lady IPFV:1SG.SM-2SG.OM-love woman 2SG.SM-PFV-1SG.OM-love.CAUS
mwanaṃke na-ku-taka. ṃpenzi wangu.
women IPFV:1SG.SM-2SG.OM-want lover my.G1
u-we mwanaṃke wangu. mwanaṃke ṃpya.
2SG.SM-COP.SUBJ woman my.G1 woman new.G1
na-ku-taka yulya jimwi.
IPFV:1SG.SM-2SG.OM-want DEM.DIST.G1 genie
「（女性が）そこの地面に降りてきたとき、『おお、お嬢さん、あなたが好きです。女よ、あなたのことが気に入りました。女よ、あなたが欲しい。私の愛する人よ、あなたは私の女、新しい女になるべきだ。あなたが欲しい。』そいつ（女）は小鬼です。」

(24) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(25) *makame wa=makame yulya.*
PN of.G1=PN DEM.DIST.G1
「そのマカメの子マカメ。」

(26) *kumbe yulya ṃtʰu a-na-e-mw-ambia.*
FIL DEM.DIST.G1 person 3SG.SM-IPFV- G1.NMLZ-3SG.OM-tell
si=ṃtʰu yulya.
NEG=person DEM.DIST.G1
「実は、その（マカメが）話しかける人は人ではないのです。」

(27) *hea ye ka-na-j-ona ṃtʰu .*
but 3SG 3SG.SM-IPFV-REFL-see person
「だけど、自分では人だと思い込んでいるのです。」

(28) *kumbe namba njo=jimwi. yulya mwanaṃke.*
FIL probably BGR=genie DEM.DIST.G1 woman
「おそらく小鬼だったのです。その女性は。」

(29) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(30) *(jimwi ka-na-j-ona ṃtʰu .)*
(genie 3SG.SM-IPFV-REFL-see person)
（「小鬼は自分のことを人だと思い込んでいる？」）

(31) *ee ka-na-j-ona ṃtʰu yulya ṃtʰu*
INT 3SG.SM-IPFV-REFL-see person DEM.DIST.G1 person
ka-na-ṃ-ona yulya hamba ṃtʰu kumbe si=ṃtʰu .
3SG.SM-IPFV-3SG.OM-see DEM.DIST.G1 like person FIL NEG=person
「そう、（小鬼）は自分のことを人だと思っている。その人（マカメ）はそいつ（小鬼）を人のように見ているけれど、実は人ではない。」

(32) *ji-jimwi.*
AUG-genie
「鬼。」

(33) (*njo=jimwi*.)
(BGR=genie)
（「小鬼？」）

(34) *ee*.
INT
「そう。」

(35) *kumbe vilya ji-jimwi ama ji-shetani.*
FIL DEM.DIST.G8 AUG-genie or AUG-devil
「鬼かもののけか。」

(36) *maana ilyo jimwi hamba shetani.*
so DEM.MED.G5 genie like devil
「つまりその鬼は、もののけのよう。」

(37) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(38) *a-ka-mw-ambia mimi si-wezi ku-shuka.*
3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-tell 1SG 1SG.SM.NEG-be_able.NEG INF-get_down
na-tenda fupi tu. mie si-wezi kuo kw-enda.
IPFV:1SG.SM-do short only 1SG 1SG.SM.NEG-be_able.NEG INF.HESIT INF-go
「（その女性は）言いました。『私は降りられないわ。』短いの（話）をしてるだけだよ。『私は行くことができないわ。』」

(39) *ka-na-mw-ambia tw-ende nyumba-ni kwangu.*
3SG.SM-IPFV-3SG.OM-tell 1PL.SM-go.SUBJ house-LOC my.G15
bibi N-ø-vyo-ku-penda tw-ende nyumba-ni kwangu.
lady 1SG.SM-PFV-G8.NMLZ-2SG.OM-love 1PL.SM-go.SUBJ house-LOC my.G15
「彼は言いました。『私の家に行きましょう。お嬢さん、私はあなたを愛しているのだから(?)、私の家に行きましょう。』」

(40) *aa mie si-wezi kw-enda aa.*
INT 1SG 1SG.SM-be_able.NEG INF-go INT
「『ああ、私は行くことができません。』」

(41) *a-ka-mw-ambia haya basi*
3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-tell FIL FIL
a-ka-kinga miongo. yulya bibi a-ngie.
3SG.SM-CONS/COND-protect back DEM.DIST.G1 lady 3SG.SM-enter.SUBJ
「彼は（女性に）言いました。『わかりました。』彼は、背をむけてかがみました。女性が乗れるように。」

(42) *ka-mw-eleke=yo.*
3SG.SM-3SG.OM-carry.PFV=DEM.MED.G1
「彼女を彼はおぶったんだよ。」

(43) *a-ka-ngia kulya miongo-ni.*
3SG.SM-CONS/COND-enter DEM.DIST.G15 back-LOC
「彼女はその背中に乗りました。」

(44) *a-k-enenda a-k-enenda a-k-enenda*
3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-go
na=ṃzigo wake miongo-ni.
COM=burden his/her.G3 back-LOC
「彼は背中に荷物（小鬼）を背負ってどんどんと進みました。」

(45) *hata ku-fika mahaa a-ka-mw-ambia e.*
even INF-arrive place 3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-tell INT
「あるところについて、彼は言いました。」

(46) *mwanaṃke vino sasa mie tena N-choko.*
woman DEM.PROX.G8 now 1SG then 1SG.SM-be_tired.PFV
maana tu-na-ko-kwenda si=vadogo. N-choko.
so 1PL.SM-IPFV-G15.NMLZ-go NEG=small.G16 1SG.SM-be_tired.PFV
「『女よ、今私は疲れています。我々の行くところは近くはありません。私は疲れています。』 」

(47) *na=tu* *na=tu-choke* *vivyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
COM=1PL.SM.HESIT COM=1PL.SM-be_tired.SUBJ DEM.MED.G8 DIM-back~RED

na=tu-choke *viyvyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
COM=1PL.SM-be_tired.SUBJ DEM.MED.G8 DIM-back~RED

kw-enda-nyi-twala *kwetu* *miti* *mikuu* *mi-chapia+komba*
2SG.SM-go:IPFV-1SG.OM-take our.G15 trees big.G4 G3-leap+galago

hoo pendo na=moyo.
INT love COM=heart

「『背中でこういう風に休みましょう。背中でこういう風に休みましょう。あなたは、ガラゴ[33]が飛び越えるような高い木のある私たちのところに、私を連れに行きます。愛のある心で。」』」

(48) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(49) *haya a-k-enenda* *a-k-enenda* *ha.*
FIL 3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-go INT
「そして、彼はどんどんと進みました。」

(50) *he* *mwanaṃke N-choka*[34] *we.* *N-choko* *we.*
INT woman 1SG.SM-be_tired 2SG 1SG.SM-be_tired.PFV 2SG

mwanaṃke mie N-choko.
woman 1SG 1SG.SM-be_tired.PFV
「『女よ、私は疲れています。疲れています。女よ、私は疲れています。』」

[33] サルの一種。夜行性。ブッシュベイビーとも呼ばれる。マクンドゥチ郡の集落内にも頻繁に出没する。
[34] 次に完結形の *N-choko* という語形が現れることを考慮すると、この *N-choka* という語形は言い間違いである可能性がある。

(51) *tu-choke* *ja=viyvyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
1PL.SM-be_tired.SUBJ like=DEM.MED.G8 DIM-back~RED

tu-choke *ja=viyvyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.* *kw-enda-nyi-twala*
1PL.SM-be_tired.SUBJ like=DEM.MED.G8 DIM-back~RED 2SG.SM-go:IPFV-1SG.OM-take

kwetu *miti* *mikuu* *mi-chapia+komba* *hee* *pendo* *na=moyo.* *he.*
our.G15 trees big.G4 G3-leap+galago INT love COM=heart INT

「『背中でこういう風に休みましょう。背中でこういう風に休みましょう。あなたは、ガラゴが飛び越えるような高い木のある私たちのところに、私を連れに行きます。 愛のある心で。』」

(52) *ka-na-mw-ambia* *njo=pendo* *li-wa* *moyo-ni.*
3SG.SM-IPFV-3SG.OM-tell BGR=love G5.SM-COP.PFV heart-LOC

tu-choke *ja=vivyo.*
1PL.SM-be_tired.SUBJ like=DEM.MED.G8

「彼女は彼にこう言っています。『愛は心にある。こういう風に休みましょう。』」

(53) *he.*
INT

（小休止）

(54) *wa-k-enenda* *wa-k-enenda* *wa-k-enenda.*
3PL.SM-CONS/COND-go 3PL.SM-CONS/COND-go 3PL.SM-CONS/COND-go

haya *bibi* *vano* *njo=vangu.* *ama* *vano* *njo=vetu.*
INT lady DEM.PROX.G16 BGR=my.G16 or DEM.PROX.G16 BGR=our.G1

ino *njo=nyumba* *yangu.*
DEM.PROX.G9 BGR=house my.G9

「彼らはどんどん進みました。『はい、お嬢さん、こここそが私のところです。こここそが私たちのところです。 これこそが私の家です。』」

(55) *kiji-banda* *tu* *cha=ṃgongo.* *maana* *ha-na* *ṃke.*
DIM-hut only of.G7=back so 3SG.SM.NEG-POSS wife

「棟木ひとつの単なる小さな小屋です。というのも、彼には妻がいないから。」

(56) *tu-choke* *ja=viyvyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
1PL.SM-be_tired.SUBJ like=DEM.MED.G8 DIM-back~RED

tu-choke *ja=viyvyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
1PL.SM-be_tired.SUBJ like=DEM.MED.G8 DIM-back~RED

kw-enda-nyi-twala *kwetu* *miti* *mikuu* *mi-chapia+komba*
2SG.SM-go:IPFV-1SG.OM-take our.G15 trees big.G4 G3-leap+galago

hoo penda na=moyo.
INT love COM=heart

「『背中でこういう風に休みましょう。背中でこういう風に休みましょう。あなたは、ガラゴが飛び越えるような高い木のある私たちのところに、私を連れに行きます。 愛のある心で。』」

(57) *ṃpaka yulya* *bwana a-ka-fwa.*
until DEM.DIST.G1 sir 3SG.SM-CONS/COND-die
「そのご主人がなくなるまで（そのように暮らしました）。」

(58) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(59) *a-ø-vyo-kufwa.* *wat^{h}u* *wa-ka-ngia* *tena ṃlya* *nyumba-ni*
3SG.SM-PFV- G8.NMLZ-die people 3PL-CONS/COND-enter then DEM.DIST.G18 house-LOC
「彼が死んだとき、人々がその家の中に入ってきました。」

(60) *ee we we we yuno* *mwezi=o* *ke-me-kufwa.*
INT 2SG 2SG 2SG DEM.PROX.G1 partner=your 3SG.SM-PRF-die

u-lawe *ṃno* *mwa=yuno* *binadamu.*
2SG.SM-come.from.SUBJ DEM.PROX.G18 of.G18=DEM.PROX.G1 human

ende *a-ka* *a-k-oswe.*
go.SUBJ:3SG.SM 3SG.SM-CONS/COND.HESIT 3SG.SM-CONS/COND-wash.PASS.SUBJ
「『お前さん、お前の連れは死んだんだよ。 ここ、この人のところから出なさい。彼は洗われに行かなければならないんだよ。』」

(61) *tu-k-oshwe* *ja=vivyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
1PL.SM-CONS/COND-wash.PASS.SUBJ like=DEM.MED.G8 DIM-back~RED

tu-k-oshwe *ja=vivyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
1PL.SM-CONS/COND-wash.PASS.SUBJ like=DEM.MED.G8 DIM-back~RED

kw-enda-nyi-twala *kwetu* *miti* *mikuu* *mi-chapia+komba hee pendo na=moyo.*
2SG.SM-go:IPFV-1SG.OM-take our.G15 trees big.G4 G3-leap+galago INT love COM=heart

「『背中でこういう風に洗われましょう。背中でこういう風に洗われましょう。 あなたは、ガラゴが飛び越えるような高い木のある私たちのところに、私を連れに行きます。愛のある心で。』」

(62) *ye* *ka-na-sema* *pendo njo=ka*
3SG 3SG.SM-IPFV-tell love BGR=3SG.SM.HESIT

na-ṃ-penda=yo. *basi ny-oswe* *na=yeye.*
IPFV:1SG.SM-3SG.OM-love=DEM.MED.G1 FIL 1SG.SM-wash.PASS COM=3SG

「彼女は言いました。『私は彼を愛しています。それは愛です。彼と一緒に私も洗われましょう。』」

(63) *he* *haya sasa a-k-oswa*
INT FIL now 3SG.SM-CONS/COND-wash.PASS

ka-wa *mumomo* *yulya* *jimwi maungo-ni ha-na-lawa.*
3SG.SM-COP.PFV DEM.MED.G18 DEM.DIST.G1 genie body-LOC 3SG.SM.NEG-IPFV-come_from

「彼女は洗われました。小鬼（女性）は（男の）体についたままです。離れません。」

(64) *hata sasa yuno* *a-vwiswe* *nguo.*
even now DEM.PROX.G1 3SG.SM-dress.PASS.SUBJ clothes

「『こいつは、服を着せられなければなりません。』」

(65) *shu* *lawa* *ṃno* *weye.*
get_down.HESIT come_from.IMP DEM.PROX.G18 2SG

「『ここから離れなさい、お前さん。』」

(66) *hea na=walya* *wat^{h}u* *na=o* *wazembe*
but COM=DEM.DIST.G2 people COM=PRO.G2 idlers

ha-wa-ja-ṃ-piga *kigongo tu.*
3SG.SM.NEG-PRF.NEG-3SG.OM-hit knock only

「しかし、その人々も怠け者で、棒でそいつを打ったりすらしていません。」

(67) *walya* *wat^{h}u* *na=o* *wazembe.*
DEM.DIST.G2 people COM=PRO.G2 idlers
「その人々、彼らも怠け者だ。」

(68) *maana wa-nge-mu-ua.*
so 3PL.SM-CF-3SG.OM-kill
「つまり、そいつを殺していれば。」

(69) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(70) *a-ka-sema* *a-vwiswe* *vivyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
3SG.SM-CONS/COND-tell 3SG-dress.PASS.SUBJ DEM.MED.G8 DIM-back~RED
na=a-vwiswe *vivyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
COM=3SG.SM-dress.PASS.SUBJ DEM.MED.G8 DIM-back~RED
k-enda-nyi-twala *kwetu* *miti* *mikuu* *mi-chapia+komba hee pendo na=moyo.*
3SG.SM-go:IPFV-1SG.OM-take our.G15 trees big.G4 G3-leap+galago INT love COM=heart
「『背中でこういう風に彼は着せられて。背中でこういう風に着せられて。彼は、ガラゴが飛び越えるような高い木のある私たちのところに、私を連れに行きます。愛のある心で。」』」

(71) *hata* *wakinaume* *we-me-kuja* *sasa* *na=a-chukulwe*
even men 3PL.SM-PRF-come now COM=3PL.SM-take.PASS.SUBJ
ende *a-ka-zikwe.*
go.SUBJ:3SG.SM 3SG.SM-CONS/COND-bury.PASS.SUBJ
「いよいよ、男たちがやってきました。彼は連れ出され、埋められに行きます。」

(72) *a-ka-chukulwa.*
3SG.SM-CONS/COND-take.PASS
「彼は連れ出されました。」

(73) *sasa* *bwe* *bibi* *uka.* *yuno* *ṃt^{h}u* *k-enda-zikwa.*
now HESIT lady leave.IMP DEM.PROX.G1 person 3SG.SM-go:IPFV-bury.PASS
「『さあ、お嬢さん、去りなさい。この人は埋められに行きます。」』」

(74) *na=a-zikwe* *vivyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
COM=3SG.SM-bury.PASS.SUBJ DEM.MED.G8 DIM-back~RED

na=a-zikwe *vivyo* *ki-ṃgongo~ṃgongo.*
COM=3SG.SM-bury.PASS.SUBJ DEM.MED.G8 DIM-back~RED

k-enda-nyi-twala *kwetu* *miti mikuu* *mi-chapia+komba*
3SG.SM-go:IPFV-1SG.OM-take our.G15 tree big.G4 G3-leap+galago

hee pendo na=moyo *he.*
INT love COM=heart INT

「『彼は背中でこういう風に埋められて。彼は背中でこういう風に埋められて。彼は、ガラゴが飛び越えるような高い木のある私たちのところに、私を連れに行きます。愛のある心で。」』」

(75) *a-ka-chukulwa* *hata*
3SG.SM-CONS/COND-take.PASS even

ke-me-fiswa *kulya* *ji-kaburi-ni.*
3SG.SM-PRF-arrive.CAUS.PASS DEM.DIST.G15 AUG-grave-LOC

「彼は連れ出され、とうとう墓のところにつきました。」

(76) *ji-shimo-ni* *ka-na-tiwa.*
AUG-hole-LOC 3SG.SM-IPFV-put.PASS

「穴の中に、彼は入れられます。」

(77) *lilya* *jidu-bwana* *li-ka-lawa* *mboon*
DEM.DIST.G5 AUG?-sir G5.SM-CONS/COND-come.from ONM

li-ka-ruka. *ji-jimwi.*
G5.SM-CONS/COND-jump AUG-genie

「そのもののけはボーンと出て、飛び上がりました。鬼です。」

(78) *li-ka-lawa* *li-ka-ruka* *wat^{h}u*
G5.SM-CONS/COND-come.from G5.SM-CONS/COND-jump people

uyo *uyo* *wapi* *wa-ṃ-kut^{h}e* *wapi.*
DEM.MED.G1 DEM.MED.G1 where 3PL.SM-3SG.OM-meet.SUBJ where

「そいつが出てきて、飛び上がり、人々は『そいつ、そいつ』。どこ？彼らはどこにそいつをみるっていうんでしょう？」

(79) *ha-wa-li-mu-ua* *tangu kati* *uo* *kwani.*
NEG-3PL.SM-PFV.NEG-3SG.OM-kill since inside DEM.MED.G3 why
「彼らが、あいつを中で殺さなかったのはなぜでしょう。」

(80) *hata w-ende* *wa-ka-mu-ue.*
even 3PL.SM-go.SUBJ 3PL.SM-CONS/COND-3SG.OM-kill.SUBJ
yulya *bwana ke-si-zi* *k-enda-zikwa.*
DEM.DIST.G1 sir 3SG.SM-finish.PFV-bury.PASS.HESIT 3SG.SM-go:IPFV-bury.PASS
「彼らは、そいつを殺しに行くべきでした。そのご主人は埋められに行きます。」

(81) *njo=ha-li-vatika* *k-enende* *kumbe vilya* *si=ṃtʰu .*
BGR=3SG.SM.NEG-PFV.NEG-get.STAT 3SG.SM-go.PFV FIL DEM.DIST.G8 NEG=person
「あいつは見つかりませんでした。行ってしまいました。あんな風で人ではありません。」

(82) *ji-nyama* *tu.*
AUG-animal only
「単なる怪物。」

(83) *ji-jimwi.*
AUG-genie
「鬼。」

(84) *li-sumku.*
G5.SM-run_away.PFV
「あいつは逃げました。」

(85) *haya paukwa iyo* *i-si.*
FIL tale DEM.MED.G9 G9.SM-finish.PFV
「はい、このお話はおしまい。」

(86) *nn.*
INT
「ええ。」

(87) *(jimwi ka-na-sema* *nini.)*
(genie 3SG.SM-IPFV-tell what)
（「小鬼はなんと言っている？」）

(88) *a-zikwe* *ja=vivyo.*
3SG.SM-bury.PASS.SUBJ like=DEM.MED.G8
「彼はあんな風に埋められて。」

(89) *(ka-na-chaka* *maboga.)*
(3SG.SM-IPFV-want pumpkins)
（「（小鬼は）かぼちゃが欲しい？」）

(90) *jimwi ka-na-chaka* *maboga.*
genie 3SG.SM-IPFV-want pumpkins
「小鬼がかぼちゃが欲しいって？」

(91) *a* *iyo* *i-wa-ko* *hea nyi-wa.*
INT DEM.MED.G9 G9.SM-COP.PFV-EXIST but 1SG.SM-COP.PFV
pʰanda nyingine. si=iyo.
split other.G9 NEG=DEM.MED.G9
「それ（そういう話）はあります。だけど、それはまた別の分かれ道（別のお話）。これではないよ。」

(92) *sasa ku-na* *jimwi ṃmoja.*
now G15.SM-POSS genie one.G1
「さて、小鬼が一匹おります。」

(93) *bwana ṃmoja k-evu.* *makame wa=makame na=e*
sir one.G1 3SG.SM-COP.HESIT PN of.G1=PN COM=PRO.G1
「あるご主人がおりまして、彼もマカメの子、マカメです。」

(94) *a-li-ondokea.* *makame wa=makame.*
3SG.SM-PST-leave.APPL PN of.G1=PN
「マカメの子、マカメがおりました。」

(95) *makame wa=makame uyo.* *a-ka-sema*
PN of.G1=PN DEM.MED.G1 3SG.SM-CONS/COND-tell
ka-na-chaka *ṃke.*
3SG.SM-IPFV-want wife
「そのマカメの子、マカメは妻が欲しいと言いました。」

(96) *mahaa k-enda-posa.*
place 3SG.SM-go:IPFV-ask_in_marriage
「ある場所に、彼は結婚の挨拶に行きます。」

(97) *a-k-ambiwa bi bwana weye leo*
3SG.SM-CONS/COND-tell.PASS lady.HESIT sir 2SG today
kw-isi-oa. harusi i-me-tendeka.
2SG.SM-finish.PFV-marry marriage G9.SM-PRF-do.STAT
「彼は言われました。『ご主人、あなたは今日結婚してしまいました。結婚式は執り行われました。』」

(98) *ku-vi-tambuu.*
2SG.SM-G8.OM-recognize.PFV
「分かった？」

(99) *u-ka-vita mahaa va-na ṃto.*
2SG.SM-CONS/COND-PASS place G16.SM-POSS river
ṃto-ni yuno mwanaṃke ka-cha-kw-ambia ende
river-LOC DEM.PROX.G1 woman 3SG.SM-IRR-2SG.OM-tell go.SUBJ:3SG.SM
a-k-oge. u-si-ṃ-k^{h}e ruhusa=yo
3SG.SM-CONS/COND-bathe.SUBJ 2SG.SM-NEG-3SG.OM-give.SUBJ permit=DEM.MED.G1
kw-enda-koga. mw-ache ja=vivyo.
INF-go-bathe 3SG.OM-leave.SUBJ like=DEM.MED.G8
「『あなたがある場所を通り過ぎたら、そこには川があります。 川で、この女は、水浴びしに行ってもよいかとあなたに言うだろう。 水浴びしに行く、許可を彼女に与えてはなりません。 そんな感じで、彼女は放っておきなさい。』」

(100) *basi wa-ke-nenda. sasa leo wa-na-kwenenda kwao.*
FIL 3PL.SM-CONS/COND-go now today 3PL.SM-IPFV-go their.G15
「こうして彼らは出発しました。今日、彼らは彼らのところへ行きます。」

(101) *wa-k-enenda wa-k-enenda wa-k-enenda.*
3PL.SM-CONS/COND-go 3PL.SM-CONS/COND-go 3PL.SM-CONS/COND-go
「彼らはどんどんと進みます。」

(102) *hata ku-fika valya ṃto-ni bwana. na-taka ku-koga.*
even INF-arrive DEM.DIST.G16 river-LOC sir IPFV:1SG.SM-want INF-bathe

bwana na-ona joto. yulya mwanaṃke.
sir IPFV:1SG.SM-see hotness DEM.DIST.G1 woman

「そこの川に着くと、『ご主人様、水浴びがしとうございます。ご主人様、私は暑いです。』とその女。」

(103) *bwana na-ona joto. a-ka-mw-ambia*
sir IPFV:1SG.SM-see hotness 3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-tell

hea mama ka-tw-ambii tu-ka-fika ṃto-ni
but mother 3SG.SM-1PL.OM-tell.PFV 1PL.SM-CONS/COND-arrive river-LOC

hebu oge=vyo.
PROH bathe.SUBJ:2SG.SM=DEM.MED.G8

「『ご主人様、私は暑いです。』彼は彼女に言います。『だけど、お母さんは私たちが川に着いたら、水浴びしてはならない、と私たちに言いました。』」

(104) *he bwana mie na-taka ku-koga. bwana na-ona joto.*
INT sir 1SG IPFV:1SG.SM-want INF-bathe sir IPFV:1SG.SM-see hotness

a-ka-mw-ambia haya ngia oge.
3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-tell FIL enter.IMP bathe.SUBJ:2SG.SM

「『ご主人様、水浴びがしとうございます。ご主人様、私は暑いです。』彼は彼女に言います。『分かった。（水に）入りなさい。水浴びをしなさい。』」

(105) *a-ka-vua nguo zake zote*
3SG.SM-CONS/COND-take_off clothes his/her.G10 all.G10

na=mapambo yake bi+harusi.
COM=ornaments his/her.G6 Mrs.+marriage

「服をすべて、装飾品を脱ぎ去ります。花嫁は。」

(106) *kama ja=yulya bi+harusi ya=sijaamini.*
like like=DEM.DIST.G1 Mrs.+marriage of.G1=PN

「スィジャアミニのあの花嫁みたいな感じ。」

(107) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV

「聞いた？」

(108) *a-ka-vua yoti. maguo yake.*
3SG.SM-CONS/COND-take_off all.G6 clothes his/her.G6
「彼女は、服という服すべてを脱ぎ去りました。」

(109) *hata a-k-oga a-k-oga*
even 3SG.SM-CONS/COND-bathe 3SG.SM-CONS/COND-bathe
a-ø-vyo-kwisa kumbe vilya li-ka-lawa ji-jimwi.
3SG.SM-PFV-finish FIL DEM.DIST.G8 G8.SM-CONS/COND-come_from AUG-genie
ṃlya kati ya=bahari.
DEM.DIST.G18 inside of.G9=sea
「彼女が水浴びをして、ちょうど終えたとき、水の中から、鬼が現れました。」

(110) *ṃlya ṃto-ni li-ka-lawa nini.*
DEM.DIST.G18 river-LOC G5-CONS/COND-come_from what
「その川の中から、何がでてきたでしょう。」

(111) *ji-jimwi li-ka-ja zilya nguo*
AUG-genie G5.SM-CONS/COND-come DEM.DIST.G10 clothes
za=ṃke=we valya juu zi li-ka-vwaa.
of.G10=wife=his/her DEM.DIST.G16 above HESIT G5.SM-CONS/COND-wear
「鬼は現れると、上にあった彼の（マカメの）妻の服を着ました。」

(112) *yulya bwana ka-na-sema mie yuno ṇjo=ṃke yangu*
DEM.DIST.G1 sir 3SG.SM-IPFV-tell 1SG DEM.PROX.G1 BGR=wife my.G9
sura yake ja=yeye. ṃke=we.
appearance his/her.G9 like=3SG wife=his/her
「そのご主人は、言います。『この人こそが私の妻だ。見た目は、彼女そのもの。』つまり、彼の妻のことです。」

(113) *haya sasa tw-enende.*
FIL now 1PL.SM-go.SUBJ
「『さあ、行きましょう。』」

(114) *wa-k-enenda wa-k-enenda ṃpaka kwao. nyumba-ni*
3PL.SM-CONS/COND-go 3PL.SM-CONS/COND-go until their.G15 house-LOC
「彼はどんどん進みました、彼らの家のところまで。』」

(115) *kijiji-ni.*
village-LOC
「村へ。」

(116) *wa-ø-vyo-fika* *ye* *ka-na-sema* *njo=ṃke=we.*
3PL.SM-PFV-G8.NMLZ-arrive 3SG 3SG.SM-IPFV-tell BGR=wife=his/her
「彼らが到着したとき、彼は、（この人こそが）彼の妻だと言いました。」

(117) *yulya* *bibi* *ṃlya* *hata* *wakati* *a-ø-o-lawa*
DEM.DIST.G1 lady DEM.DIST.G18 even time 3SG.SM-PFV-G3.NMLZ-come_from
a-ka-lola *valya* *juu* *mume=we* *ha-vo.*
3SG.SM-CONS/COND-look DEM.DIST.G16 above husband=his/her 3SG.SM.NEG-EXIST
a-ka-lola *valya* *juu* *nguo* *zake* *ha-zi-vo.*
3SG.SM-CONS/COND-look DEM.DIST.G16 above clothes his/her.G10 NEG-G10.SM-EXIST
「あそこの（川の中の）お嬢さんは、（川から）出てきたとき、 上を見まわして、彼女の夫はいません。 上を見まわして、彼女の服はありません。」

(118) *sasa ka-cha-kwenenda jaje.*
now 3SG.SM-IRR-go how
「さて、彼女はどこにどう行くのでしょう。」

(119) *a-k-enenda* *wala* *a-na-ko-kwenda*
3SG.SM-CONS/COND-go though 3SG.SM-IPFV-G15.NMLZ-go
ha-kw-iji.
3SG.SM.NEG-G15.OM-know.PFV
「彼女は、自分自身が向かう先を知らないで、出発しました。」

(120) *a-k-enenda* *a-k-enenda* *a-k-enenda*
3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-go
a-k-enenda *a-k-enenda.*
3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-go
「彼女はどんどん進みました。」

(121) *hata ku-fika mahaa vamoja ka-na-kona vijumba*
even INF-arrive place one.G16 3SG.SM-IPFV-see huts
ja=ivyo+ko a-ka-fuzia jaa-ni.
like=DEM.MED.G8+DEM.MED.G15 3SG.SM-CONS/COND-proceed rubbish-LOC
「あるところに着くと、 彼女は、あそこにあるような小屋を数軒みつけて、彼女はゴミ捨て場へとまっすぐに向かいました。」

(122) *va-tupwa chicha*
G16.SM-throw_away.PASS.PFV remains_of_grated_coconut
njaa i-na-mu-uma.
hunger G9.SM-IPFV-3SG.OM-hurt
「そこには、ココナッツの搾りかすが捨ててありました。彼女は空腹で苦しんでいるのです。」

(123) *a-ka-okota zilya chicha*
3SG.SM-CONS/COND-pick_up DEM.DIST.G10 remains_of_grated_coconut
a-ka-wa ka-na-kulya.
3SG.SM-CONS/COND-COP 3SG.SM-IPFV-eat
「彼女は、そのココナッツの搾りかすを拾い、食べていました。」

(124) *ku-na mwanakele ka-na-kwenda kulya jaa-ni.*
G15.SM-POSS child 3SG.SM-IPFV-go DEM.DIST.G15 rubbish-LOC
「そこに、子供が現れます。その子はゴミ捨て場へと向かっています。」

(125) *haa kuno hea yuno+ku ṃtʰu .*
INT DEM.DIST.15 but DEM.PROX.G1+DEM.PROX.G15 person
「『あれまあ、こっちに人がいる』」

(126) *tena a-k-emba yulya ṃtʰu.*
then 3SG.SM-CONS/COND-sing DEM.DIST.G1 person
「そしてその人は歌いました。」

(127) *maria we maria mama ka-tw-ambia maria.*
PN 2SG PN mother PFV.3SG-1PL.OM-tell PN
ṃto-ni tw-enda=ko maria. ṃkono wa=mwanangu maria.
river-LOC 1PL.SM-go:IPFV=DEM.MED.G15 PN hand of.G3=child:my PN
shikio la=mwanangu maria.
ear of.G5=child:my PN
「『マリアよ、マリア、お母さんは私たちに言いました。マリア。 川に私たちは行きます。マリア。私の子供の手、マリア。私の子供の耳、マリア。』」

(128) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(129) *he.*
INT
（小休止）

(130) *yulya mwanakele a-ka-piga mbio a-k-enda*
DEM.DIST.G1 child 3SG.SM-CONS/COND-hit speed 3SG.SM-CONS/COND-go
nyumba-ni mwao.
house-LOC their.G18
「その子供は急いで、自分たちの家へと行きました。」

(131) *a-ø-vyo-kwenda a-ka-mw-ambia mama=ake*
3SG.SM-PFV-G8.NMLZ-go 3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-tell mother=his/her.G9
「家に着いたとき、彼はお母さんに言いました。」

(132) *mama uko jaa-ni ku-na ṃtʰu ka-na-kwimba.*
mother DEM.MED.G15 rubbish-LOC G15.SM-POSS person 3SG.SM-IPFV-sing
ka-na-kwimba bali ka-wa uchi.
3SG.SM-IPFV-sing but 3SG.SM-COP.PFV naked
「『お母さん、そこのゴミ捨て場に人がいる。彼女は歌っている。彼女は歌っているけど、裸だよ。』」

(133) *N-kʰa=ga* *iyo* *nguo*
1SG.OM-give.IMP=bit DEM.MED.G9 clothes
mie ny-ende *ha-ṃ-kʰe.*
1SG 1SG.SM-go.SUBJ CONS/COND:1SG.SM-3SG.OM-give.SUBJ
「『その服をちょっとちょうだい。行って彼女にあげなきゃ。』」

(134) *a-ka-tupwa* *upande* *ja=uno* *a-k-enda*
3SG.SM-CONS/COND-throw_away.PASS direction like=DEM.PROX.G3 3SG.SM-CONS/COND-go
a-ka-ṃ-kʰa *a-ka-ji-bamba* *haya.*
3SG.SM-CONS/COND-3SG.OM-give 3SG.SM-CONS/COND-REFL-catch FIL
「彼は、こっちの方角に（服を）投げ出されると、行って、彼女に（服を）あげて、彼女はそれを身につけました。」

(135) *walya* *watʰu* *wa-ka-lawa*
DEM.DIST.G2 people 3PL.SM-CONS/COND-come_from
njo=wa-k-enda *wa-ka-ṃ-chukua.*
BGR=3PL.CONS/COND-go 3PL.SM-CONS/COND-3SG.OM-take
「その（そこの集落の）人々は出てきて、彼女を連れにいきました。」

(136) *wa-ø-vyo-kwenenda* *wa-k-enda* *wa-ka-ṃ-chukua.*
3PL.SM-PFV-G8.NMLZ-go 3PL.SM-CONS/COND-go 3PL.SM-CONS/COND-3SG.OM-take
「彼らは行ったとき、彼女を連れに行きました。」

(137) *haya a-ka-ja* *kuno.*
FIL 3SG.SM-come DEM.PROX.G15
「こうして、彼女は、こちらに来ました。」

(138) *a-ka-ja* *kuno* *tena kia* *ṃtʰu*
3SG.SM-CONS/COND-come DEM.PROX.G15 then every person
ka-na-sema *na=mie* *leo* *a-je* *kwangu.*
3SG.SM-IPFV-tell COM=1SG today 3SG.SM-come.SUBJ my.G15
「彼女がこちらに来ると、みんなが『今日は私のところに彼女はいらっしゃい』と言います。」

(139) *na=leo* *mie a-je* *kwangu k-enda* *a-k-emba.*
COM=today 1SG 3SG.SM-come.SUBJ my.G15 3SG.SM-go:IPFV 3SG.SM-CONS/COND-sing
「『今日も、私のところへいらっしゃい。』(そう言われて)彼女は歌いに行きます。」

(140) *maria we maria. mama ka-tw-ambia maria.*
PN 2SG PN mother PFV-1PL.OM-tell PN
ṃto-ni tw-enda=ko maria.
river-LOC 1PL.SM-go:IPFV=DEM.MED.G15 PN
ku-na dudu ovu maria. ṃguu wa=mwanangu maria.
G15.SM-POSS insect evil.G5 PN leg of.G3=child.my PN
shikio la=mwanangu maria. kichwa cha=mwanangu maria.
ear of.G5=child:my PN head of.G7=child:my PN
「『マリアよ、マリア、お母さんは私たちに言いました。マリア。 川に私たちは行きます。そこには、醜い虫がいます。マリア。私の子供の足、マリア。私の子供の耳、マリア。私の子供の頭、マリア。』」

(141) *he.*
INT
「え。」

(142) *he maria we maria ṃpaka siku moja.*
INT PN 2SG PN until day one
「『マリアよ、マリア』とある日まで。」

(143) *a-k-enda juu ya kwa=kia ṃtʰu ka-na-ṃ-chaka.*
3SG.SM-CONS/COND-go above of.G9 of.15=every person 3SG.SM-IPFV-3SG.OM-want
「彼女は彼女を望むどんな人のところにも行きました。」

(144) *a-k-enda a-ka-lawia*
3SG.SM-CONS/COND-go 3SG.SM-CONS/COND-come_from.APPL
valya va-na-vo yulya mume=we.
DEM.DIST.G16 G16.SM-POSS-G16.NMLZ DEM.DIST.G1 husband=his/her
「彼女は、彼女の夫がいるところへと行きました。」

(145) *sasa yulya mume=we njo=ka-na yulya jimwi.*
now DEM.DIST.G1 husband=his/her BGR=3SG.SM-POSS DEM.DIST.G1 genie
「さて、その夫は、件のとおり、あの小鬼とおります。」

(146) *lilya jimwi li-k-enua kichwa.*
DEM.DIST.G5 genie G5.SM-CONS/COND-raise head
「その小鬼は、頭を上げます。」

(147) *yamaa=ni iyo uchamu gani nye.*
colleague=AL.PL DEM.MED.G3 sweetness what.kind Q
「『みなさん、それはどんな素敵なものですか』」

(148) *maana jimwi k-evu a-ka-choea ja=ivyo.*
so genie 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-CONS/COND-speak like=DEM.MED.G8
「ちなみに、小鬼はそんな風にしゃべっていたのです。」

(149) *uno njo=uchamu gani.*
DEM.PROX.G3 BGR=sweetness what_kind
「『これはどんな素敵なものですか。』」

(150) *ee jamaa kichu kichamu=cho nye*
INT colleague thing sweet.G7=DEM.MED.G7 Q
ka-na-kuna nazi ilya nazi a-ka-y-acha.
3SG.SM-IPFV-scratch coconut DEM.DIST.G9 coconut 3SG.SM-CONS/COND-G9.OM-leave
「『お前さんよ、それは素敵なものです。』（小鬼は）ココナッツを削っています。そのココナッツを放りました。」

(151) *ee maria we maria. mama ka-tw-ambia maria.*
INT PN 2SG PN mother PFV:3SG-1PL.OM-tell PN
「『マリアよ、マリア、お母さんは私たちに言いました。マリア。』」

(152) *ilya ka-na-sikiliza. ilya nazi ka-y-acha.*
DEM.DIST.G9 3SG.SM-IPFV-listen DEM.DIST.G9 coconut 3SG.SM-G9.OM-leave.PFV
「それを小鬼は聞いています。ココナッツを放りました。」

(153) *ṃto-ni twenda=ko maria. ku-na dudu ovu maria*
river-LOC 1PL.SM-go:IPFV=DEM.MED.G15 PN G15.SM-POSS insect evil.G5 PN
ṃkono wa=mwangu maria. shikio la=mwangu maria.
hand of.G3=child.my PN ear of.G5=child:my PN
mume=we ka-tulii tu ka-na-ṃ-lola jimwi
husband=his/her 3SG.SM-be.calm.PFV only 3SG.SM-IPFV-3SG.OM-look genie
a-na-vyo-tenda valya juu ya=mbuzi.
3SG.SM-IPFV-G8.NMLZ-do DEM.DIST.G16 above of.G9=coconut_grater
「『川に私たちは行きます。そこには、醜い虫がいます。マリア。私の子供の手、マリア。私の子供の耳、マリア。』 彼女の夫は落ち着いています。彼は小鬼を見つめています。ココナッツを削る道具の上での小鬼の様を。」

(154) *ye ka-wa ja=vino jimwi.*
3SG 3SG.SM-COP.PFV like=DEM.PROX.G8 genie
「小鬼はこんな風です。」

(155) *hee mama ka-chw-ambiya maia. ṃcho-ni chwenja=ko maia.*
INT mother PRF-1PL.OM-tell PN river-LOC 1PL.SM-go=DEM.MED.G15 PN
ṃkonyo wa=mwanangu. ka-na-vua bangili=yo.
hand of.G3=child:my 3SG.SM-IPFV-take.off bangle
shikio ya=mwanangu maria. ka-na-vua haline.
ear of.G5=child:my PN 3SG.SM-IPFV-take.off earring
「『お母さんは私たちに言いました。マリア。川に私たちは行きます、マリア。私の子供の手』小鬼は、腕輪を脱ぎます。『私の子供の耳、マリアよ。』小鬼はピアスを外します。」

(156) *shikio ya=mwanangu maia. mama ka-chw-ambia maia. kichwa cha=mwanangu.*
ear of.G5=child:my PN mother PFV.3SG-1PL.OM-tell PN head of.G7=child:my
「『私の子供の耳、マリア。お母さんは私たちに言いました。マリア。私の子供の頭』」

(157) *kia a-na-vo-ji-guiya ka-na-vua kitʰu.*
every 3SG.SM-IPFV-G16.NMLZ-REFL-catch 3SG.SM-IPFV-take.off thing
「つかんだ（体の）いたるところで、小鬼は（身に着けている）ものを外しています。」

(158) *wa-ka-ṃ-lola* *k-ooto* *ṃkia na=mabawa.*
3PL.SM-CONS/COND-3SG.OM-look 3SG.SM-stretch tail COM=wings
「人々が目を向けると、小鬼はしっぽと翼を伸ばしました。」

(159) *uyo* *jimwi ka-ruku.*
DEM.MED.G1 genie 3SG.SM-jump.PFV
「その小鬼は飛び立ちました。」

(160) *avo* *ha-li-pigwa.*
DEM.MED.G16 3SG.SM.NEG-PFV.NEG-hit.PASS
「そこでは、小鬼は殴られませんでした。」

(161) *ha-li-tendwa* *jambo hea tena k-enende.*
3SG.SM.NEG-PFV.NEG-do.PASS matter but then 3SG.SM-go.PFV
「小鬼は何もされませんでした。行ってしまいました。」

(162) *yulya* *mwanaṃke a-ka-sema* *ṃ-na-kona* *mie*
DEM.DIST.G1 woman 3SG.SM-CONS/COND-tell 2PL.SM-IPFV-see 1SG
yuno *njo=ṃke* *yangu=vyo* *yulya* *mwanaṃme*
DEM.PROX.G1 BGR=wife my.G9=DEM.MED.G9 DEM.DIST.G1 man
a-ø-vyo-sema.
3SG.SM-PFV- G8.NMLZ-tell
「その女性は言いました。『あなたたちみていますか。』『この人こそが私の妻だ』とその男のいうところ」

(163) *maana yuno* *mie mama* *ka-ny-ambii* *ama*
so DEM.PROX.G1 1SG mother 3SG.SM-1SG.OM-tell.PFV like
uyo *ṃto-ni* *a-s-ende-koga.*
DEM.MED.G1 river-LOC 3SG.SM-NEG-go-bathe
「『こういうわけで、この私にお母さんは、この人は川で水浴びをしてはいけないと言いました。』」

(164) *ha-li-dumba=yo*
3SG.SM.NEG-PFV.NEG-agree=DEM.MED.G1
a-k-enda-koga *li-lawa* *ilyo* *ji-dudu.*
3SG.SM-CONS/COND-go-bathe G5.SM-come_from.PFV DEM.MED.G5 AUG-insect
「彼女は、同意しませんでした。彼女は水浴びをしに行って、あの巨虫が現れました。」

(165) *ji-jimwi.* *ilyo* *li-me-kwenenda.*
AUG-genie DEM.MED.G5 G5.SM-PRF-go
「あの鬼です。あいつは行ってしまいました。」

(166) *tena valya* *yulya* *bibi* *i-ka-tendeka*
then DEM.DIST.G16 DEM.DIST.G1 lady G9.SM-CONS/COND-do.STAT
aka *ka-fiki* *vake* *a-kae* *na=mume=we.*
3SG.SM.HESIT 3SG.SM-arrive.PFV his/her.G16 3SG.SM-sit.SUBJ COM=husband=his/her
「そして、そこでその女性は、彼女の夫と暮らすために彼のところに至ることになりました。」

(167) *ji-jimwi* *li-ruku* *ly-enende.*
AUG-genie G5.SM-jump.PFV G5.SM-go.PFV
「鬼は飛び立ちました。行ってしまいました。」

(168) *nn.*
INT
「んん。」

(169) *sasa jimwi.*
now genie
「さて、小鬼ですが。」

(170) *ye* *jimwi ka-kazwa* *N=maboga* *kwa=ku-lya.*
3SG genie 3SG.SM-please.PASS.PFV by=pumpkins of.G15=INF-eat
「小鬼は、かぼちゃを食べるのが好きです。」

(171) *vyakulya vyote* *basi vitʰu* *a-na-vyo-chaka* *maboga.*
foods all.G8 FIL things 3SG.SM-IPFV-G8.NMLZ-want pumpkins
「すべての食べ物で、彼が欲しいのはかぼちゃ。」

(172) *ku-vi-tambuu*
2SG.SM-G8.OM-recognize.PFV
「わかった？」

(173) *ee maana jimwi njo chu-lye maboga.*
INT so genie come.IMP 1PL.SM-eat.SUBJ pumpkins
jimwi njo chu-lye maboga. jimwi njo.
genie come.IMP 1PL.SM-eat.SUBJ pumpkins genie come.IMP
「だから、『小鬼よ、おいで、かぼちゃを食べましょう。小鬼よ、おいで、かぼちゃを食べましょう。小鬼よ、おいで。』」

(174) *njo=vyakulya vyake.*
BGR=foods his/her.G8
「まさに彼の食べ物です。」

(175) *ku-sikii.*
2SG.SM-hear.PFV
「聞いた？」

(176) *a-vate maboga a-vate kichwa cha=pʰaa.*
3SG.SM-get.SUBJ pumpkins 3SG.SM-get.SUBJ head of.G7=gazelle
「小鬼はかぼちゃを手に入れなければならない。小鬼はガゼルの頭を手に入れなければならない。」

(177) *njo=vyakulya vya=jimwi.*
BGR=foods of.G8=genie
「まさに小鬼の食べ物です。」

(178) *hea uyo jimwi mara nyingi ka-na-wa uko hadithi-ni*
but DEM.MED.G1 genie time many.G10 3SG.SM-IPFV-COP DEM.MED.G1 story-LOC
「だけど、その小鬼は、多くの場合、物語の中にいます。」

(179) *ku-na-ko paukwa.*
G15.SM-POSS-G15.NMLZ tale
「お話の中。」

(180) *ee.*
INT
「そう。」

(181) *haya.*
FIL
「はい。」

(182) *ee.*
INT
「うん。」

(183) *hadithi nyingi tu.*
story many.G9/G10 only
「多くのお話よ。」

(184) *haya.*
FIL
「はい。」

(185) *(u-ø-zo-N-hadithia.)*
2SG.SM-PFV-G10.NMLZ-1SG.OM-narrate)
（「あなたが私に話してくれたもの。」）

(186) *ee.*
INT
「うん。」

(187) *(ku-fundishwa N=nani)*
(2SG.SM-teach.PASS.PFV by=who)
「（「誰に教えてもらったの？」）」

(188) *mie N-fundishwa N=mama=angu k-evu*
1SG 1SG.SM-teach.PASS.PFV by=mother=my 3SG.SM-COP.PST
a-ka-N-lea. ṃtʰu ṃzima vino.
3SG.SM-CONS/COND-1SG.OM-bring_up person whole.G1 DEM.PROX.G8
「私？私のお母さんに教えてもらいました。彼女が私を育てました。こんな感じの（今の私のような）大人です。」

(189) *(wapi. uko tunguu.)*
(where DEM.MED.G15 PN)
「(「どこで？トゥングウ？)」

(190) *ee uko tunguu. ee.*
INT DEM.MED.G15 PN INT
「そう、トゥングウで。」

(191) *njo=a-ø-ko-fundisha.*
BGR=3SG.SM-PFV-G15.NMLZ-teach
「まさに、そこで教えてくれました。」

(192) *tena wakati uo na-ngoja vyakulya v-ivwe*
then time DEM.MED.G3 IPFV:1SG.SM-wait foods G8.SM-ripen.SUBJ
kiasi saa mbili njo=kw-aza mama=angu ka-na-kuna nazi.
degree hour two BGR=INF-begin mother=my 3SG.SM-IPFV-scratch coconut
「そのとき、私は、ごはんができるのを待っています。大体、8 時くらい。ちょうどそのときに、私のお母さんはココナッツを削り始めます。」

(193) *tena na-tendwa hadithi N-si-lale.*
then IPFV:1SG.SM-do.PASS story 1SG.SM-NEG-sleep.SUBJ
「そして、私は、寝ないようにお話をしてもらいます。」

(194) *vyakulya vi-na-vikwa N-je nyi-lye.*
foods G8.SM-IPFV-cook.PASS 1SG.SM-come.SUBJ 1SG.SM-eat.SUBJ
「ごはんは料理されています。私は来て食べなければならない。」

(195) *tena haya mama ka-na-tenda hadithi ama baba=angu*
then FIL mother 3SG.SM-IPFV-do story or father=my
ka-na-tenda hadithi N-si-lale.
3SG.SM-IPFV-do story 1SG.SM-NEG-sleep.SUBJ
「そして、お母さんはお話をする。あるいは私のお父さんがお話をする。私が寝ないように。」

(196) *maana chʰa-sizia.*
so IRR:1SG.SM-doze
「だって、私はうとうとするだろうから。」

(197) *hea zi-ka-tendwa izo.*
but G10.SM-CONS/COND-do.PASS DEM.MED.G10
「だけど、それらは、話されます。」

(198) *si-sizii chʰa-wahi vilya vyakulya*
1SG.SM.NEG-doze.PFV IRR:1SG.SM-be.in.time DEM.DIST.G8 foods
vi-na-vyo-kuniwa nazi.
G8.SM-IPFV-G8.NMLZ-scratch.APPL.PASS coconut
「私は、うとうとしません。ココナッツが削られてできたそのごはんまで起きていられます。」

(199) *wakati uo maisha magumu.*
time DEM.MED.G3 life hard.G6
「その頃、生活は厳しかった。」

(200) *ezi zetu tu-ø-vyo-lelegwa suwe makoto. maisha magumu sana.*
age our.G10 1PL.SM-PFV-G8.NMLZ-bring.up.PASS 1PL PN life hard.G6 very
「私たちが育てられた時代、生活はとても厳しかったんだよ、マコト。」

(201) *nn.*
INT
「うん。」

(202) *maana pesa y-evu ha ngumu ha-ku-na pesa*
so money G9.SM-COP.PST HESIT hard.G9 NEG-G15.SM-POSS money
「だって、お金（を得るの）は難しかった。お金はない。」

(203) *bali vyakulya u-ka-na pesa vy-evu njo=vi-wa-ko.*
but foods 2SG.SM-CONS/COND-POSS money G8.SM-COP.PST BGR=G8.SM-COP.PFV-EXIST
「だけど、ごはんは、あなたにお金があれば、あったのよ。」

(204) *na=tw-evu tu-ka-lima*
COM=1PL.SM-COP.PST 1PL.SM-CONS/COND-cultivate
ja=ṃ-ka-lima ku-na-vi-vata.
like=2PL.SM-CONS/COND-cultivate 2SG.SM-IPFV-G8.OM-get
「そして、私たちは、野を耕していました。あなたたちが耕せば、それを（ごはんを）得るように。」

(205) *maana wakati uo vua zi-na-kunya.*
so time DEM.MED.G3 rain G10.SM-IPFV-rain
「なぜなら、そのころ、雨が降っていましたから。」

(206) *haya.*
FIL
「そう」

(207) *(a-ka-ku-hadithia kiswahili au kikae.)*
3SG.SM-CONS/COND-2SG.OM-narrate Swahili or Kikae
（「（お母さんは）お話を、スワヒリ語とカエ方言のどちらでしていましたか？）

(208) *kikae. njo=ka-na-ny-ambia kwa=kikae.*
Kikae BGR=3SG.SM-IPFV-1SG.OM-tell of.G15=Kikae
k-evu a-ka-choea kikae mama=angu.
3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-CONS/COND-speak Kikae mother=my
「カエ方言よ。カエ方言で彼女は私に話していました。彼女はカエ方言でしゃべっていました。私のお母さんは。」

略号一覧

1	first person（1 人称）
2	second person（2 人称）
3	third person（3 人称）
AL	allocutive（聞き手）
APPL	applicative（適用）
AUG	augmentative（指大）
BGR	background（背景）
CAUS	causative（使役）
CF	counter-factual（反実仮想）
COM	comitative（共格）
COND	conditional（条件）
CONS	consecutive（継起）
COP	copula（コピュラ）
DEM	demonstrative（指示詞）
DIM	diminutive（指小）
DIST	distal（遠称）
EXIST	existence（存在）
FIL	filler（フィラー）
G	gender（名詞クラス）
HESIT	hesitative（言いよどみ）
IMP	imperative（命令）
INF	infinitive（不定）
INT	interjective（間投詞）
IPFV	imperfective（未完結）
IRR	irrealis（未実現）
LOC	locative（所格）
MED	medial（中称）
NEG	negative（否定）
NMLZ	nominalizer（準体言化）
OM	object marker（目的語標識）
ONM	onomatopoeia（オノマトペ）
PASS	passive（受動）
PFV	perfective（完結）
PL	plural（複数）
PN	proper noun（固有名詞）
POSS	possessive（所有）
PRF	perfect（完了）
PRO	pronoun（代名詞）
PROH	prohibitive（禁止）
PROX	proximal（近称）
PST	past（過去）
Q	question（疑問）
RED	reduplication（重複）
REFL	reflexive（再帰）
SG	singular（単数）
SM	subject marker（主語標識）
STAT	stative（状態）
SUBJ	subjunctive（接続）

参考文献

Baraza la Kiswahili la Zanzibar (BAKIZA). (2012). *Kamusi la lahaja ya Kimakunduchi*. Zanzibar: Baraza la Kiswahili la Zanzibar.

Contini-Morava, E. (1994). *Noun classification in Swahili*. Research reports from the Inst. for Advanced Technology in the Humanities, Univ. of Virginia. Retrieved September 4, 2015, from http://www2.iath.virginia.edu/swahili/swahili.html

Katamba, F. (2003). Bantu nominal morphology. In D. Nurse, & G. Philippson (Eds.), *The Bantu Languages* (pp. 103–120). London: Routledge.

Meinhof, C. (1932). *Introduction to the phonology of the Bantu languages* (traslated by N. J. van Waremelo). Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

Nurse, D. (1982). A tentative classification of the primary dialects of Swahili. *Sprache und Geshichte in Afrika 4*, 165–206.

Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993). *Swahili and Sabaki: A linguistic history.* Berkeley: University of California Press.

Racine-Issa, O. (2002). *Description du Kikae: Parler Swahili du sud de Zanzibar: Suivie de cinq contes.* Leuven: Peeters Publishers.

Whiteley, W. H. (1959). An introduction to the rural dialects of Zanzibar, part1. *Swahili 30*, 41–69.

柴谷方良. (2014). Rethinking relative clause. 第 92 回待兼山ことばの会講演スライド. http://www.let.osaka-u.ac.jp/eigogaku/Matt_Shibatani_koenkai.pdf（閲覧日 2017 年 3 月 30 日）

古本 真. (2016).「スワヒリ語カエ方言の「関係節」－準体言としての記述－」『言語記述論集 8』147–172.

受理日 2017 年 4 月 10 日

コプト・エジプト語サイード方言における母音体系と母音字の重複の音価：白修道院長・アトリペのシェヌーテによる『第六カノン』の写本をもとに[1]

宮川　創

ゲッティンゲン大学大学院人文学研究科エジプト学・コプト学専攻、京都大学大学院文学研究科言語学専修、ドイツ学術振興協会共同研究センター1136 (CRC1136)「古代から中世および古典イスラム期にかけての地中海圏とその周辺の文化における教育と宗教」
smiyaga@gwdg.de

キーワード：コプト・エジプト語、母音字重複、母音体系、写本、シェヌーテ

1　はじめに

本稿では、コプト語の母音組織、特に母音字の音価と母音字の重複の問題について論じる。まず従来の諸説を検討し、新たな論拠を加えながら、母音字の使い分けについては開口度説、母音字重複については声門閉鎖音説の可能性が高いことを論じる。最後に、筆者が行った写本における語中改行の調査による新たな事実を提示し、その結果が母音字重複の声門閉鎖音説を支持することを示す。

1.1 コプト・エジプト語について

コプト・エジプト語は、アフロ＝アジア語族エジプト語派を単独で構成するエジプト語の最終形態であり、紀元前 32 世紀頃のアビュドス U-j 墓から出土した最古の記録[2]から文字で記録されてきたエジプト語の最も新しい言語段階である。コプト・エジプト語は、コプト文字で書かれるようになったエジプト語であり、民衆文字エジプト語の一部として考えられるエジプト語の散発的なギリシア文字転写であるいわゆる古コプト語を除き、紀元後 4 世紀頃から一般化し、現在は、コプト教徒の活動家[3]による言語復興運動はあるものの、主にコプト・キリスト教会の典礼言語に用いられ、口語としてはいわゆる dormant[4]の状態になっていると言える。

---

[1] この論文は、第 51 回言語記述研究会例会で行った口頭研究発表「コプト・エジプト語サイード方言の母音体系」、平成 25 年度西アジア言語研究会で行った口頭研究発表「コプト・エジプト語サイード方言の母音音韻論」、第 40 回古代エジプト研究会で行った口頭研究発表「エジプト語歴史音韻論とコプト・エジプト語の母音字重複について」を加筆・修正した上、その内容をさらに発展させたものである。発表準備・論文執筆中に様々な側面での助言をくださった吉田豊先生、発表の際に貴重なコメントをくださった吉田和彦先生、笈川博一先生、永井正勝先生、吉野宏志氏、論文執筆にあたって貴重な助言をくださった千田俊太郎先生、鈴木博之氏に感謝する。

[2] Dreyer 2011:127-136 をみよ。

[3] この中でも、イクラディユース・ラビーブはコプト語復興運動を牽引した(Basta 1991, 三代川 2013)。

[4] Lewis et al. 2016 による。

コプト・エジプト語は、エジプト語としての連続性を強調した歴史言語学的な用語であり、一般的にはコプト語と呼ばれる。本稿では、こののち、便宜のためコプト語と呼称する。また、コプト語以前のエジプト語を、コプト語は古代ローマ期にも使われていたため若干齟齬はあるものの、古代エジプト語と便宜のために称することにする[5]。

コプト語には数種の方言がある。学者によってはさらに詳細に区分けする学者もいるが、大別すれば、ボハイラ方言(ボハイル方言、ブハイラ方言)、オクシュリュンコス方言(オクシリンコス方言、中部エジプト方言)、ファイユーム方言、サイード方言(サヒド方言、サヒード方言、サイド方言)、リュコポリス方言(リコポリス方言、準アフミーム方言、準アクミーム方言)、アフミーム方言(アクミーム方言)に分かれる。このほか、綴りなど異なるものとして、古テーベ方言(原サイード方言)、古ボハイラ方言があるが、これらの資料数はごく少数である。なお、ギリシア文字で転写した民衆文字エジプト語を古コプト語と称するが、これらはエジプト語言語学者の間では、民衆文字エジプト語に入れるのが常である(Kammerzell 2000:97)。本稿では、このうち、最も資料が多く残されたサイード方言を中心に論ずる。サイード方言は、3 世紀頃にコプト語の諸方言のなかで、標準語の地位を確立した方言であり、その地位は 9 世紀頃にボハイラ方言が標準語的な地位を奪うまで続き、その間に多数の文献を残した。グノーシス主義と原始キリスト教を知る上で重要な地位を占めているナグ・ハマディ写本群の文書の大半も、リュコポリス方言の影響をある程度受けたサイード方言で書かれている。

コプト語は 24 のギリシア文字のアンシャル体と大部分の方言では 6 ないし 7 のエジプト民衆文字から派生した文字を用いる。サイード方言では母音字は 6 つである。ここでは、コプト語が用いるこの音素文字(アルファベット)をコプト文字と呼称する。このコプト文字は、母音を表わす文字を完全に備えている。これに対して、コプト語以前のエジプト語で用いられていた 3 種のエジプト文字(聖刻文字、神聖文字、民衆文字)は、音素文字、表語文字、決定文字の混合であり、このうちの音素文字は主に子音を表す文字のみ(アブジャド)であった。よって、母音字を有するという点においてコプト文字は母音字を有しない古代エジプト文字とは異なる。コプト文字は、一般的な方言では、6 つの母音文字および 24 ないし 25 の子音文字に大別される。母音文字を備えている点で、コプト語は聖刻文字の解読者ジャン・フランソワ・シャンポリオン以来、古代エジプト語、つまり古エジプト語、中エジプト語、新エジプト語、民衆文字エジプト語(いわゆるデモティック)の母音を再建する鍵となった。この古代エジプト語の母音を再建する分野を、エジプト語言語学の中では、ヴォーカリゼイション(vocalization)と呼ぶ。もちろん、アッカド語などの、楔形文字によるエジプト語転写、および古コプト語と呼ばれる、民衆文字エジプト語のギリシア文字転写も vocalization の鍵となりうるのだが、これらの資料の数は限られているのに対し、コプト語

[5] コプト語は古代末期から中世にかけて最も盛んに用いられ、近現代でも典礼言語として使用されているという点において古代のみに用いられた言語ではない。それに対し、コプト語より前のエジプト語は、古代にのみ用いられたという点において古代エジプト語である。

資料は豊富にある。このため、コプト語の音声は vocalization の最大の根拠となるのである。また、コプト語以前のエジプト語の子音の再建に関しても、コプト語の子音が最重要の資料となっている。このように古代エジプト語の音組織の再建の分野でコプト語は最も重視されてはいるが、コプト語は音素文字という音素を個別に表わす音素表記に極めて近い文字を使っていたのにかかわらず、コプト語の音価自体は、完全に解明されたとは到底言えない。これは、コプト文字がギリシア文字というギリシア語を表記するための文字を借用した結果である。子音に関しては、コプト文字は、民衆文字からギリシア語にはない子音音素を表わす文字を転用しているため、ある程度の精確さは担保されている。しかしながら、母音文字にかんしては、ギリシア文字とまったく同じであり、民衆文字から追加された文字はない。このため、コプト語の母音組織については未だ不明瞭である。本稿では、このコプト語の母音組織、特に母音字の音価と母音字の重複の問題について論じる。

表 1：コプト文字の一覧

	文字
子音字	ⲃ ⲅ ⲇ ⲍ ⲏ ⲑ ⲕ ⲗ ⲙ ⲛ ⲝ ⲡ ⲣ ⲥ ⲧ ⲫ ⲭ ⲩ ⲱ ϥ ϧ[6] ϩ ϫ ϭ ϯ[7] (ⲇ ⲉ ⲋ ⲍ ⲟ ϣ ϫ ⲗ ⲗ ⲗ ⲗ ⲗ ⲗ ⲗ ⲗ ⲗ ⲗ)[8] ⲛ[9]
母音字	ⲁ ⲉ ⲏ ⲓ ⲱ ⲟ ⲩ
母音+子音字	ϯ /ti/
補助記号	ⲁ̄[10] ⲁ̅ ⲁ̄ⲃ[11] ⲁ̄ⲁ̄[12] ⲁ̄[13] ⲁ̈ ⲁ̇ ⲁ̀[14]
数字にのみ用いられる文字[15]	ϛ

[6] 主にボハイラ方言で用いられ、サイード方言では用いられない。

[7] 主にアフミーム方言で用いられ、サイード方言では用いられない。

[8] これらは、古コプト語や、古テーベ方言(P 方言)など、古い方言に見られる。注意すべきは、古コプト語や古テーベ方言で、ⲗが声門閉鎖音を、ⲋが有声咽頭摩擦音を表すとされていることである。Allen (2013:12)および Kasser (1991)をみよ。

[9] 行末で使われ、ⲛ <n>と同じである。

[10] 単独スープラリニアーストローク。主に 1 子音の単語に用いられるが、印刷の関係上、現代の古い諸エディションでは次の 2 子音結合スープラリニアーストロークや 3 子音結合スープラリニアーストロークの代用として用いられてきた。これらのエディションでは、2 子音結合スープラリニアーストロークの代用では後ろの子音に、3 子音結合スープラリニアーストロークの代用では中央の子音字に、単独スープラリニアーストロークが用いられている。

[11] 2 子音結合スープラリニアーストローク。3 子音結合スープラリニアーストロークもある。

[12] 主に、疑問代名詞のⲟⲩ <ou>に用いられる。

[13] 母音字の上に用いられることが多い。

[14] ボハイラ方言で主に用いられる。ジンキムと呼ばれる。

[15] コプト語の数字には、古代ギリシア語やゲエズ語などと同様、アルファベットが用いられた。ⲁ =1, ⲃ = 2, ⲅ = 3, ⲇ = 4…である。なお、文字を数字として用いられる時は上線(スープラリニアーストローク)を持つか、上線と下線の両方を持つことが多い。数字の 6 は通常のコプト語のアルファベットとしては用いられないソウϛを用いる。

コプト文字の母音文字は 7 つある。すなわち、アルファ(ⲁ)、エータ(ⲏ)、イオタ(ⲓ)、エプシロン(ⲉ)、オミクロン(ⲟ)、ユプシロン(ⲩ)、オメガ(ⲱ)である。このうち、コプト語では、ギリシア語からの借用語を除き、ユプシロンが単独で使われることはなく、つねにオミクロンの後で用いられる。アルファは広母音、エータおよびエプシロンは非円唇前舌中母音に近い母音、オメガおよびオミクロンは円唇後舌中母音に近い母音、イオタは非円唇前舌狭母音を表し、オミクロンとユプシロンの組み合わせは円唇後舌狭母音、エプシロンとイオタの組み合わせは円唇前舌狭母音をそれぞれ表わすとされている。

表 2：ギリシア文字母音字とコプト文字母音字との比較

	アルファ	エプシロン	イオタ	オミクロン	ユプシロン	エータ	オメガ
ギリシア文字	α	ε	ι	ο	υ	η	ω
コプト文字	ⲁ	ⲉ	ⲓ	ⲟ	ⲩ	ⲏ	ⲱ

2 コプト語母音字の問題：ⲏとⲉ、 ⲟとⲱ の対立と母音字重複

2.1 問題の所在とギリシア語および古ヌビア語における証拠

現在、これらの母音字の音価を巡って学者間で意見が対立している。すなわち、エータとエプシロン、オメガとオミクロンの音価の差異を説明するかという問題、および母音字が重複した時の音価はどうなるかという問題である。この解決策として、エータとオメガはエプシロンとオミクロンのそれぞれ長母音とする説(音長説)、エータとオメガはエプシロンとオミクロンとはそれぞれ別の開口度であるとする説(開口度説)、母音字重複に関しては、母音字重複はその母音字の音価の長母音を表すとする説(長母音説)、母音字重複はその母音字の音価の後に声門閉鎖音が来ることを表すとする説(声門閉鎖音説)がある。例えば、(0)エータがエプシロンの、オメガがオミクロンのそれぞれ長母音(音長説)で、かつ重複母音字が長母音を表す(長母音説)ならば、エータおよびオメガの重複は超長母音を表すということになる。また、この(0)の条件下では、エプシロンの重複とエータ、オミクロンの重複とオメガは同じ音価であるということになる。もちろん、世界にはエストニア語[16]など、母音の超長母音がある言語もあるが、このような超長母音は今日伝えられているコプト語の教会発音にはなく、また、開口度が中程度の母音にのみ、超長母音が存在するということを支持する証拠もない。このように、長母音説と音長説の組み合わせは蓋然性が低いのに比べ、(1)開口度説と音長説、および(2)長母音説と声門破裂音説、(3)開口度説と声門破裂音説はそれぞれありえる。(1)はグリーンバーグ(Greenberg 1962)によって、(2)はレイトン (Layton 2011)、デパイト (Depuydt 1993)、クヌセン(Knudsen 1962)らによって(3)はライントゲス(Reintges 2004)、ラムディン(Lambdin 1983)らによって支持されている。なお、開口度説の中では、ライントゲスのみがエータとオメガをエプシロンとオミクロンよりも口の開きが

[16] 査読者の 1 人によれば、エストニア語の超長母音は超分節音的音特徴として考えるのが現在の学界の傾向であるとのことである。

広い音であるとするのに対し、その他の学者は、口の開きが狭い音であるとしている。(0)の長母音説と音長説は、誰も拒否する理由を明確にはしていないものの、おそらく上記の理由などで支持する者はいない。

(0)の説・・・н[eː], є [e], ω [oː], ο [o], ⲁⲁ [ɑː], нн[eːː], ωω [oːː]
(1)の説・・・н[e], є [ɜ], ω [o], ο [ɔ], ⲁⲁ [ɑː], нн[eː], ωω [oː]
(2)の説・・・н[eː], є [e], ω [oː], ο [o], ⲁⲁ [ɑʔ], нн[eʔ], ωω [oʔ]
(3)の説・・・н[e], є [ɜ], ω [o], ο [ɔ], ⲁⲁ [ɑʔ], нн[eʔ], ωω [oʔ]

現在、文法記述において最も一般的な説は(2)である。可能性が低い(0)を外すと、(1)-(3)のうちで、唯一長母音説をとっているのも(2)である。しかしながら、この説は、特に長母音説において、欠点がある。前述したように、コプト文字の母音字はギリシア文字から借用されたものである。コプト文字の使用が標準化し始めた紀元後 2 世紀[17]のギリシア語は、コイネー・ギリシア語と呼ばれる。エジプトはその乾燥した気候と、パピルスの生産地とのこともあって、アレクサンドロス大王のエジプト征服(紀元前 332 年)から、プトレマイオス朝エジプト(紀元前 305 年–紀元前 30 年)、ローマ帝国、ビザンツ帝国の属州エジプト(紀元前 30 年–紀元後 639 年)の約 1,000 年間にかけて、ギリシア語パピルスが最も数多く残されている土地である。これらの豊富なパピルス資料から、コイネー・ギリシア語のエジプトでの発音を再建する試みがなされてきた。アレクサンドロス大王がエジプトを征服し，暫くしてプトレマイオス朝が樹立された直後の紀元前 3 世紀の教育を受けた話者のギリシア語母音字の発音は Horrock (2010)によれば、以下のとおりである。

表 3：紀元前 3 世紀・高位変種(Horrock 2010:166)

文字	音価
ι, ει (子音の前もしくは語末で), ηι (ῃ)	[iː]
ι	[i]
υ	[yː]
υ	[y]
ει (母音の前で), η	[eː]
ε	[e]
α	[aː]
α	[a]
ω	[oː]
ο	[o]

[17] 「コプト文字の成立時期については、ギリシア文字からの借用字形が E や Σ や Ω ではなく、єやcやωであることから、ヘレニズム時代以降であることが明らかである。また、アルファベット式数字表記もこれを支持する。なぜなら、いずれもその頃に現われ、ローマ時代に一般化したからである。」（塚本 2001:437）

ου	[u:]
ου	[u]
υι	[yi]
ευ	[eu]
ηυ	[e:u]
αι (ᾳ)	[a:i]
αι	[ai]
αυ	[au]
ωι (ῳ)	[o:i]
οι	[oi]

これが、紀元前 2 世紀までには次のように変わる。この時期には、音長説を支持しうるような、母音の長短の区別は消えており、η と ε の区別は舌の高さの違いになっている。

表 4：紀元前 2 世紀(Horrock 2010:167)

文字	音価
ι, ει (子音の前もしくは語末で), ηι (ῃ)	[i]
υ	[y]
ει (母音の前で), η	[ę]
οι	[ø]
ε, αι	[e]
α, αι (ᾳ)	[a]
ο, ω, ωι (ῳ)	[o]
ου	[u]
υι	[yi]
ηι	[iw]
ευ	[ew]
αυ	[aw]

次に，サイード方言で多数のコプト語文献が書かれた時期である、ビザンツ期初期(紀元後 4 世紀末–)のコイネー・ギリシア語エジプト方言の母音字の音価を以下の表に示す。引き続き、音長説で弁別的とされた母音の長短の区別はなくなっている。

表 5：ビザンツ期初期エジプト(Horrock 2010:167)

文字	音価
ι, ει, η, ηι	[i]
υ, υι, οι	[y]
ε, αι	[e]
α, αι	[a]
ο, ω, ωι	[o]
ου	[u]
ηυ	[if], [iv]
ευ	[ef], [ev]
αυ	[af], [av]

Horrock (2010)による再建は Allen (1987)による再建とも概ね合致している。このギリシア文字の音価は、コプト文字の音価における開口度説を支持する。

また、コプト文字にメロエ文字から派生した数種の文字を加えた文字を用いた古ヌビア語(ナイル・サハラ語族)では、現代ヌビア諸語からの再建から、短母音と長母音の区別があるとされる。ブラウンはその古ヌビア語の文法書(Browne 1989)の中で、開口度説を取り、かつ母音字の重複に関しては長母音説を取っている。ⲏとⲉ、ⲱとoに関して音長説を取らない理由は、ノビイン語やドンゴラウィー語などの現代ヌビア諸語の長母音は、開口度が中程度の母音だけでないこと、および、これらにはエストニア語にみられるような超長母音が存在しないこと、現代ヌビア諸語と古ヌビア語の同源語において、古ヌビア語の母音字の重複が現代ヌビア諸語の長母音にあたることが考えられる。

表 6：古ヌビア語におけるコプト文字母音字の音価(Browne 1989:3)

古ヌビア語コプト文字	音価
ⲁ	[a]
ⲟ	[o]
ⲱ	[o]
ⲓ	[i]
ⲉ	[e]
ⲏ	[i]
ⲟⲩ	[u]
ⲉ̄	[e]
ⲉⲓ	[i]

これらのギリシア語および古ヌビア語の母音字の音価の再建から、コプト語の母音字におけるエータとエプシロン、オメガとオミクロンの違いが音長ではなく、開口度であることが推定される。

2.2 古典アラビア語における証拠

グリーンバーグは、コプト語の母音字の音価を扱ったその 1962 年の論文(Greenberg 1962)において、古典アラビア語単語のコプト語転写を用いて音長説を退け、開口度説を支持している。古典アラビア語単語のコプト語転写、およびコプト語単語のアラビア語転写に関しては Richter (2006)をみよ。アラビア語は、紀元後 639–642 年に行われた、第 2 代正統カリフであるウマル・イブン・アル＝ハッターブのイスラム共同体(ウンマ)による、将軍アムル・イブン・アル＝アースに率いられたイスラム軍のエジプト征服後、行政言語としてエジプトで用いられるようになり、中世のイスラム世界の医術の興隆もあって、イスラム征服後のコプト語医学書において医学・薬学の専門用語としてアラビア語の単語はよく用いられるようになった。

表 7：アラビア語単語のコプト文字転写(Greenberg 1962 および Chassinat 1921)

	アラビア語単語	コプト文字転写
(i)	حَولَان /ḥawla:n/	ϩⲁⲩⲗⲉⲛ <haulen>
(ii)	مِلح /milḥ/	ⲙⲏⲣϩ̄ <mêlh>
(iii)	صبِر /ṣbir/	ⲥⲁⲡⲏⲣ <sapêr>
(iv)	البُرَام /albura:m/	ⲁⲣϥⲱⲗⲙ <arfôlm>

グリーンバーグが用いたのは、シャシナによって編集された医学パピルス(Chassinat 1921)である。彼は、 表 7 の(i)–(iii)の 3 例を挙げている。(i)の例では、アラビア語の長母音/ā/にコプト文字エプシロン<ⲉ>が対応している。(ii)の例では、アラビア語の短母音/u/をコプト文字の<ô>で表しており、(iii)の例では、アラビア語の短母音/i/をコプト文字の<ê>で表している。また、(iv)は、Greenberg (1962)では挙げられていないが Chassinat (1921:22)には存在する例である。(iv)ではアラビア語の短母音/u/が、コプト語のオメガに対応していることがわかる。

(ii)と(iii)ではⲏが/i/に、(i)の例からはⲉがアラビア語の/a:/に近かったことがわかる。これらは，ⲏの開口度が狭かったこと、および、ⲉの開口度が広かったことを示し、開口度説の証拠になりうる。アラビア語は，3 母音体系の言語であり，かつ長母音と短母音の区別がある。よって、このパピルスでは，アラビア語の長母音である/a:/をⲉで，短母音である/u/をⲱで音訳していることになる。コプト語内でも、ⲱとⲟⲩの同語異綴りがサイード方言内でみられることが、岡島 (1942)によって指摘されている[18]。アラビア語の/u/がⲱで書かれていること、ⲟⲩとⲟが置き換わらないことから、ⲱはⲟよりも開口度が小さい母音である可能性が高く、これは開口度説を支持する。

音長説ではⲱとⲏは長母音で、ⲟとⲉは短母音である。もし、音長説が正しければ、ⲱとⲏはⲟとⲉに対して、明確に長かったことになり、明確な母音の長短があるアラビア語の短母音を借用する際は、ⲱとⲏは用いられなかったはずである。しかし、実際は(iv)のように短母音/u/に対してⲱが(ii)と(iii)のようにアラビア語短母音/i/に対してⲏが用いられた。この音長説に対する反例は、音長説ではなく開口度説を支持する根拠の 1 つとなる。

また、仮にアラビア語の長短の区別がコプト語にもあるとすると、表 7 のデータからみるとⲉが長母音でⲏが短母音ということになる。なぜなら、表 7 の(ii)と(iii)の例では、ⲏがアラビア語の短母音の/i/に、(i)の例では、ⲉがアラビア語の長母音の/a:/に対応しているからである。しかし、この解釈は、コプト文字ⲉ、ⲏ の元になったギリシア文字 ε、η の音価史からいって、ありえない。そこで、このコプト文字転写の基準になった当時のコプト語のⲉとⲏ、ⲟとⲱの発音には長短の区別がなく、母音の音色の違いによって書き分けられたのだと考えるほかない。よって、このアラビア語コプト語転写のデータは、この点でも開口度説を支持する。

[18] 「稀ニ，子音 ϣ ϫ 及ビ ϭ ノ後ノⲱ ニⲟⲩガ表ハレル．例ヘバ ϣⲟⲩϣⲧ̄ “窓” ノ代リニ ϣⲱϣⲧ̄」（岡島 1942:13）

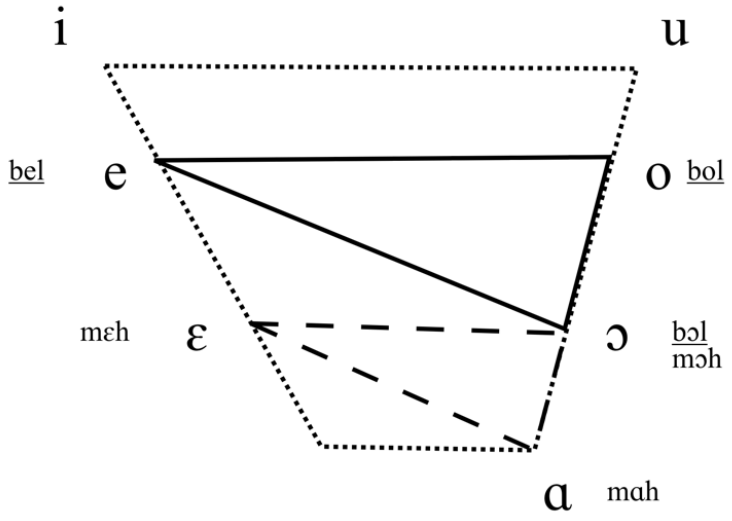
Chassinat (1921)のように、イスラムのエジプト征服以降、コプト文字によって、アラビア語単語が書かれた文献がいくつか存在する(Richter 2006:495ff.)。Richter (2006)は、アラビア語単語のコプト文字転写をまとめたものであり、開口度説を支持する多数の例を有する。イスラム征服時には、エジプトの住民の母語は大部分がコプト語であったが、イスラムの支配によって、エジプト社会は、アラビア語を高位言語、コプト語を低位言語とするダイグロシア状況になり、アラビア語を母語とする者の割合が高くなっていき、早くとも 13 世紀、遅くとも 17 世紀に母語・第一言語(L1)としてのコプト語は一旦消滅し、コプト語は典礼でのみ用いられる「典礼言語」になった。イスラム征服後もコプト語が母語として十分残存している地域で、コプト文字によってアラビア語単語が転写されたのであるが、このように、アラビア語単語コプト文字転写におけるそのコプト文字の用い方も、コプト語の音価と音韻を知る傍証となるのである。

2.3 コプト語動詞活用における母音変化

また、グリーンバーグ(Greenberg 1962:433) は、コプト語の動詞活用における例を開口度説の証拠の 1 つとしている。コプト語の動詞には絶対形、前名詞形もしくは構成形、前代名詞形、状態形の 4 つがある。このほかに、少数ながら、命令形(さらには 命令前名詞形、命令前代名詞形、命令絶対形)をもつ動詞もある。絶対形、前名詞形、前代名詞形、状態形の変化は主に母音の変化によって示される(<t>が付加される動詞もある)。グリーンバーグは、ϣⲱⲗ <bôl>「解く」と ⲙⲟϩ <moh>「充す」 というボハイラ方言[19]の 2 つの動詞の変化を上げている。 ϣⲱⲗ <bôl>とⲙⲟϩ <moh>は絶対形であり、これらの前代名詞形はそれぞれϣⲟⲗ <bol>とⲙⲁϩ <mah>、状態形は ϣⲏⲗ <bêl>とⲙⲉϩ <meh>である。ここで音長説をとると、ϣⲱⲗ、ϣⲟⲗ、 ϣⲏⲗとⲙⲟϩ、ⲙⲁϩ、ⲙⲉϩ は[boːl]、[bol]、[beːl]、および、[moh]、[mɑh]、[meh]となる。それに対して開口度説をとると、[bol]、[bɔl]、[bel]、および、[mɔh]、[mɑh]、[mɛh]となる。次ページの図 1 のように母音の三角形で書くと、開口度説であれば、舌の動きは規則的になるのに対し、音長説では不規則的になる。ちなみに、ⲁ<a>はここまで[a]で書いたが、前よりの[a]であったか、後ろよりの[ɑ]であったかは不明であるが、[ɑ]であったとすると、次ページの図 1 のようにさらに規則的になる。なお、ϣⲟⲗ <bol>の変化は最も規則的なものであり、ⲙⲟϩ <moh>の変化は語末が喉音の時である。

[19] 絶対形ⲙⲟϩ <moh>、前代名詞形ⲙⲁϩ⸗ <mah>、状態形ⲙⲉϩ <meh>はボハイラ方言 の動詞変化である。サイード方言では絶対形ⲙⲟⲩϩ <mouh>、前代名詞形ⲙⲁϩ⸗ <mah>あるいはⲙⲟϩ⸗ <moh>、状態形はⲙⲉϩ <meh>となる(Crum 1939:208)。なお、本稿本文では Greenberg (1962)に合わせるために、前代名詞形には⸗の記号を付していない。⸗は、名詞や動詞など接尾代名詞以外に付けられた場合、接尾代名詞が必ず後続することを示す、コプト学の記法である。

図 1：動詞活用に伴う母音の変化（開口度説）



		音長説	開口度説
通常：	ɯ ⇨ o ⇨ ʜ	/o:/ /o/ /e:/	/o/ /ɔ/ /e/
喉音前：	o ⇨ ɐ ⇨ ɛ	/o/ /a/ /e/	/ɔ/ /ɑ/ /ɛ/

3 母音字重複について

グリーンバーグによる構造主義的共時態研究、および借用語研究、そして、ギリシア文字、ヌビア語コプト文字の音価などの様々な観点から、母音字の音長説は開口度説に比べ、可能性が低い。そのため、残りの説は、(a)開口度説かつ母音字重複声門閉鎖音説、および、(b)開口度説かつ母音字重複長母音説となる。これらの証拠となりうるものとして、コプト語の綴りとコプト語以前のエジプト語の声門閉鎖音および有声咽頭摩擦音の対応が考えられる。コプト語以前のエジプト語、すなわち、古エジプト語、中エジプト語、新エジプト語および民衆文字エジプト語における声門閉鎖音と有声咽頭摩擦音はコプト語では合流したとされる。その証拠に、現代標準アラビア語およびエジプト・アラビア語には、声門閉鎖音と有声咽頭摩擦音の区別があるにもかかわらず、コプト語の現代教会発音では、有声咽頭摩擦音は用いられない。

なお、古代エジプト語で、声門閉鎖音を表すエジプト文字の転写はʒであり、セム諸語の諸文字の声門閉鎖音を表す文字の類推からアレフと呼ばれる。有声咽頭摩擦音を表すエジプト文字の転写はアインと呼ばれ、セム語学と同様ʿで記述される。聖刻文字(ヒエログリフ)、神官文字(ヒエラティック)、民衆文字(デモティック)からなるエジプト文字は、表語文字、子音文字、決定文字から構成されている。このうち子音文字は、1 つの子音を表す単子音文字、2 つの子音を表す複子音文字、3 つの子音を表す三子音文字に分けられる。単子音文字でアインを表す文字は腕の形態をした𓄡で、アレフを表す文字はワシの形態をした𓄿である。なお、古エジプト語では、エジプト語単語の楔形文字転写から、アレフは口蓋垂震え音[ʀ]を表していたが、後に声門閉鎖音になったと考えられる(Loprieno 1997:33)。この

アイン、アレフの痕跡は、コプト語では、古テーベ方言に残っており、ϧが声門閉鎖音を、ϩが有声咽頭摩擦音を表すとされ、サイード方言の母音字重複に対応する。例: 古テーベ方言 ϩⲟϧⲡ、アフミーム方言 ϩⲟⲟⲡ、ファイユーム方言 ϣⲁⲁⲡ、リュコポリス方言 ϣⲟⲟⲡ、サイード方言 ϣⲟⲟⲡ、ボハイラ方言 ϣⲟⲡ、オクシュリュンコス方言 ϣⲁⲡ ‘existent’ (Allen 2013:12)。これは有力な母音字重複声門閉鎖音説の証拠である。

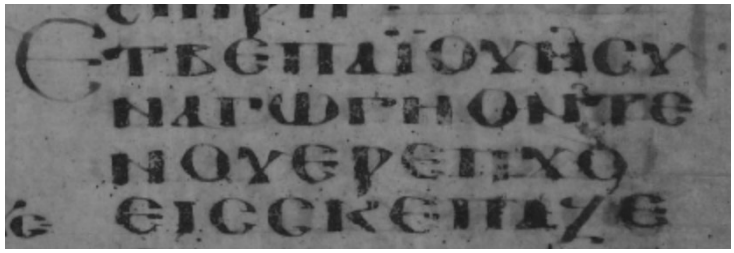
また、チェルニーによるコプト語語源辞典(Černý 1976)は、コプト語とコプト語以前のエジプト語の同源語をまとめた辞典として定評がある。この辞典において、コプト語の母音字重複と、アインおよびアレフの分布を調べた結果、次の例があった。ⲙⲁⲁⲃ <maab> ‘thirty’ ← *mᶜbꜣ* ‘thirty’、ⲟⲩⲏⲏⲃ <ouêêb> ← 古代エジプト語 *wᶜb* ‘priest’、古・中・新エジプト語 *šᶜd* → 民衆文字エジプト語 *šᶜṯ* → コプト語 ϣⲱⲱⲧ <šôôt> (Černý 1976:254)。

これらの例では、古代エジプト語でアインもしくはアレフがある位置にコプト語の母音字重複が来ている。このことは、母音字重複声門閉鎖音説を支持する。また、セム語(ヘブライ語 שֵׁעֵר <šê‘êr>、アラム語 שֵׁעֲרָא <šê‘ărā’>など) >> Dem. *šᶜr* → ϣⲁⲁⲣ <šaar> ‘price’ (Černy 1976: 250)のようにセム語の有声咽頭摩擦音/ʕ/と対応する母音字重複があるのも母音字重複声門閉鎖音説の重要な証拠である。

4 写本における語中改行

今回、これらの調査の他に、これまで誰も切り込んでこなかった点において、調査を行った。コプト・エジプト語が書かれた写本を見ると、語内で改行・改ページしているものや、形態素内で改行・改ページしているものがある。中には P.Macq. 1(Choat & Gardner 2013)のように、全く音節境界を無視して改行している写本はあるものの、ナグ・ハマディ写本群のように、ある程度は音節境界を意識して改行しているものもある。こうした音節境界を意識して改行している写本で、母音字重複が改行位置にきたときに、どの位置で改行されるかの頻度を調べれば、母音字重複への正しい理解を得られると期待できる。

図 2：語中改行の例(フランス国立図書館 Copte 130[2] f. 19r)[20]



ⲉⲧⲃⲉⲡⲁⲓ ⲟⲩⲛ̄ⲥⲩ|ⲛⲁⲅⲱⲅⲏ ⲟⲛ̀ ⲧⲉ|ⲛⲟⲩ ⲉⲣⲉⲡϫⲟ|ⲉⲓⲥ ⲥⲕⲉⲡⲁϫⲉ |

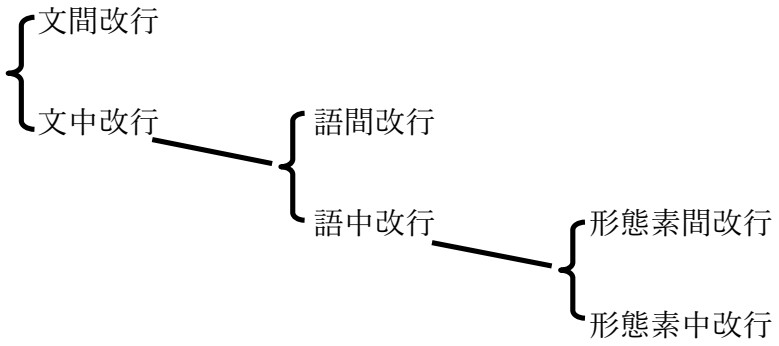
<etbepaï ouñsu|nagôgê on’ te|nou erepčo|eis skepaze>

[20] 画像は Gallica (http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52504721n/f19.item.r=Copte.zoom, accessed 2017-02-20)から取られた。

ここでは、前ページの図 2 の白修道院 XV 写本の p. 75 (Bibliothèque nationale de France, Copte 130[2] f. 19r) の第 2 カラムの例を挙げて説明する。|を改行位置とする。この写真の中では 3 つの語中改行と、1 つの語間改行がある。語中改行は、どれも音節境界に来ている。

以下の図で、改行の類型をまとめた。

図 3 改行の類型論



コプト語文献の著者の中で最も多く著作を残したのは、シェヌーテである。シェヌーテは、現在の上エジプトのソハーグの郊外に当たるアトリペに位置する白修道院、赤修道院および女子修道院の第 3 代目掌院および修道院長であり、この修道院群の発展に多大に貢献した。彼の生涯は後継者のベーサが書いたと伝えられている『シェヌーテ伝』(Leipoldt & Crum 1906)に描かれているが、この聖人伝は、他の聖人伝と同様、実際の聖人の生涯を正確に表したものだとは考えられていない。シェヌーテ学者たちは、基本的に、シェヌーテが直接著作したとされる 9 つのカノンおよび 8 つのロゴイ(ディスコース)をもとに彼の生涯を再建する。これらは、後に彼の弟子たちが、彼の書簡や説教文を編集したものである。これらのカノンとロゴイの諸写本は白修道院のスクリプトーリウム(筆写室)で筆写され、大半が、白修道院の図書館跡で発見された。その後、ヨーロッパのエジプト学者などによって欧米に持ち込まれ、様々な経緯を経て、その写本群の諸ページは現在フランス、イタリア、イギリス、ロシア、アメリカ、ドイツ、オーストリアを中心とした幾つかの図書館や博物館などに保管されている。

そのうちの『第六カノン』の写本の一つ、白修道院 XF 写本[21]を筆者はフランス国立図書館、ナポリ国立図書館、カイロ・コプト博物館、大英図書館に分散されて所蔵されている

[21] 欧文では、MONB.XF と記される。MONB はイタリア語 Monasterio Bianco (白修道院)の略称である。MONB.XF 等の記号（シグルム）は、コプト語写本電子データベースであるコプト語文学的写本コーパス Corpus dei Manuscritti Copti Letterari (http://www.cmcl.it/, accessed on 2017-02-20)で用いられ、その後コプト学者らによって用いられている。なお、この letterari は英語におけるパピルス学の用語である literary と同様で、literary な資料は、行政・経済文書や日常生活で用いたメモおよび手紙や記録を含む documentary な資料以外に相当し、文学的文献および宗教的文献を含むものである。

諸ページの写真を見ながら、コンピュータ上でユニコードを用いて転写し、その転写を用いて、母音字重複と語中改行の関係について調べた。白修道院 XF 写本自体は、そのコロフォン[22]から、アパ・セトの指導の 8 年目のパオーネ月 15 日[23]、第 6 インディクティオ[24]に筆写されたものであることが指摘されている。 Van Lantschoot はこれを 10 世紀に推定している(Emmel 2004:168)。この写本の諸ページは Emmel (2004)によって同定されたものである。

今回用いた資料は、XF 写本のうちの 1 – 28 ページ、203 – 278 ページである。47、48、77、78、87、88、155、156、179、180、191、192 ページは断片であり、その他のページ数不明の 6 つの断片を含めて、これらの断片は語中改行を調べるには、不完全であるため、除外した。残りのページは未発見である。

これらを用いて語中改行を調べた結果、以下のことがわかった。(1)母音字重複の真ん中で語中改行が行われたのは 67 例、(2)母音字重複の前で語中改行が行われたのは、20 例、(3)母音字重複の後で語中改行が行われたのは、16 例であった。なお、余白はあり、ある程度列の端は合っているものの、余白にはみ出ている列も数多く見受けられた。このことから、(1) – (3)のどれかを意図的に避けることは可能だったはずである。(1)の例としては、ⲉⲧⲟ|ⲟⲧⲛ̄、ⲙ̄ⲡⲉϫⲟ|ⲟⲥ、ⲉⲛⲧⲁⲕⲧⲁ|ⲁⲥなどがあげられる。最初と次の例ではオミクロンⲟ <o>の重複の中央に改行が、最後の例では、アルファⲁ<a>の重複の中央に改行がある。(2)の例としては、ⲙⲁⲩ|ⲁⲁⲩ、ⲉⲧⲟⲩ|ⲁⲁⲃ、 ⲛ̄ϩⲉⲛ̄ⲙⲉⲓ|ⲟⲟⲩⲉがあげられ、(2)の最初の例はアルファの重複の前で改行が、残りの例では、オミクロンの重複の前で改行が行われている。(3)の例では、ⲉⲧⲟⲟ|ⲧϥ̄、ⲉⲧⲙⲟⲟ|ⲱⲉ、 ϩⲙ|ⲡⲧⲣⲉⲡⲙⲁⲁ|ϫⲉなどがあげられ、前二者はオミクロンの、最後の例はアルファの重複の後で改行がなされている。

これらのように、母音字重複周辺の改行について、中央での改行がほぼ半数を占めていることがわかった。これは、母音字重複長母音説を支持しない証拠である。なぜならば、コプト語写本の筆記者はしばしばその筆写元のテクストを誰かが読んだものを聞いて、筆写したと考えられるが、母音字重複長母音説であれば、わざわざ長母音を聞いて、その中央で改行した、としか考えられないからである。これに対し、母音字重複声門閉鎖音説も問題があるとみられるかもしれない。なぜなら、例えば、ⲙ̄ⲡⲉϫⲟ|ⲟⲥ /ṃpetʲoʔs/では改行が声門閉鎖音と歯茎摩擦音の前に来る。しかし、音節の観点に立てば、この場合、ソノリティは、声門閉鎖音よりも歯茎摩擦音が大きく、最後の子音/s/でソノリティのピークをなすことから、ここで音節核を形成し、/ʔs/で 1 つの音節を形成していると見ることができる。ⲉⲛⲧⲁⲕⲧⲁ|ⲁⲥ、ⲉⲧⲟ|ⲟⲧⲛも同様である。母音字 – 改行 – 母音字の例の中には母音字 – 改行 – 母音字が語末の例はなく、必ず、母音字 – 改行 – 母音字の後ろに子音か他の音節が来る。声門閉鎖音は最も聞こえ度が低い音であるため、必然的に、その後ろで音節が形成される。よって、改行は音節境界間に来ていることになり、これは写本を音読筆写する上で自然な

[22] 著作の末尾に記された著作のタイトル、著者名、書記名などの情報。
[23] 現在日本で用いられているグレゴリオ暦では 6 月 9 日。
[24] ローマ時代から用いられた 15 年周期の年代単位。

ことである。よって、母音字重複で語中改行がその 2 つの母音字の真ん中に来ることが多いことは、母音字重複声門閉鎖音説を支持する。

なお、ここまで「語」と称してきたが、コプト語の「語」の認定には様々な議論がある。最もよくつかわれている Layton (2011)の文法書では「語」を用いず、形態素の音韻論的な集まりとしての単位として束縛集合(bound group)を導入している(Layton 2011:25)。これは単一の強勢を共有し、発声時に途切れない形態素の集合体である。言語類型論の議論から出た用語を借りれば、「音韻語」[25]と呼ぶこともできる。本稿では、「語」は束縛集合、もしくは音韻語を指している。

5 終わりに

今回、互いに関係しているエータとエプシロン、オメガとオミクロンの音長説、開口度説、母音字重複の声門閉鎖音説、長母音説をめぐって議論を行った。ギリシア文字の音価、古ヌビア語コプト文字の音価、アラビア語単語コプト文字転写、コプト語の動詞の活用からエータとエプシロン、オメガとオミクロンの関係は、開口度説の可能性がより高いことがわかった。母音字重複の方は、古テーベ方言の声門閉鎖音と有声咽頭摩擦音を表す文字とサイード方言の同源語の綴りの対応、古代エジプト語のアインとアレフとサイード方言との同源語の綴りの対応、シェヌーテ『第六カノン』白修道院 XF 写本の語中改行から、声門閉鎖音説がよりありうることがわかった。最後の語中改行の研究はパイロットスタディであり、より多くの写本において同様の事例研究をすることが今後求められる。

略号

X → Y　X から Y への歴史的変化

X >> Y　X から Y への借用

参考文献

岡本誠太郎 (1942)『こぷと語小文典』奈良：飛鳥園.

塚本明廣(2001)「コプト文字」『世界文字辞典』言語学大辞典、別巻．東京: 三省堂. 436−440.

三代川寛子 (2013) 「20 世紀初頭におけるコプト・キリスト教徒の民族意識形成−コプト語復興運動を中心に」日本オリエント学会第 55 回大会研究発表.

Allen, James P. (2013). *The ancient Egyptian language: An historical study.* Cambridge: Cambridge University Press.

[25] Dixon & Aikhenvald (2002)をみよ。

Allen, W. Sydney. (1987). *Vox Graeca: The pronunciation of classical Greek.* 3rd ed. Cambridge: Cambridge University Press.

Basta, Munir. (1991). Iqladiyus Labib (1873-1918), In: Aziz Suryal Atiya (ed.) *The Coptic encyclopedia*, vol. 4, Macmillan

Chassinat, Émile. (1921). *Un papyrus médical copte*. Mémoires publiés par les membres de l'Institut français d'archéologie orientale du Caire, 32.

Černý, Jaroslav. (1976). *Coptic etymological dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.

Choat, Malcolm and Iain Gardner. (2013). *A Coptic handbook of ritual power: The Macquarie papyri*. Turnhout: Brepols.

Crum, Walter Ewing. (1939). *A Coptic dictionary.* Oxford: Clarendon Press.

Depuydt, Leo. (1993). On Coptic sounds. *Orientalia (neue)*. 63, 338-375.

Dixon, R. M., & Aikhenvald, A. Y. (2002). Word: a typological framework. In: R. M. Dixon, & A. Y. Aikhenvald (eds.), *Word: A cross-linguistic typology*, 1-41.

Dreyer, G. (2011). Tomb U-j: A royal burial of Dynasty 0 at Abydos. In: Emily Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization*, 131-8.

Greenberg, Joseph H. (1962). The interpretation of the Coptic vowel system. *Journal of African Languages*, 1, 22-29.

Emmel, Stephen. (2004). *Shenoute's Literary Corpus,* vol. 1 & 2. Leuven: Peeters.

Hintze, Fritz. (1980). Zur koptischen Phonologie. *Enchori*a 10:23-91.

Horrocks, Geoffrey. (2010). *Greek: A history of the language and its speakers*. 2nd ed. Chichester: Wiley-Blackwell.

Knudsen, Ebbe E. (1961). Saidic Coptic vowel phonemes. *Acta Orientalia* 26, 29-42.

Lambdin, Thomas O. (1983). *Introduction to Sahidic Coptic*. Macon, GA: Mercer University Press.

Layton, Bentley. (2011). *A Coptic grammar with chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*. 3rd ed. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Leipoldt, Johannes and Walter E. Crum (1906). *Sinuthii archimandritae vita et opera omnia: I. Sinuthii vita bohairice*. CSCO 41. Leuven: Peeters.

Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) (2016). Coptic, In: Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) *Ethnologue: Languages of the World*, 19th ed. Dallas, Texas: SIL International. Online version: https://www.ethnologue.com/language/cop, accessed 2017-02-18.

Loprieno, Antonio. (1997). Egyptian and Coptic phonology. In: Alan S. Kaye (ed.) *Phonologies of Asia and Africa (including the Caucasus)*, Vol. 1. Winona Lake, Indiana: Eisenrauns. 431-460.

Peust, Carsten. (1991). *Egyptian phonology: Introduction to the phonology of a dead language*. Göttingen: Peust und Gutschmidt.

Till, Walter. (1929). Altes 'Aleph und 'Ajin im Koptischen. *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes*, 36. 186-96.

Richter, Tonio Sebastian. (2006). Coptic. In: Kees Versteegh (ed.), *Encyclopedia of Arabic language and linguistics*. vol. 1. Leiden: Brill. 495-501.

Worrell, William H. (1934). *Coptic sounds*. University of Michigan studies humanistic series; XXVI. Ann Arbor: University of Michigan Press.

受理日 2017 年 4 月 10 日

言語記述論集　第９号

言 語 記 述 研 究 会

2017 年 4 月 30 日発行

ISSN 2432-244X